
地球の乙女

新庭 一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地球の乙女

【Nコード】

N2829B

【作者名】

新庭 一

【あらすじ】

勉強も運動も苦手ないじめられっ子の少女が、英雄になってしまふ物語。

第1章 行ってきます

英雄とは自分のできることをした人である ロマン・ロラン

頭が悪くて勉強できない、のろまで運動苦手な中学二年生のいじめられっ子、三城ミズホにとって最悪な朝がやってきた。

今日から学校の行事で、泊まりがけの授業へ七日間行かなければならない。行かない方法はいくらでもあるが、彼女は行かなければと思い込んでいる。たった一人の家族、おばあちゃんを心配させないために。

ミズホは幼稚園のころからいじめられていたが、ずっと隠し^{かく}つづけている。身体中^{からだじゅう}に痣^{あざ}を作^{つく}って帰^{かえ}ってきたり、持ち物をぼろぼろにされて帰^{かえ}ってきたりしても、「ライオンにおそわれたの」とか、「ワニとケンカしちゃった」など、頭の悪さを証明^{つそ}するような嘘^{うそ}を平気で言^いって、いじめられていることを秘密^{ひみつ}にしてきた。

彼女が中学生にな^なってから、[「]体育の授業で……[」]とか、「友達と遊^{あそ}んで……」などに変^かわり、ずいぶんと成長したが、おばあちゃんはいじめを知^しっていて気づ^きかないふりをしていた。 とい^いうのも、いじめられていることを心配すると、ミズホは徹底的に否定^{ひてい}するからであ^あった。

自分に心配^{しんぱ}かけないよう^{よう}にと振^ふる舞^まうミズホのことが、おばあちゃんは大^{だい}好き^きだった。学校の成績^{しんせき}はいつも学年^{がくねん}でびり、得意^{とくい}な科目^{こくむ}なんて一つもない、そんなことはどうでもよ^よかった。

ミズホが三城家に養子^{ようし}に來^きたのは、三歳のときであ^あった。ミズホの実^みの両親^{りょうしん}、荒川^{あらかわ}シゲルと妻^{つま}のアサミは、手作^てりのぬいぐるみ屋^やを小^こさな店^{みせ}でや^やっていた。アサミは命^{いのち}と引きかえにミズホを産^うんで、二十四歳の若^{わか}さでこの世^よを去^さった。妻^{つま}が亡^なくな^なったあと、シゲルは一人^{ひとり}でミズホを育^{そだ}てながら、店^{みせ}を細^{こま}々とや^やっていた。シゲルの作^{つく}

たぬいぐるみはぶさいくで、アサミが作ったたぬいぐるみのようにかわいくなかったが、一部のファンには絶大な支持を得ていた。

そんなある日、大手玩具チェーン店おおてがんくの社長が、いまの時代に完全な手作りのたぬいぐるみとは珍しい、と言ってやってきた。そして、うちの玩具店に、ぜひ商品を置かせてくれと頼んできた。シゲルは断ろうとしたが、たくさん作れなくてもいいならという条件で、玩具店にたぬいぐるみを納品することにした。その大手玩具チェーン店の社長が、三城テツハルであった。

シゲルの作るたぬいぐるみは一つとして同じものがなく、納品される数が少なかったから、レアな商品となり、人気になった。自宅兼店のほうも大忙しになり、慢性的な品不足まんせいときにうれしい悲鳴をあげていた。

しかし、そんな日々は長くつづかなかった。シゲルは病に倒れ、たお二十七歳で娘の成長を見とどけずに妻のあとを追った。孤児になつた三歳のミズホは、親戚などの引き取り手もなく、施設に入る予定だったが、三城夫妻が彼女を養子にすることにした。

子供ができなかった三城夫妻は、いままで子育てをしたことがなかったので、ミズホを引き取るのはいへんな勇気が必要だった。しかし、幼い彼女の無邪気な笑顔を見て、どうしても引き取りたくなつたのである。

ミズホを養子にした当時、三城テツハルは六十一歳、妻のメグミは五十六歳になっていた。だから、ミズホには養父母の関係でありながら、「おじいちゃん」「おばあちゃん」と呼ばせることにした。三城夫妻にとって、ミズホは生きがいそのものになった。テツハルはミズホを養女に迎えた翌年、会社を売ってリタイアし、ミズホと過ごす時間を大切にした。

ミズホも三城夫妻が大好きになった。白髪しらがの似合うおじいちゃん
は、とても姿勢がよくて楽しい人柄。薄茶色に染めた髪を短くまとめたおばあちゃんは、植物を愛する温かい人柄。そんな二人の背中を見て育つたミズホは、とても優しい子になった。けれど、学校の

成績だけはどうにもならなかった。

幼稚園のころ、ミズホの最大の敵は、寒くなると流れ出す鼻水だった。かんでもかんでも出てくる鼻水、いつかきつとなくなると信じて、何度も強く鼻をかむのであった。強く鼻をかみすぎ、しまいには鼻血が出て、ミズホの顔は血まみれになってしまった。心配したおじいちゃんが、「そんなに強く鼻をかむと、脳みそが全部出ていっちゃうよ」と脅おどしたので、脳みそがいっぱい出てしまったかもとミズホは本気で思った。それ以来、彼女は鼻をかむのをやめ、たれ流すようになってしまった。しかも、それは中学一年生までつき、今年になってやっとなおった。

バカで運動音痴の鼻たれ娘　いじめられないほうが奇跡である。そんなミズホに、おばあちゃんは、「みんなと同じことができないでもいいから、自分のできることをやりなさい」と励ました。得意なことなど何一つなかったミズホには、あまり意味のない言葉だったが、その言葉でだいぶ気分が楽になった。

ミズホが小学校一年生のとき、三城夫妻は彼女がいじめられていることを知った。しかし、必死で隠そうとする彼女のために、気づかないふりをすることに決めたのであった。それでもおじいちゃんは、最悪な事態、自殺をさけるため、生きることや人生についてなど、ミズホに話して聞かせた。そんなおじいちゃんが亡くなったのは、六十九歳のときである。ミズホは十一歳になっていた。

自宅の病床で、おじいちゃんが臨終りんじゅうに言った言葉は、「ミズホちゃん、どんなにつらいことがあっても、最後の最後まで、人生をあきらめてはいけないよ」であった。それは、ミズホが何度も聞かされた言葉の一つだった。

だけど、決していじめに慣なれるということはない。死にたい、漠ばく然ぜんとそう考えるようになったのは、ミズホが中学一年生のころからである。自分で命を終わらせる決断をすれば、これ以上みじめな人生をつづけなくてすむ。でも、おばあちゃんへの思いやりと、おじいちゃんが話してくれた言葉の数々が、彼女の生きるモチベーション

ンを持続していた。

もし、ミズホが知的障害者だったなら、勉強や運動ができなくても救われる道はあったかもしれない。しかし、健常者のミズホに対して世間はあまりにも冷たかった。

東京にある三城家は三階建て、中ぐらいの大きさの一軒家である。大手玩具チェーン店の元社長宅としては、それほど立派ではない。生前のおじいちゃんが極端な贅沢を好まず、豪邸を建てなかったのだ。

一階には、台所や食堂、接客用の部屋などがあり、四分の一が道路に面した駐車場になっている。二階には、居間や浴室、おばあちゃんの部屋と寝室、書斎を改装したおじいちゃんの仏壇がある部屋などがある。三階には、物置状態の部屋が数室、おじいちゃんが好きだった玩具が飾ってある部屋、そして、ミズホの部屋と寝室があった。

一階から三階までいたるところに、おばあちゃんの趣味である観葉植物の鉢植えが置いてあり、家中に草や花の香りを漂わせている。六十七歳のおばあちゃんは働いていないが、サンセット・セキユリティーという民間の年金で、金銭面では問題なく生活が送れている。おじいちゃんが残した莫大な財産は、彼女がボランティア団体にすべて寄付してしまった。

おばあちゃんの朝は早く、日の出少し前に起きて、ジーンズとトレーナー、それにエプロンをかけたお気に入りの服装で、家中の鉢植えに水を与え、ちょうど太陽が昇るころ、玄関先にあるおもての小さな花壇へ水を与える。それから台所へ行き、朝食の準備に取りかかるのが毎日の日課だった。

朝よりも夜のほうがミズホは好きだった。特に寝るとき。このまま明日が来なければいいのに、眠ったまま目覚めなければいいのに、と毎晩思っていた。それでも朝は容赦なくやってきた。普段でさえつらい朝。いつもなら、学校から帰ってくればいじめから解

放される。だけど、今日からはじまる七日間は、どこにも逃げ場はない。小学校六年生のときに行った泊まりがけの林間学校は二日間だけだったが、つらくてみじめな二日間であった。

「一週間の我慢……」目覚めたミズホはベッドの中でつぶやき、布団から出て、洗面所へ向かった。

ミズホは顔を洗ってから、大きめな鏡の中に映る自分の姿を眺めた。黒い髪は肩ぐらいまでの長さ、十四歳とは思えない幼い顔立ち、きやしゃで小柄な体型　みじめな自分を見るたびに自信を失ってしまう。

しかし、その瞳は純粹な輝きを放ち、あどけない唇には艶があり、体型に合った乳房やくびれた腰はバランスがよく、脚のラインも美しい　自分ではまったく気づいていないが、ミズホは驚くほどかわいかった。でも、学校での成績の悪さが、彼女の魅力を完全に覆い隠していた。

鏡の中の自分が、「どうして行くの？　行きたくない！」そう言っているような気がする。だけど、今回の学校行事へ早く行きたいと、おばあちゃんに嘘をついてきたので、いまさら行きたくないなんて言えなかった。でも、いまならまだ間に合う　ミズホの気持ちは揺れ動いたが、休みたいと言ったら、きつとおばあちゃんは心配すると思い、彼女は一週間の辛抱を選択した。

いつものように、ミズホはパジャマ姿で一階におりてきた。

「ミズホちゃん、おはよう」おばあちゃんが挨拶すると、

「おはよう！　おばあちゃん」とミズホは返した。

「体調は大丈夫？　遠くへ行くんだから、もし具合が悪かったら先生に言っ

「大丈夫、ぐっすり寝たし」

不眠症気味のミズホが、熟睡などできるはずはなかった。

「そう、それならいいけど……」

おばあちゃんにはわからなかった。学校でいじめられていても、今回の行事には本当に行きたいのかもしれない。ミズホを引き止め

ない理由はそこにあった。もし、「行かないでほしい」と言ったら、彼女は行きたくても、行くのをやめるだろう。だけど、行きたくなくても、いじめられていることを隠すために彼女は行くだろう。そんなミズホの性格を知っていたおばあちゃんは、彼女の判断にゆだねるほかなかった。

朝食のおかずはベーコンエッグとお豆腐の味噌汁、キュウリの浅漬け、ちよつとしたサラダであつた。ミズホはどんなに食欲がなくても、おばあちゃんが作った料理を必ず食べていた。

朝食をすませると、ミズホは自分の部屋にもどり、チェック柄の短いスカートとブレザー風の上着の冬用学生服に着替え、身支度をし、旅行用バッグを持った。そして二階に立ち寄り、おじいちゃんの仏壇に線香をあげて合掌し、それから一階へおりていった。

すると、小さなお弁当箱を持って、おばあちゃんが訊いてきた。

「ミズホちゃん、おむすびのお弁当を作ったけど、持って行く？

ちよつとおなか为空いたときにと思って……」

おばあちゃんの小さな手で作った、小さなおむすび二つであつた。

「うん、持って行く。ありがとう」

ミズホは、おばあちゃんからお弁当箱を受け取り、バッグの中に入れた。

食事は学校で用意されているので、お弁当など持つて行く必要はなかったが、せっかくおばあちゃんを作ってくれたおむすびを、ミズホが断るはずはなかった。

玄関先まで、おばあちゃんはミズホを見送りに出てきた。おもてには十月の少し肌寒い風が、キンモクセイの甘い匂いとともに穏やかに吹いていた。

「おばあちゃん、行ってきます！」せいいつぱい精一杯の笑顔でミズホは言った。「行ってらっしゃい、ミズホちゃん」おばあちゃんも笑顔で答えたが、なぜかもう二度とミズホに逢えないような不安におそわれた。

しばらく歩いてミズホが家のほうを振り返ると、おばあちゃんはまだ玄関先に立って見送っていた。

「行ってきましたーす！」ミズホが手を振って、大声で言うと、

「行ってらっしゃーい！」とおばあちゃんも手を振って、大きな声で言ってくれた。

ミズホは自分にも聞こえないくらいの小さな声で、もう一度つぶやくように言った。

「行ってきます」

第2章 成田発 M42

日比谷中学校の二年生は全四組で、ひと組三十名前後、男女は半々ぐらいである。今回の行事には生徒のほかに、各組の担任と副担任、校長先生、それと宇宙科学庁長官が同行する。正門の前の大通りには、すでにバスが四台ならび、出発の時間を待っていた。

遊びの学校行事ではないので、生徒たちは全員学生服を着用し、先生たちはビジネス・スーツを着込んでいる。

二年の生徒たちは先生の指示に従い、校庭に出て組ごとに整列していた。四組のミスホは、女子の列の一番後ろにならんでいる。前から身長順にならんでいるにもかかわらず、小柄なミスホが最後尾にされているのは、クラスメートたちが彼女の近くを嫌がるからであつた。

四組の生徒は二十九名で、男子十四名の女子十五名　つまり、男女二列にならぶと女子が一人分はみ出る　ミスホの前にならぶ女子だけが、我慢すればいいというわけだ。

「もつと離れなさいよ！」

ミスホの前にならんでいる、すらりと背の高いモデルのような身体つきのアイナが振り向いて言った。ミスホは少しさがった。

「もつとだよ」と言つて、アイナは地面に置いてあつたミスホのバッグを蹴^けつ飛ばした。

すると、アイナの隣^{となり}にならんでいる、のっぽで太った男子のヨシトが言った。

「あーあ！　ハナミスホ菌がくつついたぞ。これでアイナもバカになるな」

去年まで寒くなると鼻水をたらしていたミスホのあだ名は『ハナミスホ』であつた。

「ヨシトにうつしちゃおつと」

アイナがヨシトの足に、ミスホのバッグを蹴ったほうの足を近づ

けた。

「やめろよ、バカになるだろ」

「なんてね。ハナミズホに直接さわったわけじゃないから大丈夫よ」
「本当か？ バッグだって、ハナミズホ菌が染みついていると思うぜ」

二人が笑うと、会話を聞いていた周りの連中もバカにして笑った。
バッグを取りに後ろのほうへ行ったミズホは、その場にぽつんと立ちずくみ、列へもどることもできず、自分の足もとを見つめていた。
そこへ、四組の担任で、ずんぐりとした三十二歳の男性教師、中里なかざと先生がやってきて、いらだつように言った。

「三城、何やってんだ！ 早くならべ」

ミズホが列にもどると、ヨシトが言った。

「ハナミズホ、自分のクラスもわかんなくなつたのか？」

生徒たちと一緒に、中里先生もミズホをバカにして笑った。

先生たちも、誰一人ミズホの味方をしてくれない。その理由は、ミズホがバカで運動音痴だからではなく、彼女の味方をする、ほかの生徒たちから嫌いやわれてしまうからである。生徒たちの人気者になることは、先生たちの大事な目標の一つなのだ。一人の生徒のために、ほかの生徒たちを敵に回すわけにはいかない。もちろん、ミズホのことがかわいそうだと思う先生もいるが、助けるわけにはいかないのである。年々ずる賢くなる生徒たちに、先生がいじめられてしまう恐れがあるからだ。

アイナの前にならんでいる、髪を金髪に染めた色黒の女子、ケイが振り向いて言った。

「かわいそうにね、アイナ。ハナミズホと同じ部屋じゃん」

「空いてる部屋に移るし。ねえ、いいでしょう？ 中里先生」甘えるような声でアイナが言くと、

「好きにしろ」と中里先生は面倒くさそうに言った。

「さすが中里先生！ 話がわかるわね」

「それじゃあ、私たちの部屋に来れば？」ケイが誘うと、

「そうね、考えとくわ」とアイナが答えた。

「そろそろ校長の長話がはじまるから、静かにしてる」

中里先生がそう言って、最前列にもどっていった。入れ替わりに、副担任の佐野先生が後ろに向かってきた。生徒たちは、二十六歳のやせ細った青白い顔の副担任と軽く挨拶を交わしていた。彼が一番後ろに来たとき、ミズホも挨拶をしたが、完全に無視されてしまった。

佐野先生は、校則を守らない生徒たちや勉強をしない生徒たちにうるさいことは言わないタイプで人気がある。しかしそれは、生徒たちが将来どうなってもいいという態度にほかならない。生徒たちが大人になって苦労しようと、知ったことではないのだから。

しばらくすると、肥満気味で頭髪が心細い六十五歳の羽柴校長が、朝礼台にあがって話しをはじめた。

「みなさん、おはようございます。えー、今日から七日間の共同生活で、えー、友達との信頼関係を深め、えー、コミュニケーション能力と、えー、未知への好奇心をつちかってください。えー、この七日間の貴重な体験で、えー、君たちが、えー、心の広い人間に成長できると、えー、願っています……」

羽柴校長の長話はしばらくつづき、やっと終わったと思ったら、スーツ姿がよく似合う紳士的な雰囲気の高瀬宇宙科学庁長官の話しがはじまった。彼は五十七歳で、白髪まじりの髪を短めに整えていて、穏やかそうな表情ではあるが、その目つきには何かしら力強いものを感じる。高瀬長官は、自分の自己紹介や宇宙の偉大さなどを手短かに話した。

そして、組ごとにバスへ乗り込み、目的地を目指して出発していった。

一号車には羽柴校長が同乗し、四組の四号車には、高瀬宇宙科学庁長官が同乗した。高瀬長官は、校庭からバスに乗るまでの短い時間に、鋭い観察力でクラスから孤立しているミズホに気づいた。彼がミズホの隣に坐ったので、四組の生徒たちはミズホをいじめる楽

しみを奪われた。ミズホはバス内での安全を保証されたが、窓の外の景色を不安な表情で眺めていた。

「君の名前は？」高瀬長官が訊いてきた。

「ミズホです。三城ミズホです」か細い声で、ミズホは答えた。

「ミズホさん、宇宙は好きかな？」

「はい。星がたくさんあって、大好きです」

ミズホの表情が少し明るくなったので、高瀬長官はうれしくなった。

「それはよかった。これからすごい数の星を見ることができるようだね」

「はい」

「ミズホさんは、将来の夢とか、やりたい職業とか、あるのかな？」

「私……、私、得意なことがないんです。学年で、成績がびりなんです」

前の座席から女子生徒たちのあざ笑う声が聞こえてきた。

高瀬長官がミズホに優しい口調で言った。

「あせることはない、ゆっくり探せばいい」

「でも、私、バカだから……」

ミズホの言葉を聞いて、周りの座席の生徒たちが爆笑した。

「自分より劣る人とくらべて、自分は頭がいいと思っっている本物のバカよりずっとましだよ。そういう人間には未来がない。だから、ミズホさんは絶対に大丈夫」

高瀬長官は、ミズホではなく、明らかに周りの生徒たちに語っていた。バス内に一瞬緊迫した沈黙が流れたが、それを破ったのは男子生徒の、「成田空港だ」のひと言だった。ミズホが車窓から外を見ると、ちょうど成田空港を横切っていくところであつた。

「お、もう着いたか」そう言つて、高瀬長官が子供のような笑顔を見せた。

日比谷中学校の二年生を乗せた四台のバスは、空港を通りすぎ、隣にある『成田スペースポート』にすべり込んでいった。

成田国際空港に隣接して建設された成田スペースポートは、宇宙旅行へ旅立つための宇宙客船の港である。

宇宙旅行といっても、地球以外の惑星へ行って休暇を楽しむようなものではなく、居住施設や娯楽施設を完備したスペースシップに乗って、いろんな星や星雲付近を数日間遊覧して帰ってくるといったものであった。

結局、スペースシップ内で時を過ごすだけなので、宇宙旅行は海外旅行よりも人気がない。バカンス・シーズン以外の乗船率は五割以下である。それでも、宇宙旅行を主催している航空会社は『できるビジネスマンは宇宙で商談を成立させる』とか『アーティストの想像力は宇宙で加速する』などのキャッチフレーズで、観光客以外のターゲットを確保^{かくほ}し、充分な黒字を出していた。そのほかに、シーズン・オフの空席を学校の修学旅行や科学授業に利用してもらうため、通常料金の三分の一の価格で提供し、利益を得ていた。

出発ロビーに日比谷中学の先生たちと生徒たちは集合し、宇宙客船に搭乗する時間を待っていた。スペースシップの発着場側が全面ガラス張りなので、多くの生徒は宇宙客船を眺めながら、自分たちの宇宙旅行体験の自慢話などでもりあがっていた。

ミスホも宇宙旅行は初めてではなかった。小学校三年生のときにおじいちゃんとおばあちゃんの三人で、月の周りをゆっくり廻って二泊過ごすというツアーに行ったことがある。その宇宙旅行のときおばあちゃんがひどい宇宙酔いになり、心配したミスホは、ほとんどキャビンから出ずに看病していたので、月を眺めて楽しむ余裕などなかった。

でも、おじいちゃんとおばあちゃんには、その宇宙旅行は無駄ではなかった。ミスホの優しさを心底知ることができたからである。その月旅行以来、ミスホは地球を離れたことがない。今回が二度目であった。

日比谷中学の生徒たちが集まっている場所へ、ジーンズに革ジャ

ンなどを着た十二人の男の団体が通りがかった。そのうちの一人、クルーカットの短髪に、鋭い目つきに鼻筋が通った端整な顔立ちで、長身の筋肉質な三十代後半ぐらいの男が、高瀬長官のところに近づいてきて話しかけた。

「宇宙科学庁長官の高瀬さんですね」

男は笑顔で高瀬長官と軽く握手をした。高瀬長官は少し困った様子でたずねた。

「たいへん失礼ですけど、どこかでお会いしましたか？」

「いや、すみません。申し遅れました。私は、海兵隊の特殊部隊に所属していました武藤ダイキという者です。初めまして」

「軍人さんですか」

「元軍人です。いまは小さな警備会社を経営しています。彼らは私の会社の社員です」ダイキは十一人のほうを指さした。

「スペースポートの警備でこちらに？」高瀬長官が訊くと、

「いいえ、ちがいます。今日から社員旅行でM42へ行くんです。野郎どもだけっていうのもなんですけど、社員サービスも大切ですから。社員がいなければ、会社は成り立ちませんから」とダイキは答えた。

「社員旅行ですか。それはいいですね。私たちもM42へ行くんです」高瀬長官が言うと、

「修学旅行ですか？」とダイキが日比谷中学の生徒たちを眺めて訊いた。

「いえ、今回は科学授業です」

「どっちにしても、たいへんでしょう」

「そんなことはない。学生たちと過ごす宇宙の旅も楽しいですよ」宇宙への修学旅行や科学授業の同行は、宇宙科学庁長官の大切な仕事の一つになっていた。よほどの理由がないかぎり、必ず同行しなければならない。

高瀬長官はダイキに訊いた。

「ところで、海兵隊の特殊部隊に所属していたんですか？」

「ええ、対テロ特殊部隊です」

「対テロ特殊部隊！ エリートの中のエリートじゃないですか」

「いや、大げさですよ」

「海兵隊の対テロ特殊部隊といたら、士官学校を首席で卒業するくらいの成績と体力がなければ入れない」

「大したことはないです」

「もしかすると、あの方たちも？」高瀬長官は十一人のほうを向いてたずねた。

「実はそうなんです。対テロ特殊部隊の後輩たちをヘッドハンティングして、会社を作ったんです」ダイキは誇らしげに仲間たちを見た。

「エリート集団ですか。少数精鋭の警備会社ですね」

「ありがとうございます」

「もし、私が大統領になったら、君たちに警備を頼みたいものだ」

「いつでも呼んでください。では、失礼します」

ダイキはそう言って、仲間たちのところへもどっていった。そこに、スペースポートの職員がやってきて、ダイキと話をする声が聞こえてきた。

「荷物は大丈夫だろうか？」ダイキが訊くと、

「任せてください。完璧です」とスペースポートの職員が答えていた。

高瀬長官が打ち合わせのために先生たちのところへ行ってしまうと、ミスホはクラスメートたちから足を踏ふまれる地味ないじめを受けた。バスの中で高瀬長官に守られたことは、ミスホには決して幸運なことではなかった。クラスメートたちのいじめ魂に火をつけるようなものだった。

「やめて」泣きそうな顔でミスホが言うと、

「『やめて』」とアイナが口真似をして、クラスメートたちの笑いを誘っていた。

宇宙旅行が普通になり、宇宙時代といわれる現代でも、残念ながらいじめはなくなっていない。人間の精神だけは、科学で進歩させることができなかった。

出港は午前十一時。三十分前の十時半に搭乗たっしょうを知らせるアナウンスが流れ、ミズホは地味ないじめから救われた。先生たちに誘導され、生徒たちはタラップへつづく搭乗口に向かって歩き出した。

男子生徒たちが、歩きながら発着場のほうを眺めて話している。

「どのスペースシップに乗るんだ？」

「あの大型宇宙客船だつてさ」

「あれか！　すげえーな」

スペースシップが成田を出港するまで約三十分　地球から千六百光年以上の宇宙の旅　M42オリオン大星雲へ向かう。

第3章 遙か彼方へ

大型宇宙客船の船内は五階に分かれていて、キャビン、大食堂、娯楽施設などは、一階より上の階にある。大気圏を抜けるまで、乗客たちはシャトルと呼ばれる一階にある部屋へ入り、セーフティー・シートに坐る。この部屋は、離陸から大気圏を抜けるまでと、大気圏突入から着陸までの間しか通常は使われない。シート数は四百席

この船は、乗員乗客合わせて四百五十五人乗りである。乗員五十五名のほかに、簡単な業務を行うロボットが搭載されている。動力は反物質エンジン

宇宙空間の水素原子を集め、その半分を特殊な装置を使い、電気的に反対の特性を持つ反粒子にする。そして、粒子と反粒子を反応させ、対消滅を起こし、光に変えて噴射させる光子ロケット推進システムだ。宇宙空間の水素を利用するため、燃料は無限である。ほぼ光速での飛行が可能だが、それでは宇宙を観光する意味がないので、目的地と日数に応じて速度を調整する。

船内の重力は、グラビテーション・バランサーにより、離陸から大気圏を抜けるまでと、大気圏突入から着陸までを1.5〜3Gに設定され、宇宙空間では船底に向かって1Gに設定される。つまり、宇宙では地球上と同じ重力がキープされるのだ。

さらに、人工光と人間の呼吸で出された二酸化炭素で植物の光合成以上のことができるクロロフィルターを使ったエア・コンディショナーが、酸素不足になることを防ぐ。

今回の乗船率は日比谷中学校の科学授業が加わったため、約七十パーセントであった。

ミスホは、ほかの乗客たちと同じようにセーフティー・シートへ坐り、安全ベルトをして、正面の大画面ディスプレイを見つめていた。宇宙旅行では、離陸時に大画面の画像ディスプレイに映し出さ

れるカウントダウンを、十秒前から乗客全員で声を出して行うのが恒例になっている。

離陸準備が整い、大画面ディスプレイには三分前からカウントダウンがはじまっている。ミズホの鼓動^{こどう}は、周りへ聞こえるのではないかと思うくらいに高鳴った。彼女にかぎらず、どんなに宇宙旅行に慣れている人でも、離陸時のカウントダウンは緊張する。

離陸二分前になり、一分前になった。そして、ついに十秒前になって、乗客たちによるテン・カウントダウンがはじまった。日比谷中学の生徒たちの若い声が特に響く。だけど、ミズホはみんなと一緒に声を出すことができなかった。

「10、9、8、7、6、5、4、3、2、1、リフト・オフ!!」
JST（ジャパン・スペース・トラベル）の大型宇宙客船J108の13便は、噴射音とともにゆっくりと、機体を水平のまま垂直にあがっていく。大画面ディスプレイには、小さくなっていくスペースポートが映っている。スペースシップは、徐々にスピードをあげ、対流圏を抜け、成層圏に入り、高度四十キロメートルで船体を垂直に傾けて、さらにスピードをあげ、中間圏、熱圏を抜け、高度九百キロメートル先の外気圏へ一分三十秒で飛び立った。

大画面ディスプレイに映っていた地表は青い地球となり、無事に大気圏を抜けたことを知らせる船内アナウンスが流れ、乗客たちの拍手が鳴り響いた。ミズホを乗せたスペースシップは、遥^{はる}か彼方^{かなた}にあるオリオン大星雲を目指して航行をはじめた。

セーフティー・シートから離れ、シャトルを出ることが許された乗客たちは、それぞれのキャビンへ向かう。日比谷中学の生徒たちも先生の指示に従い、自分たちに割り当てられたキャビンに行くため、一組から四組まで男女二列にならび、通路を歩いていった。各所に設置された大小の画像ディスプレイには、離れていく地球の映像や太陽系の説明、JSTの宣伝などが映し出されている。

生徒たちが通路を歩いていると、それまで閉じていたシャッター

が開き、特殊ガラスの大きな窓から、肉眼で地球や宇宙を展望できるようにになった。この特殊ガラスは、恒星^{こうせい}などから出る人体に有害な光線を百パーセントカットし、ガラスの色を変えずに眩^{まぶ}しさを自在にコントロールできる。

数人の生徒から低い歓声^{かんせい}があがり、羽柴校長が生徒に向かって言った。

「地球とも、えー、しばらくお別れです」

一番後ろを歩いていたミズホは、どんどん遠ざかっていく青い故郷を見て、もう引き返せないと覚悟を決めた。

キャビンは、特等、一等、二等があり、部屋の大きさは様々で、日比谷中学の生徒たちは、四階にある二等の四人部屋である。同じ階の一等の二人部屋が、先生たちの泊まるキャビンだ。

ミズホが泊まるキャビンは38号室、アイナと知的な顔立ちの女子のレミカが同じ部屋であった。三人はキャビンへ入り、自分のベッドに荷物を置き、寝泊まりする準備をした。四人部屋なので、ミズホは二人から離れたベッドを選んだ。

ナイト・テーブルに荷物を入れているミズホを睨^{にら}んで、アイナが言った。

「こいつと同じ部屋なんて、最悪だよ」

「ほんと、ハナミズホ見てると気分が悪くなるのよね。あー気持ち悪い」レミカが、荷物を整頓しながら言った。

「いじめられてたら、普通は来ないわよね」アイナが言うと、「バカだから平気で来られるのよ。宇宙だって、こんなバカが来たら迷惑よ」と言って、レミカもミズホを睨^{にら}んだ。

「来るなって言ったのに。ひざまずいて謝^{あやま}りなさいよ！」アイナが怒鳴るように言った。

「……ごめんなさい」ミズホは床^{ゆか}にひざまずき、小さな声で謝った。「聞こえないわ！」レミカが怒鳴りつけ、ミズホの肩に力強い蹴^けりを入れた。

その勢^{いき}いでミズホは後ろへのけぞり、ナイト・テーブルのかどに

頭をぶつけて、床にうずくまった。

レミカは学年でトップの優等生である。実は彼女もいじめられていた時期があった。成績が優秀すぎても、いじめのターゲットにされるのだ。その時期、孤独だったレミカは、自分から進んでミスホと友達になった。

二人は、一緒に通学したり、買い物へ行ったり、レジャーランドへ行ったり、お互いの家に遊びに行ったりするほど仲よしになった。やっとできた友達に、ミスホはともうれしくなった。

しかし、アイナがレミカに、「ミスホをみんなの前で泣かせたら、あんたをいじめるのをやめて、仲間にしてやるわ」と約束したので、レミカはミスホを裏切った。ミスホと友達でいても、なんの得にもならない。それが、成績優秀な頭脳がはじき出した計算の答えであつた。

「それ以上バカにならないから、心配しなくていいわよ」

頭を抱えて床にうずくまるミスホに向かって、レミカが冷たく言うと、アイナが高笑いした。ちょうどそのとき、月の真横を通過しているという船内アナウンスが流れてきた。

昼食の時間になり、先生、生徒たちは、三階にある広くて豪華な大食堂に集まった。食事は、フードマシンからセットになってトレイの上に自動で出てくる。それを自分で取って、テーブルに着き、宇宙を眺めながら食事を楽しめるようになっていた。一般客はメニューを自分で選べるが、日比谷中学では学校のほうでメニューを決められていた。

ミスホは高瀬長官を捜したが、見あたらなかった。しかたなく彼女は、みんなから離れた誰もいないテーブルに坐った。メニューはカレーライスとサラダで、デザートにプリンがあり、飲み物はホット・ミルクだった。

アイナがいるテーブルには、レミカ、ケイ、ヨシト、そして、女子に一番人気がある男子のエイタが食事をしていた。

「いいこと思いついた！」エイタが唐突に立ちあがった。

「どうしたの？ いきなり」ケイが訊くと、

「いいものを見せてやる」とエイタが言った。

そして、エイタはミズボのところまで歩いていった。

「な、何？ エイタ君」ミズボが訊いた。

「ミズボさん、一人で寂しいじゃん。僕がカレーのおいしい食べ方を教えてやるよ」とエイタが、にやにやしながら言った。

「カレーのおいしい食べ方？」ミズボが言うと、

「ああ、教えてやる」と言って、エイタはテーブルにあった醤油を取り、ミズボのカレーに全部かけてしまった。向こうのテーブルでは、その様子を眺めてアイナたちが楽しんでいる。

「何するの……」ミズボが戸惑って言うと、

「親切だよ、親切！ こうやって食うと、うまいんだ！」エイタはさらに、ソース、ケチャップ、マヨネーズ、サラダ、プリン、ホット・ミルクをカレーに入れ、ミズボから取りあげたスプーンでグルグルとかきまぜた。

「ほら、うまそうじゃん！」

エイタが言うと、見ていた周りの生徒たちが爆笑した。

「さすが、一流シェフ！」

ヨシトがそう言って拍手すると、ほかの生徒たちも拍手をした。アイナがミズボのところにやってきた。

「ハナミズボ、早く食べなさい！ 食べないなら、頭からかけるわよ！」

かけられるより食べるほうがましだと思い、ミズボは少しだけそれを食べて、ひどく嘔^むせてしまった。

「本当に食った！ 信じられねえな」

エイタが気分悪そうに言うと、ミズボが声を出さずに泣き出した。

「エイタ、感動して泣いてるわよ」アイナが言うと、

「ああ、親切は気持ちがいいぞ、アイナ」と言って、エイタは高笑いした。

そして、満足した二人は、自分たちのテーブルへもどっていった。その光景を、元軍人のダイキと仲間たちが食事をしながら見ていた。「ダイキさん、いじめですよ。かわいそうに、先生たちも知らん顔みたいですね」

仲間の一人が話しかけたが、ダイキは何も答えずに食事をしていった。

火星の横を通りすぎるとき、乗客が観賞できるようにスペースシップは速度を落とした。知名度の高い惑星などの近くでは、ゆっくりと航行する。

日比谷中学の生徒は先生に呼ばれて、最上階にあるパノラマ・ラウンジに集合した。このラウンジは公園のように広く、宇宙が百八十度見渡せるようになっていた。生徒たちは火星を観賞しながら、人類の惑星移住計画、テラフォーミングの失敗についてなどの授業を高瀬長官から受けた。

『テラフォーミング・プロジェクト』それはいまから二千六百年以上前、火星に地球と同じような環境を人工的に作り、人類が火星へ移住できるように行われた。計画に着手してからおよそ百年後、火星に濃い大気ができ、人間は小型の酸素マスクだけで活動できるまでになった。そのまま計画が順調に進めば、数百年後の火星は地球と同じような環境になる予定だった。

しかし、永久凍土層の氷を一部溶かしたとき、地球上には存在しない、人類の医療では太刀打ちできない殺人ウイルスが大気中に発生し、次々と死者を出してしまった。その殺人ウイルスについてわかったことは、種類は二百三十種類以上、感染すると四時間以内に死亡、地球上ではなぜか生息できない、などであった。

火星が地球と同じ環境になれば、殺人ウイルスも絶滅するのではないかという説もあったが、科学者たちがその説を否定した。それどころか、ウイルスの種類が増えつづけると断言した。そういうわけで、テラフォーミング・プロジェクトは、着手からおよそ百五

十年後に断念された。

宇宙技術が発展し、コズミック・トンネルの発見で、より遠方へ行けるようになると、人類は移住できそうな惑星や地球外文明を求めて探査を開始した。この探査を本格的にはじめたとき、宇宙条約で、『地球文明より劣る地球外文明を発見した場合、その惑星には絶対に関与してはならない』と定められた。発達していない文明に、高度な科学知識や技術を教えると何が起こるかわからないので、危険だと考えられていた。

しかし、約二千年以上探査し、いろんな惑星で数え切れないほどの地球外生命体が発見されたが、文明を持つ人類のような知的生命体は見つからなかった。また、人類が移住できそうな環境の惑星も発見できなかった。そして、いまから五百年前に、このような目的の探査は打ち切られた。

このときの探査でわかったことは、この銀河系だけでも無数の生命体が存在すること。地球と同じような環境でければ生物は生存できないと考えられていたが、そうではなかったこと。水がまったくない惑星にも生物はいた。コズミック・トンネルが無数にあること。地球外文明や地球環境と同じような惑星を発見するのは、きわめて困難であることなどであった。

科学の発展が地球環境を悪化し、ほかの惑星への移住計画が開始されたのだが、『私たちは地球を見捨てない』をスローガンに、最終的に人類は、科学の力で地球環境を改善する道を選んだ。現在の地球環境は、ほぼ完璧に近い状態を常にキープしている。世界の総人口は約三十五億人。もし、四十五億人を超すと、人口調整プログラムが発動し、数百年をかけてゆっくりと三十五億人前後までもどされる。

現代の宇宙探査は、過去のような目的ではなく、学術的な宇宙構造の把握を目的^{はあく}に行われている。次々に見つかったコズミック・トンネルによって、宇宙の構造もかなりわかってきた。

コズミック・トンネルとは、宇宙空間にある謎のトンネルで、そ

の原理は完全には解明されていない。トンネルへ入ると、数光年から数百、数千、数万光年と、わずか数十分から数十時間で移動できる。このトンネルの存在によって、遙か彼方の宇宙旅行が数日間で行けるようになった。

ミズホを乗せたスペースシップが目指すM42へは、二箇所のコズミック・トンネルを経由し、約一日かけて到着する。そして、オリオン大星雲で五日間を過ごし、また一日かけて地球にもどつてくるといふ七日間の旅である。

次に高瀬長官が、火星に建設された無人の電波中継施設や天体観測施設などについての説明をしようとしたときには、もう火星をとつくに通過してしまつた。

「いかん、いかん、火星を通りすぎてしまつた。このつづきは帰りに説明しよう。では、今日はここまで」

少し照れたように高瀬長官は早足でパノラマ・ラウンジを出て行つた。

「えー、今日の授業は、これで終わり。えー、これからは、自由行動を取つてよし。えー、ただし、夕食をすませるまで、学生服を着替えないようにしてください。それと、えー、くれぐれも、ほかの乗客に迷惑をかけないようにお願いします」

羽柴校長の指示で、生徒たちはうれしそうに解散していった。ミズホはパノラマ・ラウンジで宇宙を眺めていたかつたが、誰かにいじめられるのが怖かつたから、自分のキャビンへもどることにした。

夕食は食へに行かずに、ミズホは学生服からジャージに着替えてしまつた。普通は、男子の気を引くためにおしゃれな普段着を女子は持つてくるのだが、彼女は普段着代わりにジャージを三着しか持つてこなかつた。

キャビンにもどつてきたアイナとレミカは、ミズホが普段着を持つてこなかつたことを知り、さんざんバカにし、バカと同じ部屋で寝るのは我慢できないと言つて、二人は荷物を持つてほかの部屋に

移っていった。

これで明日が来るまで一人でいられる。小窓から見える宇宙を眺めながら、きつと天国のおじいちゃんが助けてくれたにちがいないと、ミズホは思った。安心した途端におなかが空いてきたので、おばあちゃんが持たせてくれたおむすびを一つ食べ、もう一つは明日の朝、食べることにした。

ミズホは、そのおむすびをどんな高級料理よりもおいしく感じた。おばあちゃんの作ってくれたおむすびの味に、ミズホは涙があふれてきた。

最初のコズミック・トンネルは、火星と木星の軌道きどうの間にあるアステロイド・ベルト付近にあり、突入時はスペースシップの特殊ガスのシャッターをすべておろす。それが、船内アウンスとともに、コズミック・トンネルへ入る合図でもあった。この間、乗客は外の景色を一切見ることはできないが、見たとしても特に何も見えない。シャッターを閉めつぱなしにするのは、乗客へトンネル内にいることを示すためと、出入時に起こる閃光と爆音を軽減するためだ。

スペースシップは、およそ三十分かけて一箇所目のコズミック・トンネルを抜けると、海王星軌道の先にあるカイパー・ベルト天体に出た。そして、数時間航行し、冥王星軌道より先にある二箇所目のコズミック・トンネルへ突入していった。

時間の感覚を失わないため、船内は地球の日本時間に合わせて薄暗くなり、夜のような演出がなされる。カジノやバーなど、ほとんどの娯楽施設は夜通しやっているの、先生たちの楽しみはこれからだ。

生徒たちはもう寝る時間だが、友達同士で過ごす宇宙の船旅、楽しくて寝られるはずがない。宇宙で一人の夜を迎えるミズホもなかなか眠れなかったが、それは楽しいからではなく、明日になるのが不安だったからだ。

それでも、一日目はなんとか終わった。これから九時間かけて、このコスミック・トンネルを抜けると、そこは地球から千六百光年以上の彼方である。

第4章 オリオン大星雲にて

閃光に爆音を轟かせながら、JSTの大型宇宙客船J108の13便が、コズミック・トンネルから出てきて、オリオン大星雲にやってきた。閉ざされていたシャッターが全開になり、早起きの乗客に信じられない光景を見せつけた。

すれちがいに、アメリカのUSCT（ユナイテッド・ステーツ・コズミック・ツアー）の大型宇宙客船が、地球へ帰るため、コズミック・トンネルへ入っていった。

ほかの生徒たちが起きてこないうちに飲み物を買うため、ミスホはパジャマのまま五階にある自動販売機へ行った。早朝だから、通路には乗客の姿がほとんどない。不思議な形をした清掃ロボットが一生懸命に働いていて、ミスホがそばを通ると、ロボットが、「オハヨウゴザイマス」と挨拶をしてきた。ミスホも、「おはよう」と挨拶を返した。

自動販売機には、いろんな飲み物のほかに、パンやハンバーガーなど、たくさんの種類の食べ物やお菓子も売っていた。お金は、タッチ・パネル式DNA鑑定装置で、自分の銀行口座から自動で引き落とされる。その鑑定システムは、本人の生存や細胞の生死などを詳細に識別できるため、他人のDNAを使った偽造は、完全にできないようになっていた。

ミスホは、お茶やジュースのほかに、昼食と夕食のパンも買うことにした。朝食は、おばあちゃんのおむすび。これで今日は食堂に行つて、嫌な思いをしないですむ。

キャビンへもどる途中、オリオン大星雲の美しさに見とれたミスホは、立ち止まってしばらく眺めることにした。すると、後ろのほうからダイキがやってきて、話しかけてきた。

「素晴らしい眺めだな、三城ミスホさん」

ミズホが戸惑っていると、

「名前は『ミズホ』でいいんだよね？」とダイキが訊いてきた。

「は、はい……」

「俺は武藤ダイキ」

「元軍人さん。エリートの……」

「俺を知ってるのか？」

「あの……、成田で」

「ああ、なるほど。宇宙科学庁の高瀬長官と話していたとき、そばにいたのか」

「はい」

ダイキは、ミズホの持っている食べ物に目をやった。

「大勢おおぜいの前で、あんないじめをされたら、もう食堂では食えないよな」

ミズホは黙ってうつむいた。

「生徒に訊いたよ。学年で成績は最下位、運動はまったくダメ。おまけに去年まで寒くなると鼻水をたらしていて、あだ名は『ハナミズホ』だって」

ミズホがうつむいたまま黙っていると、ダイキはつづけて言った。

「バカすぎて親に捨てられ、年寄り夫婦の養女になったそうだな」

「それはちがいます！ ほんとの両親は、私が小さいころに死んでしまったの。毎年お墓参りに行ってるわ」

「それ以外は、本当だってことだな」

ダイキの言葉に、ミズホは何も言えなかった。

優等生だったダイキも、中学生のころいじめを受けていた。だが、復讐を決意し、頭と力を使った冷酷で残酷れいこく さんぎやくな方法で、相手を叩きたたのめしたのであった。

「いじめを受けたら、二つの道がある」

そう話すダイキの顔をミズホが見あげると、彼はつづけて話した。「逃げるか、闘うかだ。頭脳も体力もない君には、どうやっても勝ち目はない。逃げる道を選択しろ、逃げるのも立派な戦術だ。もう

学校に行く必要はない。バーチャル・スクールで、その気になれば自宅でも充分勉強できるだろ　いや、勉強などしなくてもいい」
バーチャル・スクールとは、人間の五感の仕組みを解明して、三百六十度の完璧な3D映像を実現し、嗅覚、味覚、触覚もリアルに疑似体験できるユニバーサル・3Dバーチャル・コミュニケーション技術を、自宅に利用した教育システムである。

「でも……」ミズホは言葉につまった。

「近い将来　まあ、いいや」

ダイキの顔つきが変わったが、鈍感なミズホには気がつかなかった。

「そのうち教えてやる……全人類にな」ダイキはオリオン大星雲の星々を眺めながら、押し殺したような低い声で言った。

学生服に着替えたミズホは、電子ノートを持って、集合場所のパノラマ・ラウンジへ向かった。電子ノートには、太陽系やオリオン大星雲、銀河系などの膨大なデータを出発前に学校で入れてもらった。今回の科学授業の唯一の教材である。

パノラマ・ラウンジに生徒たちは集まっていたが、先生たちと高瀬長官はまだ来ていなかった。ミズホをいじめるには絶好の機会だ　もしいれば、助けくれたかもしれないダイキたちの姿もなかった。

アイナたち数人は、電子ノートでミズホの頭を叩いている。

「やめてください」ミズホが半泣きで頼むと、

「頭がよくなるおまじないだってば」とヨシトが言った。

「ハナミズホのために、みんなも協力してよ」

レミカが呼びかけると、ほかのクラスの連中もミズホの頭叩きに参加した。

「やっぱダメだな！　バカはなおらない」エイタがそう言って、ミズホに蹴りを入れた。

倒れたミズホが、その拍子に電子ノートを落とすと、それをアイ

ナが拾^{ひろ}って言った。

「バカのハナミズホには必要ないわね。宇宙の勉強したって、あなたにはなんの意味もないじゃん」

アイナはダストシユートへ向かった。ミズホは起きあがり、アイナのあとを追って、彼女の学生服の袖をつかんで言った。

「返して、アイナさん」

「さわるんじゃないわよ！ 汚いわね」

ミズホを振り払い、アイナは電子ノートをダストシユートに捨てる仕草をした。

「いつものように、ひざまずいてお願いしたら、返してやってもいいわ」

「アイナさん、ノートを返してください」

ミズホが床にひざまずいて頼むと、アイナはミズホの頭に足を載せて踏みつけた。

「ちゃんとおぼえておきなさい、おバカさん。ゴミは、ここに捨てるのよ」

ミズホの電子ノートを、アイナはダストシユートに捨ててしまった。ほかの生徒たちが爆笑している。パノラマ・ラウンジにいる大人の観光客たちは、見て見ぬふりだ。ミズホはダストシユートの中をのぞき込んだが、もう手遅れだった。そして、先生たちと高瀬長官が来て、生徒を組ごとにしなければせ、授業がはじまってしまった。

昔は、オリオン大星雲内で神秘的な星々の光景を眺めると、誰もが心を洗われたものである。しかし、いまではそうでもなさそうだ。観光客たちは星を眺めるより、船内の娯楽施設で遊ぶほうが楽しいようだし、学生たちは神秘的な光景より、いじめのほうが楽しいようだ。

今日の高瀬長官の授業は、ここへ来るためのコズミック・トンネルを発見した、日本の宇宙探査船の事故についてなどであった。

冥王星軌道の先から、オリオン大星雲をつなぐコズミック・トン

ネルが発見されたのは、いまから約千年前だ。トンネルを発見した宇宙探査船には、三人の日本人宇宙飛行士が搭乗していた。その宇宙探査船は、オリオン大星雲内で小惑星に接触し、大破してしまう。三人の宇宙飛行士は、一人乗りのライフポッドで各自に脱出したが、当時二十七歳の安堂トオルという男性宇宙飛行士だけが行方不明になってしまった。しかし、ほかの二機のライフポッドが無事に生還してきたので、コズミック・トンネルの位置や事故の詳細が明らかになった。

その千年前の事故以来、オリオン大星雲での事故は一度もない。ちなみに、現在のライフポッドは五人乗りで、乗っている人が操縦しなくても、自動で地球にもどってくるようになっていく。

「これは余談ですが」「高瀬長官がつづけた。「名字は漢字、名前はカタカナに統一されたのは、千二百年前くらいです。それまでは、名前も漢字で書いていたそうです。以上、今日の私の授業は終わり。このあとは、各組の先生方が教えます」

高瀬長官は生徒に軽く手を振って、パノラマ・ラウンジから出て行った。

組ごとに分かれて、授業のつづきは担任と副担任が引き継いだ。四組の生徒は、中里先生と佐野先生の周りに集まり、授業を受けた。「ノートを出して、オリオン大星雲のトラペジウムをディスプレイに表示しろ」

そう言いながら、中里先生は生徒たちの間を回った。「準備できたか？」

生徒たち呼びかけながら、中里先生が見て回っていると、ミズホが電子ノートを持ってないことに気がついた。

「ノートはどうした？ 三城！」

ミズホはもじもじしているの、中里先生が怒鳴った。

「どうしたんだ！」

ミズホの身体がびくつとなった。

「忘れたんだな」

ミスホが何も言わないので、中里先生はさらに激しく怒鳴った。

「なんとか言え！ 忘れたんだろ！」

「……ち、ちがいます」おびえながら、ミスホはやつとの思いで答えた。

「それなら、どうしたんだ？ キャビンに置いてきたのか？」

ミスホは首を横に振った。

「正直に答えろ！ 忘れたんだな！」

中里先生の尋問に、ミスホはどうしていいかわからず、泣き出してしまった。

「泣いてごまかしたってダメだぞ！ 何しにオリオン大星雲まで来たんだ！ 勉強する気がないんだろ！ バカ！」

中里先生はミスホの頭をぶった。

電子ノートをアイナに捨てられたことを話せば、いじめがひどくなる。同じような状況で、ミスホは何度も泣いてきた。十四歳にもなって、人前で泣くのは恥ずかしい。彼女はいつも自分の限界まで我慢する。それでも我慢できず、泣いてしまうのであった。

四組の生徒たちは、その状況を見てにやにやと笑っている。副担任の佐野先生は、冷たく鼻で笑った。そばにいる観光客のほとんども、笑いながらミスホを見物していた。

自分のキャビンに高瀬長官が入ろうとしたとき、乗客の青年が声をかけてきた。

「すみません。あの学校の先生ですか？」

「いいえ、私は宇宙科学庁の者で、科学授業に同行してきました」

「ああ、高瀬長官ですね」青年は、テレビで見た高瀬長官を思い出して言った。

「ええ、そうです。日比谷中学校の先生に、何か用ですか？」

高瀬長官が訊くと、青年はカメラから録画チップを取り出して言った。

「これ、今朝、パノラマ・ラウンジで撮影したんですけど」

「これは？」高瀬長官は、青年から録画チップを受け取った。

「あの学校の先生に渡してください」

「私も見ていいのかな？」

「どうぞ」

青年と別れ、高瀬長官はキャビンに入って、ソファーに腰をおろし、新聞を開いた。その新聞は紙ではなく、紙のように薄い画像ディスプレイで、折りたたむことや筒状に丸めることができる。地球近辺なら、新しい情報をいつでも検索して見ることができ、またテレビやビデオとしても使用できる。ただ、地球から離れすぎてしまうと、船内で流している情報やテレビ番組などしか見られない。

高瀬長官が、青年から渡された録画チップを新聞のビデオスロットにさし込むと、パノラマ・ラウンジでミズホがいじめられている映像が映し出された。

「この子たちは……、こんなことをするために生まれてきたんじゃないだろ……」

高瀬長官のつぶやきは、怒りを通り越し、悲しみにあふれていた。ミズホがいじめられていることには気づいていたが、実際の映像で見せられるとかなり生々しい。高瀬長官は、スーツの内ポケットからカードを出して、羽柴校長につないだ。

『カード』とは、電話、免許証、身分証明、保険証、車や家などの鍵、財布、情報端末など、その他、いろんな役割を果たす携帯コンピュータである。セキュリティ・ロックで、本人以外は絶対に使用することができないようになっていてる。

「もしもし、高瀬です。羽柴校長、見てもらいたい映像があるんですがね……」

授業は午前中で終わりだった。夕食がすむまで学生服を着ていないとならないが、昼食以降は自由行動になっている。

生徒たちは、昼食を食べるために食堂へ向かったが、ミズホは自

分のキャビンへ急いで帰った。部屋から出なければ、今日はいじめを受けることはない。二日目も終わったようなものだった。けれど、そんなにあまくはなかった。ミズホがキャビンに入ると、アイナとレミカがソファアーに腰かけ、今朝買ったミズホのパンやジュースを飲み食いしていた。

「悪いわね。私たちのために買っておいてくれたんでしょ？」アイナが言うと、

「ハナミズホにしては気が利くわね」と偉えらそうにレミカが言った。

ミズホは不安な表情で、ただ立ちすくんでいる。

「よく考えたら、なんで私たちが部屋を替わらなくちゃならないのよ」そう言って、アイナはミズホに食べかけのパンを投げつけ、彼女の顔面に直撃した。

「ストライク！ さすがアイナ」とレミカが言った。

「私とレミカがこのキャビンを使うから、あんたは出て行ってよ。」

ほかのキャビンに入れてくれなかったら、通路で寝ればいいじゃんわかった！」

アイナの命令に、ミズホはうなずくほかなかった。何を言っても追い出されるに決まっている。しかたなくミズホは自分のバッグを持って行こうとするが、バッグがどこにもなかった。

「あれ？ 私のバッグが……」

ミズホがバッグを捜していると、レミカが言った。

「忘れてた！ ハナミズホの荷物なら、ゴミとまちがえてダストシユートに捨てたわ。必要なら一階のゴミ集積場で捜してきな」

ミズホが目には涙を浮かべ、キャビンから出て行くと、アイナはテーブルの下からミズホのバッグを引きずり出した。

「バカってムカつく！」

自分の言葉とは裏腹に、アイナは心の中に強烈な罪悪感が湧いてきた。

高瀬長官のキャビンで、乗客の青年が撮ったいじめの映像を見せ

られ、羽柴校長はひたすら謝った。

「私に謝ってどうするんです。羽柴校長！」厳しい口調で、高瀬長官が言った。

「は、はい。責任を持って解決します」羽柴校長の顔色が悪い。

「四組の担任と副担任は？」高瀬長官が訊くと、

「はい、えー、担任が中里先生で、えー、副担任は佐野先生です。

えー、二人には、厳重に注意しておきます」と羽柴校長が答えた。

「名前を聞いてるんじゃない！どこで何をやっているんです」高瀬長官が怒鳴った。

「あ、はい、その、あー、確か……、えー、どこでしたか……、えー、そう、カ、カジノだと思います」と羽柴校長が話した。

「生徒が苦しんでいるのに、先生はカジノでギャンブルですか！信じられない……」

高瀬長官は深いため息をつき、部屋中に重い空気が流れた。

捨てられたと思っっているバッグを取りに行くため、ミスホはゴミ集積場を捜して、一階の立ち入り禁止区域に知らない間に迷い込んでしまった。誰かに訊くにも、そこには人の気配はなく、作業用ロボットがうろついているだけであった。

食料品などの倉庫に入ったミスホは、出口を見失い、さまよってしまった。荷物の山で、まるでダンジョンのようになっている。彼女が出口を捜していると、迷彩服めいさいふくを着た十二人の男たちが、何かをしている現場に出くわした。ミスホはあわててしゃがみ、荷物の陰に隠れ、そつとのぞくと、ダイキと仲間たちが真剣な表情で、ライフルやマシンガンなどの銃器を整備していた。

「もう一度確認するぞ」ダイキが、ほかの連中に指示をしている。

「俺たち三人は、ナビゲーション・ブリッジへ行く。お前ら三人が制御室だ。あとの六人は、ブリッジと制御室以外の乗員と乗客を全員パノラマ・ラウンジに監禁しろ。抵抗する奴は、容赦ようじやうなく殺せ」

仲間たちがうなずくと、ダイキはマシンガンのマガジンに弾丸を

込めながら、つけ加えて言った。

「銃の手入れは、万全にしておけよ」

ミズホがその様子を眺めていると、何かが肩を叩いた。しかし、彼女は目の前の光景に驚き、気がつかない。二度肩を叩かれて、ミズホはやつと気づき、後ろを振り返った。

「ドイテクダサイ」作業用ロボットだった。

「しーっ！ 静かに！」ミズホは人さし指を口にあてて言った。

「ドイテ、ドイテ、ジャマデス、ジャマ」

「うるさいの、あっち行つてね」

「シゴト、シゴト、ジャマデス、ジャマナノ」

「お願い、あっち行つて」

「アナタガ、アツチイケ、ドツカイケ」

「聞こえちゃうでしょ」

「さつきから聞こえてんだよ」

ダイキの声に振り向くと、ミズホに銃を向けて、十二人の迷彩服の男たちが立っていた。

「殺しますか？ ダイキさん」仲間の一人が訊くと、

「いや、ライフポッドにぶち込む」とダイキが答えた。

ライフポッドに乗り込むための緊急ハッチがならぶ一階の通路に、ミズホはダイキと仲間たちにつれられてきた。五人乗りのライフポッドは、予備を含めて各階に二十機ずつ、全部で百機搭載してある。

仲間の一人が一箇所のライフポッドの緊急ハッチを開き、ダイキがミズホを中へ放り込んだ。

「バカは救いようがないな。この中で、おとなしくしてろ！ ハナミズホ！」そう言って、ダイキは緊急ハッチを閉め、ロックをかけた。

「出してください！」ミズホは泣きながら頼んだが、外にはまったく聞こえない。

「よし、行くぞ。ミッション開始だ」ダイキが仲間たちへ向かって命令し、マシンガンの薬室に弾丸を装填した。

第5章 スペースジャック

四階にあるナビゲーション・ブリッジのドアが開き、ダイキと二人の仲間が武装して入ってきた。

ブリッジには、JSTの制服を着た男性三人と女性二人が勤務している。河田^{かわた}船長は四十代前半の男性で、ほかに三十代後半の操縦士の男性と三十代前半の副操縦士の女性、それと二十代後半の男性と二十代前半の女性のオペレーターである。ブリッジのドアは厳重なセキュリティで守られていて、関係者以外は入れないはずであった。

「な、なんだ君たちは！ どうやって入ってきたんだ！？」男性のオペレーターが、ダイキの前に行つて尋問した。

「見ればわかるだろ。ドアからだよ」そう言つてダイキは、男性オペレーターをマシンガンでいきなり射殺した。

ブリッジ勤務のクルーに恐怖が走った。

「この程度のセキュリティ・システムなんて、簡単に破れるんだよ」

仲間の一人が言つと、ダイキが意気込んで言つた。

「この船をスペースジャックする！ おとなしく言うことを聞いてもらうぜ」

「何が要求だかわからないが、女性二人はブリッジの外に出してやつてくれ」河田船長が頼むと、

「いいだろう。女二人は外に出ろ」とダイキが言つた。

そして、女性の副操縦士とオペレーターがブリッジから外に出て行こうとした、が、そのとき、ダイキは彼女たちの背中をマシンガンで撃ち、冷酷に殺してしまった。

「なんてことをするんだ！」河田船長は愕然^{がくぜん}とした。

「男女平等だろ。都合の悪いときだけ『女だから』なんて、俺には通用しないぜ！ 死体を外に出せ」

ダイキに命令され、仲間の二人は、ダイキが射殺した三人の遺体をブリッジの外に出した。

「私と河田船長を殺したら、船を操縦できる者はいない。地球には帰れませんよ」操縦士が言うと、

「その心配はない！ オートでもマニュアルでも、俺たちが操縦できる」とダイキが自信たっぷりに言った。

「わかった、抵抗はしない。君たちの要求を聞こう」河田船長が、あきらめて言った。

ダイキの仲間三人が制御室に入ってきて、JSTの作業服を着た男性オペレーター二人を射殺した。

「もう一人いるはずだがな」

「それはあとだ。こつちを片づけちまおう」

三人は制御パネルに向かって操作した。乗員乗客が隠れられないように、すべてのキャビンのドアロックを解除し、また彼らが脱出できないように、ライフポッドの緊急ハッチを開かなくした。

「これで誰も逃げられない」

「ああ。それに、キャビンに閉じこもることもできないだろう」

「ダイキさんに連絡だ」

仲間の一人が制御室の回線を使って、ブリッジのダイキに連絡した。

「ダイキさん、制御室は占領しました」

「いいぞ。ライフポッドを使えないようにしたか？」スピーカーから、ダイキの声が返ってきた。

「はい」

「キャビンのほうは？」

「OKです」

「よし。指示をするまで、その場で待機だ」

「了解！」

ダイキたちは回線を切った。

三階後部にある制御室は、すべての階と吹き抜けになっている機関室とつながっていた。機関室からエンジンの点検をすませ、もどってきた中年男性の機関長が、いまの会話をドアの裏に隠れながら聞いていた。制御室のオペレーター二人が殺されていることも確認した。彼は気づかれないように機関室へ引き返し、エンジンの隙間^{すま}に身を潜めた^{ひそ}。

「たいへんなことになったぞ」機関長は震えながらつぶやいた。制御室で待機しているダイキの仲間の一人が、思いついたように言った。

「そういえば、もう一人いるはずだぞ。制御室にはオペレーター二人と、機関長が一人いる」彼は遺体を見て、つづけて言った。「こいつらはオペレーターだ。機関長がどこにいます」

「機関室だ！ 機関室にエンジンの点検をしに行ってるんだ！」

ほかの仲間が言うのと、三人目の仲間が言った。

「機関室だな。俺が行ってくる」

彼は制御室にある機関室のドアを開き、中へ入っていった。

船内の各所に、緊急船内放送が流れた。

「乗員乗客のみなさん、私は船長の河田です。問題が発生しました。どうぞパニックにならないように聞いてください。この宇宙客船は、スペースジャックされました」

各所にいる乗員乗客たちがざわめいた。緊急船内放送はつづく。

「みなさん、抵抗せずに、すみやかにパノラマ・ラウンジへ向かってください。それと、宇宙科学庁の高瀬長官、大至急ナビゲーション・ブリッジまでお越しください」

ダイキの仲間の二人が、船内を回って呼びかける。

「パノラマ・ラウンジに行け！ もたもたしてる奴は撃ち殺すぞ！」

「死にたくなければ、パノラマ・ラウンジに急げ！」

二人は、各所に乗客が隠れていないか調べながら巡回する。

パノラマ・ラウンジでは、ダイキの仲間の四人が、集まってきた

乗員乗客たちを監視している。そこには、日比谷中学の先生や生徒たちの姿もすであつた。

「無駄口を叩くな！ 逆らう奴は撃つぞ」仲間の一人が怒鳴った。

「こ、こんなことはよしなさい。えー、子供たちが大勢、えー、乗っているんです」羽柴校長が説得しようとした。

「なんだお前は！」

「わ、私は、この学校の、えー、校長です。日本の未来を支える子供たちだけは、えー、助けてやってください」

「『未来を支える子供』だって？ 弱い者いじめを集団でやっている子供に、日本の未来は託せないな！」

「それは……」

ライフルの銃弾が、羽柴校長の頭部を貫いた。パノラマ・ラウンジが騒然となり、校長を射殺したダイキの仲間が怒鳴った。

「黙れ！ いいか、余計なことを言う奴は、こうなるぞ！」

ナビゲーション・ブリッジの前の通路に横たわる三体の遺体を見て、高瀬長官は事の重大さを充分に理解し、中に入った。

「君たちだったのか……」高瀬長官が、ブリッジにいたダイキたちを見て言った。

「早かったな、高瀬長官」ダイキが言った。

「君たちの目的はなんだ？」

高瀬長官が訊くと、ダイキは答えた。

「攻撃衛星、コスモスのコントローラーを、俺たちに渡してもらおう」

『コスモス』とは、ピンポイントから広範囲に指定した領域の生物を一瞬にして抹殺できるレーザー兵器だ。コスモスは、気象衛星の役割もするため、一般的には気象衛星だと思われるが、実は攻撃衛星なのである。地球軌道上を廻っているそのスペース・ウエポンは、人類を絶滅させることも簡単にできる。テロ対策用に関発されたその攻撃衛星のコントローラーは、持ち運びできるほどコン

パクトで、宇宙科学庁の地下に厳重に保管されていた。持ち出すには、生きた高瀬長官の網膜スキャンとDNA鑑定が絶対に必要である。コスモスは国の最高機密で、その正体を知っている者はかぎられていた。

「あの気象衛星が攻撃衛星だと知っていると、さすが元対テロ特殊部隊だな。しかし武藤君、そんなものを手に入れてどうするつもりなんだ」

「俺たちが地球を支配する！ 惑星をまるごと支配するなんて、スケールがでかいだろ。俺の人生を賭けた、人類史上かつてない壮大な計画だ。俺が神に匹敵する存在になる。それが俺の夢だ。だが心配するな、俺が創り出す世界は楽園になる」

ダイキの話を聞いて、高瀬長官は呆れた顔で言った。
「本物のバカとは、君のような人間だな」
すると、ダイキが反論した。

「俺はバカじゃない！ エリートの中のエリートだぞ！ 普通の人間より遥かに高いIQと身体能力を持っている。俺は最高に優秀な人間なんだ！ バカな政治家連中に代わって、世界をよくしてやるぜ」

「仕事はできる優秀な人材だが、人間的に本物のバカを私は山のように見てきた。そして、いまも見てる」高瀬長官が、ため息をついて言った。

ダイキの顔色が変わり、マシンガンの銃口を高瀬長官の顔に向けた。

「ぶっ殺す！」

「殺せ！ 私を殺したら、コスモスのコントローラーは入手できないぞ」

「お前が了承するまで、乗員乗客を一人ひとり殺していく。いいんだな？」

高瀬長官が沈黙すると、ダイキはマシンガンの銃口を彼の顔からそらした。

機関室ではダイキの仲間の一人が、機関長を捜してうろついていた。彼は、エンジンの隙間に隠れている機関長に気づかず、その場で立ち止まり、警戒しながら辺りを見回している。

見つければ、まちがいなく殺される。そう思った機関長は、彼が背中を向けた瞬間を狙って飛びついた。

「なんだ!？」

ダイキの仲間はあわてて抵抗したが、機関長は彼の背中にへばりつき、マシンガンをつかんで放さない。

二人は床に倒れて、激しくもみ合った。ダイキの仲間が、機関長の手からマシンガンを引き離そうとした。そのとき、トリガーを引いてしまい、弾丸が連射し、エンジンの急所を直撃した。

「やばいぞ!!」

機関長が叫んだ瞬間、エンジンが出火し、ものすごい勢いで機関室と制御室は炎に包まれた。機関室でもみ合っていたダイキの仲間と機関長、それと制御室で待機していたダイキの仲間二人は、数秒で灰と化した。

スペースシップが大きく揺れて、警報が鳴り響いた。パノラマ・ラウンジにいた全員が床に倒れ、パニック状態になった。

ナビゲーションブリッジで、操縦士が叫んだ。

「機関室で火災です!」

「脱出しないと、船が爆発するぞ!」河田船長が大声で言った。

「あいつら、しくじったな!」ダイキが怒鳴った。

動揺し、油断していたダイキの仲間の一人に操縦士が飛びか

かり、ハンドガンを奪い、彼の頭に突きつけ、叫んだ。

「銃を捨てろ! 捨てないと、こいつを撃つぞ!」

「あまいな」そう言ってダイキは、操縦士と自分の仲間の頭部をマシンガンで撃った。

「正気ですか!! ダイキさん!」もう一人の仲間が、ライフルの銃口をダイキに向けて叫んだ。

「足手まといは必要ない」ダイキは冷たく言い放った。
「もうあなたにはついて行けない。ダイキさんに、理想の世界を創れるとは思えない」

二人の会話中、河田船長はブリッジのライフポッドの緊急ハッチを素早く開き、高瀬長官を押し込んだ。

「河田船長！ 何をするんです！？」高瀬長官が言うと、

「この船は沈みます。地球に帰って事故の詳細を知らせてください」
河田船長はそう言って、緊急ハッチを閉め、ライフポッドを発進させた。

高瀬長官を乗せたライフポッドは、スペースシップから飛び出し、自動で地球へ向かって正常に航行していった。

ダイキが気づいて怒鳴った。

「お前！ 何をやった！」

「高瀬長官を地球に送り返した」

河田船長が答えると、ダイキは動転して言った。

「ライフポッドは使えないはずだぞ」

「勉強不足だったようだな、エリートの中のエリート！ ブリッジのライフポッドだけは、制御室のシステムとつながってないんだ。

それよりも、早く避難しないと全員死ぬぞ」そう河田船長が話すと、
「ダイキさん、船長の言うことを聞いてもらいます」と仲間の一人が、ダイキの背中にライフルを突きつけて言った。

しかし、ダイキは素早く振り向き、ライフルをかわし、マシンガンで仲間の頭を撃って即死させた。突然、船体が激しく揺れてダイキが倒れた。

その隙に、河田船長はナビゲーション・ブリッジから走って出て行った。ダイキは倒れたまま発砲したが、マシンガンの銃弾は河田船長にはあたらなかった。

パノラマ・ラウンジにいた乗員が叫んだ。

「船が爆発するぞーっ！ 早くライフポッドに乗り込めーっ！」
パニックになった乗員乗客たちが、いっせいにパノラマ・ラウン

ジから出て行った。ダイキの仲間たちは、銃を上に向けて発砲し、怒鳴った。

「ここに残れーっ！」

しかし、乗員乗客たちは、誰も言うことを聞かず、パノラマ・ラウンジの出口にもものすごい勢いで向かっていった。

「やばそうだ！ 俺たちも逃げようぜ」

仲間の一人が言うと、ほかの仲間たちがうなずいた。

河田船長が特殊消化器を使って、制御室にやっとたどり着いた。機関室を見ると、消化システムは作動しているが、エンジンの炎は消えそうにない。爆発は時間の問題だ。

制御パネルに向かって、河田船長はライフポッドの緊急ハッチを開こうとしたが、システムは完全にダウンしている。

「ダメだ……助からない……」

河田船長の絶望的なつぶやきとともに、サブ・エンジンが爆発し、制御室を吹き飛ばした。

激しい衝撃で、各階にあるライフポッドの緊急ハッチがならぶ通路に押し寄せていた乗客たちが将棋倒しになった。四階のライフポッドに乗り込むための通路には、日比谷中学の先生と生徒たちがたくさんいた。

「どうしてだ？ ライフポッドの扉が全部開かないぞ！」乗客の誰かが怒鳴った。

「ここもダメか！ ほかの通路に行こう」中里先生が言った。

「神様、助けてください！」

アイナが泣き叫ぶと、ほかの生徒たちも泣きはじめた。

ダイキは、五階にあるライフポッドの緊急ハッチがならぶ通路にやってきた。その通路には、乗客たちの姿はもうなかった。たぶん緊急ハッチが開かなかったので、ほかの階に移っていったのだろう。一つひとつの緊急ハッチを見て回るダイキだったが、やはり扉は開かない。やけくそになったダイキは、マシンガンで一箇所の緊急

ハッチの開閉スイッチを撃った　全弾丸を撃ち尽くしたが、緊急ハッチは開かない。

激怒したダイキが、マシンガンを緊急ハッチに投げつけると、突然扉が開いた。

「やっぱ俺は幸運の持ち主だ！」

歡喜してダイキは、ライフポッドに乗り込もうとした　そのとき、メイン・エンジンが爆発、それまでにない激しい揺れが船内に起こり、彼はその場に倒れた。

ダイキは起きあがり、もう一度ライフポッドに乗りうつするが、グラビテーション・バランスが故障し、船内が無重力状態になった。

浮きあがったダイキは、ライフポッドの扉から引き離され、叫んだ。

「くっそーっ！！」

使えるライフポッドを探して、船内の各所をさまよっていた乗員乗客たちが、無重力状態で宙に舞っている。四階にあるライフポッドの通路にいた日比谷中学の生徒たちは、できるだけ離れないように、友達同士で腕や脚などの身体をつかみ合って宙に浮いている。

「手を放さないでよーっ！」アイナが叫んだ。

「誰か！　どうにかしてーっ！」レミカが半狂乱で叫んだ。

ライフポッドの中で、ミズホも宙に舞っていた。彼女はシートの一つに手をのばしてつかまり、身を引き寄せ、なんとか坐ることができた　そして、シートベルトを装着し、つぶやいた。

「おばあちゃん……」

スペースシップのあちこちで爆発がはじまった　その直後、閃光が走り、大型宇宙客船全体が大爆発をし、粉々に散ち、九十九機のライフポッドがオリオン大星雲にばらまかれた。

日比谷中学の先生と生徒たちや、ほかの乗員乗客たちは、ライフポッドに乗り込むことができなかった。宇宙旅行時代はじまって以

来の大惨事、ほぼ全滅だ。

ミズホを乗せたライフポッドは、爆風で故障し、安定性を失い、クルクルと回転しながら宇宙空間を飛んでいく。しかも、地球へ向かうコズミック・トンネルとはまったくちがう方向、オリオン大星雲の中心へ向かって飛び去っていく。

第6章 見知らぬ大地

ミズホを乗せたライフポッドは大気圏に突入し、鬱蒼うつそうと茂る森の中へ落下していった。地表が接近し、墜落を防ぐための緊急逆噴射がライフポッドにかかり、ゆるやかに着地した。

ライフポッドの小窓からミズホが外を眺めると、一瞬何かが横切ったような気がした。彼女はもう一度よく眺めたが、特に何も無い外は明るく、草木が生い茂っていて、どこかの森の中に着地したようだ。

「助かったのね。地球に帰ってきたわ」

そうつぶやきながら、ミズホはシートベルトをはずして立ちあがり、ライフポッドの外に出てみようと思い、緊急ハッチを開こうとした。しかし、どうやっても開かない。彼女は何度も挑戦したが、やはり開かない。壊れてしまったのだろうか？ そうではない、出口は横についている別の扉だった。

やっと気づいたミズホは、扉を開けて外に出ようとした。そのとき、黄土色のムカデと毛虫の中間のような十メートルぐらいの巨大な怪物が、でかい口を横に開き、シャーッと鳴きながらおそいかかってきた。突然の攻撃に驚いたミズホは、悲鳴をあげて、その怪物に頼りない蹴りを入れた。すると、驚いたことに、その怪物は遠くのほうへぶっ飛んでいってしまった。

「な、何！？ いまのは！！」

ミズホはあわててライフポッドの扉を閉めて、中に避難した。

「でも……さっきの生き物、すごく軽かったわね……ヘンなの」

平常心を取りもどしたミズホは、つぶやくようにそう言って、少し笑った。

ライフポッドの小窓から、ミズホはしばらく外の様子を眺めたが、あの怪物はもういる気配はない。さっきの出来事は、何かの勘かん違いがいただったのかもしれない、彼女はそう思って忘れることにした。

外の様子をいつまで眺めていてもしょうがないから、ミズホは船内を物色しはじめた。救急セットに非常食や非常飲料、新聞などが出てきた。スペースシップの事故のことが、放送されているかもしれない。そう思った彼女は、新聞を広げ、スイッチを入れてみた。しかし、新聞のディスプレイには何も映らず、ただ電波の荒れが映っているだけである。

「壊れちゃってるわ」

地球なら電波が届かないはずがないので、ミズホはそう思った。

あの事故からいままで、どのくらい時間が経ったのだろうか？

もしかしたら、何日もすぎているかもしれない。そんなことを考えたら、ミズホは急におながが空いてきた。あれから何も食べてないのだ。

ミズホは非常食を少し食べることにした。だけど、あまり食べるわけにはいかない。救助隊の到着が、いつになるかわからないのだから。それまで、少しずつ非常食を食べようと彼女は思った。

いつの間にか、おもては夜になっていた。ミズホは不安になってきたが、救難信号がライフポッドから発信されていることを確認して、少し安心した。安心したら眠くなってきたので、彼女は寝ることにした。

朝になってミズホは、ライフポッドから外へ出てみた。おもての空気は緑の香りが漂い、とても爽やかで、暑くも寒くもなかった。いまの日本は秋だから、ここは日本ではないことが彼女にはわかった。

ミズホは深呼吸をして、少しうれしくなって言った。

「気持ちいいわね。どこの国かしら？」

ライフポッドの周辺を、ミズホはとりあえず散策（さんさく）してみることができた。何の木だかわからないが、高いところにおいしそうな実が生っている大きな木があった。彼女はその木を揺（ゆ）すってみた。数回揺すったら、なんと大きな木が突然折れてしまった。

「あつ！ ごめんなさい！」

思わずミズホは木に謝った。おばあちゃんから、植物も生き物だとさんざん教えられていたから、ミズホには木も動物と同じ感覚だったのだ。

驚くほど簡単に、その木は折れてしまったので、彼女は抱えて持ちあげてみることにした。すると、その大木が持ちあがったではないか！

「この木、軽いわね！」

ミズホは持ちあげた木を豪快に振り回してみた。そして、中が空洞なのかと思い、のぞいて見たが、そうではないようだ。次に、彼女はその木に生っている実を一つ取って、よく観察してみた。いい匂いがして食べられそうだったが、彼女はおなかをこわすといけなしいと思い、いまは食べるのをやめた。でも、非常食がなくなったら勇気を出して食べてみようと思った。

大木を倒したままにしておくのはよくないと思って、ミズホはその木を土の地面に勢いよく突き刺した。すると、大木は思った以上に深く突き刺さった。

「あれ？ 地面がやわらかい？」

ミズホはしゃがんで地面を調べると、かなりやわらかい。しかも、足もとにあった拳ぐらいの石を拾い、握ってみると、粉々に砕けてしまった。

「珍しい石ね。あれは、どうかな？」

そう言って、ミズホは大きな岩のところへ行った。彼女の二倍近くある大きな岩だ。その岩を彼女はおもいきって持ちあげてみると、信じられないが持ちあげることができた。

「わーい！ チャンピオン」

ミズホは岩を放り投げ、手についた土を両手でパチパチとはたき、ライフポッドのほうを向いて目を細めた。突然自分にもすごい力がついたのかと勘ちがいのしたミズホは、鳴りもしない指の関節を鳴らす動作をしながら、じりじりとライフポッドに近づき、それを持

ちあげることに挑戦した。

彼女はライフポッドの先端に行き、しゃがんで両手をかけ、全身に力を入れた。かなり踏ん張ったが、ライフポッドはびくともしなかった。

「……やっぱり無理ね」

当然、そんなものが持ちあがるはずはない。ミスホに力がついたのではなく、この木や岩が、軽かったり、やわらかかったりするだけだ。

見たこともない、いろんな植物を観察したり、変わった昆虫を眺めたり、昼寝をしたり、食事をしたり、独りごとを言ったり、岩などを碎いて超人気分を味わったりして、ミスホは一日を過ごしたが、ついに救助隊は来なかった。彼女が何よりも心配だったのは、おばあちゃんのことだった。自分が生きていることを、一刻も早く知らせたいと思っていた。

空気が澄んでいるせいか、夜は満天の星空で、とても美しかった。ミスホはライフポッドにあった毛布を外に敷いて、夜空の星を眺めながら食事をするにした。夜の森の独特な匂いと星空がおかずになって、特殊パックに入ったおいしい非常食が、彼女にはさらにおいしく感じた。食事をすませたミスホは、毛布に仰向けに寝そべり、もつとよく星空を眺めることにした。

「星がきれいな……手に届きそうだな」

片手を夜空へのぼし、そうつぶやいたミスホの穏やかな表情が、だんだんと険しくなってきた。彼女は突然起きあがり、夜空を食い入るように見つめた。

「……ここは……地球じゃない……」

天文学の知識が一切ないミスホでも、それを理解することができた。なぜなら、夜空には大きくてまんまるい月が、はっきりと二つ出ている……！

ライフポッドを離れてどこかへ向かっても何かがあるとは思えな

い。だから、たとえ救助隊が来なくてもここに残ったほうが安全である。そのほうが、少しは長生きができるだろう　普通の人間ならそう考える。一般的には、失敗を恐れて何もしない人間を『利口な人間』と思われ、失敗する可能性が高いのに行動する人間を『バカな人間』と思われる。なぜか、偉大なことを成し遂げた人物はすべて後者だ。

もちろんミスホは、とにかく行動しようと思って、ライフポッドにあったザックに救急セットや毛布、入るだけの非常食と非常飲料を詰め込んで、目的のない旅へ夜が明ける前に出発していった。

風が吹いてくる方向へ行こうと決めたミスホは、森の中をひたすら歩いた。場所によっては、草木で太陽の光がほとんど遮られてかなり薄暗く、不気味な感じがしたが、彼女はこんな森の中を歩くのは初めてだったから、気分はそれほど悪くはなかった。

かなり歩いた気がするが、どこまで行っても森から出ることはできない。

「この星は、森しかないのかな？」

ミスホは立ち止まり、辺りを見回して少し気分が落ち込んだ。

「ちよつと休もう」

彼女はザックを背中からおろし、地面に坐って大きな木に寄りかかった。体力がないミスホは普通の人の数倍は疲れただろう　坐った途端に眠気がおそってきた。

木に寄りかかったまましばらく眠ってしまったミスホは、ガサガサという激しい物音で目を覚ました。目をこすって前方を見ると、暗赤色の何かがミスホのほうにやってくる。よく見ると、その生き物は体長五メートルはある巨大なサソリに似ていて、反り返った尻尾の先端に大きな目玉が一つあり、身体の三分の二が口で、ものすごい牙が生えていて、脚が六本に力マキリのような腕がついている。ミスホは恐怖で身体が硬直して、逃げるができなくなった。怪物は彼女に気づいてないらしく、ときどき機械音のようなギーギ

ーという鳴き声を出し、辺りをうろろしながら近づいてくる。ミズホの三メートルぐらいに怪物は近づいてきたが、やがて方向を変えて去っていく。その隙に、ミズホは逃げようと静かに歩き出したが、小枝を踏んで音を立ててしまった。恐る恐る彼女は振り向くと、怪物の尻尾の目玉だけが振り向き、目と目が合った。

ミズホはとりあえず微笑ほほえんでごまかそうとしたが、やはり通用しなかった。怪物は向きをかえて突進してきた！あわてて走ろうとしたミズホだったが、脚がもつれて転んでしまった。怪物はすごい勢いで迫ってきて、彼女の脚にかぶりつき、噛み砕いた！

「痛い！痛い！痛くない！？」

見ると、ミズホの脚はなんともなく、怪物の牙が数本折れていた。怪物がひるんだ隙に、ミズホは起きあがって走った。すると怪物が怒り狂って彼女を追ってきた。が、怪物は突然止まり、あどずさりをはじめた。ミズホがでかい岩を持ちあげ、立ちほだかつていたのだ。

「どりゃーっ！」

彼女が投げた岩を間一髪でかわし、怪物は一命を救われ、全速力で逃げ去っていった。

「助かったわ……」

ほっとしてミズホは言ったが、助かったのはたぶん怪物のほうである。

そして彼女は、大きな木の下に置きっぱなしだったザックを背負い、風が吹いてくる方向へまた歩きはじめた。

気づいたら夜になってしまった。二つの月明かりでまだ歩けそうだったが、ミズホは野宿をすることにした。ザックから毛布を出し、それにくるまってミズホは横になった。歩き疲れていた彼女は、すぐに眠りに落ちた。

どれくらい眠っただろうか、クンクンという物音で目が覚めると、まだ夜中だった。その音の正体は、顔の長い大きい犬のような薄茶

色の動物が、熱心にミズホの匂いを嗅いでいる音だった。

その動物は、毛布にくるまったミズホの身体の匂いを嗅いでいたが、やがて顔の匂いを嗅ぎはじめた。ミズホがうす目を開けて見ていると、突然その動物はお尻を向け、後ろ脚で彼女に土をかけはじめた。

「こら！」

ミズホが起きあがって怒鳴ると、その動物は驚いて走り出した。

「私はうんちじゃないわよーっ！」

逃げていくその動物に向かって、ミズホは叫んだ。そして、彼女は制服の匂いを嗅いでつぶやいた。

「臭くないわ。失礼ね」

朝になって、ミズホはまた歩き出した。どこまでもつづく森、途中なんども休みながら彼女は歩いた。

「あれ？ 水の音がするわ！」

彼女は音がするほうへ行ってみると、そこにはきれいな小川が流れていた。

「川だわ！ 水が透き通ってる」

ミズホはうれしくなって駆け寄り、水を手ですくい、飲んでみた。

「おいしい！」

川の中を見ると、変わった魚がたくさんいて、元気に泳いでいる。彼女は川に手を入れて、人さし指で魚をさわろうとした。すると、三十センチぐらいの頭でつかちの魚が、彼女の指に食いついてきた。

「わあっ！」

ミズホが驚いて振り払うと、魚は地面に落っこちた。

「大丈夫かな？」

川にもどしてやろうとして、ミズホが手を魚に近づけたとき

突如、魚から脚が二本出てきて、森の中へ走り出した。

「そっちは川じゃないわよーっ」

いちおう忠告したが、魚は元気に走っていったので、きっと大丈夫

夫だと彼女は思った。

小川でしばらく休憩したミスホは、その川をくだって歩きはじめた。かなりくだと、歩ける場所がなくなり、彼女は迂回うかいすることにした。

ミスホは、また森の中を半日ぐらい歩いた。そしてついに森を抜け、驚くことに土で舗装ほてうされている道に出た。そのとき、ミスホの目の前に、茶色で膝上丈ひざじょうの単純なワンピースを着て、同じ色で膝下丈のフードつきマントを羽織はおりり、黒い髪を後ろで二つに分けて結んだ、小学三年生ぐらいのかわいらしい少女が、蓋ふたがついた木製のバケツのようなものを持って立っていた。

どうやら、この惑星には文明があるようだ。

第7章 少女と一緒に

突然森の中から出てきた不思議な服装（チェック柄の短いスカートとブレザー風の上着の冬用学生服）にザックを背負ったミスホを見て、少女は驚いているようである。

少女の外見は日本人とかわらない。子供らしいむじやきな顔立ちで、ほんの少しやせ気味のように感じ、好奇心旺盛な瞳（こころしんおうせいひとみ）をしている。地球ではないので言葉が通じるとは思えなかったが、勇気を出してミスホは少女に話しかけた。

「……あ、あの……、宇宙人さんですか？」

間抜けなことを訊いてしまった。さらに、

「私は、その……、えっと、私は……、あつ、私が宇宙人です！」
間抜けなことを言ってしまった。少女は無言でミスホを見つめている。

「……やっぱり言葉が通じないわ」そうつぶやいたミスホは、「コーコハー、ドーコデースカー？」と外国人訛りの日本語でトライしてみた。

「お姉ちゃん、どこから来たの？」黙っていた少女が、唐突（たうつ）に話した。

「英語が通じたわ！ えっ？ ちがう。日本語しゃべってる！」

「お姉ちゃん、何言ってるの？」

「な、なんでもないの。それより、この星はなんていう星なの？」

ミスホが訊くと、少女は大笑いした。

「お姉ちゃんへんよ。プールの人？」

「ブ、プール？」

「ちがうの？ じゃあ、お姉ちゃんはどこから来たの？」

「あのね、遠い宇宙の彼方から来たのよ」ミスホが空を指さして言う
「と、

「子供だと思って、バカにしてるの！ 真面目（まじめ）に訊いてるのに！」

少女は怒った。

「ちがう！　ちがうわ！　ごめんなさい……」ミスホはあわてて謝った。

「そのヘンな服、ブルで流行ってるの？」少女が訊いた。

「服？　あ、これ。これはね、私が行ってる中学校の学生服よ」

自分の服を見ながらミスホが答えると、少女は強い口調で言った。
「お姉ちゃんの言ってること意味がわかんないわ。どこから来たの？　真面目に答えて」

「と、東京から……」ミスホが答えると、

「トウキョウってどこ？」と少女は頭をかしげながら訊いた。

「日本、だけど……」ミスホが真面目に言つと、

「もついいわ。私、忙しいから行くね」と言つて、少女は歩き出した。

「待つて！　私も一緒に行く！」

ミスホは少女のあとについて行き、二人は歩きながら話した。
「どうしてついて来るの？」

少女が不思議そうに訊くと、ミスホが頼み込むように言った。

「助けてほしいの」

「だって、何を助けるのよ？」

「私、行くところがないの……」

「家出ね！　親とケンカしたんでしょ？」

少女の言葉に、ミスホは何も答えることができなかった。本当のことを言っても、きっと彼女は信じないだろうとミスホは思ったからだ。

つづけて少女が言った。

「悪いけど、知らない人を家に泊めることはできないわ」

ミスホの表情が暗くなるのを見て、少女はつけ加えて言った。

「でも、ママに頼んでみるね」

「ありがとう……、えっと……、あなたの名前は？」

「私の名前はネナ」

「ありがとう、ネナちゃん。名字はなんていうの？」

「ミヨウジって何？」

「あ、なんでもない、気にしないで。私の名前はミズホ。よろしくね」

この惑星には名字がないとわかったミズホは、説明するのをやめた。

「ところで、どこ行くの？」ミズホが訊くと、

「原油げんゆの泉いずみ」とネナは答えた。

「何しに行くの？」

「原油を取りに行くのよ」ネナは木製のバケツをかかげた。

「私も手伝うね」ミズホが言くと、

「でも、危ないわよ」とネナが言った。

「なんで危ないの？」

「知らないの？ ジュームが出るのよ」ネナはそう言い、思い出したように、「あ、そうだミズホちゃん。森から出てきたけど、ギルビーが出なかった？」と訊いた。

「何それ？」

「尻尾に目がついた怪物。でも、ミズホちゃんが生きてるんだから遭あわなかったのね」

「その怪物におそわれたわ！ 脚を噛まれたけど大丈夫だったわ」

「大丈夫なはずないわ！ ギルビーにおそわれて生きてる人はいないわよ」

「そ、そうなの。じゃあ、夢だったかも……」

「夢か嘘のどっちかよ」

ミズホは何も言えず、ちよつと気まずくなった。

茂みに隠れながら、二人は原油の泉に近づいていった。そこは油田のようだが、地球の原油とはちがい、濁った水のような。その泉は、それほど大きくはない。

「臭いがすごいわね」ミズホが言くと、

「原油だから、あたりまえよ」とネナが答えた。

二人が茂みの陰から泉をのぞくと、泉のそばで、体長十メートルぐらいの巨大なムカデと毛虫の中間のようなあの怪物一匹と、薄緑色で頭から目玉が三本出ている二足歩行で歩くワニとトカゲの中間のような体長三メートルぐらいの怪物が二匹いて、一対二で闘っていた。

「ダメだわ。ジュームがいるから原油が取れないわ」ネナが言った。
「ジュームってどっち？」

ミズホが訊くと、ネナが説明した。

「あの脚がいつぱいある長い奴だよ。目が三つある小さいほうはナーナよ。ナーナは人間をおそわないの」

ナーナが小さいといっても、ジュームと比べてという意味である。身体の半分を反らせて起きあがったジュームに一匹のナーナが捕まり、ものすごい勢いで食べられてしまった。

「たいへん！ 食べられちゃったわ！」ミズホが言うと、

「ミズホちゃん、私たちも食べられる前に帰ろう」とネナが言った。突然、ミズホが怪物たちのほうへ向かって歩き出した。

「どこ行くのミズホちゃん！！」ネナが叫ぶと、

「ジュームは軽いから大丈夫よ」とミズホが言った。

「か、軽いつて？」

ネナはミズホの言っている意味がわからなかったし、行動も理解できなかった。茂みの陰から見ているほかない。

ジュームがもう一匹のナーナをおそおうとしたとき、ミズホはジュームの背後に近づき、たくさんある脚の一番後ろの一本をつかんだ。そして、自分の頭上で怪物をブンブン振り回し、「えーい！」と手を放すと、ジュームは山の向こうへすっ飛んでいった。

信じられない光景を目撃したネナは、半分腰が抜けた状態になった。

ミズホがネナのところにもどってきて言った。

「やつつけたわ。早く原油を取りましょう」

ネナは恐怖のあまり何も話せない。

「どうしたの？ 早く！」ミズホが言うと、

「は、はい！ わかりました」ネナは思わず敬語になってしまった。とりあえずネナはミズホに感謝して、二人は泉で原油を取ることにした。ネナが持ってきた、木製のバケツの横についていた柄杓ひしゃくのようなもので原油をすくい、バケツの中へ入れていく。それをミズホがやった。

「ミズホちゃん、そんなに入れると重たくて持てないわよ」

「大丈夫よ。だってこれ軽いじゃない」

ミズホは、原油をたくさん入れたバケツを小指で持ちあげた。

「す、すごいね。でも、私は持てないの」ネナがそう言うと、

「私が持つて行ってあげる」とミズホが言っ、原油をバケツの中にぎりぎりまで入れて蓋をした。

視線を感じてミズホが後ろを振り向くと、さっきのナーナがこっちを見ている。

「なんか見てるわよ」ミズホが言うと、

「ナーナは大丈夫。それに、目が三つあるから、私たちのことを見てるんじゃないかも。いつもどこ見てるかわかんないけど、人間はおそわないの」とネナが教えた。

「さわってみようかな」

そう言っ、ミズホがナーナに近づいていくと、怪物は森の中へ行ってしまった。

「逃げちゃったみたい」

ミズホがもどってきて言うと、ネナが笑った。

「ねえ、ネナちゃん。怪物も言葉を話すことできるの？」

「怪物が話すはずないわよ。大丈夫、ミズホちゃん？」ネナが驚いて言った。

「だって、ネナちゃんは言葉を話せるじゃない！」ミズホが言うと、
「あたりまえよ！ 私は怪物じゃないもん。人間だもん」とネナはちよつと怒って言った。

「ご、ごめんね」ミズホは謝った。

しかし、ミズホにしてみれば、地球の日本人ではないネナが日本語を話すのは不思議でしようがない。

「日本語は宇宙共通語なのかな……？」ミズホがつぶやくと、

「何？」とネナが訊いた。

「なんでもない」とミズホは答えた。

日本語が宇宙共通語のはずはない。だが、地球では日本語はメジャーな言語になっている。

多彩な表現能力がある日本語は世界でも比類がない。言葉や文章などの記号にしろ、人間の複雑な感情を日本語は的確に表現できたり、漢字、ひらがな、カタカナなどを使い分けることによって、他国の言語では不可能な文章表現ができる。したがって、正確な伝達手段として日本語がもつとも優れていると世界的に評価され、およそ千年前に国際標準語に指定されたのだ。

英語と日本語が国際標準語に指定されているが、指定されているだけで、世界中が英語と日本語だけを使っているという意味ではない。

帰り道、二人が出逢った場所を通りすぎてしばらく行くと、木で造ったシンプルな橋が小川に架かっていた。そこは、ミズホが水を飲んで休憩した川のつづきである。夕日が川の水面に反射して、黄金に輝いていた。

「すごくきれい！」ミズホが橋の中央で立ち止まり、川を眺めて言った。

「北の川っていうのよ」とネナが微笑んで教えた。

ミズホが川岸を見ると、あの『走る魚』が数匹お坐りしていて、そのうちの何匹かが、犬が首を掻くように、足でエラのところを掻いていた。

「あの魚だわ！」ミズホが言うと、

「バブーがどうしたの？」とネナが訊いた。

「あれ、バブーっていうんだ。ヘンな魚ね」

「別にヘンじゃないわよ」

「でも、魚が走るのよ」

「魚が走ると何がヘンなの？」

ネナの問いに、ミズホはどう答えていいかわからなかった。

「バブーレースも知らないの？」ネナが言った。

「知らないわ。何それ？」

ミズホが訊くと、ネナが説明した。

「八匹のバブーを競争させるゲームよ。自分でバブーを捕まえて、育てて参加するの。一位から三位まで商品がもらえるのよ」

「楽しそうね。こんど捕まえて参加しようよ」ミズホが言うと、

「でもバブーはけっこう凶暴で、指を噛まれると大ケガするのよ」とネナが言った。

ミズホは、バブーが指に食いついたけれど大丈夫だったことは話さなかった。彼女は、また嘘をついていると、ネナに思われなかったのだ。

二人がその橋を渡って、しばらく道を歩いていくと、丁字路に突きあたった。

「どっちへ行くの？」ミズホが訊いた。

「こつちよ」ネナは左のほうを指さした。

「こつちに行くとなんがあるの？」右を向いてミズホが訊いた。

「そつちはハービー。いろんなお店があるにぎやかな町よ」

「行ってみたいな」ミズホが言うと、

「明日ね。今日はもう帰らないと」とネナは言い、つづけて、「ミズホちゃん、それ重いでしょ？」とミズホが持っている原油の入ったバケツを見て言った。

「ぜんぜん重くないわ。空っぽみたいに軽いわよ」ミズホは微笑んで言った。

二人は丁字路を左へ行った。少し歩くと、ミズホが森で見た顔の長い犬のような動物とすれちがった。

「いまの動物は？」ミズホが訊くと、

「あれはピムだよ。いい匂いを嗅ぐと、後ろ脚で土や砂をかけるのよ」とネナが教えた。

「なんだ、そうだったの……」ミズホは少し安心して言った。

「土をかけられたの？」

ネナが訊くと、ミズホはうなずいた。

「ミズホちゃん、いい匂いするもんね」とネナは言って微笑んだ。

ほとんど日が沈みかけたとき、石造りで建てられた、様々なデザインの民家が立ちならぶ町に二人はやってきた。

そこにはたくさんの人が歩いていたが、服装以外は日本人とそれほど変わらなかった。ミズホはこの惑星の人たちに違和感^{いわかん}を抱か^{いだ}なかったが、すれちがった人たちはミズホの服装を見て少し驚いているようだ。

この惑星の人たちの服装は、男性はズボンにTシャツ、その上に薄手のコートを着ていて、女性はネナのように単純なワンピースの上にフードつきマントを羽織っている。服のデザインは微妙にちが^い、色の種類は多いようだ。

文明が発達していない不思議で楽しい雰囲気^{いふかん}の町を眺め、何もかも珍しくて、ミズホがきよろきよろして歩いていると、ネナが言った。

「ミズホちゃん、ここがルーシーよ。私の家はもうすぐだから」

第8章 地球外文明

石造りの小さな家の前に、ネナとミズホはやってきた。

「ミズホちゃん、バケツをここへ入れて」ネナはそう言つて、外にある物置の戸を開けた。

ミズホは言われたとおりに、原油の入ったバケツをそこへ入れた。そして、二人は家の中へ入っていった。

最初に、ネナはミズホをつれて寝室へ入っていった。その部屋にはベッドが二つあり、一つのベッドにネナの母親が緑色のパジャマを着て横になっていた。様子からして、どうやら彼女は何かの病気のようだ。

「お帰りネナちゃん。遅かったわね」ベッドに寝たまま、心配そうに母親は言つた。

「ママ、ただいま」ネナがうれしそうに答えた。

親子の何げない会話が、ミズホはとても羨ましかつた。もう地球へ帰れない、おばあちゃんに逢えない、そう思うと彼女はすごく寂しくなってきた。

「このお姉ちゃんは、ミズホちゃん。行くところがないんだつて。しばらくうちに泊めてあげていいでしょ」ネナが事情を話した。

「初めまして、ミズホです。よろしく願いします」ミズホは自己紹介をした。

「私はサラです。こちらこそ、ネナちゃんをよろしくお願いね」

ネナの母親のサラは、少し癖のある髪を長めにのびし、色白で細身、目には生気がないが、穏やかな顔立ちでとても優しくそうな人であつた。

ネナの家は一階建てで、寝室が二部屋に、居間兼食堂、台所があり、浴室とトイレは日本のように別になっている。床は石材で、入浴と寝るとき以外は靴を脱がない。部屋の明かりは石油ランプでか

なり明るい。石英^{せきえい}を加工する技術もあるようで、窓にはガラスがはめ込まれている。

家具類は石作りか木製で、食器類は陶器や木製、鉄製もあった。見かけは地球の素材と変わらないが、根本的なちがいがある。それは、硬さや重たさなどである。生物を含めたこの惑星の物質全体がそうなのだ。

しかし、それは地球人だけの感覚で、この惑星の人たちには決してそうではない。ミズホにとって軽かった岩も、この惑星の人間には絶対に持ちあげることはできない。

ネナがミズホを空いている寝室へ案内し、その部屋の石油ランプをつけた。

「この部屋、空いてるから、ミズホちゃんはここに泊まってね」

「ありがとう、ネナちゃん」

「私、お風呂沸かして、食事の準備してくるね。ミズホちゃんは、この部屋で休んで。食事ができたら呼びに来るね」

部屋からネナが出て行こうとしたとき、ミズホは訊いた。

「ネナちゃん。パパはまだ帰ってこないの？」

「パパはいないの」

ネナはさらっと答えたが、ミズホは余計なことを訊いたと思い、それ以上何も言わなかった。

部屋に一人になったミズホは、ザックを隅へ置いて、ベッドに腰かけ、部屋の中を見回した。室内はとてもシンプルで、いい雰囲気だった。東京の自分の部屋とはまったくちがうが、ミズホはなぜかすごく心が落ち着いた。

「なんか、こういう部屋もいいわね」そうつぶやいて、ミズホは深呼吸をした。

食卓には、精白^{せいぱく}していない米のようなものを、バターと醤油^{しょうゆ}のようなもので炒めた料理と、変わった野菜のスープ、それとデザートにプップという果物がならんだ。プップは、ミズホが森で折ってし

まった木に生っていた果物だった。

玄米のようなものを『米』と呼び、醤油のような調味料は『醤油』と呼び、バターも普通に『バター』と呼んでいた。食材は地球のものと似ているものが多いようだが、やはり同じものではないようだ。ミズホとネナ、そしてパジャマ姿のサラは、丸いテーブルを囲んで椅子に坐^{いす}って食事をした。突然のお客さんに、ネナはとても楽しそうだった。サラは、そんな娘を見るのは久しぶりで、とてもうれしく思った。

「これ、なんていう料理なの？」ミズホが訊くと、

「ただの焼きご飯よ」とネナが答えた。

「おいしいわね」

そう言ってミズホが食べていると、バキツと音がした。

「何かしら、いまの音は？」

サラを見ると、ミズホが口の中から噛み切った木製のスプーンを出した。

「ミ、ミズホちゃん、歯が丈夫なのね」驚いてサラが言うと、

「ごめんなさい」とミズホは謝った。

ネナが新しいスプーンをすぐに持ってきて話した。

「ママ、ミズホちゃんはね、すごく強いんだよ。だって、ジュームを遠くへ投げ飛ばしちゃったんだから」

「まあ、そんなことできたらすごいわね」サラは信じなかった。

「でもね、ほんとなのよ。だから今日は原油が取れたもん。ね、ミズホちゃん」

ネナの言葉にミズホはうなずいたが、やっぱりサラは信じなかった。それもそのはず、怪物を投げ飛ばすなんて不可能なのだ。この惑星の人間には。

デザートのお菓子を食^くべる^{とき}、ネナが緑色のハーブ・ティーのよ^うな^お茶^を入^れて^くれ^た。果物の味は、とても甘くてさっぱりしていた。

「この果物、おいしいわね」ミズホが言うと、

「プップ、食べたことないの？」とネナは驚いて訊いた。

「初めて食べるわ。私、このプップ大好きになったわ」ミズホはプップをたいらげて、お茶を飲み、「このお茶も変わった味がしておいしいわ。なんていうお茶なの？」と訊いた。

「ただの緑茶よ」ネナが答えた。

「でも、味がちがうわ……」手に持ったマグカップを眺めながら、ミズホがつぶやくと、

「ミズホちゃんは、どこから来たの？」とサラが訊いてきた。

その質問にミズホは答えることができず、黙ってしまった。

「ママ。ミズホちゃんはね、遠いところから来たのよ」

そうネナが言って、その話題は終わり、サラの病気の話になった。サラは原因不明の病気にかかっていて、身体中が痛くて思うように動けない。その病気を治すには特殊な薬草が必要だが、いまは手に入らないのだ。そのため、サラは働くことができず、ネナが原油を売って生計を立てている。

食事をすませ、お風呂に入る前、ミズホがほかに服を持っていないことを知ったサラは、自分が昔着ていた茶色のワンピースと茶色のフードつきマント、それに水色のパジャマを二着ずつくれた。

お風呂からあがってパジャマに着替え、ミズホは自分の部屋に入って寝ようとする、ネナがやってきた。

「ミズホちゃん、もう寝るの？」

「ネナちゃんは、まだ寝ないの？」パジャマに着替えてないネナを見て、ミズホは訊いた。

「少し話さない？」ネナがそう言くと、

「いいわよ」とミズホは答えた。

二人はベッドにならんで腰かけ、話をした。

「ネナちゃん、泊めてくれてありがとう。ほんとに助かったわ」

「空いてる部屋があったから、気にしないで。ミズホちゃん、それよりさ……」ネナは少し考えてつぶけた。「ミズホちゃん、本当に、

う、宇宙からやってきたの？」

「……どうして？」

「だって……なんにも知らないみたいだし、それに……」

「それに？」

「それに、本当のことを信じてもらえないと、つらいもんね」

ネナは食事のときに話したミズホが怪物を投げた話を、サラが信じてくれなかったことを思い出して言った。

「ネナちゃん、いろいろ教えてね」

ミズホがそう言うのと、ネナはうなずいて言った。

「ここはね、星じゃないのよ、地上なの」

どうやらこの惑星には、まだ地動説がないらしい。きっと自分たちが星に住んでいることを理解するのは難しいだろう。

地球が丸い星だと初めて知ったとき、ミズホは不思議でしようがなかった。おじいちゃんに、「どうして丸いのに、人間は地球から落っこちないの」としつこく訊いたおぼえがある。だからミズホはいまはネナに宇宙や星の説明をしないことにした。それに、うまく説明できるかどうかも疑問だった。

「ネナちゃん、学校へは行ってないの？」ミズホが訊くと、

「ガッコウって何？」とネナが言った。

「子供が集まって、大人が勉強を教える場所なんだけど」

そうミズホが説明すると、ネナは話した。

「勉強は親が子供に教えるのよ。だから、そういう場所はないわ。

それに、うちみたいに貧乏な家は、子供も働かないとね」

ミズホは学校がないなんて羨ましいと思ったが、子供が働くのはたいへんだとも思った。

ネナがおやすみなさいと言って母親の寝室へもどっていったあと、ミズホは寝る前に窓を開けて夜空を眺めた。やっぱり月が二つ出ている。

次の日、ミズホとネナは原油を石油精製所へ売りに行くため、出

かけていった。

ミズホは、サラにもらったワンピースとフードつきマントを着たので、靴以外はこの星の人々で見分けはつかない。この星の人たちの靴は布製か何かの動物の革製で、やはりシンプルなデザインをしていた。ミズホの靴はスニーカーであった。

石油精製所はルーシーの町はずれにあった。原油の入ったバケツは満タンでいつもより重たく、ネナが持つにはたいへんだから、ミズホが持つて歩いていった。

「ミズホちゃん、その服のほうが似合うわよ」とネナが言って微笑んだ。

「こういう服も素敵^{すてき}ね」ミズホはうれしそうに言った。

服装によって人は気分が変わるものである。ミズホは学生服からいま着ている服に替えて、なんだか心が解放された気分になった。

ネナとミズホが石油精製所に入ると、小太りで四十代ぐらいの肉体労働者の顔立ちのゴンタという人が出迎えてくれた。

「お、ネナちゃん。原油が取れたのか？」

「うん、ゴンタおじさん。このミズホちゃんが手伝ってくれたから取れたの」

そうネナが言うと、ゴンタはミズホを眺めて言った。

「見ない顔だな」

「お友達なの。ミズホちゃん、ゴンタおじさんにバケツを渡してくれる」

ミズホは軽々と持っていたバケツをゴンタへ渡すと、ゴンタはバケツを落としそうになった。

「な！ 重いじゃないか」ゴンタは蓋を開け、「満タンだな……。君が軽そうに持っていたんで、てっきり少ないのかと思った」と言った。

「ミズホちゃんは力持ちなのよ」ネナが言うと、

「そうみたいだな、ミズホちゃん」とゴンタは言って笑った。そして、「ちよっと待つててな」と言って、原油のバケツを持って彼は

奥のほうへ行つた。

数分して、空のバケツと硬貨^{こづか}十枚のお金を持ってゴンタはもどってきた。そして、それらをネナに渡して言った。

「はい、今回の換金^{かんきんぶん}分の百エンだ」

「百エンも！ いいのゴンタおじさん？」ネナが驚いて言った。

「ああ。これから原油を満タンで持ってきたら、百エンで買い取るぞ。でもな、原油の泉は危険なところだ、あまり無理はするんじゃないぞ。怪物がいなくてよかったぞ」

「わかつてる。いつも同じこと言うんだから」ネナはそう言って笑った。

ゴンタが心配するのも当然である。危険な泉へ行つて命懸け^{いのちが}で原油を取って来るのは、金銭的にかなり苦しい人だけだからだ。しかも、原油の泉で命を落とした大人がたくさんいるというのに、ネナはまだ子供だ。

原油は普段、山の向こうのブルという町から買い取っている。ブルにある原油の泉では、安全に原油を取ることができるが、土地の所有者がいるため、ほかの人が勝手に取るわけにはいかない。つまり、その土地の所有者は独占的に原油を売っている企業のようなものである。

二人は石油精製所を出てきた。

「百エンじゃ、安いんじゃない？」ミズホが訊くと、

「どうして？ 百エンあつたら五日間は生活費に困らないわよ」とネナが答えた。

「そうなんだ！」

ミズホは少し驚いたが、ここは地球でもなければ日本でもない、物価がちがうのはあたりまえである。それよりも、貨幣^{かへい}単位を『エン』と言っていたが、彼女は不思議だとは思わなかったらしいみんな普通に日本語を話すから、いろんなことが少しずつ麻痺^{まひ}してきたのかもしれない。

第9章 勇気と自信

換金してもらった百エンを持って、ネナとミズホは買い物をするため、ハービーの町へ向かった。

「ハービーって遠いの？」ミズホが訊くと、

「ちよつと遠いわね」とネナが言った。

昨日の丁字路はルーシーから歩いてくると、右へ行くと原油の泉の方角で、このまま歩いていくとハービーへ行くことになる。

草木の香る道を歩いていると、心地よい風が吹いてきて、ミズホはなんだかとてもわくわくしてきた。

「風が気持ちいいわね。ネナちゃん、いまの季節はなんなのかしら？　ちよつどいい気候だけど」

「キセツってなんのこと？」

ネナが訊き返すと、ミズホは説明した。

「季節を知らないの？　気候がすごく暑くなったり、すごく寒くなったりすることよ」

「雨が降ると少し寒くなるけど、すごく暑くなったり、すごく寒くなったりしないわよ。いつもこんな感じよ」そうネナが話すと、

「いつもこんなに気持ちいいなんて、いいわね……」ミズホは青空を見あげて言った。

この惑星の人間が住んでいる大陸は、一年中同じような気候で、雨は普通に降る。一週間は七日で、新月を基準に一カ月は二十八日間、一年は十一カ月で三百八日である。一年の目安は、十一カ月に一回しか花が咲かない一年の木というのがあって、その木に花が咲いたときが新年のはじまりだ。

いまは三月の終わりで、いちおうカレンダーはあるが、誰も日付単位で行動しないため、今日が何月何日か気にしない。だから誕生日はなく、一年の木に花が何回咲いたかで人の年齢を決めている。ネナの年齢は九歳だとミズホに教えた。一日の時間は二十四時間、

日時計があるが、昼以外はやはり大ざっぱだ。

丁字路を越えて、ゆるやかなカーブの道を何度も蛇行してしばらく歩くと、左側に荒れ果てた大きな石造りの建物があらわれた。

「ここは何？」立ち止まってミズホが訊いた。

「神殿よ」とネナは答えた。

「神殿？　ずいぶんぼろぼろね」

「大昔の建物だし、いまは使っていないもん」

「使っていない？　どうして？　神様にお祈りしないの？」ミズホが訊くと、

「神様なんかいるはずないわ」とネナは寂しそうに言った。

「ネナちゃん、神様を信じないの？」

「だって、祈っても助けられないもん。神話なんて、ただの作り話なのよ」

ミズホの問いに答えるネナの声が、少し小さくなった。

神殿からまたしばらく歩き、たくさんの民家や商店街が立ちならぶ、人々にぎわうハービーの町に着いた。

ミズホが町を見渡しながらネナに言った。

「ネナちゃんの住んでいるルーシーの町とは、ずいぶん感じがちがうわね」

「そうね。ハービーにはお店がたくさんあるけど、ルーシーにはないもん」

「ここが一番大きな町なの？」

「ちがうわ。一番大きい町はブルよ」

「ブルって町はどこにあるの？」

「山の向こうよ。行ったことないけど」

「行ったことないの？　歩いていくのがたいへんなんだ」ミズホが言うと、

「ブルへは歩いていけないのよ。山には道はないし、高すぎて超えることができないの。だから、船で行くのよ」とネナが教えた。

「船で行くんだ。どんな町なのかな？」

ミスホがつぶやくように言うと、ネナが説明した。

「行ったことないからわからないけど、ハービーとルーシー、それに海のほうにあるテッドの港町を三つ合わせたよりも大きな町で、お店もハービーよりたくさんあって、なんでもある『神の都』なんだってさ」

「神の都？」ミスホが訊いた。

「プールには神様の生まれ変わり、バドル様が住んでいるのよ」とネナは言って、つづけて話した。「バドル様に死の予言をされた人は、必ず死んでしまうの。でも、死の予言をされてもバドル様の奴隷になれば助かるのよ。それと、バドル様に逆らうことは、神に逆らうのと同じことだから、特使たち^{とくし}に処刑^{しょけい}されてしまうの」

「特使たちって？」

「特使たちはバドル様の部下で、特別に選ばれた人間になれるの。」

特使なら人を殺してもいいんだって」

「ちよつと怖い神様ね」

そうミスホが言うと、ネナは声をひそめて話しはじめた。

「偽物だと思うわ。神様なんかいないもん。バドル様は奴隷がほしいから、嘘の予言をしてるだけよ。死の予言をされても奴隷にならない人は部下が殺しているのよ。あと、逆らう人もね。みんなは殺されるのが怖いから、信じているふりをしてるんだと思うわ。それでも、さっきの神殿の、昔から伝わる神話の神様を最後まで信じて殺された人は大勢いるのよ。私のパパもそうなの」

ネナの話を聞いて、ミスホは驚いて彼女の顔を見た。

「特使たちは反逆者がいないか、いろんな町を見て回ってるから、バドル様の悪口なんかを言わないようにね。悪口を聞かれたら殺されるかも」ネナが注意した。

「そうね。それに、人の悪口を言うのはよくないしね」

ミスホがちよつと的はずれなことを言うと、ネナはミスホのことをじっと眺めた。

「な、何？」ミズホが訊くと、

「ミズホちゃん、神様じゃないよね？」とネナが言った。

「どうして？」

「だって、宇宙から来たんでしょ」

「私が神様に見える？」ミズホがうれしくなって訊くと、

「ぜんぜん見えない」きつぱりとネナは答えた。

いろんな食料品が売っているにぎやかな商店街へ、二人はやってきた。店先に商品をならべて売っている店が多いようだ。

「この商店街は、マーケットっていうの。いろんな食べ物が売っている」ネナが話した。

「マーケット……。変わった食べ物が売ってるわね……」ミズホは周りを見渡して、「あつ、プップが売ってるわよ」と果物屋を指さして言った。

「プップは、まだ家にあるからいいわ」

「ネナちゃん、何を買うの？」

「うんとね、お米と、お肉と、ミルク、あと何かあるかな……」

にぎやかだった商店街が、急に静かになった。どうしたのかと思い、ミズホを見ると、一般の人たちとはちがったデザインのコートを着た四人の男たちが、肩をいからせながら道の中央を偉そうに歩いている。

商店街にいた人たちは、彼らに「お疲れ様です」と声をかけ、頭をさげていた。

「特使たちよ」ネナが小声で言った。

特別に選ばれた人間？ どう見てもただのならず者だ。道のほぼ中央にいたネナとミズホは、彼らが通る道をあけ、二人は頭をさげた。

「お疲れ様です」ネナが彼らに言った。

「こんにちは」ミズホは緊張して、彼らにそう言ってしまった。

「なんだお前は！」

特使の一人、ガルが怒鳴って、ネナをどかし、四人でミズホを取り囲んだ。

ネナはどうしていいかわからず、おろおろした。商店街にいた人たちが心配そうに眺めている。しかし、ミズホを助けることは、自分が死ぬことを意味する。だから誰も助けることはできない。

「な、なんですか？」ミズホが言うと、

「お前、俺たちを誰だか知ってるのか？」特使の一人、ベイがすごんで訊いた。

「は、はい。確か、インチキ神様の子分さんでしたっけ？」緊張しすぎたミズホは、思わず本当のことを言ってしまった。

それを聞いて、ネナはミズホが殺されると絶望し、周りにいた人々は恐怖した。

「てめーっ！」

特使の一人、ゲンがものすごい勢いで、ミズホに殴りかかってきた。驚いたミズホは反射的に手が出て、彼を払いのけた。すると、その男はぶっ飛んでいき、果物屋へ頭から突っ込んで、のびてしまった。

「勝てる。あと三人……」ミズホがつぶやいた。

商店街にいた人々はそれを見て驚愕し、ネナはミズホが強いことを思い出した。

「反逆者だ！ 処刑する！！」

ガルが叫んで、特使たちはコートの内側から飛び出しナイフを取り出し、三人同時にナイフの刃を力チャツと出した。

「ミズホちゃん！ 殺されるよ！」ネナが叫んだ。

特使の一人、レスがナイフをミズホに突き刺すと、彼女は手の平で受け止め、ナイフの刃がぐにゃつと曲がった。ミズホの手はなんともなく、レスは恐怖で動揺した。

「びっくりしたな、もう！」

そう言って、ミズホがレスの肩を叩くと、彼はぶっ飛んでいき、肉屋の壁に激突し、倒れてしまった。

もう二人の特使、ガルとベイはナイフを突き出してはいるが、ミズボが恐ろしくて攻撃できない。ミズボはベイに近づき、腕をつかみ、頭上でグルグルと振り回し、ガルへ向かって手加減して投げつけた。投げ飛ばされたベイはガルへぶつかり、二人の男は地面に倒れ込んだ。

ネナをはじめ、周りにいた人々は、驚きのあまり、ただミズボを眺めていた。驚愕の沈黙がしばらく流れ、四人の特使たちはなんとか立ちあがり、どこかへ逃げていった。そして、マーケットは何事もなかったかのように、いつものにぎやかな商店街にもどった。

ミズボはネナのところに行つて訊いた。

「あの人たち、どこへ逃げたの？」

「たぶん港だと思う。船に乗ってプールへ帰るのよ」

二人が買い物をしようと歩きはじめたとき、おじいさんがミズボに話しかけてきた。

「お嬢さん。ちよつといいですか」

二人が振り向くと、その老人は長い白髪をひつつめて、ヤギ髭ひげを生やした仙人せんじんのような人であつた。

ミズボが話そうとすると、ネナが言った。

「コウサクじいさんと話すことは何もないわ。私たち、忙しいの。ね、ミズボちゃん。早く行こう」

おじいさんを見無視して、ネナはミズボをつれて行つてしまった。

おじいさんは、ネナと歩いていくミズボの後ろ姿をしばらく眺め、あきらめたようにマーケットの雑踏ざつとつへ消えていった。

米は約一キログラムを十エンで買って、メルという動物の肉が一切れ約二百グラム二エンで三切れ買って六エン、同じ動物のミルクを約一リットル二エンで買い、切つてない食パンのような箱形に焼いたパンを三エンで一個買って、全部で二十一エンの買い物をした。ミズボが米とミルクを入れた紙袋を持ち、ネナが肉とパンの入った紙袋を持って帰ることにした。

帰り道を歩きながら、ミズホがネナにたずねた。

「マーケットにいたおじいさん、なんの用だったのかな？　ネナちゃん、知ってるおじいさんなの？」

「あのおじいさんのせいで、たくさんの人が死んでしまったの」

「どうしてなの？」

ミズホが訊くと、ネナが話した。

「あのおじいさん、コウサクじいさんっていうんだけど、みんなに『私たちの神様を裏切ってはいけない。信じて祈れば、必ず神様の救いがある』って教えたの」

「神様って、あの偽者の？」

「バドル様じゃなくて、ずーっと昔から伝わる神話の神様よ。バドル様は偽者だから、昔から伝わる神様を信じなさいってみんなに言ったわけ。神話の神様も作り話なのに、コウサクじいさんの言葉を信じた人たちは、バドル様を神様の生まれ変わりだと認めなかったの。だから殺されてしまったのよ。私のパパも、コウサクじいさんの言葉を信じて殺されてしまったの。バドル様を信じるふりをしていれば、パパは死なずにすんだのに。奴隷だって死ぬよりましよ……」

ネナの話聞きながら歩いていると、二人はちょうど神殿の前にやってきた。ネナが立ち止まって、神殿を眺め、つぶやくように言った。

「みんながどんなに祈っても、やっぱり来なかったわ。神話なんて作り話なんだもん」

「来なかったって、誰が？」ミズホが訊くと、

「救世主きめうせいしゅだって」とネナが答え、ミズホの顔を見つめ、つづけて言った。「でも……、もしかして……」

バドルの本拠地ほんきよちバドル神殿は、ブルの町の海沿いの広大な土地にあり、いまでも奴隷たちによって増築がつづき、日増しに巨大な建造物になっている。

ミズホに叩きのめされた四人の特使は、ブルにもどつて、バドル神殿へ行った。特使と呼ばれるバドルの部下はおよそ三万人いて、その最高幹部がゾルデという冷酷な目をしたいかつい男であった。ガル、ベイ、ゲン、レスの四人はゾルデの部屋に入り、マーケットでの一件を報告した。

「ゾルデさん、その小娘は、信じられないくらい強いんです。奴を処刑するため、五十人ほど特使をそろえたいのですが」

ガルが言うと、ゾルデが怒鳴った。

「小娘を殺すために五十人の特使だと？ バカなことを言うな！ガル、お前たちは神に選ばれた人間なんだぞ！」

「し、しかし、ただ者じゃないんです」

ベイが言うと、ゾルデが話した。

「いまはそれどころではないんだ。ブルに住む反逆者たちが水面下で活動し、バドル様暗殺計画を企んでいるという噂うわさがある。こいつらを抑えて、見せしめに公開処刑をしなければならんだ」

「その話は本当ですか！？」レスが驚いて訊いた。

「ただの噂ではなさそうだ。だから、いまは向こうの町の連中を相手にしている暇はない。特使たちは全員ブルの町で反逆者たちを搜索するんだ。わかったな」

ゾルデの命令に、四人はうなずいた。

その夜、ミズホはどうしても確かめたいことがあったので、ライフポッドから持ってきたザックの中から、非常食についていたフォークとスプーンを取り出した。

そのフォークとスプーンは、有害物質を出さないエコプラスチックという自然に優しい頑丈な特殊プラスチックでできていて、よほどの力がないと折ることはできない。

彼女はそのフォークとスプーンを両手で折ろうとしたが、やっぱり折ることはできなかった。

「私が強くなつたわけじゃないのね……」

そうミスホはつぶやき、エコプラ製のフォークとスプーンをザックの中へしまった。

確かにミスホが強くなったわけではない。しかし、この惑星では彼女を倒せる者は誰一人いないだろう。ほかに地球人がいないかぎり、この惑星ではミスホは無敵であり、最強なのだ。

いじめられっ子のミスホにとって、心の底から勇気と自信が満ちあふれてきたのは、生まれて初めての感覚だった。

第10章 荷車を借りて

ここでは、太陽は海から昇って山へ沈んでいく。大ざっぱな方位は、ルーシーの町から西へ行くとハービーの町で、東へ行くとテッドの港町である。ハービーの町より西は、山脈が南北へ連なっている。その山脈は丁字のように東へも連なり、海に突き出している。そして、ハービー、ルーシー、テッドの町から北の方角、南北に連なっている山脈から東へ向かって海に突き出している山脈を隔てた向こう側にブールの町がある。

ミスホとネナは魚を買いに、テッドの港町にある市場へ来ていた。魚はハービーのマーケットでも買えるが、ルーシーからハービーへ行くよりもテッドへ行ったほうが距離的に近いし、マーケットの魚屋はテッドの市場から魚を仕入れているので、直接市場へ行ったほうが新鮮な魚が買える。しかし、川魚はマーケットの魚屋でしか買えない。

多くの人々にぎわっている市場は、露店街ろてんがいのような感じで、ほとんどがまだ生きている奇妙な魚介類をたくさん売っていた。カエルのように飛び跳ねるトラバガ二のような甲殻類が数匹逃げ出して、市場の人が捕まえようと必死になっていた。

「あれ、逃げるとたいへんなのよ」ネナが笑って言った。

「何、あの生き物？」

ミスホが訊くと、ネナが言った。

「ホッパだよ。食べるところが少ないわりに、けっこう値段が高いのよね」

いろんな魚介類を眺めながら、ミスホはネナのあとについて歩いた。するとネナが、ある魚が売っている前で立ち止まって言った。

「この魚を買うのよ」

その魚は二十センチ前後のヒラメのような魚で、大きな二つの目

に長いまつげがついたまぶたを、パチパチとまばたきさせている。
「なんていう魚なの？」食べるのがちょっとかわいそうだと思いな
がら、ミズホは訊いた。

「モビユーっていう魚よ。安くておいしいの」とネナが言った。

「こっちは何？」ミズホは、モビユーの隣にならんで売っている魚
が気になった。

その三十センチぐらいの魚には首があり、頭と胴体の区別がはつ
きりしていて、耳のようなエラに一つ目で、ゾウのような鼻をばた
つかせている。

「その魚は、ぜぜっていうの。おいしいけど、値段がちょっと高い
のよ」

ネナがぜぜを見ながら言うと、ミズホが言った。

「なんか怖い魚だね」

市場のおじさんが声をかけてきたので、一匹一エンのモビユーを
三匹買って、ネナとミズホは海を見に行くことにした。

港には長い栈橋さんばしが三箇所あり、小型と中型はんせんの帆船が十隻以上接岸
して、漁師たちが帆船から魚介類をおろし、木製のタイヤがついた
リヤカーのような二輪の荷車へ載せていた。

「見てネナちゃん。素敵な船があるわよ」帆船をおじいちゃんの模
型で見たことがあったミズホは、わくわくして言った。

「ほら、ミズホちゃん、大きい船よ」ネナが沖を指さして言った。

ミズホが見ると、大型帆船が沖から港へ向かってやってくる。

「ほんとだわ！あの船、大きいわね！」ミズホが楽しそうに言う
と、

「あれはブルの帆船よ」とネナが言った。

「特使さんたちが来たのかな？」ミズホがそう言うと、

「あの大型帆船は貨物船よ。特使たちは専用の中型帆船で来るのよ」
とネナが教えた。

すると、荷車を引きながら通りがかった、漁師のおじさんが話し

かけてきた。

「特使たちは、いまは来ないぞ。全員ブールで反逆者捜しをしているんだと」

「反逆者捜し？」ネナが訊くと、

「なんでも、バドル様を暗殺しようと計画していた連中が逃げ回っているそうさ。まあ、当分奴らが来ないほうがいいけどな」と漁師のおじさんが言った。

しばらく帆船を見物したあと、棧橋から見える砂浜を眺めてミズホが言った。

「ネナちゃん、砂浜へ行ってみたいな」

「うん。行こう、ミズホちゃん」

心から楽しい気分していると、周りの人にも伝染する。ネナはミズホの楽しそうな表情を見て、自分も楽しくなってきた。一人ではしよつちゆう来ているテッドの港だが、ミズホと二人で来たら、ネナはいつもの港とちがうように感じ、とても楽しい気分になった。

ミズホとネナは爽快な潮風を全身に浴びながら、浜辺へ行った。

真っ白な砂浜にコバルト・ブルーの海、ミズホが見たことのあるどんな海よりも美しい景色だった。

海水浴を楽しむほど暑い気候ではないから泳いでいる人は誰もいないが、砂浜では恋人たちや家族づれが数組、海を眺めたり、遊んだりしている。

「夢のようにきれいな海だわ。これで暑かったら泳げるのにね。あつ、でも私、泳げないんだったわ」

ミズホは自分で言って自分で笑い、ネナを見ると、彼女はうわの空でどこかを眺めていた。ミズホがネナの視線の先を見ると、幼い女の子と両親の三人家族が、楽しそうに遊んでいた。

ネナはまだ九歳、この惑星でも普通だったら両親の愛に包まれ、思いつきり甘えられ、楽しい日々をすごせる年齢である。しかし、彼女にそれは許されず、身体の弱い母を支えるために働き、家事もすべてやっている。それに、彼女には同年齢の友達もない。それ

でもネナはミズホと出逢ってから、自分が不幸だとは一度も嘆いたことはなかった。

「ごめんね、ネナちゃん……」浜辺に来たことを後悔して、ミズホが言うつと、

「えっ、何、ミズホちゃん？ あ、泳げないの？ 私も泳げないわ。もし泳げて、海の水はとっても冷たいの。だから入るのはやめたほうがいいわよ」とネナがあわてて言った。

「ネナちゃん……。そうだ、遊ぼうか！」ミズホは思いついたように言った。

「何して遊ぶの？」ネナが訊くと、

「『高い高い』してあげる」とミズホが言った。

「でも、私は赤ちゃんじゃないわよ」ネナは恥ずかしそうに言った。「いいから、いいから、遠慮えんりょしないで」

ミズホは、買った魚が入った紙袋を砂浜に置き、ネナの両脇をつかんだ。

「高い、高いい！」

ミズホは大声で言つて、ネナを持ちあげると、予想以上に軽くて、つい手を放してしまい、彼女を十メートルぐらい上空へ投げってしまった。

「やばいー！」

ミズホは悲鳴と一緒に落ちてくるネナをどうにかキャッチして、砂浜にそつとおろした。

「お、おもしろかった？」ごまかすようにミズホが訊いた。

「おもしろくない。だって、高すぎたもん」ネナが呆然ぼうぜんとして答えた。

二人がネナの家まで帰ってきて、中へ入ろうとしたとき、ミズホが向かいにあるネナの家より小さい家を見て言った。

「あの家には、人が住んでないみたいね」

「あそこは売り家になつてゐるの。前に住んでた人は結婚して子供が

できたから、ハービーへ引越して行つたのよ。あの家じゃあ、家族で暮らすには小さすぎるんだと思うわ」

そうネナが話すと、ミズホが訊いた。

「いくらするの、家って？」

「すごく高いわよ。小さい家でも五千円ぐらいするわ」とネナが教えた。

ミズホは買えない値段ではないと思い、自分の家がほしくなってきた。

自分の家を買って一人暮らし、そんな夢をミズホが思い描いていると、白くて毛むくじやうで四本の脚と尻尾しかなく頭がない牛ぐらいの動物が、牛車のように四輪の荷車を引いてやってきて、家の前で停まった。

それに乗り、手綱たじなをあやつっていた愛想のよさそうなやせたおじさんが、ネナに話しかけた。

「ネナちゃん、氷はどうだね」

「ジャンおじさん、こんにちは。まだ大丈夫だけど、買っておく」とネナが言った。

ミズホが荷車を見ると、大きな氷が積んであった。

氷は冷蔵庫に使う。一度買つと、だいたい十日前後もつ。氷屋は、洞窟に水を張つて氷を作り、こつやつて荷車で売りに来ている。

氷屋のジャンがノコギリで氷を切っている間、ミズホは荷車を引いていた尻尾がなければどつちが前だかもわからない動物の前に行つて、顔を探した。しかし、顔らしきものはどこにもない。手でその動物の毛をかき分けてみると、不意に口が開き、舌したが出てきて、ミズホの顔をなめた。

「うわっ！」

驚いてミズホが声をあげると、ネナとジャンが大笑いした。

「その動物がメルだよ。ミズホちゃん、お肉食べたでしょ。ミルクも飲んだよね」

そうネナが言つと、ジャンが驚いたように訊いてきた。

「本当にメルを知らないのか？」

「ミズホちゃん、動物に詳しくないのよ。ね、そうでしょ？」

ネナがそう言ってくれたので、ミズホはうなずいた。

そのメルという動物には、目と鼻はなく、口しかなかった。どうやってぶつからずに歩いているのかは、誰にもわからない不思議な動物である。

氷屋のジャンは、切った氷をネナの家冷蔵庫まで運んで、中に入れてくれた。そして、彼はネナとミズホに「また、よろしくな」と言って、メルに引かせた荷車に乗り、ほかへ氷を売りに行った。

その日の午後、ネナとミズホは原油を取りに、原油の泉へやってきた。

前と同じように、ミズホがバケツの中へ原油を柄杓のようなもので入れていると、どこからともなくナーナがやってきて、二人の様子を三本の目で眺めていた。怪物はたまに、グルルルッ、グルルルッ、と鳴いている。

「あれ？ またナーナが見てるわよ。なんか用があるんじゃない？」

そうミズホが言うと、

「ただ見てるだけよ」とネナが言って笑った。

ミズホがバケツの中に原油を満タンに入れて蓋を閉めると、ナーナはどこかへ行ってしまった。

「そうだネナちゃん。漁師のおじさんが魚を載せてたやつ、なんていうの？」

「荷車のこと？」

「その荷車、売ってないの？」ミズホが訊くと、

「売ってるけど、どうして？」とネナが訊き返した。

「バケツをいっぱい買って、たくさん原油を取って、あの荷車へ載せて運べば、お金を稼げるでしょ」

「でも、いくらするかわかんないわ」

「バケツはいくらするの？」ミズホが訊くと、

「すくい棒がついて二十エンよ」とネナが教えた。

「百エンあれば、バケツが、えっと……、五個買えるのね。でも、その前に荷車を買わないとね」とミズホが言った。

「荷車を買って、原油をいっぱい運ぶことができたらいいなあ」ネナが何かを考えるように言うつと、

「できるわよ。だからやろう、ネナちゃん」とミズホは笑顔で言った。

ネナはそれができたら、生活がだいぶ楽になると思った。

翌日、ミズホとネナは原油を石油精製所のゴンタに百エンで売って、ハービーの町へ行った。

荷車屋さんで値段を聞くと、三百エンだった。原油をバケツに満タンにして三回売れば買える値段だが、問題は時間だった。荷車は受注生産で、数十台の注文がすでに入っているため、できるのは何カ月も先になるという。だけど、荷車ができてからお金を払えばいいというので、二人は注文することにした。

お店を出てから、ミズホが訊いた。

「荷車ができるまで、誰か貸してくれる人はいないかな？」

ネナは少し考えてから答えた。

「狩人かりゆつどの人たちなら、誰か貸してくれるかもしれないわ」

そして二人は、ハービーにある狩人たちが集う『狩人の館』へ行って、荷車を貸してくれる人を探した。

狩人の館の前には、爬虫類のような皮や哺乳類のような毛皮がたくさんぶらさがっていて、狩人たちが靴屋やカバン屋などの客と値段の交渉をしている。ネナが一人の狩人へ話しかけると、ロブという人が荷車を持っているが使ってないと教えてくれた。その人は狩人の館の中にいるというので、二人は中へ入っていった。

ロブは賢そうな目をし、癖毛くせけの長髪で背が高く、勇敢ゆうかんそうな青年だった。彼は相棒のムタや仲間たちと、狩りに使う弓矢を磨みがいているところだった。

「あの、ロブさん。私たちの荷車ができるまで、ロブさんの使っていない荷車を貸してくれませんか？」ミズホが訊いた。

「ダメだね。壊こわされたら困るんだ」ロブが即答し、

「そうだ、貸さないほうがいいぞ、ロブ」と長髪で中背の前歯が一本ない相棒の青年、ムタが言った。

「壊したら弁償ひんぎょうします。使っていないなら貸してください」もう一度ミズホが頼んだが、

「ダメダメ、貸せないな」とロブは面倒くさそうに言った。

追い返されてしまった二人は、しかたなくあきらめ、次にテッドへ行つて、漁師に荷車を貸してくれるか訊いてみることにした。

漁師は仕事で荷車を毎日のように使っているから、借りるのは難しいとネナは思っていたが、とにかく訊いてみようと思ふミズホが言い張つて、行くことにした。

棧橋にやつてきたミズホとネナは、一隻の中型帆船から魚介類を荷車へ積んでいる漁師のところに行った。彼は、昨日二人に、特使たちがブルで反逆者捜しをしている話をしてくれたおじさんだった。

「姉ちゃんたち、また船を眺めに来たのか？」

漁師のおじさんが言うと、ミズホは話した。

「いいえ、今日はちがいます。おじさん、誰か漁師さんで荷車を貸してくれる人、知りませんか？ もし知ってたら、紹介してほしいんです」

「予備の荷車なら、俺が貸してやつてもいいが、なんに使うんだ？」

漁師のおじさんが訊くと、ミズホは事情を説明した。

「原油の泉で原油を取って、荷車で運びたいんです。私たち、荷車を注文したんですけど、いつできるかわからないんです。壊したら弁償しますから、注文した荷車ができるまで貸してもらえますか？」

「わかった貸してやる。だが、原油の泉はジュームが出るから危険だぞ。本当に気をつけるんだぞ、姉ちゃんたち」

「私はミズホ。この子はネナちゃんです。どうもありがとうござい

ます」

「ミズボちゃんに、ネナちゃんか。俺はバン、この船の船長だ。よろしくな」

ミズボとネナが微笑むと、バンは念を押して言った。

「とにかく、あそこは危ないから、気をつけるんだぞ！」

漁師のバンは四十代ぐらいで、短く刈った髪型に髭面、がっちりした体格に色黒で野性的な感じがする人であった。彼はやりかけの仕事を仲間に任せ、ミズボとネナをつれて、テッドにある自分の家に行き、二人に予備の荷車を貸してくれた。

荷車を借りたミズボとネナは、バケツを四個買いにハービーへまに行くことにした。

「バンさんて、怖そうだったけど、親切な人だったね」

ミズボが荷車を引きながらそう言うのと、ネナは笑顔でうなずいた。「ネナちゃん、疲れてない？ 荷車に乗っていいわよ。私が引いて行くから」思いついたようにミズボが言うのと、

「大丈夫、疲れてないわ」とネナは答えた。

「でも、乗ってよ。早く」

ミズボに勧められ、嫌な予感がよぎりながらも、ネナは荷車へ乗った。するとミズボは、ネナを乗せた荷車をいきなり持ちあげ、自分を軸にその場で回りはじめた。

「ミズボちゃん、危ないよ！ おろして！」

ネナの予感は的中した。ネナは荷車から振り落ちないようにしがみついた。四、五回まわって、ミズボは荷車を静かに地面へおろした。

「楽しくなかったの？」ミズボが訊くと、

「楽しくない。だって、危ないもん」とネナは荷車に乗ったことを後悔しながら言った。

次の日、朝から原油の泉にミズボとネナは来ていた。二人は五個

のバケツに原油を満タンに入れ、荷車へ積んだ。怪物のナーナが、また二人の様子をしばらく眺めてから、どこかへ去っていった。

そして、ミズホとネナはルーシーへもどって原油を売りに行くと、石油精製所のゴンタが、プールから原油を買うより安あがりだと言つて、よろこんでくれた。

二人は原油を五百エンで売ると、そのまま荷車を引いてハービーへ行き、もう五個バケツを買つて、全部で十個になった。これで一回原油を取りに行くと千円になる。無理をすれば一日二往復できるから、二千エン稼ぐことができる。稼いだお金は、ミズホとネナで半々にすることにした。

ハービーからルーシーへの帰り道、買ったバケツを載せて荷車を引いているミズホに、ネナはたずねた。

「でも、ミズホちゃん。そんなにお金を稼いでどうするの？」

「私、家を買いたい」ミズホが答えた。

「家を！」ネナが少し驚いて言った。

「うん。ネナちゃんちの前にある小さな家、あの家を買いたい」そうミズホが言うと、

「あの家だったら近くていいわね」とネナが微笑んで言った。

「私が家を買つても、ご飯はネナちゃんちで一緒に食べていい？」ミズホが訊くと、

「うん、そうしよう」とネナはうれしそうに答えた。

第11章 小さな家

十個のバケツを荷車に載せ、ミズホとネナは原油の泉へやってきた。

荷車からバケツをおろしながら、ネナが言った。

「ミズホちゃん、十個のバケツを満タンにするのはちょっとたいへんだね」

「私がやるから、ネナちゃんは見てるだけでいいのよ」そうミズホが言つと、

「ダメだよ、私もやる」とネナが言い張った。

二人は十個のバケツを泉のほとりにならべ、すくい棒という柄杓のようなもので原油をバケツの中へ入れていった。

ミズホが夢中で作業をしていると、突然ネナが声をあげた。

「わあっ！ びっくりした」

その声に驚き、ミズホが後ろを振り向くと、怪物のナーナが真後ろで二人を眺めていた。

「私たちに興味があるのかな？」

ミズホがそう言いながら、満タンになったバケツに蓋をして荷車へ載せると、その様子をナーナが三本の目でじーっと見ている。

「じゃましないでね」

ミズホは怪物に向かって言つて、次のバケツに原油を入れはじめた。

「ネナちゃん、バケツが満タンになったら、私が荷車へ積みむからそこに置いてね」

「お願い、ミズホちゃん」

ネナはバケツに蓋をして、ほかのバケツに原油を入れはじめた。

ミズホは自分が満タンにしたバケツとネナが原油を入れたバケツを持って、荷車へ載せると、ナーナがまたじーっと眺めていた。

「見ててもいいけど、じゃましないでよ」ミズホはナーナへ言った。

四個目と五個目のバケツが満タンになったので、ミズホが荷車へ載せるため持とうとしたら、ナーナが三本の指でバケツの取っ手をつかんでしまった。

「こら！　どこへ持つて行くの！」

あわててミズホは怒鳴ったが、ナーナは平然と一つのバケツを持つて行き、荷車へ載せた。怪物の行動を見て、ミズホとネナは顔を見合わせ、大笑いした。

「手伝ってくれたのかな？」ミズホが言うと、

「ミズホちゃんがナーナを助けたから、たぶん恩返しのもりじゃない」とネナが言った。

そのあとナーナは、原油が満タンになると、バケツを荷車へ載せてくれた。さらに怪物は、原油の泉がある森から道端まで、荷車を尻尾で引つ張っていつてくれた。

ミズホとネナは、一日二往復の原油取りを一日おきに行った。二人が原油の泉へ行くと、必ずナーナが手伝ってくれるようになった。怪物は、二人が来るのを楽しみに待っているようにさえ思えた。

数週間そんな生活をつづけ、お金はすぐに貯まった。ミズホとネナは、ハービーに引越した売り家の持ち主のところへ行き、ミズホが五千七百エンで、ネナの家の前にある小さな家を購入した。

二人はルーシーにもどり、さっそくミズホが買った家を調べてみた。居間兼食堂に台所、それに寝室が一部屋、お風呂とトイレは別々である。外には、すべての家に必ずある、洗濯をするための水道と、ちょっとした物干し場^{ものほ}、それと物置小屋がある。石造りの小さくてかわいらしい家は、ミズホの一人暮らしにぴったりのように感じ、彼女の胸は恋するようときめいた。

タンス、テーブル、ベッドなど、必要最低限の家具はそろっていた。ただ、台所の水道の小型ポンプ式蛇口だけが壊れていたので、ハービーの水道屋さんに百三十エンで新しいものと交換してもらった。

水道の水は、山から海へ向かって地下を流れている地下水を、パイプで引いてきて利用している。トイレ、洗濯、食器洗い、お風呂などで出た汚水は、地下水が流れる水圧を利用し、別のパイプを使って南の川へ流している。だから、トイレは常に水が流れている水洗状態で、とても清潔である。また、有害物質を出す化学薬品などは文明的に一切ないから、汚水やゴミが生物や環境に悪影響を及ぼすこともない。

水道屋さんが帰ったあと、ネナが言った。

「ミズボちゃん、家を買ったってことは、ここにずっと住むんでしょ？」

「……私、帰りたくても、もう帰れないの」ミズボは悲しそうに言った。

「ヘンなこと訊いちゃって、ごめんなさい」

「気にしないで。家も買ったし、ここの生活は楽しいから。これもネナちゃんのおかげよ。ほんとにありがとう」

ミズボが明るく振る舞うと、ネナは話題を変えて言った。

「そうだ！ あと、ランプの石油を買わないと」

「ゴンタさんのところで買える？」そうミズボが訊くと、
「もちろん。少し安くしてくれるわよ」とネナが教えた。

十四歳で買った小さな家。夜、ベッドに入ったミズボは幸せが込みあげてきて、なかなか眠れなかった。明日はネナと一緒にハービーへ生活用品を買いに行く約束をした。何を買おうか、あれを買おうか、ミズボはそんなことを考えていると、わくわくして眠ることができなくなった。

地球でのミズボは、いじめられる不安と恐怖で毎日が苦痛だった。明日が楽しみで眠れないときがくるとは夢にも思わなかった。幸せという言葉は、地球でのミズボには無縁のように感じられた。わくわく感や幸福感はずっと昔に忘れてしまった感覚だった。しかし、蜜のように甘い幸せを、いまは確かに味わっている。それは、さわることも、見ることも、お金で買うこともできない不思議な感覚だ。

生前のおじいちゃんは、いじめられているミズホを心配して言った。「どんなにつらいことがつついても、永遠にはつづかないからね」と。

おじいちゃんが言ったとおり、つらい状態は永遠にはつづかなかった。こんな素敵な気持ちは、ミズホには訪れないと思った。うれしくてなかなか眠れないが、不安で眠れないのはわけがちがう。気持ちいい幸福感がミズホを優しく包み、やっと深い眠りに入っていた。

約束どおり、ミズホとネナは一緒にハービーへ買い物にやってきた。食材などが売っているマーケットとはちがう場所、生活用品が中心に売っている商店街にきた。マーケットよりも道が広く、二頭のメルが引く馬車のような乗り物がときどき走っている。その乗り物は、タクシーのように使われていた。

ミズホは着替えの服がもつとほしいと思い、最初に二人は服屋へ入った。店内には、似たようなデザインで色のちがうフードつきマントやワンピース、それとパジャマや下着がたくさん売っていた。「いらっしやい。どんな服を探してるの？」

店員のきれいなお姉さんが声をかけてきたが、どの服も同じようなデザインだから『どんな服』と訊かれても、ミズホはどれでもよかった。

店内をしばらく見て回ってから、ネナは茶色のフードつきマントとワンピース、それと母親のパジャマを買い、ミズホは茶色のフードつきマントとワンピースを三着ずつと、水色のパジャマを三着、それに下着や靴下などを必要なだけ買った。

二人がお金を払いに行くと、店員のお姉さんが言った。

「あら、二人とも茶色の服を着ているのに茶色の服を買うの？　ほかの色の服も似合うと思うけど」

「汚れても目立たないから、茶色がいいの」とネナが答えた。

二人は服屋から出てきて、次に陶器や金物、炊事用具などが売っ

ている日用品店へ向かって歩きはじめた。

商店街を二人で歩いていると、ネナが不意に立ち止まって言った。
「ねえ、ミズホちゃん。本屋さんに寄っていい？」

ミズホを見ると、すぐ近くに本屋があった。

「本屋さんなんてあるんだ。いいわよ、行きましょう」

二人は本屋へ楽しそうに入っていった。

本は木版技術で紙に印刷され、すべて革表紙で装幀されている。
値段は全体の物価からするとかなり高く、内容は実用書の類がほとんどで、物語のような本はないようだ。

店内は革の匂いで充満していた。

「ネナちゃん、どんな本を買うの？」

ミズホが訊くと、ネナが言った。

「お菓子の作り方の本がほしかったの。でも本は高いから買えなかったのよ」

ネナが本を探している間、ミズホは店内の本を眺めた。漢字辞典、ひらがな辞典、カタカナ辞典なども売っている。彼女は店の看板などで文字があることはわかっていたが、それらの辞典に驚いた。

本棚からミズホが怪物図鑑を手にとって開くと、ニヨンニヨンという名前の変な怪物がカラーで載っていた。写真の技術はなく、怪物は絵で描かれ、色は印刷したあとで丁寧に塗られている。印刷技術があるといっても、一冊一冊が手作りであった。

ネナが『楽しいお菓子作り』というお目当ての本を買って、ミズホのところに来た。怪物図鑑を本棚へもどしながら、ミズホはネナに訊いた。

「ネナちゃん。物語が書いてあるような本はないの？」

「作り話の本のこと？　そういうのは、神話の本しかないと思うわ」
二人の会話を聞いて、店のおじさんが話しかけてきた。

「神話の本はもう売ってないぞ。あの本を売るとは、バドル様に禁止されているんだ。それに、あんなのを持っていると、特使たちに何されるかわからないぞ」

本を買う様子がないミズホに、ネナが訊いた。

「ミズホちゃん、何か本を買わないの？」

「わ、私はいいわ」ミズホは、あせりぎみに言った。

「もしかして、字が読めないの？」

「ち、ちがうわ。読めるけど、ただ……」

「ただ、何？」

「なんでもない……」

ミズホは本が苦手だった。それは、三行読むと眠くなり、五行読むと眠ってしまうという不思議な体質の持ち主だったからだ。

二人は日用品店で買い物をしたあと、広場で一休みしてから帰ることにした。

広場にはいくつかの屋台があつて、飲み物や手軽な食べ物が売っている。ミズホとネナは、屋台でプップジュースを買って、ベンチに腰かけて休んだ。

「おいしいわね、このプップジュース」ミズホが言うと、

「買った本に作り方が載ってたから、こんど私が作ってあげるね」とネナが言った。

「このコップ、もらっていいの？」ミズホが、プップジュースの入っているコップを見て訊いた。

「ダメだよ。飲み終わったら、屋台に返さないと。それに、ミズホちゃん、日用品店でコップ買ったじゃない」

そうネナが言うと、ミズホはちよつとがっかりした。

「それにしても、ミズホちゃん、たくさん買い物したね」ネナが紙袋を見て言った。

ミズホの買い物した紙袋は三つになっていた。

「でも、まだなんか買い忘れてるような気がするのよね」ミズホがそう言うと、

「またくればいいじゃない」とネナが言った。

「ここ、素敵な広場ね」

広場で遊ぶ子供たちや若者たちを眺めながらミスホが言うと、ネナが話した。

「この広場の周りにある木、あるでしょ。あれが一年の木なの。あの木に花が咲くと、ここで新年のお祭りをやるのよ。音楽を聴いたり、手品を見たり、ゲームで遊んだりするの。それに、いろんな屋台がいっぱいならんで楽しいよ」

「新年のお祭り、こんどはいつやるの？」

「いまは六月だから、まだまだ先ね」

「楽しみだわ。プップジューズの屋台も出るの？」

「プップジューズの屋台はいつでも出てるわよ。いまも飲んでるじゃない」

「あ、そっか」

「そのお祭りはね、前は一晩中やってたけど、いまは昼間しかやってないの」

「どうして？」

「夜行性のグーボっていう怪物がこの辺にあらわれるんだって。夜中にこの辺を歩いていて、おそわれて死んじゃった人もたくさんいるそうよ」

「それは怖いわね。でも、一晩中のお祭りなんて、楽しそうだわ」

「すごく楽しかったわ。あのころはパパも生きてたし、家族三人で新年のお祭りに行って朝まで遊んだの。私が眠くなると、パパがおんぶしてくれて……」

ネナは話の途中で黙ってしまった。心配したミスホが言った。

「ネナちゃん、なんかして遊ぶうか？ 何して遊ぶ？」

「ミスホちゃん、もう帰ってママとお昼ご飯を食べよう」そうネナが言うと、

「まだ時間があるわ。少し遊んで行こうよ」とミスホは誘った。

「遊ばない」ネナはきっぱりと断った。

「なんで？」ミスホが訊くと、

「だって、まだ死にたくないもん」とネナは答えた。

彼女はミズホの誘いで遊ぶと、死ぬ恐れがあるとすでに学習していた。

昼食のあと、ミズホは靴を買い忘れていることに気づいた。ネナは買ってきたお菓子作りの本を熱心に読んでいたから、ミズホは一人でハービーまで行って靴を買いおうと思い、出かけていった。

Ｔ字路を越えて、ハービーへ向かう道をミズホが陽気に歩いていると、神殿の前にやってきた。彼女は好奇心をかき立てられ、ちょっと中へ入ってみようと思った。

神殿の周りは、ぐるっと一周しているかなり広い庭になっているようだが、雑草がのび放題で荒れ果てていた。ぼろぼろの神殿には変わった植物の蔓が絡まつるっている。正面玄関は大きな両開きの扉になっなていて、右側が少し開いていた。ミズホはそこから神殿の中に入いっていった。建物の中は外から見るよりも広く感じ、ずいぶん老朽きゅう化しているが、意外にきれいだった。

奥の祭壇さいだんには人間と変わらない容姿の神と思われる石像が祭まつっており、椅子はまったくなく、ドーム状の天井には左右に天窓が四つずつあり、そこから日がさし込み、神秘的な光のラインが床へ向かって貫くわいていた。

マーケットでミズホに声をかけてきたコウサクじいさんが、祭壇の石像へ向かって両手を合わせ、祈っている。彼の足もとには、雑巾がふちにかかっている水の入ったバケツと箒が置いてあった。どうやら、コウサクじいさんが掃除をしているから、きれいな状態が維持維持されているようだ。

ミズホはそっと神殿を出ようとしたが、祈り終わったコウサクじいさんが振り返り、彼女を呼び止めた。

「待ってください、お嬢さん」

コウサクじいさんがミズホに向かって歩いてきたので、彼女も近寄よっていき、二人は神殿内のほぼ中央で立ち止まり、向き合った。

「お嬢さんは、マーケットで特使たちを投げ飛ばした娘さんですね

？ 確か、ネナちゃんが、ミズホちゃんと呼んでいましたね」

コウサクじいさんが言うと、ミズホがうなずいた。彼はつつけて訊いた。

「ミズホさんは、この辺りの人ではないようですが、どこから来たのですか？」

「ルーシーです。ルーシーに家を買ったんです」ミズホが答えると、
「そういえば、ルーシーにはずいぶん行ってないです」とコウサク
じいさんが言った。

「コウサクおじいさんは、どこに住んでるんです？ ハービーです
か？」

「私は、ハービーよりずっと西にある山の中で暮らしています」

「どうして、そんな山の中で？」

ミズホが訊くと、コウサクじいさんは話した。

「この神殿の神を信じるようにみんなへ言ってきましたので、特使
たちに命を狙われていたのです。それで山に家を建てて身を隠し、
そのまま住み着いてしまいました。いまはこの神殿の神を信じる者
は誰もいなくなりましたから、特使たちは私を殺さずに、『バカな
老人』と言って、笑いものになっています。しかし、山の暮らしもい
いものです。お金が必要なときは、果物や山菜などを売ることもで
きますし。 ところで、私の名前をネナちゃんから聞いたのです
か？」

「あ、はい」

「ネナちゃんは、私をすごく恨んでいたでしょう？」

コウサクじいさんの言葉にミズホが黙ってうつむくと、彼はつつ
けて話した。

「あの子にもつらい思いをさせてしまった。ネナちゃんの父親は、
私と一緒にこの神殿の神を信じてくれました。彼も最後まで神を裏
切らなかった。しかし、大勢の人間がこの神殿の神を信じることで
亡くなったと思うと、私はまちがっていたのではないかと思うとき
があります……」

「それでも、神様を信じるんですか？」

「私の家には先祖代々受け継がれた、神がこの世に残していったと言われている地図や鍵などがあるのです。機会があったら、いつかお見せしましょう」

「でも、人の命が……」

「そうですね。人の命より大切なものなどありません……。神話は
大昔の人の作り話なのでしょうか？ 真実を知っているのは、神の
奇跡を見た大昔の人間と神だけです」

コウサクじいさんは、悲しそうな年老いた瞳で、祭壇に祭られた
神の石像を見つめた。

「毎日この神殿の掃除をしてるんですか？」

ミスホが訊くと、コウサクじいさんは答えた。

「いいえ。月に何回か山をおりてきて、掃除をしているだけです」

「ずいぶん古い神殿ですね」

「実は、いつ建てられた神殿かわからないのです。私が生まれる
ずっと昔から、すでに古かったそうです。しかし、みんなで庭の手
入れをしたり、外壁を洗ったり、中を掃除したりして、神への感謝
を忘れず、大切にしてきました。ですけど、十年以上前からバドル
が支配するようになって、奴隷にされたり、殺されたりするのが怖
くて、徐々にこの神殿に来る人は減っていったのです。それでも神
話を信じ、ここへ来て、救世主の降臨（きょうりん）を祈りつづけた人々はいまし
た。しかし、ある者は奴隷になり、ある者は殺され、ある者はあき
らめてしまい、いつの間にかこの神殿には誰もこなくなつたのです」

沈黙がしばらく流れ、ミスホが口を開いた。

「来てるじゃないですか、コウサクおじいさんがこの神殿に」

「おお、そうでした、そうでした」コウサクじいさんは優しい笑顔
になり、つけ加えて言った。「それに、ミスホさんもこの神殿に来
てくれました」

神殿内の雰囲気とコウサクじいさんの穏やかな表情で、ミスホは
とても安らかな気分になった。

靴を買いに行く途中だとミスホが話すと、コウサクじいさんは、マロンさんという人がやっているいい靴屋を知っているから教えると言つて、二人は一緒にハービーまで行くことにした。

靴屋までの道中を歩きながら、コウサクじいさんがミスホに訊いた。

「ルーシーのどの辺りに家を買ったのです？」

「ネナちゃんの家の前です」

「あそこの小さな家ですか」

「昨日、買ったばかりなんです」

「昨日、買ったばかり？ その前はどこに住んでいたのです？」

「えっ、その……、と、遠くです……」

「遠く？ といいますと、どの辺りです？」

「ずっと、ずっと、遠くなんです」ミスホは空を見あげた。

「そんなに遠くから……」コウサクじいさんも空を見あげた。

二人が靴屋の前までやってくると、コウサクじいさんが言った。

「この店がマロンさんの靴屋です。私は山へ帰りますので、ここで失礼します」

「ありがとうございます、コウサクおじいさん」

ミスホはお礼を言つて、二人は靴屋の前で別れた。

彼女が店内へ入ると、気難しそうな中年の男がカウンターに坐っていた。

「すみません、マロンさんですか？ 靴を買いたいんですけど」ミスホが声をかけると、

「ああ、そうだが。あんた、いまコウサクじいさんと話してたな？」とマロンが言った。

「コウサクおじいさんが、ここの靴がいいからつて、教えてくれたんです」

「そうかい。でもな、あのコウサクじいさんのおかげで、俺の弟はバドル様の奴隷にされてしまったんだ。あんたも気をつけな、コウ

サクじいさんの話をまともに聞くと、ろくなことにならないぞ」

「そんなこと言ったら、コウサクおじいさんがかわいそうです。それに、マロンさんの靴は、すぐく丈夫でいいって言っていましたよ」

「だがな、弟は……。まあ、あんたに言ってもしょうがないな。で、どんな靴がほしいんだい？」

「丈夫な靴がいいんですけど」

「丈夫な靴がいいんだな。それなら、ちょうどいいのがある」

そう言って、マロンは店の奥から革製の靴を出してきた。

「この靴は男性用だが、サイズが小さいからあんたに履^はけると思うな。もし履けなかったら、時間はかかるが、丈夫なやつを作^はつてやるよ」

ミズホがその靴を履いてみると、ちょうどよかった。

「同じ靴、三足ありますか？」

「ああ、あるよ。それはそうと、あんたの靴、見たことないな。どこで買ったんだ？」マロンはミズホのスニーカーを手に持って、しげしげと見つめた。

「その靴は、おばあちゃんと一緒に銀座の靴屋に行って、買ったもらったんです」

「どこで買ったもらったって？」

「だから、あつ、それは、買ってきてもらったから、わかりません……」

ミズホはなんとかごまかしたが、マロンはスニーカーをいろんな角度から見ている。

「あんまり見ないでください」ミズホが言うと、

「どうして？」とマロンが言った。

「恥ずかしいから……」わけのわからないことをミズホが答えると、「あんたを見てるんじゃないだろ。靴を見てるんだよ」とマロンが言った。

買った三足の靴は、マロンが頑丈で長持ちすると言ったが、ミズホがその気になれば、簡単に引きちぎることができるだろう。靴に

かぎらず、この惑星のものは地球人にとって脆^{もろ}すぎるが、ミスホは加減をできるようになっていた。

第12章 反逆者

バドル神殿にある『神の間』と呼ばれる部屋は、建物の最上階にあり、神殿を増築するために働く奴隷たちの仕事ぶりを眺めることができ、海と町も見渡すことができる。内装は様々な宝石類で装飾され、豪華で悪趣味だ。

その部屋で、黄金の肘掛け椅子ひじか いすにバドルは偉そうに坐っていた。でっぷりとした身体に派手な刺繍をほどこしたローブをまとい、髪は長く、ずる賢そうな顔つきで病的に青白い、彼はそんな五十代半ばぐらいの男であった。

窓際には特使の最高幹部、ゾルデが立っていて、増築現場で働く奴隷たちの様子を、まるで虫けらを眺めるような目つきで見おろしている。

なぜバドルがこの世界を支配できるまでになったのか？ それは、たった二つの予言からはじまった。その予言とは、『あなたにはよいことが起こる』と『あなたには悪いことが起こる』の二つであった。

人間が日常生活を送るうえで頻繁ひんぱんに起こるよいことや悪いこと、百パーセント当たるに決まっている。たとえば、悪いことが起こると予言され、ちよつとケガでもすれば、「予言が当たった」という具合に。

バドルはブルの人々に特別視されるようになり、自分でも特別な人間『神の生まれ変わり』だと思い込み、自己暗示にかかっていた。そのインチキ予言にすっかり騙だまされたゾルデは、バドルを神と崇あがめ、親しくなり、必要以上にほめたたえ、特使の最高幹部にまなつた。

あなたは選ばれた人間だと勧誘し、特使と名づけた部下を約三万人集め、勢いづいたバドルは、神殿を建造する計画を立て、そのために必要な奴隷を集めるため『死の予言』の着想を考え出した。そ

の予言で集めた奴隷の数は一万人を超えていた。

特使たちはバドルを神の生まれ変わりだと本気で信じている信じているからこそ、自分たちは選ばれた人間だと思い、バドルの命令で殺人も平気で行うことができるのだ。

窓際にいるゾルデに、バドルがたずねた。

「それで、私の暗殺計画を企んだ連中は全員捕まえたのか？」

ゾルデは、バドルの坐っている黄金の肘掛け椅子の前にやってきて報告した。

「はい。予定より長くかかりましたが、バドル様を恐れて密告する者が多数あらわれたおかげで、全員を捕まえることができました。バドル様暗殺計画のリーダーは、ハンスという男で、大型貨物船の船長でした」

「人間は悲しい生き物だ。自分の都合で仲間を裏切り、密告する。結局、神である私に逆らうことなどできないのだ。特使たちは私を裏切らない。神の子として私に選ばれた君たちは、優秀な人間なのだぞ」

バドルが偉そうに話すと、ゾルデが言った。

「ありがたいお言葉。神に選ばれたことを常に感謝しています」

「もともと、君たち特使が反逆者たちを捕らえることは、すでに予言されていたのだ」

「すべてお見通しとは、さすがバドル様」

ゾルデが大げさに手を広げて言うと、バドルは目を閉じ、予言をはじめた。

「見える、見えるぞ、予言が見える。ゾルデ、お前によいことが起こるであろう」

「神の生まれ変わり、偉大なる救世主バドル様、ありがとうございます」ゾルデは深々と頭を下げた。

「ところでゾルデ、反逆者たちの処刑は、いつどこで行う予定なのだ？」

バドルが訊くと、ゾルデは話した。

「ハンスたちの処刑は、プールの中央広場で行う予定ですが、日取りはまだ決めていません。反逆者たちをしばらく牢屋ろうやで苦しめたあと、処刑を執行したいと思います。プールの中央広場での処刑は、人々へのよい見せしめになるでしょう」

バドル暗殺計画を企んだのは、ハンスをはじめ、男十一人と女八人の十九名であつた。大型貨物船の船長をしているハンスは、短髪で長身、正義感の強さが瞳から伝わってくる四十代ぐらいの優秀な船乗りだつた。彼らはバドル神殿の地下にある、鉄格子てつこうで仕切られた薄暗い牢屋に投獄とうくされていた。

十九名は同じ牢屋に監禁されていて、ほかの牢屋には、仕事で失敗などをした奴隷たちが監禁されている。奴隷たちは男女合わせて十人くらいずつ、それぞれの牢屋に投獄されていた。

反逆者たちが入れられた牢屋の、向かいの牢屋に入れている中年女性が、鉄格子をつかんでハンスたちに話しかけてきた。

「あんたたち、バドル様を暗殺しようとか計画したって、本当かい？」

ハンスたちは何も答えなかった。すると、中年女性と同じ牢屋に入っていた中年男性が、つぶやくように言った。

「神様を殺そうとか計画するなんて、とんでもない連中だ」

「奴は神なんかじゃない！ 騙だまされているんです！」

ハンスが言うと、中年女性が言った。

「バドル様は神の生まれ変わり、救世主だよ。その証拠に、私たちは奴隷になつて死の予言から救われたんだよ」

「本気でそんなこと言ってるんですか！？ 神なんかいるはずないでしょう！ もしいるとしても、神が人間を奴隷にするはずがない！」

ハンスが怒鳴ると、隣の牢屋から若い女性が話しかけてきた。

「私もバドル様は偽者だと思います」

中年女性が彼女に向かつて言った。

「あんた、そんなこと言うと、この連中と一緒に処刑されてしまう

よ。あんたも死の予言から救われたんだろ。それはバドル様のおかげなんだよ。バドル様は救世主なんだよ」

「こんな人生なら、死んでもいいわ」そう言って若い女性が泣き出した。

ハンスの仲間の青年が訊いた。

「みなさんは、どうしてここに入れられたんですか？」

中年女性と同じ牢屋の若い男が話した。

「仕事で失敗をしたからです。だけど、一カ月間監禁されたあと、反省の刑を受ければ出られます」

「反省の刑？　どんな刑なんです？」ハンスの仲間の女が訊いた。

「特使たちに殴なぐられる刑です」と若い男が説明した。

それを聞いて、ハンスが言った。

「そんなことをする連中が、神に選ばれた人間だと！　みなさんは、それでもバドルを信じるんですか？　いい加減、目を覚ましてください！」

「バドル様は救世主だ！　神話に予言されている救世主だ！」

中年男性がそう言うと、ハンスは半分叫ぶように言った。

「神話なんてデタラメだ！　それに、バドルはあの神を信じることを禁じ、あの神話を否定してるじゃないですか。そんなことも知らないんですか？」

「知らないな、そんな話は」中年男性が言った。

「なぜバドルが、あの神話を否定してるかわかりますか？」ハンスが訊いた。

「なぜなんだい？　言ってみなよ」

中年女性が挑発的に訊くと、ハンスは答えた。

「神話で予言されている救世主は『地球の乙女』だ。つまり、女の子なんです」

この惑星の日時計で二時ごろ、真新しい荷車を引っ張ってきて、ミズホはネナの家の前で止まった。

「ネナちゃん！ ネナちゃん！」ミズホが呼ぶと、
「なあに？ ミズホちゃん」と言つて、ネナは家の窓から顔を出した。

「私たちの荷車ができたから、取つてきたわ」ミズホが荷車を見せながら言つと、

「やつとできたのね」とネナが言つた。

「私、バンさんに借りた荷車を返してくるわね」

「ミズホちゃん、私も一緒に行く」

「いいわよネナちゃん。お菓子を作つてゐる途中でしょ？」

「でも、つづきはあとでやる。お菓子ができたら、ミズホちゃん、また食べてくれる？」

「食べる食べる、ネナちゃんのお菓子、すごくおいしいから」

ミズホがお菓子を食べるのを楽しみにして言つと、ネナはとてもよろこんだ。

自分たちの新しい荷車をネナの家の物干し場に置き、そして、バンから借りた荷車をミズホが引いて、ネナと一緒にテッドの港町へ向かつて歩いていった。

「この荷車にもお世話になつたわね」ミズホが言つと、

「こんどバンさんに、お菓子作つてあげよう」とネナが言つた。

「ネナちゃん、荷車に乗る？」ミズホが訊くと、

「乗らない」ネナは素早く断つた。

「持ちあげたり、回したりしないから、乗りなよ」

「乗らないわ。だつて、持ちあげたり、回したりしなくても、投げるかもしれないもん」

ネナが疑つと、ミズホが言つた。

「投げないわよ。まちがつて投げるかもしれないけど」

その言葉で、ネナは背筋が寒くなった。

そんなことを話しながら二人はテッドの棧橋までやってきて、バンの中型帆船を捜し出した。帆船のそばに、長髪で小麦色に日焼けした中背の明るそうな二十代ぐらいの青年が立っていた。

「すみません、バンさんの船ですよね？」ミズホが訊いた。

「ああ、そうだよ。バンさんに何か用？」

青年がそう言つと、こんどはネナが話した。

「借りた荷車を返しに来たんですけど」

「バンさん！」青年が帆船に向かって叫んだ。

「なんだ、リド？」バンがその青年の名前を言つて、帆船の甲板から顔を出した。

帆船には、バンのほかにも何人か乗っている。

「この子たちが、バンさんから借りた荷車を返しに来たんだってさ」リドが話すと、

「おお、ミズホちゃんに、ネナちゃんか。まだ使つててもいいぞ」とバンが言つた。

「注文してあつた荷車ができたから、もう大丈夫です。バンさん、どうもありがとうございます」ミズホがお礼を言つと、

「そうだ！ お二人さん。この船に乗つて海へ出てみないか？」とバンが誘つてきた。

「船に乗せてくれるの！？ 乗りたいわ！」

ミズホがそう言つて、ネナとよろこんだ。

「ちよつとそこで待つてな。いま、帆の縄を調整してるからな。荷車はその辺に置いてくれ」とバンが言い、つづけて、「リド！いつまで休憩してんだ！早く船に乗つて手伝え！」と怒鳴つた。「そんな休んでないよ」リドはぼやき、タラップから帆船へ乗つていった。

ミズホとネナは、帆の調整が終わるまで、海を眺めながら待つことにした。一隻の小型帆船がやってきて、バンの帆船の向かい側に接岸し、タラップをおろした。そして、小型帆船から、母親と少年二人、母親の両親と義理の両親らしき人たちが悲しそうに泣きながらおりてきて、待つていた二頭のメルが引く馬車のような乗り物に乗り、町へ向かつて帰つていった。

その様子を眺めていたミズホが言つた。

「かわいそうにね」

ネナは黙ってうなずいた。

「ひどい船酔いになったのね」そうミズホが言うと、

「船酔い？ ミズホちゃん、あれはお葬式だよ」とネナが教えた。

「そ、そうなの！ でも、なんで海でお葬式をしてきたの？」

「お葬式は海でやるのよ。亡くなった人を灰にして、海へまくの」

「じゃあ、海にすれば、亡くなった人といつでも逢えるのね」

ミズホがそう言うと、ネナは微笑んだ。

この文明には墓の習慣はなく、遺体を火葬にし、海へまいていた。二人がまた海に目をやると、こんどは中型帆船が棧橋へ向かってやってきた。

「また船が来るわ」

ミズホが言うと、帆船からおりてきたバンが言った。

「あれは特使の船だな」

二人が振り返ると、バンはつづけて話した。

「ブールの反逆者を全員捕まえたから、こっちの町の監視を再開するんだろ」

「ミズホちゃん、帰ったほうがいいみたい」ネナが言った。

「そ、そうみたいね」ミズホが言うと、

「どうしてだ？ もう船に乗れるぞ」とバンが言った。

特使の帆船は、どんどん棧橋へ近づいてきて、甲板に乗っている四人の男の顔が確認できた。その四人は、ミズホに叩きのめされた、あの特使たちだった。

特使のガルが、甲板からミズホのほうを指さして何かを叫んでいる。

「いたぞーっ！ あの小娘だ！ 早く接岸しろ！」

ミズホとネナは、バンに事情を話す余裕もなく走り出した。二人は棧橋を駆け抜け、市場方面へ向かった。不意にミズホが立ち止まったので、ネナもつられて立ち止まった。

「なんで逃げるの？ あの四人なら勝てるわ」ミズホが言うと、

「四人のはずないわ。船の中にまだ乗ってると思うよ」とネナが言った。

ミスホは棧橋を振り返って言った。

「大丈夫！　じゃないかも……」

接岸した帆船から、特使たち五十人がそろそろとおりている真っ最中だった。その光景に、思わず二人は見入ってしまった。

「あそこだ！　あそこ！」

特使のゲンが二人を指さして叫び、五十人の特使たちがこっちへ向かって全速力でそろそろと走ってくる。

「逃げ切れないわ！　ミスホちゃん、どっかに隠れよう！」

ネナの言葉にミスホはうなずき、二人は市場へ向かってまた走り出した。

第13章 市場での闘い

市場にやってきたミズホとネナは、売り物の魚を入れてある積みかさなつた木箱の後ろに隠れ、息を潜^{ひそ}めた。

それを見ていた市場のお兄さんが、笑いながら言った。

「お、かくれんぼか。子供は元気でいいな」

それからすぐに、五十人の特使たちが駆けつけてきた。市場にいた大勢の人々は、何かと心配し、不安な表情をしている。

「そんなに早く逃げられるはずはねえ！ この辺に隠れてるぞ！」

特使のベイがそう叫んで、ほかの特使たちが魚の入った木箱をひっくり返すなどして、市場の店を荒らしはじめた。

「やめてください！ 特使さんたち」

市場のおじさんが頼むと、特使のレスが彼の胸ぐらをつかんで訊いた。

「おい、お前、この辺りにガキの女が逃げてこなかったか？」

「し、知りません」

そう答えた市場のおじさんを、レスは殴り飛ばした。

四人の特使が中心となつて、五十人の特使たちが、長剣や短剣、飛び出しナイフなどの武器を持ち、市場をめちやくちにしはじめた。バンと彼の船員たちが駆けつけてきて、市場のありさまを見て驚いた。

「これはひどい！」リドが、暴れている特使たちを見て言った。

「あの子たちを捕まえるために？ 大げさすぎるな……」バンが言った。

隠れて特使たちの様子を見ていたミズホが、嘆くように言った。

「たいへん、私のせいで市場が……」

「でも、しょうがないよ」ネナが困つたように言った。

特使たちが投げ飛ばした木箱から、カエルのように飛び跳ねるタラバガ二のようなホッパが、二人が隠れている場所に飛んできて、

ひっくり返った。この甲殻類は、陸でさかさまになると自分では起きあがれない。

「見てネナちゃん。ホッパだよ！」ミズホが地面のホッパを指さして言った。

「それどころじゃないよ、ミズホちゃん」ネナは見向きもせずと言った。

こんどは、首があつて一つ目で、耳のようなエラにゾウのような鼻をしている魚のゼゼが、二人のところに飛んできた。

「見てネナちゃん。ゼゼだよ！」ミズホが地面のゼゼを指さした。

「それどころじゃないって……」ネナは見向きもせず、呆れて言った。

「私、謝ってくる」ミズホが言うと、

「謝ったって、殺されちゃうよ」とネナが言った。

「でも、話してみないとわからないわ」

そうミズホは言うのと、なぜか右手にゼゼ、左手にホッパを持って、特使たちが暴れているまっただ中へ飛び出していった。

「ミズホちゃんっ！」

ネナは呼び止めようとしたが、彼女は行ってしまった。

「やめてーっ！」

ミズホが叫ぶと、五十人の特使たちは暴れるのをやめ、いっせいに彼女を睨みつけた。

「やめて頂けませんか？」

ミズホが丁寧言いなすと、五十人の特使たちが集まってきた、彼女を取り囲んだ。市場にいた人々やバンたちは、その様子を心配そうに見守った。

ハービーでミズホにやられたことのある特使、ガル、ベイ、ゲン、レスの四人が、彼女のところにやってきた。そして、四人は背負っている鞘こしらから長剣を取り出した。

「俺たちから逃げられないとわかったか」ベイが言った。

「今日は、この前のようにはいかないぞ。反逆者！」ゲンが言った。

「お前を処刑する」とレスが言って、
「覚悟しろ小娘！」とガルが怒鳴った。

「この前は、やつつけてしまって、ほんとにごめんなさい」

ミズホが謝ると、周りの特使たちが四人を眺め、『こんな小娘にやられたのか』という冷たい視線になった。

「う、うるせえんだよ、ガキ！」ベイが怒鳴ると、

「俺が殺す」とガルが言った。

そして彼は、ミズホの前に来た。

「あの、こ、これを……」

ミズホはあわてて、手に持っていたぜとホッパをガルへさし出した。

「なんのつもりだ？」ガルが訊くと、

「これをあげます。だから、私と仲直りをしませんか？」ミズホが言ったが、無駄だった。

「このガキ！ なめやがって！」

ガルが長剣を振りかざした。そのとき、ミズホが持っていたぜの鼻から、墨が勢いよく噴き出し、ガルの顔面を直撃した。

「何、何、何これ！？」ミズホは驚き、ぜを放り投げた。

ガルはうなり声を出し、長剣を落として、コートの袖で顔をぬぐい、怒鳴った。

「この野郎ーっ！」

「ご、ごめんなさい！ 墨がでるなんて知らなかったんです。こつちをあげます」

そう言ってミズホが、持っていたホッパをガルに向かって軽く投げると、ホッパが六本の脚で彼の顔面に張りついた。その弾みでガルは仰向けに倒れた。ホッパは彼の顔から離れ、ピョンピョンと飛び跳ね、どこかへ行った。

「許さねえ、許さねえぞ……」怒りが頂点に達したガルは、低い声でうなるように言いながら立ちあがった。

すると、後ろのほうから女の声がしてきた。

「ガル！ 待ちな！」

短い髪できつい目をした二十代後半ぐらいの特使の女が、右肩に長剣を担ぎ、ほかの特使をかき分け、ミズホの前にやってきた。彼女は革のワンピースにフードがついてない革のマントを羽織り、ブーツを履いている。

「あの特使の女は……」

不安な表情で眺めていたリドがつぶやくと、バンが小声で言った。

「ああ、剣の達人、サツキだ。やばいな」

「バンさん……」

ネナがバンたちのところに来たが、誰もどうすることもできなかった。

「ざこは引っ込んでな」サツキはガルたちをしりぞけ、ミズホに向かって、「魚介類を使った戦術、なかなかやるな」と褒めた。

「ちがいます！ わざとじゃないんです。せぜが墨を噴くなんて知らなかったし、まさかホツパが顔にくつつくなんて……。ただ、あげようと思って……」ミズホは自分を弁護したが、信じてもらえそうになかった。

「お前の特使に推薦してやる。すいせんバドル様の部下になって、私の弟子にならないか？」

サツキが勧誘してきたので、ミズホは大声で言った。

「なりません！ インチキ神様の部下になんか、絶対になりません！」

彼女の言葉に、大勢の見物人や特使たちが心底驚いた。

心配そうに見ていたバンがつぶやいた。

「勇敢だが、もう終わりだ。殺される」

バンの仲間たちとネナが、絶望してうつむいた。

「バドル様への冒瀆、許せん！ 処刑だ！」サツキは怒鳴って、長剣をミズホの頭めがけて振りおろした。

バンと仲間たち、ネナが目をつけた。

よけることができなかったミズホは、サツキが振りおろした長剣

の刃を頭に載せ、きょとんと突っ立っている。サツキは自分の目を疑い、ミズホの頭に長剣を振りおろしたまま固まってしまった。市場は静まり返り、その場にいた大勢の人々が驚愕している。目を伏せていたバンたちとネナが恐る恐る見てみると、平気でミズホが立っていた。

サツキはミズホの頭上に振りおろした長剣を、両手でノコギリのように前後へ押し引きしてみたが、彼女の頭はまったく切れない。

「くすぐったいから、やめてください」

ミズホは頼んだが、サツキは必死で彼女の頭を切ろうとがんばっている。

「くすぐったいわ」もう一度ミズホが言うと、

「そ、そんなバカな……」とサツキはつぶやいた。

「バカで悪かったわね！」

そう言つてミズホは、サツキを両手で突き飛ばした。サツキは空中へ舞いあがり、落下してきて、魚の生ゴミが入っている箱に勢いよく突っ込んで気絶した。それを目撃して、ほかの特使たちはひるんだ。

「殺せ！ 小娘を殺せ！」

ベイが叫ぶと、特使たちはいつせいにミズホにおそいかかった。

次々とおそいかる特使たちを、ミズホはどんどん突き飛ばした

突き飛ばされた特使たちは、次から次へと宙に舞い、市場のあちこちへ散つて、それぞれの店などに突っ込み、気を失い、のびていった。

市場にいたバンたちとネナや大勢の見物人たちは、あんどりと口を開けて、おもしろいように突き飛ばされていく特使たちを目で追いながら眺めている。

ネナの目の前に、ミズホに投げ飛ばされた一人の特使が落っこちてきて倒れた。起きあがろうとした彼の後頭部にネナが蹴りを入れ、とどめを刺した。それを見ていたバンと仲間たちは、顔を見合わせ、ちよつと引きつって笑った。

「行けーっ！ 殺せーっ！」

ガルが叫んだが、もう誰もミズホにおそいかかっていかない。彼は我に返って周りを見渡すと、残っている特使は自分を含めた例の四人だけになっていた。彼らは闘わずに、かけ声だけをかけていたのだ。

市場にいた大勢の人々が、その四人を睨みつけている。覚悟を決めたガルとベイが、ミズホに飛びかかっていき、長剣を振りかざした。が、彼女は左右の手で二人の長剣の刃を受け止め、奪い取り、投げ捨ててしまった。長剣を取られてしまった二人の手は、やることをなくし、髪をいじったり、服をいじったりしてごまかした。

そしてミズホは、右手でガル、左手でベイの胸ぐらをつかみ、軽々と持ちあげた。ゲンとレスは長剣を捨てて逃げ出したが、ミズホは二人の背中へ向かってガルとベイを投げつけた。ガルはゲンの背中に、ベイはレスの背中に命中し、四人の男は地面に転がり気絶してしまった。

市場にいた大勢の人々が、ミズホを尊敬のまなざしで眺めている。みんなから注目され、ミズホがもじもじしていると、誰かが拍手をはじめ、やがて見物人全員の拍手が市場に鳴り響いた。思いもしなかった大拍手に、ミズホは照れながら微笑んだ。

一部始終を見とどけたバンがつぶやいた。

「まさか、あの子は……」

「ミズホちゃんはね、すごく強いんだよ。だって、宇宙から来たんだもん」

ネナの話しをバカにして笑う者など、誰もいなかった。

翌日、ミズホとネナは原油をたくさん取って、めちやくちやになつてしまった市場をできるだけ弁償しようと、原油の泉に新しい荷車を引いてやってきた。

二人が原油を取りはじめると、怪物のナーナがやってきて、いつものように手伝ってくれた。すくい棒で原油をすくい、バケツへ入

れながら二人は話した。

「市場の人は大丈夫だって言ってたけど、弁償したほうがいいよね」
ネナが言うと、

「そうね。あんなにめっちゃめっちゃにしちゃったからね」とミスホが言った。

「でも、ミスホちゃんは悪くないよ。みんなもわかってると思うわ」
そうネナが言ってくれたので、ミスホはとても安心した。なぜなら、市場の人たちが、本当はすごく怒っているのではないかと、一晩心配していたからだった。

いっぴいになったバケツにミスホが蓋をすると、ナーナが三本の目をきよるきよるさせながらバケツを持って行き、荷車へ載せた。
「ここ来ると、ナーナは必ず手伝ってくれるようになったちゃったね」

ナーナの行動を眺めてミスホが言うと、ネナが微笑んで言った。

「怪物が手伝ってくれるなんて誰かに話しても、きっと信じてくれないと思うわ」

「いつまで手伝ってくれるのかな？」

「なんかさ、手伝いたくってしょうがないって感じがするから、ずっと手伝ってくれるかもね」

ネナがそう言うと、ミスホは楽しそうに笑った。二人がナーナを見ると、怪物は次のバケツが満タンになるのをひたすら待っているようであつた。

バドル神殿の神の間で、バドルとゾルデにサツキが先日のできごとを報告していた。

「そういうわけで、あの小娘はガルたちから聞いていたとおり、いや、それ以上に危険な存在だとわかりました」

サツキの話を黙って聞いていた二人であつたが、ゾルデがつぶやくように言った。

「五十人の特使を…… たった一人で……」

「はい、まるで神業でした」

サツキの言葉に、二人の顔色が激しく変わった。そして、ゾルデが怒鳴った。

「『神業』だと！ サツキ！ 言葉に気をつける！ 神はバドル様だけだ！」

「し、失礼しました」サツキはあわてて謝罪し、つづけて話した。

「しかし、小娘は神話に出てくるトオル様のように、人間を軽々と空中へ突き飛ばしてしまうほどの力を持っていました。しかも、完全な反逆者です。バドル様を『インチキ神様』と、はつきり言っていました。彼女がこのバドル神殿にやってきたら危険です。警備の強化を」

「わかった。少し大げさだが、特使の半数をこの神殿に待機させ、あとの半数をその小娘を捕らえに向こうの町へ行かせよう」

ゾルデが案を出すと、バドルが言った。

「いや、すべての特使を待機させてくれ」

「全員ですか？ バドル様、特使は三万人いるんですよ！」

ゾルデが驚いて言うと、バドルが話した。

「たかが小娘一人を捕らえるために、半数の特使を行かせるよりもましだろう」

「確かに」ゾルデが言った。

看守の男が二人、地下牢で話している。その声が、ハンスたちの監禁されている牢屋にまで聞こえてきた。彼らの話の内容を、ハンスと仲間たちは牢屋の中で寝そべりながら聞いていた。

「知ってるか？ たった一人の娘に、五十人の特使たちがやられたんだってさ」

「ああ、剣の達人、サツキも勝てなかったって噂だぞ」

「それが本当だったら、相当強いぞ」

「しかし、ジゼムさんには勝てないだろう」

「彼は別格だ。最強の戦士だからな」

ハンスの仲間の青年が二人の話を聞いて、ハンスに小声で話しか

けた。

「ハンスさん、奴らの話は本当ですかね？」

「くだらんことを期待するな」

「そうですね、僕はどうかしてました。処刑されと思うと、ありえない奇跡を期待してしまいます。神話に出てくる地球の乙女なんて、来るはずなのに……」

青年が悲しそうに言うと、ハンスは仲間たちを眺めて言った。

「すまない、俺のせいだ……」

「死ぬ覚悟はできてました」

青年が言うと、仲間たちがうなずいた。

「地球の乙女……救世主か……」ハンスは鉄格子を眺めながらつぶやいた。

第14章 地球の乙女

数日後、雷が鳴り響き大雨が降った。ミズホがこの惑星に来てから五カ月くらい経ち、雨は何度か降ったけれど、今日のような激しい雷雨は初めてであった。

そんなひどい天候でも、バドル神殿では、奴隷たちが増築のため、野外で大粒の雨に打たれながら働かされていた。

増築作業をしながら、二人の奴隷の男が話している。

「あの噂を知っているか？」

「噂……？」

「ものすごい大男が、テッドの市場で、特使たち五十人をやつつけてしまったんだと。その大男が、こんどはバドル様をやっつけにここへ来るんだと」

「救世主がついに来たのか！？」

「救世主かどうかは知らんが、噂は本当らしい。大男が来ることを警戒して、特使たちは全員この神殿で待機しているんだと」

二人の奴隷の話に気づき、監視をしていた特使がやってきて怒鳴った。

「お前ら！ 無駄口を叩くな！」

そして、特使は二人の奴隷を殴った。

神の間では、雷雨の中で働く奴隷たちを窓からゾルデが見おろしている。バドルは黄金の肘掛け椅子に、いつものように坐っていた。そこへ、最強の戦士といわれる男、ジゼムが威勢よく入ってきた。バドル様、いつまで待機なんですか！ この俺が行って、そいつの首をもぎ取ってきます。俺一人で充分だ！」

窓の外を見ていたゾルデが、ジゼムのほうを向いて話した。

「それもいいだろう。だが、ハンスたちの処刑が終わってからだ。わかったな、ジゼム」

「奴らの処刑はいつですか？」ジゼムが訊くと、

「来月の予定だが、早めるかもしれん」とゾルデは答えた。

「それなら早く処刑してください」

ジゼムが言うと、バドルが薄ら笑いを浮かべながら話した。

「人間は実際に死ぬより、死ぬまでの恐怖のほうが苦痛なのだ。彼らにはその苦痛を十分に味わってもらおう」

「わかりました。だが、処刑が終わったら、俺は一人でその娘を殺しに行ってきます」

そう言っただけで、神の間を出て行った。

「小娘はこの神殿に来るのでしょうか？　バドル様の予言でわかりませんか？」

ゾルデが訊くと、バドルが答えた。

「来たくてもこれないだろう。私は小娘に恐ろしい呪いをかけたのだ」

「どんな恐ろしい呪いを？」

ゾルデの問いに、バドルは目をつぶり、声を張りあげて言った。

「割れるような頭痛、呼吸ができないくらいの吐き気、焼けるような腹痛……。まさにいまこの瞬間、小娘は悶え苦しんでいるだろう」

まさにそのとき、

「おいしいわね！　このお菓子」

ミズホはネナが作って持ってきたお菓子を食べて、自宅で楽しんでいる真つ最中だった。つまり、ぜんぜん平気だった。

「こんどはね、ケーキを作ろうと思うの」ネナが言うと、

「楽しみだなあ、ネナちゃんのケーキ。ネナちゃんさ、将来ケーキ屋さんをやれば」

そうミズホが言うと、ネナはうれしくなって微笑んだ。

「ミズホちゃん。今日の夕ご飯、何が食べたいの？」

「なんでもいいわよ。ネナちゃんの料理は、みんなおいしいからね」
「いつも『なんでもいい』だね」

ネナがそう言っただけで、ミズホと二人で笑った。外が激しく光り、雷

が鳴った。

「今日はすごい雨だね」

ミスホが窓の外を見ながら言うと、ネナが話した。

「大雨の次の日は、きつといい天気になると思うわ。だから今日はミスホちゃんちでゆっくりしようよ。それに、このところ毎日原油を取りに行ってたから、たまには休まないかね」

「そうね、私の家ならどんなに騒いでも大丈夫だし。ネナちゃんちだと、病気のサラさんに迷惑かけちゃうものね」

「ママなら平気よ。食事のとき、ミスホちゃんちが来るのを楽しみにしてるくらいだから。でも、今日はミスホちゃんちでゆっくりしたいの。だって、友達の家に来るのって楽しいじゃない」

「ネナちゃん、ゆっくりしていつてね」

ミスホが言うと、ネナは笑顔でうなずき、思い出したように言った。

「ねえ、ミスホちゃん。明日お天気になったら、一緒に理髪店りはつてんに行かない？」

「理髪店？　ときどき自分で髪を切ってたけど、ちゃんと理髪店で切ってもらいたいわね。でも……そうだね、ネナちゃん。一緒に理髪店に行こう」

この星のハサミでは、自分の髪は切れないと思い、ミスホは理髪店に一度も行ってなかった。だけど、ライフポッドから持ってきた救急セットに、地球の小型ナイフやカミソリ、小さなハサミなどが入っていたから、その中の小さなハサミを持って行こうと思った。

二人が楽しく話していると、誰かが家のドアを激しくノックした。「誰か来たみたいよ」ネナが言った。

「誰だろう？　ネナちゃん以外に、私の家に来る人なんていないのに……」

そう言ってミスホは、ネナと二人で玄関へ行き、ドアを開くと、狩人のロブが大雨の中、コートのフードをかぶって立っていた。

「君がミスホさん？」

ミスホがうなずくと、ロブはつづけて言った。

「この間は、荷車を貸さないで悪かった」

「気にしないでください。あのときは漁師さんに借りることができたし、いまは私たちの荷車がありますから」

ミスホが話すと、ロブが言った。

「あの荷車は使ってなかったけど、大切な荷車だから貸せなかったんだ。本当にすまなかった、許してくれ」

「私たちこそ無理を言ってごめんなさい。でも、そんな前のことを謝りに、こんな大雨の中をわざわざ来てくれたんですか？」

そうミスホが言くと、ロブが話した。

「いや、ちがうんだ。コウサクじいさんに、ミスホさんを神殿へつれてくるように頼まれたんだ。みんなが神殿で待ってる。一緒に来てくれるかな？」

ミスホがネナの顔を見ると、ネナは首を縦に振った。

「わかりました、行きます」とミスホはロブに言った。

ミスホとネナはいったん家の中にもどり、マントを羽織って家から出てきた。そして、二人はマントのフードを頭にかぶり、雷雨の中、ロブのあとをついて行った。

この文明には傘はなく、雨が降るとコートやマントのフードをかぶる。それらの外套は防水加工が施されているので、着替えなければならぬほど濡れになることはない。

神殿へ向かう途中、ミスホは市場での一件をみんなに怒られると思ひ、不安になった。だけど、市場の被害を弁償するために、原油を売ってお金を貯めていることをみんなに話せば、きっと許してくれるだろうと考えていた。

ロブと一緒に二人が神殿に入ると、たくさんの人が集まっていた。コウサクじいさんをはじめ、バンと仲間たちや漁師の人たち、石油精製所のゴンタや氷屋のジャン、靴屋のマロンに、服屋の店員のきれいなお姉さんや水道屋、本屋のおじさんや商店街の人たち、ロブ

の相棒のムタと狩人たちや市場の人たち、知らない人たちの姿もたくさんあった。

ミズホとネナが、なんだろうと顔を見合わせると、ロブは奥にある石像が祭られた祭壇のほうへ行くように二人をうながした。みんなが左右に分かれ、祭壇までの通路をあけてくれたので、二人は彼らに注目されながらそこを通って奥の祭壇へ向かった。

祭壇まで行つて、ミズホとネナがみんなのほうを振り返ると、二人を百八十度取り囲むように彼らが集まってきた。

ミズホは怒られる前に謝ろうと、頭をさげて言った。

「ほんとにごめんなさい！ 市場で壊してしまったものは必ず弁償します」

すると、ミズホの前に立っていたコウサクじいさんが言った。

「何を言ってるのです、ミズホさん。そんなことはどうでもいいのです」

「どうでもいい？ ちがうんですか？」

ミズホが訊くと、コウサクじいさんは話した。

「市場のことではありません。ミズホさん、そろそろ本当のことを教えてください。あなたは、我々を苦しみから救いに来た救世主なのでしょ？」

「ちがいます、ちがいます！ 私は救世主なんかじゃありません！」
ミズホがあわてて否定すると、コウサクじいさんは言った。

「わかつているのです、隠さないでください。あなたは救世主です。奴隷になった者たちをバドルから救ってください」

「ちがうって！ 救世主じゃないんです。隠してなんかいいし、人を救うなんて……」

そうミズホが言うと、コウサクじいさんが訊いた。

「では、ミズホさんの神業としか思えない人間離れた力はなんなのですか？ それに、あなたは宇宙から来たそうですね？」

「私は、宇宙から来たけど……でも、みなさんを救いに来た救世主なんかじゃないです。ほんと、がっかりさせてごめんなさい。私は

ただの……」

静まり返った神殿内で、みんなはミズホの次の言葉を待った。

「……ただの、地球の乙女なんです」

ミズホの言葉を聞いた全員の顔色が変わって、コウサクじいさんが言った。

「救世主だ！」

祭壇にある棚の引き出しから、コウサクじいさんは一冊の本を出した。

「これは、大昔に記された神話を、昔の人が本として作りなおしたものです」

そう言ってコウサクじいさんは、神話の革表紙を開き、朗読しはじめた。

彼は、遙か宇宙の彼方からやってきた。

彼の姿は、人間の男性と変わらなかった。

彼の名はトオル。

彼が大地へ舞いおりるまで、人間は動物同然であった。

しかし、彼が人間を導いた。

最初に言葉を教えた。人間は話せるようになった。

次に文字を教えた。人間は文字を書けるようになった。

次に道具を与え、火や水の扱い方を教えた。

人間の生活は急速に豊かになった。

次に衣服と家を与えた。人間は家族で暮らすようになった。

次に時間を教えた。人間は年月を知るようになった。

次に様々な仕事を与え、お金の使い方を教えた。

人間は知恵を身につけ、助け合って生きるようになった。

トオル様は短期間に、秩序と文明を築きあげた。

しかし、すべてが順調ではなかった。

生活が豊かになると、罪を犯す者があらわれた。

トオル様が罪深き者にふれると、奇跡の力で彼らは空高く突き飛ば

された。

トオル様は言った。

私は宇宙の彼方から来た。私はあなた方の神になる。神である私に逆らってはならない。

私の言葉を信じれば、あなた方は救われる。あなた方は幸福に生きられる。

あなた方の心は、まだ純粹である。

心を汚してはならない。人を欺あざむいてはならない。

人のものを盗んではならない。人を恨んではならない。

人を憎んではならない。人を嫉妬しつとしてはならない。

人を殺してはならない。

極端な欲望と怒りが苦しみを産み、人を罪へと駆かり立てる。

あなた方の敵は、欲望と怒りだと知りなさい。

自然の恵みによつて、生かされていることを感謝し、祈りなさい。

私の言葉を守れば、あなた方の幸せは保証される。

なぜなら、私がこの世界を創造した神だからだ。

我々は神の奇跡を確かに見た。

神は巨大な岩を軽々と持ちあげ、投げ飛ばすことができ、

また砕くだくこともできた。

刃物は神を切り裂くことはできず、火も神を焼くことができなかった。

神は無敵であつた。

巨大な恐ろしき怪物を、神は簡単に倒してしまった。

さらに、神は怪物を手なずけることもできた。

我々は神の奇跡に守られ、平和で幸せに生きることができた。

神は教えてくれた。生きているものはやがて死ぬ。

しかし、魂は永遠であると。

神もやがて年を取り、死ぬときが訪れた。

神の亡骸なきがらは、燃やして灰にすることができず、深い海の底へ沈めた。それが神の希望でもあつた。

神が亡くなる間際、我々に残した最後の言葉は、

『地球の乙女に逢いたい』であった。

我々はその意味を考えた。

そして、知恵ある者が解明し、神の予言であるとわかった。

『地球の乙女』とは、新たにやってくる救世主である。

欲望によって悪がはびこり、秩序と平和がおびやかされるとき、人々よ祈りなさい。

救世主、地球の乙女は、我々を救いに必ずやってくる。

およそ千年前、日本人の安堂トオルという宇宙飛行士が、オリオン大星雲で行方不明になった話を、高瀬宇宙科学庁長官の授業で聞いて、ミスホはうつすらとおぼえていた。過去に、この星に地球の日本人が来たことがある。そして、文明を築いていったのだ。地球人なら、ここでは神的存在になれただろう。

なぜ、この惑星の人々が日本語を話すのかなど、ミスホは多くを知ることができた。しかし、老人になったトオルが、臨終に残した言葉、『地球の乙女に逢いたい』は、神を演じるのに疲れたトオルが、地球へ帰りたいと思いと、スケベ心で言った言葉だとは、ミスホはさすがに気づかなかった。

雷雨はすぎ去り、天窓から優しく光がさし込んできて、神殿内が明るくなった。コウサクじいさんは朗読を終わり、本を閉じて言った。

「やはり、あなたは地球の乙女ですね？」

「そうですけど」

ミスホが言いかけると、コウサクじいさんが言った。

「救世主なのですね！」

「いいえ、ちがいます。地球の乙女ですけど、救世主なんかじゃありません」

ミスホが否定すると、コウサクじいさんは神話の本をもう一度開いて言った。

「しかし、地球の乙女とは、救世主のことですよ。ほら、ここに書いてある」

「それは、その……、だから……」

ミズホが口ごもっていると、靴屋のマロンが、コウサクじいさんの肩に手をかけ、話しはじめた。

「もうあきらめな、コウサクじいさん。ミズホさん、いや、救世主様は、俺たちを確かに救いにやってきた。だが、俺たちを観察してみて、『こんな連中なんか助けるのは、まっぴらごめんだわ！』こんな奴らは、もがいて、もがいて、もっともっと苦しんで、うんと苦しんで、苦しみながら死んでいつて、いい気味だわ！』と、思ったんだよ」

「そんなこと思うはずないでしょ！」ミズホが大声で言うと、

「では、奴隷になった者たちを助けてくれるのですね！ 私たちをバドルの支配から救ってくれるのですね！」とコウサクじいさんが言った。

ミズホはうなずくしかなかった。

「おお、神を信じてよかった！ 私はまちがっていなかったのです！ 夢ではないのです。本当に救世主が救いに来てくれました！」

コウサクじいさんが涙を浮かべ、心からよろこぶと、漁師のバンが言った。

「よし、船は俺たちが出す。俺たちがブールのバドル神殿まで案内する。で、いつ行くんだ？ 明日か？」

「明日はダメです」ミズホはすぐに答えた。

「ミズホさんは、心の準備が必要なのですよ」コウサクじいさんが言うと、

「明日はネナちゃんと一緒に、理髪店に行く約束をしたんです」とミズホが言った。

それを聞いて、ネナが微笑んだ。そして、コウサクじいさんが感心して言った。

「小さな約束でもしっかり守るとは、さすが救世主様です。私たち

を救ってくれる約束も、必ず守ってくれるでしょう」

「それならいつ行く？ ミズホちゃんが決めてくれ。俺たちはいつでもいいぞ」

バンがそう言うと、ミズホは答えた。

「あさつて、あさつて行きます。奴隷になった人たちを助けに行きます」

ミズホの言葉を確認したコウサクじいさんは、神殿内のみんなへ向かって大きな声で言った。

「みなさん、聞きましたか！ やはりそうです。彼女は、私たちがずっと待ち望んでいた救世主、地球の乙女です！」

全員が床にひざまずき、ミズホに向かって両手を合わせた。ミズホは困った顔をして、戸惑ってしまった。

第15章 ブールへ出港

理髪店の太り気味で大柄なヘレナおばさんと、すらりとした嫁のエリは、ネナが救世主をつれて髪を切りに来ると聞いて、昨日から楽しみに待っていた。

「ヘレナおばさん、こんにちは」

そうネナが言いながら、ミズホと一緒に店の中に入ってきた。

「待ってたよ、ネナちゃん。それに……」ヘレナおばさんはミズホの顔を見て、つづけて言った。「救世主様」

「あの、ミズホでいいです。ミズホって呼んでください。救世主だなんて……」

「それじゃあ、ミズホさん。ここに坐って」

ミズホは、羽織っていたフードつきマントを脱いで棚に置き、ヘレナおばさんの前にある椅子へ坐った。

「ネナちゃんはこっちょ」エリが言った。

「うん、エリさん」

ネナもフードつきマントを脱いで棚に置き、エリの前にある椅子へ坐った。

この理髪店には、ヘレナおばさんと嫁のエリしかない。だから、髪を切るために客が坐る椅子も二つしかなかった。その木製の椅子は、普通の椅子よりもがっしりしていて、鏡に向かって二つならんでいる。

「ミズホさん、どんなふうに髪を切るの？」ヘレナおばさんは、切った髪の毛が服につかないようにするための布をミズホに巻きつけながら訊いた。

「このままそろえるような感じで、普通に切ってください。ハサミを持ってきましたから、これ使ってください」ミズホは、救急セットから持ってきた小さな地球のハサミを、ヘレナおばさんにさし出した。

「あら、ハサミなんか持ってたなくてもいいのよ。ここにちゃんとハサミがあるから」

そう言ってヘレナおばさんは、笑いながら理髪店のハサミを出した。エリが二人の会話を聞いて、微笑んで言った。

「救世主さんは、私たちの文化をあまり知らないみたいね」

「エリさん。私はいつものように切ってね」ネナが言うと、

「はい、はい、わかってるわ」とエリが、布をネナに巻きつけながら言った。

笑顔でミズホの髪の毛を切ろうとしたヘレナおばさんの顔が、突然真剣な表情に変わった。どうしても彼女の髪が切れないのだ。

「おかしいわね……、どうしてかしら……」

ヘレナおばさんがむきになってミズホの髪を切ろうとし、ハサミを壊してしまった。その様子を隣で見ていたエリが驚いている。

ミズホの髪を眺めながら、ヘレナおばさんがつぶやくように言った。

「こんなにさらさらの髪なのに、どうして切れないの……？」

「こつちで切ってみてください」

ミズホが持ってきた小さなハサミをヘレナおばさんは受け取り、それを使って髪を切ってみた。すると、彼女の髪は普通に切ることができた。

「あら、不思議ね……」

「こんどからここに来るときは、このハサミを持ってきます」

ミズホが言うと、隣で髪を切ってもらっていたネナが話した。

「ヘレナおばさん。ミズホちゃんね、ナイフや剣でも切ることができるのよ。神話の神様と同じなんだから。そのハサミはきっと神様の道具なのよ。ね、そうでしょ？ ミズホちゃん」

「それは地球のハサミよ」とミズホは教えた。

「ミズホさん。明日、バドル神殿へ奴隷を助けに行ってくれるのよね？」

ヘレナおばさんが訊くと、ミズホがうなずいた。彼女はつぶけて

話した。

「私の主人と息子が奴隷にされてしまったの。エリさんは息子の嫁なの。バドル様の奴隷になってしまった人は、二度と帰ってこないのに、エリさんは再婚もしないでこの理髪店を手伝ってくれてるの。主人と息子が奴隷にされてから、もう三年くらい経ってしまっただわ。ミズホさん、本当に奴隷になった人たちを助けることができるの？ そんな奇跡的なこと、本当にできるの？」

「ヘレナおばさん、ミズホちゃんなら大丈夫よ。きっとみんなを助けてくれるわ」

そうネナが言うと、エリが望みを託すように言った。

「お母さん、ミズホさんを信じましょう」

二人が理髪店を出て、ハービーからルーシーへ帰る途中、たくさんの人たちがミズホに声をかけてきた。

「救世主様、娘を助けてください」とおじさんが言ってきたり、
「お父さんをつれもどしてきて、救世主さん」と少年が言ってきたり、

「神の力を信じています」と女性が言ってきたり、

「あの人が地球の乙女、救世主よ」と言って遠くから指さし、親が子供に教えている姿も多く見られた。

ミズホはみんなの期待に笑顔で応えていたが、だんだん不安にもなってきた。

「有名人になっちゃったね、ミズホちゃん」ネナが言った。

「でも、どうしよう……」ミズホの表情が曇った。

「何が『どうしよう』なの？」ネナが訊くと、

「もし、奴隷になった人たちを助けてあげることができなかつたら、みんな怒るかな？」

ミズホが不安を話すと、ネナが言った。

「そんなことないと思うわ。それに、ミズホちゃんなら誰にも負けないわよ。もっと自信を持ったほうがいいわ」

「もしもだよ。奴隷になった人たちを助けることができなくても、ネナちゃんはずっと私のお友達でいてくれる?」

ミスホが訊くと、ネナは微笑んで言った。

「あたりまえよ! ミズホちゃんが救世主でも、そうじゃなくても、私たちはずっとお友達だよ!」

ミスホは一人でも友達がいれば、あとは何があってもいいと思うことができ、自信を取りもどした。

その日の夕食は、ネナがミスホのために、いつもより豪華な食事を作った。肉料理や魚料理、スープやサラダ、デザートも数種類テーブルに載っていた。

「ちよつと作りすぎじゃない?」ミスホが言うと、

「いいの、いいの、今日は特別よ」とネナが楽しそうに言った。

「ミスホちゃんが来てから、ネナちゃんは本当に明るくなったわね」サラがうれしそうに言った。

「さあ、早く食べよう」ネナが言うと、

「うん、いただきます」とミスホが言った。

二人は夕食を食べはじめたが、サラは食事に手をつけなかった。

「ママ、どうして食べないの? 身体の具合が悪いの?」

ネナが訊くと、サラは首を横に振り、心配そうに話した。

「ミスホちゃん、本当に明日、バドル神殿へ行くの? 無理しないでいいのよ。行きたくないのに、みんなのために行こうとしてるんじゃないのかしら?」

「大丈夫です。心配しないで、サラさん。私、もう覚悟を決めましたから」

「ママ、私も明日プールへ行くわ。ミスホちゃんが無理しないように見張ってる。いいでしょ?」

ネナの言葉にサラは微笑んでうなずき、三人は食事のつづきを楽しんだ。

テッドの港には、早朝から奴隷になった人々の家族や身内などが

大勢集まって、救世主の出港を見送りに来ていた。

バドルの奴隷になっているのは約一万人で、そのうちハービー、ルーシー、テッドの町からは、およそ五千人が奴隷になっている。あとの五千人は、ブルの町で奴隷になった人々である。

バンの中型帆船に乗ってブルへ向かうのは、ミズホとネナのほかに、船長のバンとその仲間たちである。

バンの仲間は五人の男で、リド以外に、つるつる頭で髪の毛が一本もない優しそうな四十代のケビンが副船長、口髭を生やして長髪をひつつめた三十代のオスターが操舵手^{そつたしゅ}、癖毛で仲間のうちでは一番背が低い二十代の青年マックと短髪で長身の二十代の青年ウッドは、リドと同じ乗組員である。

バンの仲間たちは、すでに中型帆船に乗船している。ミズホとネナ、そしてバンは、棧橋でコウサクじいさんや見送りに来た人たちに囲まれ、話しをしていた。

ミズホはフードつきマントの下に、日比谷中学の学生服を着てきた。靴下や靴も地球のものを身につけてきた。それは、この文明の服だと、闘っている最中に長剣などの刃物でぼろぼろにされ、裸になってしまうのではないかという、くだらない理由からだった。

バンがほかの漁師仲間と言った。

「奴隷になったみんなを助けたら、貨物船の連中に頼んで乗せてきてもらう。だから、全部の棧橋の片側を空けておいてくれ」

漁師たちはわかったと言って、うなずいていた。三箇所ある棧橋はかなり長く、一箇所の棧橋の片側に、大型帆船は縦にならべて二隻接岸することができる。つまり、全部の棧橋の片側を空ければ、六隻の大型帆船が接岸できる。

ネナがコウサクじいさんに謝った。

「コウサクじいさんの話を信じないで、冷たくしちゃって、本当にごめんなさい」

「ネナちゃんは何も悪くないよ。ネナちゃんにつらい思いをさせたのは、私だからね」

コウサクじいさんが優しく言うと、ネナは笑顔で言った。

「そんなことないわ、悪いのは私。パパは、コウサクじいさんを最後まで信じてよかったって、きっと思ってるわ」

「ネナちゃんのパパの代わりに、ネナちゃん自身が、救世主の神業をしつかりと見てくるんだよ。いいね」そう言ってコウサクじいさんは、ネナの頭を撫でた。

「さあ、行こうか！」バンが言うと、

「コウサクおじいさん、行ってきます」とミズホが言った。

「私たちは、ミズホさんたちと奴隷になったみんなが帰ってくるのを、この港で待ってます」

コウサクじいさんがそう言って、周りにいた人たちがうなずいた。その中には、理髪店のヘレナおばさんやエリ、靴屋のマロンたちの顔もあつた。

ミズホたちが乗船し、ウッドとリドがタラップをあげた。

「それでは救世主さん、出港していいかな？」甲板の上でバンが訊いた。

「はい、出港してください」ミズホは覚悟を決めて静かに答えた。

そして、バンが仲間たちへ向かって叫んだ。

「よし！ ブールへ向かって出港だ！」

バンの中型帆船ちゅうがたはんせんは、三本マストの帆ほをなびかせ、コバルト・ブルの海を優雅に航海していた。ブルの港までは約四時間かかる。向こうへ着くのは午前九時半ごろだ。

ミズホとネナは、初めて乗る帆船に興奮気味で、いろいろ見て回った。甲板より下の船内は二階造りになっていて、中型帆船といつてもかなり大きくて広い。木製の二段ベッドが五組あり、十人が寝られる大きな寝室が一部屋に、ベッドが一つある個室が五部屋あつた。そして、居間や食堂に、台所、風呂、トイレもあり、魚を捕るための道具や捕った魚を入れておく箱などが入っている倉庫のような場所も数部屋あつた。

船内にあきた二人は、甲板へ出て海を眺めることにした。甲板は二段になっていて、後部が一段高くなっている。中央より後ろ側に操舵室そうたしつがあり、屋根が後部甲板とつながっていた。操舵室ではオスターかしが舵を取っていて、バンとケビンが無言で窓の外を眺めている。後部甲板にはウッドがいて、最船尾に吊してある十人乗りの救命ボートを点検していた。船首にはリドがいて、木製の浮き輪に坐り込み、前方を眺めている。三本の帆柱ほしじのうち、中央の帆柱には見張りみはり台があり、そこでマツクが海上を見渡していた。

甲板の上は清々すがしい潮風が気持ちよく吹きつけ、ミズホはとてもわくわくしてきた。彼女が空を見あげると、青い空には子供が描いたような真つ白な雲がいくつも浮いていて、帆船の周りには、首が二つあるカモメのような白い鳥が、ときどき鳴きながらたくさん飛び回っていた。

「何、あの鳥？ 頭が二つあるわよ！」ミズホが言うと、

「あの鳥はウミナだよ」とネナが教えた。

帆柱にも変わった鳥がいっぱいまとっていた。ミズホはその鳥を指さして言った。

「あの鳥も不思議な鳥ね」

「あれは鳥じゃないわ。魚だよ」

ネナに言われて、ミズホがよく見てみると、背中に翼があつて、エラのところから鳥のような細い脚が二本出ているが、確かに魚だった。

「なんていう魚なの？」

ミズホが訊くと、ネナが話した。

「トッコっていう魚よ。お刺身さしみにして食べるとおいしんだけど、新鮮な生きたトッコは飛んでいっちゃうから、市場ではなかなか売ってないの」

「トッコのお刺身が食べたいときは、どうするの？」ミズホが訊くと、

「市場のおじさんに注文しておくか、自分で捕るしかないわね」と

ネナが言った。

そのとき、トッコが帆柱から飛んできて、二人の目の前の手すりにとまった。ミズホが捕まえようとして、そっと手を出すと、魚は飛んで逃げてしまった。

「あつ、どこ行った！」ミズホが言うと、

「頭、頭！ ミズホちゃん、頭に魚がとまってるわよ！」とネナがミズホの頭を指さしながら言った。

ミズホが自分の頭に手をやると、魚はまた飛んでいき、海の中へ入ってしまった。

「ああ、残念でした」

ネナがそう言って、二人は甲板から海を見おろした。

「見て見て、ミズホちゃん。エアルの大群がいるわ！」ネナがうれしそうな声で言った。

エメラルドグリーンの身体に頬がピンク色のイルカに似た哺乳類の群れが、ときどきジャンプをしながら帆船のすぐ横を楽しそうに泳いでいる。

「かわいいわね、船についてくるわ」

ミズホがエアルを眺めながら言うと、バンが操舵室から出てきて言った。

「おお、エアルの群れか。あいつらは頭のいい動物なんだ。ミズホちゃんが救世主だとわかってて、ついてくるのかもな」

「きつとそうだよ」ネナが微笑んで言った。

「バンさん、プールにつれて行ってくれて、ありがとうございます」

ミズホが感謝すると、バンが話した。

「俺たちは、少しでも救世主さんの役に立ちたいんだ。実は、この船の連中も、バドルのせいであんなに思いをしてるんだ。マックとウツドは両親を殺されたし、リドも両親を殺され、リドの兄のランドは奴隷にされてしまった。オスターは恋人が殺されて、俺とケビンは妻を殺されたんだ……」

ミズホとネナが無言で顔を見合わせると、バンはつづけて話した。

「殺されたり、奴隷になるのが嫌で、バドルを信じるふりをし、特使たちの機嫌を取って、こうやって生きている俺たちは、ずる賢い人間なんだと思う……」

「だって、しょうがないでしょ。パパみたいに死んじやったら終わりだもん」

ネナが言うと、バンは沖を見てつぶやくように言った。

「死んじやったら終わりか……。だが、ずる賢く生きるくらいなら、死んだほうがましなような気もするが……」

帆柱の見張り台で海を見渡していたマックが、何かを見つけて大声で言った。

「バンさん！ 真下にシランがいます！」

ミズホたちが甲板から船の真下をのぞき込むと、巨大な黒い影があった。

「オスター！ 進路をそらせーっ！」バンが操舵室へ向かって叫んだ。

バンに命令され、オスターが進路をそらしたとき、帆船の真横から体長三十メートルはある紺色のクジラのような生物が浮上してきた。

「すごい、すごい！ でつかいわ！」ミズホが楽しそうに言った。

「ほんとすごいわ！ シランなんて、初めて見たわ」ネナもよろこんで言った。

シランは大きな目玉でミズホたちをぎょろつと見て、帆船から離れていった。

「シランも救世主に逢いに来たのかもな」とバンが言って微笑んだ。唐突に見張り台からマックが叫んだ。

「シランがジャンプするぞ！ みんな、どこかにつかまって！」

ミズホとネナが手すりにつかまり、ほかのみんなも自分の近くにあった帆柱の縄や手すりなど、つかめる場所につかまった。

シランの巨大な身体が海面から垂直に勢いよく飛び出し、半回転して背中から海の中へ倒れ込んだ。舞いあがったしぶきは霧状に

なり、はつきりとした虹を一瞬浮きあがらせ、海面は大きくうねり、帆船をぐらぐらと揺らした。

その状況が意味もなく楽しくて、みんなで大笑いした。

「楽しくて、わくわくするね!」

ミズホがはしやぎながら言つと、ネナが忠告した。

「でもミズホちゃん、遊びに行くんじゃないからね。みんなを助けに行くのよ。忘れないでね」

「わかってるつて!」

ミズホはそう答えたが、本当は忘れる寸前であつた。

第16章 闘うしかない

プールの港はテッドの港の十倍以上はあり、数十箇所もある栈橋に様々な大きさの帆船が数百隻接岸している。バンの中型帆船がプールの港へ近づいていくと、海沿いにあるバドル神殿は帆船の上からすでに確認できた。

「あれがバドル神殿だ」甲板からバンが指をさして言った。予想以上に巨大なバドル神殿を見て、ミスホは息を呑んだ。

バンの帆船を栈橋に接岸させ、タラップをおろし、ミスホたちがおりると、一人の青年がやってきて声をかけた。

「あなたたちは、プールの人じゃないですね。何しにここへ来たんですか？」

「バドルをやっつけに来たんだ！」

バンが答えると、青年が話した。

「噂は本当だったんですね。でも、救世主気取りはやめたほうがいいです。貨物船の船長のハンスさんも、仲間と一緒にバドル様を暗殺しようと計画したんですけど、全員捕まって、地下牢に入れられてしまったんです。そのうち処刑されるそうですよ」

「それで？」

バンが言つと、青年はむきになって言った。

「『それで？』じゃないですよ！ 特使たちは全員バドル神殿に待機しているんですよ。たった八人で勝てるはずないでしょう！」

「八人じゃないわ。私が一人で闘うのよ」ミスホが言った。

「だってさ」バンが言った。

青年は啞然^{あぜん}となり、言葉を失った。

港からバドル神殿までは。それほど遠くない。だから、歩いてもそんなに時間はかからなかった。ミスホたちが丘の上までくると、そこをくだったところに、バドル神殿とつながった広大な増築現場

があり、大勢の奴隷たちが働かされているのが見えた。

その増築現場は、あまりに大きすぎて、いったいどんな建物を造ろうとしているのか見当もつかない。あちこちに石材や木材などがたくさん積みまれ、建物の土台となる一階部分をまだ建設しているようだ。場所によっては二階部分も石柱の上に造っていて、中途半端に途切れた大きいバルコニーのような感じで、バドル神殿の二階部分とつながっているとところもあった。

広大な増設現場の様子をしばらく眺めてから、バンがミズホに訊いた。

「さて、どうする？」

「バンさんたちは、奴隷の人たちを、この丘につれてきてください」「で、そのあとは？」バンがつづけて訊くと、

「ここで見てください。あとは、私がどうにかします」とミズホが言った。

「無理しないでね、ミズホちゃん」ネナが言うと、
「大丈夫、心配しないで」とミズホは答え、つづけて、「行きましよう！」と真剣な表情で言った。

ミズホが増築現場へ向かって丘をくだり出すと、みんなも彼女のあとについて行った。

二人でやっと運べるくらいの大サイズの石材を、たくさんの奴隷たちが列になって運んでいるところにミズホたちはやってきた。

バンが奴隷たちへ向かって叫んだ。

「みんなーっ！ 助けに来たぞーっ！ 作業をやめて、あの丘まで走って行けーっ！」

奴隷たちは、石材をその場におろし、バンの声が聞こえた範囲内のほかの奴隷たちも仕事を中断し、ミズホたちの周りに集まってきた。

男の奴隷がバンの前に来て言った。

「おお、あなたが、あなたが噂の救世主なんですか！」

「俺じゃない、この子だ」

バンがミズホの頭に手をやって紹介すると、周りにいた奴隷たちは、とても落ち込んでしまった。

「私はミズホです！ みんなを助けにきました。私を信じて、あそこ丘まで行ってください！」

丘を指さしながらミズホが言うと、奴隷の青年が叫ぶように言った。

「信じる、僕は信じるよ！」

彼が丘へ走っていくと、ほかの奴隷たちもいつせいに丘へ向かって走り出した。

ミズホたち八人は散りぢりになって、できるだけ多くの奴隷たちに、丘へ逃げるようにと声をかけた。広大な増築現場で、すべての奴隷たちに声をかけるのは無理だったが、奴隷たち同士で伝えあったり、丘へ集まっていく奴隷仲間を見て気づいたりして、およそ一万人の奴隷たちが作業を放り出し、丘へ向かって走り出した。

監視をしていた特使たちが、丘へ走っていく奴隷たちに怒鳴った。「仕事にもどれーっ！ もどらないと処刑するぞーっ！」

しかし、監視をしていた特使たちは、突然のできごとに対処し切れず、奴隷たちの行動を止めることはできなかった。

バドル神殿の一階にあるたくさんの出入り口の一つから、特使のガル、ベイ、ゲン、レスの四人が増築現場へ出てきた。

「なんだ？ 騒がしいな……」

ガルがそう言うのと、ベイが指をさし、あせつたような声で言った。「おい、見る！ あの小娘だ！」

彼らは、ミズホとネナが奴隷たちに声をかけ、丘へ誘導しているところを見つけた。

「ついに来てしまったか……」つぶやくようにゲンが言った。

「大至急、待機しているジゼムさんたちに連絡しようぜ！」

そうレスが言って、四人はバドル神殿の中へ走っていった。奴隷たちを監視していた特使たちも、待機している仲間たちに状況を知

らせるため、巨大なバドル神殿内へ入っていった。

リドが奴隷たちに大声で言った。

「早くーっ！ 早く丘へ逃げてーっ！」

すると、奴隷になっていた兄のランドが、リドに気づいて走ってきた。

「リドーっ！ リド、リドじゃないか！」

「兄さん！ ランド兄さん！ 元気そうでよかった！」リドが半泣きで言う。

「救世主が助けに来たって本当か？」とランドが訊いた。

「ほんとだよ、ランド兄さん」リドが答えると、

「地下牢にも奴隷になった人たちがいる。その人たちも助けないと」
とランドが言った。

「わかった、あとで一緒に行こう。いまはとにかく、奴隷のみんなが集まっているあの丘へ行つて」

そうリドが言うと、ランドはうなずき、ほかの奴隷たちへ向かって叫んだ。

「救世主だ！ 救世主が助けに来たぞ！ みんな、丘へ行こう」

そしてランドは、大勢の奴隷たちと一緒に丘へ向かって走つていった。

バドル神殿の神の間では、黄金の肘掛け椅子に坐っているバドルに、ゾルデが話しかけていた。

「バドル様、ハンスたちの公開処刑が終わったら、奴隷の数を増やしたいのですが」

「私も、そろそろ死の予言を行おうと思つていたところだ」

「お願いします」

「ハンスたちの処刑だが、神である私を殺そうと企んだ愚かな連中だ。いいなゾルデ、残酷な処刑を期待しているぞ」

「お任せください、バドル様」

そうゾルデは答え、彼は窓際へ行つて増築現場を見おろした。

「ん……？ 様子がおかしい！？」

驚いた口調でゾルデが言うと、バドルは黄金の肘掛け椅子から立ちあがり、窓際にやってきて、外の様子を見おろした。すると、大勢の奴隷たちが増築現場を離れていき、丘の上へ大移動しているではないか！

「もしかすると、噂の小娘が……」

ゾルデが不安そうにつぶやくと、バドルが言った。

「心配するなゾルデ。この神殿には、三万人の特使たちが待機しているんだぞ。私たちも下へ行って、ジゼムがその小娘の首を切り落として殺すのを見ようではないか」

「それなら、増築現場の造りかけの二階が、いい見物席になります」ゾルデの案にバドルはよろこび、二人は神の間を出て、二階へおりていった。

地下牢に特使の青年がやってきて、看守の特使たちへ呼びかけた。「たいへんだ！ 噂の小娘が来たぞ！ 早く増築現場へ向かってくれ！」

特使の青年と看守の特使たちは、あわただしく地下牢を出て行った。

牢屋でその会話を聞いていたハンスは、仲間たちと顔を見合わせ、つぶやいた。

「地球の乙女……まさかな……」

ミズホ以外のバンたち七人とおよそ一万人の奴隷たちは、全員丘の上に移動し、広大な増築現場の中央に一人でぼつんと立っているミズホを眺めていた。

ミズホは闘う気はなかったが、もし話し合ってもダメなら闘うしかないと思い、誰かが出てくるのを待っていた。

しばらくすると、バドル神殿の一階にあるすべての出入り口から、最強の戦士のジゼムを先頭に、長剣で武装した男女の特使たちが、次から次へそろそろと、どんどん出てきて、ミズホを取り囲んだ。そして、バドル神殿とつながっている造りかけの二階部分には、弓

矢で武装した千人くらいの男女の特使たちが出てきて、その中央にバドルとゾルデが偉そうにあらわれた。

気がつくときゃしゃで小柄なミスホは広大な増築現場の中央で、およそ三万人の特使たちにすっかり囲まれてしまった。丘の上で眺めていた大勢の奴隷たちは、絶望的な光景に不安を隠せなかった。

リドの肩に手をかけ、兄のランドが言った。

「どんなにすごい奇跡が起こっても、勝てるとは思えない……」

リドは何も答えられず、バン、ケビン、オスター、ウッド、マツク、ネナたちも、希望が持てる言葉を話せなかった。

ほかの特使よりも派手な服装で、長剣を右肩に担いでいるジゼムが正面にいた。ミスホは彼に向かって大声で言った。

「あなたがバドル様ですか？ 話し合いで解決しましょう！」

「俺はバドル様じゃねえ！ 最強の戦士、ジゼムだ！ バドル様はあそこだ！」

そうジゼムは言っ、造りかけの二階部分の中央で悪趣味な柄のロープを羽織り偉そうに立っているバドルを指さし、ミスホに教えた。ジゼムがつづけて話した。

「神の生まれ変わりであるバドル様に、お前のような愚かな人間が話しかける資格はない。お前にバドル様の予言を伝える。今日、この場所で、お前は死ぬ！」

ミスホが、巨大なバルコニーのようになっている造りかけの二階部分を見あげると、バドルが偉そうに見おろしていた。ミスホは覚悟を決め、つぶやくように言った。

「闘うしかないのね」

そして、彼女はフードつきマントを脱ぎ、かっこよく頭上へ投げた。が、フードつきマントは落ちてきて、彼女の頭にかぶさってしまった。

「うわっ！ 真っ暗！」

ミスホは驚いて、フードつきマントを頭から取りのけ、足もとにちょこんと置いた。その不思議な怪しい行動を目撃していた最強の

戦士ジゼムは、呆れて開いた口がふさがらない状態になった。

ジゼムの隣にいたサツキが、警戒して言った。

「ゆ、油断しないで、何かの戦術かもしれない。それに、あのおかしな服装、普通じゃないわ」

唐突にミズホが、ちつとも強そうじゃない変な攻撃姿勢をとって叫んだ。

「やつつけちゃうよー！」

笑いを極限までこらえていたジゼムであつたが、ついに吹き出した。

「ぶあーっはははははっ！　ぶあは、ぶあは、ぶあーっははははははーっ」ジゼムはミズホを指さし、「ぐあーっははははははーっ！　はあ、はあ、がーっははははははーっ！　あー苦しい、ふー苦しい、ひー苦しい！」おなかが痛くなるほど大笑いしてしまい、たぶんいままでの人生で一番笑い、一生分笑つたかもしれない。

何がおもしろいのかわからなかったミズホは、自分の学生服にゴミがついてないか調べてみたり、うんちを踏んでないか靴の裏を調べてみたりしたが、大丈夫そうだった。

苦しいほどの笑いを引きずりながら、ジゼムはミズホの目の前でゆっくりと歩いてきて、彼女の背の高さまで自分の顔を近づけ、バカにしたような口調で言った。

「救世主ちゃん。俺を倒せるものなら、倒してみな！」

ミズホがジゼムの顔面に、気合いを込めてへなちょこパンチをしますと、彼はものすごい勢いでぶっ飛んでいき、後ろにいた大勢の特使たちをなぎ倒した。　なぎ倒された一部の特使たちは空中へ舞いあがり、造りかけの二階部分にいたバドルとゾルデの目の前まで飛びあがってきた。バドルとゾルデの顔が蒼白そうはくになった。

「ひるむなーっ！　叩きのめせーっ」

サツキが叫び、ミズホに向かって走っていき、長剣を彼女の左肩へ振りおろした！　ミズホはサツキの腕をつかみ、自分の頭上で彼女をグルグルブンブン振り回し、向かってくる大勢の特使たちへ投

げつけた！ サツキは人間弾丸となつてぶっ飛び、特使たちの群れに突っ込み、百人以上をなぎ倒した。

次々と飛びかかってくる特使たちに、ミスホがへなちよこパンチやへなちよこキックを入れると、彼らはぶっ飛んでいき、ほかの仲間たちへ突っ込み、次から次へとなぎ倒されていった。

丘の上から眺めていたバンたちや奴隷たちは、大勢の人間たちが木の葉のように舞いあがり、どんどんなぎ倒されていくとてつもない光景を見て驚愕している。

造りかけの二階部分で、その信じられない光景を目撃したゾルデは、恐怖で震えているバドルに向かって言った。

「か、神様ごっこは終わりだ。どうやらまちがいない。神話に予言された、ほ、本物の救世主が来てしまった……」

ミスホは、高さ五メートル、直径一メートルぐらいの巨大な石柱を引っっこ抜き、バツトのように振り回し、数百人の特使たちをまとめてぶっ飛ばしはじめた。

「ゆ、弓矢だ！ 矢を放てーっ！」バドルが震える声で叫ぶように命令した。

弓矢で武装した千人の特使たちが、二階からミスホに向かっていっせいに矢を放った。ほとんどの矢はミスホに命中したが、彼女はぜんぜん平気だった。

ミスホは巨大な石柱を持ったまま、自分を軸にグルングルン回転し、造りかけの二階部分へ向かって、その巨大な石柱を投げつけた。しかし、巨大な石柱は大きく的はずれ、回転しながら空高く飛んでいき、バドル神殿の最上階へ直撃し、爆発したように吹き飛ばした！

プールの町中からでも、バドル神殿の最上階部分全体が吹き飛ばす様子を確認できた。その瞬間を目撃した町の人々は驚き、噂の救世主が来たのかもしれないと期待した。

ミスホは巨大な石柱をもう一本引っっこ抜き、さっきと同じように回転し、もう一度造りかけの二階へ向かって投げ飛ばした。

巨大な石柱は、また回転しながら飛んでいき、二階部分を支えていた石柱へ激突して砕け散り、バドルとゾルデ、それと弓矢で武装したおよそ千人の特使たちは、二階部分もろとも崩れ落ちた！

神と信じたバドルの負けを確認し、残り数百人の特使たちはミズホから逃げはじめた。

「待ちなさい！」

ミズホは叫びながら数百人の特使たちを追ったが、彼らのほうが足が速かった。特使たちは、増築現場で円を描くように逃げたため、ミズホの後ろのほうにやってきてしまった。見た目では、数百人の特使たちがミズホを追っているように見える。

突然ミズホが立ち止まり、振り返ったので、先頭を走っていたガルたちはあわてて止まったが、後ろから押されて彼女の目の前まで来てしまった。

ガル、ベイ、ゲン、レスや、先頭にいたほかの特使たちが引きつって笑うと、ミズホはうれしそうに微笑み返した。ガルが握手を求め、ミズホに手をさし出した。すると、ミズホはガルの手を握り、彼を自分の頭上でグルグル振り回しはじめた。

「助けてくれーっ！」

ガルは泣き叫んだが、ミズホは容赦なく彼をヘリコプターの翼のように高回転で振り回した。いつせいに逃げ出した特使たちへ、ミズホはガルをぶん投げた！ガルは逃げていく特使たちへ突っ込み、残りの数百人をなぎ倒した！

ミズホはたった一人で、およそ三万人を叩きのめしてしまった！
！丘の上で眺めていたバンたちや奴隷たちは、放心状態になってしまった。

沈黙のあと、ランドが言った。

「そ、そうだ。地下牢のみんなを……」

「あ、ああ、行こう……」リドが答えた。

ミズホはゆっくりと歩き、血まみれで苦しんでいるバドルを見つ
け、話しかけた。

「同じ人間のくせに、人を見くだして、威張り腐いばくさっていると、最後は神様から見放されてしまうんだと思うわ」

「ゆ、許してください、救世主様。本当に神様がいるとは思わなかったから、つい……」

バドルが苦しそうに言うと、ミズホは言った。

「私は救世主でもなければ、神様でもないわ」

「で、では、あなた様はいつたい誰なのですか？ ふ、普通の人間に、こ、このようなことができるとは思えませんが……」バドルが声をふり絞しぼって訊くと、

「私はミズホ、地球の乙女よ」とミズホは答えた。

地下牢に、リドと兄のランド、そしてマツクの三人がやってきた。鍵のある場所は知っている」

そうランドが言い、錠じょう前まへの鍵を看守の棚から取り出してきて、リドとマツクに配くばった。三人はすべての牢屋の鉄格子を手分けして開き、監禁されていたハンスたちや奴隷たちを助け出した。

「どういうことだ？ 本当に奇跡が……？」

ハンスが言うと、ランドが話した。

「地球の乙女が助けに来て、バドルの時代は終わった。みんな自由になったんだ」

地下牢から外の増築現場にあがってきたハンスたちは、およそ三万人の特使たちがくたばっている壮絶な現場を見て驚愕した。変わった服装の少女が、増築現場にうろちよろしていたので、彼女が地球の乙女だとハンスはすぐにわかった。

「あの子が、たった一人で？」

そうハンスが訊くと、リドたちがうなずいた。

「いったい、どんなにすごい奇跡が起こったんだ？」さらにハンスが訊くと、

「言葉で説明するのは難しいが、どんなにすごい奇跡よりも、もっともつとすごい奇跡が起こったんだ」とランドが答えた。

ハンスは信じられないといった感じで、仲間たちと顔を見合わせた。

ネナやバンたちが、丘から増築現場におりてきた。

「ハンスって奴は、この中にいるか？」バンが訊いた。

「俺だけど、何か？」

ハンスがそう言うのと、バンは話した。

「お前さん、貨物船の船長なんだってな」

「ああ、そうだが」

「なら、話しは早い。奴隷になっていた俺たちの町の連中を貨物船に乗せて、テッドの港までつれて行ってくれないか？」

「わかった。だが、俺の船だけでは、全員は無理だ。ほかの貨物船にも頼んで、協力してもらおう」

「よろしく頼む」バンはハンスに感謝し、つづけて、「バドルたちはどうするんだ？ 殺すのか？」と周りを見渡しながら訊いた。

すると、ハンスが笑って話した。

「いや殺さない。殺したら奴らと同じになってしまう。こいつらには、ここを自分たちで取り壊して、ブルの人たちのために、広場でも造ってもらおうとするか」

増築現場の中央で、ネナがミズホのフードつきマントをかかげ、大きな声で言った。

「あつたよーっ！ ミズホちゃん」

「ありがとう、ネナちゃん」ミズホはネナのところに駆け寄っていた。

ミズホはさつきから、増築現場で自分のフードつきマントを探していたのだ。

この星の人々にとって、確かにミズホは奇跡的なことをやって見せたかもしれない。だけど、それは地球人だったら誰でも可能なことだ。でも、ほかの地球人だったら不可能だったかもしれない奇跡的なことを、ミズホは本当にやっていた。なぜなら、彼女はおよそ三万人を叩きのめしたが、一人も殺してはいないのだ。もちろん、

大ケガをした連中は大勢いるが

。

第17章 怪物退治

太陽が西へ傾きはじめたころ、テッドの港に坐り込み、救世主の帰りを待っていた大勢の人々は、やはりダメだったのではないかという不安におそわれていた。誰も話す者はなく、異常に静まり返った港には、さざ波の音だけが聞こえていた。

靴屋のマロンが我慢し切れず、ついにつぶやいてしまった。

「帰ってこないな……、もしかして……」

コウサクじいさんも、あせりの表情が隠せない様子でうつむいていた。

しばらくして、奴隷になった父親の帰りを、母親と二人で待っていた小さな男の子が立ちあがり、海を眺めて言った。

「来た！ 帰ってきたよ！」

大勢の人たちが海を見たが、そこには特に何も無い。子供のいたずらだと、がっかりしたときだった。海に突き出した山の裏から、一隻の大型帆船があらわれ、つづいて二隻目の大型帆船が、そして次々と六隻の大型帆船があらわれた。

港にいた大勢の人々がいつせいに立ちあがって、向かってくる大型帆船を眺めた。甲板には大勢の人たちがびっしり乗っていて、港へ向かって手を振っている。一番後ろからは、バンの中型帆船がやってきた。港で待っていた人々の表情が笑顔になり、大型帆船へ向かって手を振り返した。コウサクじいさんは、信じていたけれど信じられないといった表情で、感動し魂が震えていた。

六隻の大型帆船は、一箇所、二箇所、三箇所ある桟橋に接岸し、奴隷になっていた人たちをおろしはじめた。ハービー、ルーシー、デッドから奴隷になっていたおよそ五千人を、六隻の貨物船に分け、ミズホたちはつれて帰ってきたのである。

奴隷から解放された人たちは、大型帆船からおりて、家族や身内、恋人などを港で捜し、見つけると抱き合^だって再会をよろこんでいた。

みんなのうれし涙と笑顔を、きれいな夕日が照らしていた。コウサクじいさんは棧橋の先端にいて、その様子を眺め、感無量になった。バンの中型帆船は、棧橋から少し離れたところに停泊^{ていはく}し、つれて帰ってきた人々が大型帆船から全員おりののを待っていた。

ミズホとネナ、バンたちとリドの兄のランド、みんな甲板にいて、港で再会をよるこんでいる人々を眺めている。

大勢のよろこぶ人々を見守るミズホの瞳^{ひとみ}は、夕日を浴^あびて優しく輝き、彼女の髪とフードつきマントがオフショアの風で爽やかになりびいていた。

棧橋の先端から、コウサクじいさんがバンの中型帆船を眺めると、夕日に照らされたミズホとネナが、ならんで甲板から小さく手を振った。コウサクじいさんはミズホに手を合わせ、待ち望んだ奇跡に感謝した。自分が生きている間に救世主が本当にやってきて、大勢の人々を救い、永遠に変わらないと思われた悲惨な世の中を変えてくれる。ずっとずっと祈り、夢見ていたことがついに叶った。

よろこびに満ちあふれた大勢の人々は、バドルが支配した暗い時代は終わり、希望の風が吹いてきたことを全身で感じていた。

その夜、お風呂からあがってパジャマに着替えたミズホが、ベッドに入ろうとすると、窓から気持ちいい夜風が入ってきたので、彼女は窓際へ行って外を眺めた。寝室の窓からはネナの家は見えないが、さつき居間から見たとき、明かりは消えていたから、きつともう寝てしまったのだろう。そんなことを思いながらミズホが夜空を見あげると、星がとてもきれいだった。彼女は、しばらく星空を眺めることにした。

気持ちいい風に吹かれ、美しく神秘的な星々を眺めながら、ミズホは今日のことを思い出していた。奴隷になっていた人々が、家族や身内と再会して幸せそうに抱き合っていた。その光景を見て、ミズホはすごく幸せな気分になった。

ミズホが幼いころ、おじいちゃんが、「人を幸せにすると、自分

も幸せになれるんだよ」と話してくれた。彼女は、その意味が今日やっとわかったような気がした。

奴隷から解放された人たちが、素敵な夜を過ごしていると思うと、ミズホの至福感^{しふくかん}は頂点に達した。そして、勉強がまったくできなくて運動も苦手な自分を、いつも優しく励ましてくれたおばあちゃんや、亡くなったおじいちゃんのことを思い出し、とても恋しくなった。

「ここから地球は見えるのかな？」ミズホは星空を眺め、つぶやいた。

おばあちゃんは元気でいるだろうか？ 私のことを心配して病気になるってないだろうか？ と彼女は思い、もしこの星でおばあちゃんと暮らせたら、とっても楽しい日々が過ごせるのと思った。ベッドに入ったミズホは、この星でおばあちゃんと二人で楽しく暮らしている想像をしながら、至福の頂点のまま気持ちよく眠ってしまった。

昼ごろまで眠ってしまったミズホは、ドアを叩く音で目を覚ました。ベッドから飛び起きたミズホは、お風呂場にある洗面所でざっと顔を洗い、パジャマのまま玄関へ行ってドアを開けると、ロブがきれいな花束を持って、笑顔で立っていた。

「ごめん、起こしちゃったみたいだな。でも、もうそろそろ昼だぞ」そうロブが言うと、

「寝すぎちゃったみたい」とミズホは言っ、照れ笑いをした。

「これを」ロブは花束をミズホに渡した。

「ありがとう、ロブさん」ミズホがお礼を言うと、

「いや、これは俺からじゃないんだ。花屋のララからミズホさんへって頼まれたんだ」とロブが言った。

「ララさん？」ミズホが訊くと、

「ああ。俺の幼なじみで、けっこう美人なんだ。両親が奴隷から帰ってきたって、よろこんでたよ」とロブが話した。

「花瓶^{かびん}がないけど、大丈夫かな？」

ミスホが心配そうに言うと、ロブが微笑んで言った。

「大丈夫だ。その花はすごい生命力があつて、そのままでも当分長生きするんだ。花瓶に入れておけば、数年はもつな」

「なんていう花なの？」

「アキラメナイっていうんだ。なかなか枯れないから、そういう名前がついたんだ」

ロブが教えると、ミスホは花の匂いを嗅いで言った。

「いい匂いね」

「あの、話があるんだけど」

「家の中へ入つて。私、着替えてくるから」

そうミスホは言つて、ロブを家の中へ入れた。

ミスホはもらった花束をテーブルの上に置き、ロブを居間で待たせて、いつものワンピースに着替えてすぐにもどつてきた。

「これは朝食？」ロブがテーブルの上を指さして訊いた。

ミスホがテーブルを見ると、パンが二つとハムがあつた。さっき花束を置いたときは、あわててたから気づかなかつた。

「私が寝坊しちゃつたから、ネナちゃんが持つてきてくれたんだわ。もしよかつたら、食べます？」

「いや、俺はいい。食つてきたから」

「それで、話してなんですか？」

「ハービーの広場へ行つたことある？」

「何回も行つたことあるわ。最初はネナちゃんと一緒に行つて、プツプジュースを飲んだの。すごくおいしかったから、あの広場の近くに行くと、必ずプツプジュースを飲むの」

「そうなんだ。でね、あの広場、夜になると夜行性のグーボつていう人食い怪物が出るんだ。できればいいんだけど、ミスホさんに退治してもらえないかと思つて。でも、ダメならいいんだ。ハービーの連中が頼んでみてくれつて言うもんだから……」

「その怪物のことなら、ネナちゃんに聞いたことがあるわ。たくさ

んの人がおそわれて、死んでしまったそうね。いいわ、そのグーボとかいう怪物を退治しましょう」

「ありがたい。人食いグーボがいなくなったら、ハービーのみんながよろこぶ！」ロブはそう言い、ポケットから金属製のきれいな指輪を出して、「それと、あの、これは俺からなんだけど……」と言つて、ミズホに渡した。

「あ、ありがとう」

ミズホが恥ずかしそうに指輪をはめようとすると、ぐにゃっとつぶしてしまった。

「あつ！ ご、ごめんなさい」

彼女はあわてて指輪をなおそうとし、こんどは引きちぎってしまった。

「うわっ！ ど、どうしよう」

さらに、ミズホは指輪をなおそうとし、二つにちぎれた金属製の指輪をくつつけて、ねんどのように丸めてしまった。

「あららっ！ ヘンなんなっちゃった。ほんとにごめんなさい……」

ミズホが謝ると、啞然としてその様子を眺めていたロブが言った。

「い、いや、気にしなくてもいいよ」

そしてロブは、いきなりミズホを抱きしめた。

ミズホはおじいちゃん以外の男性に抱きしめられたことがなかったので、言葉を失い、心臓がドキドキしていた。そして、彼女もロブの背中に手を回した。そのとき、ミシツというあまり聞いたことのない音がし、ロブが体操選手のように後ろへのけ反った。

「い、痛いっ！ うーっ！」ロブは叫び、床にうずくまった。

「あつ、たいへん！！ 死んじゃったかな！？」ミズホが心配すると、

「いや、大丈夫。なんとか……生きてるみたいだから……」ロブは苦しそうに言った。

夜になって、ミズホとネナ、そしてコウサクじいさんの三人は、

神殿の中でロブが迎えに来るのを待っていた。石油ランプで照らされた古い神殿内は、まるで絵画の中へ入ったような雰囲気だった。「ネナちゃんとコウサクおじいさんは、来なくてもよかったのに」

そうミズホが言うと、コウサクじいさんが言った。

「ミズホさんの活躍を、一度でいいから見てみたいのです」
かつやく

「私は人食い怪物のグーボが見てみたいの」ネナが言った。

「でも、いまからハービーの広場まで歩いていくのはたいへんよ。道も暗いし」

ミズホがそう言うと、コウサクじいさんが話した。

「ロブ君は、メル力で迎えに来ると言っていましたから、大丈夫です」
「メル力って何？」

ミズホが訊くと、ネナが話した。

「ほら、たまに町を走ってる車よ。二頭のメルが、人を乗せた車を引くやつ。海でお葬式をやってきた人たちが乗って帰った車」

「あれがメル力っていうんだ。あれに乗れるの？ 楽しみね」ミズホが言うと、

「でもミズホちゃん、遊びに行くんじゃないわよ。怪物を退治しに

「ネナはそこまで言いかけ、ミズホちゃんは、どんなときも楽しそうでいいね」と言いなおして笑った。

「しかし、ミズホさん。昨日バドル神殿へ行って、今晚が怪物退治では、たいへんじゃないのですか？」

そうコウサクじいさんが訊くと、ミズホは答えた。

「平気です。ぜんぜん疲れてないし、それに、今日はお昼ごろまで寝ちゃったから」

すると、ネナが話した。

「今日ね、朝ご飯を食べに来ないから、ミズホちゃんちへ行ったの。そしたらミズホちゃん、よだれたらして、ぐっすり寝てたわよ。それでね、ときどき笑ってたの。ちよつと怖かったわ」

「よだれなんかたらしでないわ。起きたときは大丈夫だったし」ミズホが言うと、

「じゃあ、乾^{かわ}いちゃったのよ」とネナが言った。

二人は大笑いし、コウサクじいさんも笑って言った。
「きつと、いい夢を見ていたのですね」

三人が楽しく話していると、正面玄関の扉が開き、ロブと相棒のムタが入ってきた。

「ミズホさん、迎えに来たよ。行こうか」

そうロブが声をかけ、ミズホたちは神殿の外へ出て行った。

二頭のメルが引くメルカは、四輪の屋根付きワゴンになっていて、三人用の座席が前方を向いて三つ縦にならび、九人乗りで、石油ランプがライト代わりになっていた。メルの手綱をあやつっているのは、ミロという大柄で腕の太い中年のおじさんだった。

メルカのドアを開け、ロブとムタが一番前の席に二人で乗り、ミズホとネナとコウサクじいさんの順で、真ん中の席に三人で乗った。全員が乗り込むと、ミロが訊いてきた。

「本当に広場へ行っているんだな？」

「ああ、ミロさん。頼む」

ムタがそう言って、メルカは薄暗い夜道をハービーの広場へ向かって走り出した。というよりも歩き出した。尻尾がなければどっちが前か後ろかわからないメルは、のんびりした動物なので、決して走らないのだ。

メルカに揺られながら、怪物のことを考え、みんなは真剣な表情をしていたが、ミズホはなんだか楽しくてわくわくし、思わず笑いたくなったが、我慢して真剣なふりをした。

コウサクじいさんが言った。

「グーボが退治できたら、新年のお祭りを、また一晩中できるようにしますね」

「そうなるといいなあ」

ネナがつぶやくと、ミズホが言った。

「新年のお祭りって、一年の木に花が咲くと広場でやるんですよ。どんなのかな？ 楽しみだわ」

「そんなに楽しくはないよ。あんなの子供騙しだな」とロブが夢のないことを言った。

「ロブさんは、新年のお祭りに行かないの？」ネナが訊くと、

「そりゃあ、行くことは行くけどさ。楽しんでるわけじゃないよ」とロブが言った。

すると、コウサクじいさんが話した。

「いろんなことを素直に楽しめなくなってしまうのは残念ことです。大人になっても、楽しいことは素直に楽しまなければ、つまらない人間になってしまうのでは？」

ロブは機嫌悪そうな顔をして、何も答えなかった。暗いけれど、わずかに見える外の景色を眺めながら、自分はどんな大人になるんだろうと、ミズホは漠然と考えていた。

ハービーの広場に着くと、雲に隠れていた二つの月が出てきて、意外と明るくなった。それでも静まり返った真夜中の広場は、不気味な雰囲気を漂わせていた。

メルカにはミロだけが残り、ほかのみんなは一年の木の陰に隠れ、人食い怪物のグーボがあらわれるのを待った。

「ほんとに人食い怪物は来るの？」ミズホが訊くと、

「おとりが必要かもな。よし、広場の中を歩き回るとするか」とロブが言った。

「ロブ、気をつけるよ……」ムタが言うと、

「お前が行くんだよ、ムタ」とロブが言った。

「お、俺！？ 勘弁^{かんぺん}してくれ」ムタが言うと、

「心配するな。こっちには救世主のミズホさんがいるんだ」とロブが説得した。

「必ず助けてくれ、ミズホさん」ムタが心配して頼んだ。

「必ず助けるわ。でも、食べられちゃったら助けられないから、食べられないように気をつけてね」

そうミズホが言うと、ムタは不安になった。

「グーボが人間を食べるところも、ちょっと見てみたいわね」

ネナが期待するようにつぶやくと、ムタはすごく不安になった。さらに、コウサクじいさんが言った。

「もし、グーボにおそわれてしまったら、抵抗しないで素直に食べられたほうがいいと思います。そのほうが苦しまないでしょう」

その助言に、ムタはものすごく不安になってしまった。

「早く行け、ムタ！」

ロブに言われ、ムタはしぶしぶ広場の中央へ行って、歩き回りはじめた。

ムタが歩きはじめてから数分も経たないうちに、暗闇から体長七メートルぐらいの身体中にたくさん目玉がある尻尾が生えた力エルのような灰色の怪物が、二本脚で歩き、長い舌をべるべる振り回しながら出現した。身体中にあるたくさん目玉は、夜行性なのでギリギリと光っている。

「出たわ！ あれがグーボね！ ネナちゃん、もう見たから帰ろうか？」

ミズボが怖くなって言うと、ネナがあわてて言った。

「ダメだよミズボちゃん！ 退治しないとムタさんが食べられちゃうわよ！」

「しかし、いくらミズボさんでも危険すぎます。ここはやはり」とコウサクじいさんが言ったそのとき、ムタはみんなが隠れているところへ向かって、全速力で走ってきた。

「こっちへ来るなーっ！」ロブが怒鳴ったが、

「助けてーっ！」と叫びながら、ムタは方向を変えずに走っていく。

人食い怪物は長い舌を振り回し、ガーゴ、ガーゴ、と呻くように鳴きながら、逃げるムタをものすごい勢いで追ってきた。

「危ないぞ！ 逃げよう！」

そうロブが言って、みんなで逃げようとした。が、ムタが勢いよく飛び込んできて、彼を追ってきたグーボがおそってきた。怪物は、

ミスホたち五人が隠れていた一年の木に長い舌をのばして巻きつけ、へし折り、ぶん投げてしまった。五人があわてふためくと、次にグーボの長い舌はロブへ向かってのびてきた。

「うわーっ！」

ロブが倒れて悲鳴をあげたそのとき、ミスホが怪物の長い舌をつかんだ！そして、彼女はグーボの舌を持って扇状おうちょうに振って地面へ何度も叩きつけ、そのあと頭上でグルングルン回す得意技をやり、手を放した。人食い怪物のグーボは、夜空に身体中の目玉をギラギラさせながら、遙か遠くへすっ飛んでいった。

「うえーっ、手がねばねばするーっ」ミスホは自分の手の匂いを嗅ぎ、「なんか、くっさーい！」と言った。

「ミスホちゃんのよだれと、どっちが臭いの？」ネナが鼻声になって訊いた。

「私のよだれは臭くないわよ」とミスホは言いながら、恐怖で気絶しているムタの服で、さりげなく手を拭いた。

「救世主の奇跡を拝見はいけんしました。ミスホさんがいれば、平和な日々がつづくでしょう」コウサクじいさんが、感動して言った。

ロブは倒れたまま、放心状態でミスホを眺めていた。

第18章 みんなの神殿

ある日の午前中、ミズホは花瓶を買いに、ネナと一緒にハービーの雑貨屋までやってきた。ミズホは、ロブが持ってきた花屋のララという女性からもらった、アキラメナイを挿^さすための花瓶がほしかった。

ミズホはその花束を数日間テーブルの上へ置いたままにしておいたが、まったく枯れる様子がなかった。しかし、ロブが花瓶へ挿しておけば数年は枯れないと言っていたから、花瓶を買うことにしたのだ。

雑貨屋の花瓶売り場には、様々な形をした陶器製の花瓶がたくさんあったので、ミズホはどれを買おうか悩んでしまった。

「ねえ、ミズホちゃん。これなんかいいんじゃない？」ネナが、かわいらしい花瓶を指さして言った。

「でも、なんかちがうのよね」とミズホが言った。

「何がちがうの？」ネナが訊くと、

「もっと、こう、変わったのがいいの」とミズホが言った。

「じゃあ、あれね」ネナは一番変な形をしている花瓶を指さし、冗談で言った。

「うん、それでいい！」ミズホは笑顔でそう言って、一番変な形の花瓶を棚から取ってしまった。

「ミズホちゃん、嘘でしょ？」

「何が嘘なの？」

「だって、その花瓶、ヘンだよ。それだけは、やめたほうがいいと思うわ」

「どうして？　だって、ネナちゃんが教えてくれたんじゃない」

「冗談で言ったに決まってるでしょ」

「でも、この花瓶がいい」ミズホは言い張った。

「それ、たぶん失敗作だと思うよ。だって形がヘンすぎるもん」ネ

ナが小声で言うと、

「そんなことないわ。すごく素敵じゃない」とミスホは言った。

「やめな、やめな、ミスホちゃん」ネナは必死になって止めたが、
「この花瓶でいい。こういうの大好き！」とミスホはうれしそうに
言つて、一番変な形の花瓶を買うことに決めてしまった。

ネナはミスホの美的センスを疑ったが、本人がほしいならしかた
ないと思つた。

お金を払いにカウンターへ向かう途中、ミスホが立ち止まって言
つた。

「そうだ、これも買つておこつと」

そして、彼女は金物を磨くブラシを五本取つた。

「ミスホちゃん、よくその金物ブラシをたくさん買つてるけど、何
を磨いてるの？」

ネナが不思議そうに訊くと、ミスホは答えた。

「歯を磨いてるの。でも、すぐにぼろぼろになつちゃうのよね、こ
れ」

「普通の人が、その金物ブラシで歯を磨いたら、口の中が血まみれ
になつちゃうわ」

「ネナちゃんも、これで歯を磨いてみたら」

「だから、血まみれになつちゃうわ」

「いいじゃない、ちよつとくらい」ミスホが言うと、

「よくないつて」とネナが真顔で言つた。

カウンターでお金を払うとき、店員のお姉さんが、ミスホの買つ
た変な形の花瓶を見て、笑いをこらえているのがはつきりとわかっ
た。ネナは少し恥ずかしくなったが、ミスホは何も気にしてないよ
うであつた。

ハービーからルーシーへの帰り道、神殿の前を二人が通りかかる
と、何やら騒がしかった。ミスホとネナは顔を見合わせ、のぞいて
見ることにした。

雑草が生え放題の荒れ果てた神殿の庭を、たくさんの人たちが集まって草刈りをしている。さらに、神殿に絡みついた植物の蔓を、梯子をかけて取り除いていた。

「みんなで草刈りをしてるみたいね。どうしてかな？」ミズホが言う。

「救世主のミズホちゃんが来たから、神殿をきれいにしてるんじゃない」とネナが答えた。

草を刈っていたコウサクじいさんが二人に気づき、近づいてきて声をかけた。

「ミズホさんにネナちゃん。こんにちは」

二人が挨拶を返すと、コウサクじいさんは話した。

「ミズホさん、見てください。みんなで、この神殿をきれいに改装することに決めたのです。救世主のミズホさんが本当に来たのに、こんな荒れ果てた状態のままでは、神様に申しわけないですからね」

「コウサクじいさん、私もお昼ご飯を食べたら手伝いに来るわ」ネナが言う。

「それは助かる。ありがとう、ネナちゃん」とコウサクじいさんが笑顔で言った。

「私もネナちゃんと一緒に手伝いに来るわ」

ミズホが言うと、コウサクじいさんが話した。

「いや、いや、それはダメです。この神殿は、私たちの手できれいにしなければならぬのです。ミズホさんは救世主なのですから、何もしないでもいいのです」

「私を仲間はずれにするのね」ミズホがしょんぼりすると、

「そうではありません。誤解しないでください。ミズホさんのために改装しているのに、手伝ってもらっては意味がありません」とコウサクじいさんは言った。

「でも、少しでも手伝いたいわ」そうミズホが言うと、

「ミズホさんは、私が期待した救世主以上に素晴らしい。どうぞ手伝いに来てください。しかし、ほんの少しですよ。いいですね」と

コウサクじいさんは感激して言い、ミズホが持っている紙袋を見て、「それはなんですか？」と訊いた。

ミズホが紙袋から自慢げに花瓶を取り出すと、それを見てコウサクじいさんは言った。

「ああ、ゴミなら私が捨てておきましょう」

「ゴミじゃないです！ 花瓶です！」ミズホはあわてて花瓶を紙袋にもどした。

ネナは思わず笑ってしまったが、大切そうに変な形の花瓶を紙袋にしまっているミズホを眺め、ちよつとかわいと感じた。

昼食後、ミズホとネナが改装の手伝いに行くと、神殿の周りをぐるりと一周している広い庭に生えていた雑草は、もうすでに刈り取られていた。そして、たくさんの人たちが荷車に積んである土をシヤベルで敷いていて、円筒状の石のローラーを二頭のメルに引かせる道具を三台使い、地面を固めているところだった。

「こんなに広い庭だったのね」ミズホが言うと、

「ほんとだ。雑草が生えていたから、狭く感じたんだわ」とネナが言った。

バンの帆船の副船長のケビンが、石のローラーを引く二頭のメルを誘導しながら地面を固めていた。ミズホが彼に話しかけた。

「ケビンさん。手伝いに来ただけど、何をやればいい？」

「ミズホちゃんとネナちゃんか。人がたくさんいて、気づかなかった」

ケビンが頭をさすりながら言った。彼は話すときに、自分のつるつる頭をさするのが癖らしい。

「バンさんたちもいるの？」ネナが訊くと、

「ああ、みんな来てる。どこかで手伝つてると思うけど、人がたくさんいて、みんなどこにいるのかわからないな」とケビンが答えた。「ねえ、ケビンさん。私たちは、何を手伝ったらいいかな？」ミズホが訊くと、

「そうだな、庭に土を敷くのを手伝ってくれないか」とケビンが言った。

神殿の庭に、メルが引く荷車が、二メートル前後の石材を載せて五台やってきた。

「あれは何するの？」ミズホが訊くと、

「石工^{いしく}たちが、庭にベンチを作るんだ」とケビンが教えた。

「私、あの石をおろすの手伝う」ミズホが言くと、

「それじゃあ、私は土を敷くのを手伝ってくるわね」とネナが言った。

ミズホが、石を運んできた五台の荷車のところへ行くと、一台の荷車をメルからはずして斜めにし、十人の男が石材をおろしていた。「私も手伝います」ミズホが声をかけると、

「危ないから、お嬢ちゃんはいいいよ」と、十人へ指示をしていた石工のおじさんが言った。

「大丈夫です」とミズホは言って、ほかの荷車に載っていた石材を軽々と持ちあげ、「どこに置きますか？」とたずねた。

「そ、そこに置いてください」石工のおじさんが驚いて言った。

十人がかりで石材を荷車からおろしていた石工たちも、信じられないといったまなざしで、石材を軽々と持ちあげ地面におろすミズホを眺めた。

「ほかの石も同じ場所に置けばいいの？」ミズホが訊くと、

「あ、あなたが救世主様だったんですか……。お、お願いします」

石工のおじさんがそう言くと、ミズホはほかの石材も軽々と持ちあげ、地面におろした。

「ありがとうございます」

石工のおじさんはミズホに礼を言い、五つの石材を調べはじめた。彼はしばらく石材を調べ、一つの石材を見て言った。

「この石だけはダメだ。これは剛岩^{こうがんせき}石じゃないか」

「あっ！ すみません。まちがえて持ってきてしまいました。ちょうどいい大きさだったもんで……」その石材を持ってきた石工の青

年が謝った。

「どうしてダメなの？」

ミズホが訊くと、石工のおじさんは説明した。

「この剛岩石は硬すぎて、どうしても削ることができないんです」

「へえ、そうなんだ」

そう言いながら、ミズホがその石材を指でつつくと、簡単に穴があいた。

「そんなはずは！？」

石工のおじさんは驚き、自分の道具で剛岩石を削ろうとしたが、やはりまったく削ることはできなかった。

「ねえ、おじさん。この石で、私が何か作ってもいいですか？」ミズホがたずねると、

「どうぞ、どうぞ」と石工のおじさんが言った。

「私も道具を取ってくるわ」ミズホはそう言っ、家に帰っていった。

家に着いたミズホは、エコプラ製でできた地球のフォークとスプーンを持って、また神殿の庭へもどってきた。石工たちは、四つの石材でベンチの製作をはじめていた。ミズホはしばらくその様子を観察しながら、何を作ろうか考えていた。ミズホが周りを見渡すと、ネナがシャベルで土を敷いている姿が目に入ってきた。そして、彼女はネナの石像を作ろうと思う、持ってきた地球のフォークとスプーンで剛岩石を削りはじめた。

この星へ来てから、ネナにはずいぶんお世話になったと思いながら、ミズホは感謝を込めて彼女の石像を作った。石作りのベンチを製作していた石工たちが、この文明の道具では絶対に削ることのできない剛岩石を、ミズホが地球のフォークとスプーンでもしるいように削るのを見て、彼女が持っている道具は神の道具にちがいないと思った。

ネナはミズホのところにやってきたが、ミズホは熱中して何かを作っていたから、彼女は声をかけずにその様子を眺めていた。

ミズホがネナに気づいて訊いた。

「あれ？ ネナちゃん。もう地面に土を敷くの終わったの？」

「土が足りなくなったから、つづきは明日やるんだって」

「私は、もうできるわよ」ミズホは石像の最後の仕上げをしながら言った。

「なんなの、そのヘンなの？」ネナがミズホの作っている石像を眺めて訊いた。

「これは、ネナちゃんの石像よ」ミズホは自信たっぷりに答えた。

しかし、その石像は、どう見ても人間とは思えないほどぶさいくでひどいものだった。

「それ、私なの！？」ネナが驚いて言った。

「できたわ！ かわいいでしょ？」とミズホが言うと、

「かわいいというか、ちよつと気持ち悪いわよ」とネナは不機嫌ふきげんになつて言った。

近くでベンチを作っていた石工たちが、笑いを必死にこらえている。ミズホは何も気にしないで、その石像を神殿の正面玄関のわきへ持って行き、飾ってしまった。

「そんなとくに置くと、怒られるわよ」ネナが注意すると、

「どうして？ 大丈夫よ。みんなもよろこぶと思うわ」とミズホが楽しそうに言った。

神殿の中で作業をしていたコウサクじいさんが正面玄関から出てきて、二人に話しかけてきた。

「ミズホさんにネナちゃん。庭を手伝ってくれてたのですね」

二人が笑顔でうなずくと、コウサクじいさんはミズホの作ったネナの石像を見て、顔をしかめながら言った。

「誰ですか、こんな悪趣味な石像を置いた人は？」

「ミズホちゃんが作って、そこに置いちゃったの」ネナが教えると、「どうも失礼しました。よく見ますと、とてもいい感じです。しかし、これはなんの石像ですか？」とコウサクじいさんはあわてて言った。

「ネナちゃんの石像です……」ミズホは小声で答えた。

「そういえば、すごく似てます」

コウサクじいさんの意見に、ネナはムツとした。

神殿の中から、バンが出てきて言った。

「コウサクじいさん、内装のつづきは明日にしましょう」

「そうしましょう。バンさん、今日はお疲れ様です」とコウサクじいさんが言った。

バンはミズホとネナに気づき、微笑んで言った。

「二人も来てたのか。見てろよ、この神殿を立派に改装してやるかな」

そして、バンはミズホの作ったネナの石像を見て怒鳴った。

「誰だ！　こんなくだらないもん置いた野郎は！」

「ミズホちゃんが作って、置いちゃったの」またネナが教えると、

「どつりで素晴らしいと思った」とバンは素早くごまかした。

すっかり落ち込んでいるミズホを見て、ネナは笑いたいのを我慢した。が、肩で笑ってしまった。

神殿は二カ月かけて改装され、見ちがえるように立派になった。

神殿を一周している広い庭には、石工たちが作ったベンチがいくつもならび、汚れていた建物の壁は真っ白に塗り替えられ、外装と内装は新たに装飾された。

そして、大勢の人たちが毎日神殿に訪れるようになり、救世主の降臨こっしんを神に感謝した。正面玄関のわきに置いてしまったミズホの作ったネナの石像は、意外にも子供たちに大人気だった。

ミズホが神殿へ行くと、大勢の人たちに取り囲まれてしまうから、彼女はあまり神殿には顔を出さなかった。それでも、ときどきミズホが神殿へ行くと、何かを話してくれと人々から頼まれ、彼女はこも宇宙にある数え切れない星の一つだと、大好きな果物のプップを使って説明した。そして、この星の名前を『惑星プップ』と勝手に名づけてしまった。

救世主的働きをしたミスホは一躍有名人になり、崇められるようになったが、本人は相変わらずであった。ミスホは偉大な活躍をしたにもかかわらず、決して偉ぶることがなかったので、誰でも気軽に話しかけることができ、彼女は多くの人々から心底愛される存在になった。だけど、あまりにミスホは救世主らしくなかったから、彼女が『地球の乙女』だと気づかない人たちも大勢いた。それに、バドル神殿へ行ったとき以来、ミスホは日比谷中学の学生服を着なかったので、服装で彼女を見分けることもできなかった。

ブルの人々も帆船でやってきて、新しくなった神殿に訪れるようになり、神と救世主ミスホに祈りを捧げ、バドルの支配から解放されたよろこびを感謝した。

ブルにあった広大なバドル神殿は、貨物船の船長のハンスが指揮をとり、広場に造り替えるため、三万人の元特使たちによって解体作業が急ピッチで進んでいた。

バドルは自分の犯した罪を深く反省したが、罪悪感と肉体労働に耐え切れず、バドル神殿の解体作業中に、彼は崖から身を投げたしまった。ハンスの指揮によるバドル神殿の解体作業と広場造りは、交替制で十分な休憩と休みを与えていたから、決して過酷な労働ではなかった。だけど、威張り散らして樂をし、いい思いをしすぎてしまったバドルには、普通の肉体労働もつらく感じたのだらう。

第19章 新年のお祭り

もうすぐ一年の木に花が咲き、新年のお祭りをやるときがくる。

ネナはミズホが人食い怪物のグーボを退治したときから、ずっと考えていたことがあった。彼女は、こんどの新年のお祭りに、お菓子屋の屋台を出したいと思っていた。

ネナがそのことをミズホに話すと、大賛成してくれた。そして、新年のお祭りの日は、二人で屋台のお菓子屋をやることにした。

ミズホとネナが、最初に準備しなければならなかったのは、屋台そのものだった。それは売っているものではなく、普通は自分たちで作るしかない。しかし、リドの兄のランドが大工だったので、二人が相談すると、彼は快く引き受けてくれた。ランドは、新年のお祭りまでには必ず間に合うように、屋台を作ってくれると約束してくれた。

ミズホとネナは、お菓子を作るためのミルクと卵を買いに、牧場へ直接行くことにした。牧場はハービーの町はずれにあり、歩いていける距離ではない。だから、二人は朝早くミロのメルカに乗って牧場へ行った。

広々とした牧場には、五百頭くらいのメルが放牧されている。たくさんくさんのメルを眺め、ミズホは大はしゃぎだった。

「ネナちゃん、メルがあんなにいるわ！ それに、いろんな色のメルがいるのね」

ミズホは白いメルしか見たことがなかったから、黒や茶色、まだ模様もようのメルが新鮮だった。

「ほら、ミズホちゃん。メルの赤ちゃんがいるわよ」ネナが指さして言った。

ミズホが見ると、親メルのそばに小さなメルの子供が数匹いた。同じような光景はあちこちで見ることができた。

「メルって楽しい動物ね」とミズホが言っただけだ。

二人が買い物を忘れてメルを眺めていると、天然パーマの太った牧場のおじさんがやってきて話しかけた。

「ネナちゃん。元気か？ 牧場に来るなんて珍しいね」

「うん、ケンゴおじさん」ネナが言っただけだ。

「ママの具合はどうだね」とケンゴが訊いた。

「あまりよくないみたい」ネナは答えた。

「そうか。だけど、メルのお乳を飲んで栄養を摂れば、いつかよくなるかもしれないから、希望を捨てちゃダメだよ」

そうケンゴが話すと、ネナはうなずき、笑顔で言った。

「ありがとう、ケンゴおじさん」

ケンゴはミズホを見て言った。

「君は……、救世主のミズホさん！」

「救世主じゃないけど、ミズホです」そうミズホが言っただけだ。

「君のおかげで、おじさんの妻が奴隷から帰ってきたよ。ありがとう！」とケンゴは感謝し、つづけて、「ところで今日は、何しに来たのかな？」と訊いた。

ネナが楽しそうに話した。

「今日はね、ミルクとお菓子をたくさん買いに来たの。私たち、新年のお祭りで、屋台のお菓子屋さんをやるのよ」

「それは楽しみだね。おじさんも妻と一緒に、二人の屋台へお菓子を買いに行くよ」とケンゴは言っただけだ。「そうだ、ネナちゃんとミズホさん。少しメルのお乳搾り（ちしほ）をやってみないか？」と誘っただけだ。

「ほんと！ やってみたいわ」ミズホが言っただけだ。

「でもミズホちゃん、力が強いから気をつけないとダメだよ」とネナが忠告した。

二人はケンゴにつれられて、一頭のお乳のところにいった。そして、ケンゴはメルのお乳の下に専用のバケツを置いた。

「優しく搾（しほ）らないとミルクが出ないよ」

そう言いながら、ケンゴは乳搾りをやって見せた。二人はやり方をしばらく見て、最初にネナがメルの乳搾りに挑戦したが、なかなかうまくいかなかった。

「ぜんぜん出ないわ」ネナが言うと、

「もうちよつと力を入れて大丈夫だよ」とケンゴが言った。

ネナはさつきより強めに搾ってみると、メルのミルクがシューツと出てきた。

「やつと出たわ！」ネナはよろこんで言った。

次にミズホがメルの乳搾りに挑戦しようとしたとき、ネナが再度忠告した。

「ミズホちゃん、メルの乳首をもぎ取らないように気をつけてね。

ミズホちゃんだって、乳首をもぎ取られたら痛いでしょ」

ミズホは自分の乳首がもぎ取られることを想像し、少し痛くなっていました。そして、メルの乳首をもぎ取ってはいへんだと思い、ネナに言われたとおりに、軽くそつと乳を搾った。すると、メルのミルクはシューツ、シューツ、と勢いよく出てきた。

「おお、上手だね！ ミズホさん」ケンゴが感心して褒めた。

「ほんと、うまい、うまい」とネナも言った。

「こんどは、ネナちゃんのおっぱいを搾ってあげるね」ミズホが冗談を言うと、

「私はいいいよ」とネナは普通に断っていた。

メルの乳搾りのあと、二人はケンゴと一緒にミルクが貯蔵してある大きな倉庫へ行つて、メルのミルクが二十リットル入っている鉄製のミルクタンクを買った。その鉄製のタンクは、ミルクを使い切ったら牧場へ返すことになっている。

卵は産みたてのほうがいいとケンゴが言つて、三人はメツキー舎しゃと呼ばれる大きな養鶏場ようけいじょうのような建物へ入っていった。

そこに、千羽くらい飼育されているメツキーというニワトリのような青い鳥は、首が異常に長く不安定でふらふらし、一つしかない目玉が頭の上に飛び出している。

ケンゴがミズホとネナへ向かって、卵の取り方を教えてくれた。

「卵はメツキーの下に四個か五個くらいずつあるから、メツキーの首をつかんで、どかして卵を取るんだよ」

「メツキーは、怒らないんです？」ミズホが質問すると、

「この鳥はおとなしいから、心配しないで大丈夫だよ」

そうケンゴが言つて、卵を入れるための大きめな籠かごを二人に渡した。

「よいしょつと」ネナがメツキーの首をつかんで持ちあげ、横に置き、下にあつた四個の卵を籠の中へ入れた。

メツキーは長い首をふらふら揺らし、ピーピー鳴いて自分の卵が取られている様子を、頭から飛び出した一つ目で眺めている。

「なんか笑っちゃう鳥だけど、ちよつとかわいそうな気もするわね」ミズホが言つと、

「そんなこと言つてないで、早くミズホちゃんも卵を取つてよ」とネナが言つた。

そして、ミズホもやってみることにした。

「ごめんなさい。卵ちようだいね」ミズホは力を入れすぎないように注意して、ふらふら揺れるメツキーの首を優しくつかみ、持ちあげてどかし、卵を割らないようにそつとつかみ、五個の卵を籠の中へ入れた。

ミズホは卵を取るたび、メツキーに謝っていた。そんな彼女の後ろ姿を見て、ネナはおかしくてしょうがなかった。

卵は全部で百個買い、二十リットルのミルクタンクと一緒に三口のメルカへ積み、ケンゴにお礼を言つて、二人はルーシーへ帰っていった。

一年の木に花が咲き、二日後に新年のお祭りがハービーの広場で開催される。それに間に合うように、ネナはミズホの家の台所で大量のお菓子作りに励んでいた。

ミズホは卵とミルク以外の材料をハービーまで買いに行ったり、

卵を割ってかきまぜたり、自分にできることはなんでもやってネナを手伝った。

ネナが作っているお菓子は、本に載っていたお菓子を手本にし、自分で創作したオリジナルのホットケーキのようなお菓子だった。できあがったお菓子は、ハービーで買ってきた大きな籠に入れ、いっぱいになると居間へ持って行った。

お菓子がいっぱいになった籠が三つになったとき、ネナが心配して言った。

「こんなに作って、全部売れるかな？」

「ネナちゃんのお菓子、おいしいからきつと売れるわよ。もし売れ残ったら、私が全部食べるわ」ミズホはそう言いながら、お菓子を一つ手に取って食べた。

「ありがとう、ミズホちゃん。でも、いま食べちゃったらダメじゃない」ネナが言うのと、

「あ、そっか！」

とミズホが言って、二人で大笑いした。

お菓子は五つの籠いっぱいにつけて、ようやく材料がなくなった。家中がお菓子の甘い香りでいっぱいになり、二人はとても楽しい気分になった。

五つの籠を全部ならべると、居間が狭せまくなってしまった。

「ここに置いといていいの？」ネナが言うのと、

「もちろん、いいわよ」とミズホは気持ちよく答えた。

「それと、ミズホちゃん……」ネナが目を細めて言った。

「何、ネナちゃん？」ミズホが訊くと、

「お菓子、食べちゃダメだよ」とネナが、ちょっと怖い顔で言った。

「食べないわよ」ミズホは笑顔でそう言ったが、少しくらいなら、食べてもばれないだろうと思っていた。

二人がそんな話をしていると、居間の窓をランドが軽く叩き、手招きをした。ミズホとネナは、すぐに家の外へ出て行った。

「屋台ができたぞ。悪くないだろ」ランドは作った屋台を見せなが

ら、笑顔で言った。

その屋台は、お菓子屋にふさわしい感じの屋台だった。ミスホとネナは、大よろこびでランドに感謝した。

「あさってまで、この屋台をどこに置いておくの？」ミスホが訊くと、

「私の家の物干し場で大丈夫よ」とネナが答えた。
すると、ランドが言った。

「俺の友達が広場の近くに住んでるから、そこに置かせてもらえば」
ミスホとネナはうなずき、そうすることにした。

ハービーの広場で開催された新年のお祭りは、大勢の人々にぎわった。飲み物や食べ物の様々な屋台がたくさん並び、あちこちでゲームや手品、不思議な形の楽器を使った陽気な音楽の演奏、変わった動物の曲芸などをやっていて、人々の楽しそうな笑い声や拍手であふれていた。

ネナとミスホのお菓子屋の屋台は、行列ができるほど大繁盛で、
大忙しだった。
だいはんじょう

「大人気だね、ネナちゃん」ミスホがお菓子売りながら言うと、
「ほんと、こんなに売れるとは思わなかったわ！」とネナはうれしそうに、お菓子売りながら言った。

バン、ケビン、オスター、ウツド、マツクの漁師仲間が、みんなでお菓子を買うためにならんでくれた。

「やっと順番が来たな」とバンが言って笑った。

リドとランドは兄弟で買いに来てくれた。

「ランド兄さんが作った屋台の調子は、どうだい？」リドがたずねると、

「とってもいいわ」とネナは答えた。

ランドはにこにこ笑い、満足そうな顔をしていた。

牧場のケンゴは、奴隷から帰ってきた奥さんと夫婦で買いに来た。
「大忙しだね、お二人さん」とケンゴが声をかけた。

「ケンゴおじさんの牧場で買った、ミルクと卵で作ったお菓子だから、すごくおいしくできたのよ」

そうネナが話すと、ケンゴと奥さんは顔を見合わせて微笑んだ。

コウサクじいさんも買いに来てくれた。

「いや、いや、この屋台が一番人気です」とコウサクじいさんは言
つて、目尻に優しい皺しわを寄よせて笑った。

ほかにも顔見知りの人たちが、ネナとミズホの屋台にたくさんや
つてきて、お菓子を買ってくれた。二人は休むことができなくてす
ごく忙しかったけれど、うれしくてとても充実した気分になった。

そして、日が暮れるころには、お菓子は完全に売り切れてしまった。
お菓子が入っていた空っぽの籠を見て、ミズホが言った。

「ネナちゃん、もうお菓子がなくなっちゃったわよ。あんなに作っ
たのにね」

「ほんと、こんなに売れるとは思わなかったわ。一晩中やるつもり
だったけど、もう店仕舞いね」とネナは笑顔で言い、つづけて、「
もしかして、ミズホちゃん……、家でお菓子を食べなかった？」と
訊いた。

「もちろん、食べたわ」ミズホはきっぱり答えた。

「食べちゃダメって言ったのに」ネナが怒ると、

「でも、食べちゃった」とミズホは悪びれずに言った。

「まったく、もう」ネナが呆れて言った。

夜になると広場は、焚き火や石油ランプ、松明などでライトアッ
プされて明るくなった。お菓子が売り切れてしまったネナとミズホ
は、新年のお祭りを楽しむことにした。

二人がひとだかりをのぞくと、手品をやっていた。手品師が何も
ない箱の上に布をかぶせ、「1、2、3」と言つて布をどかすと、
メッキがあらわれた。ミズホとネナは、ほかの観客と一緒に拍手
してよろこんだ。

別のひとだかりへ二人が行くと、いい匂いを嗅ぐと砂をかける犬

に似たピムが曲芸をやっていた。ミズホとネナは一番前に来て、しやがんで見ることにした。

ピムは主人が投げた赤い玉をジャンプしてくわえ、赤い籠へ入れた。同じように、青い玉は青い籠へ、白い玉は白い籠へ入れていった。ピムが玉を同じ色の籠へ入れるたびに、観客が拍手した。何度かやっているうち、ピムは不意に主人を無視して、ミズホのところにやってきて匂いを嗅ぎ、後ろ脚で砂をかけた。それを見て、ネナと観客たちが大爆笑した。

次に二人が行ったのは、メルの前部を当てるゲームだった。メルは尻尾がなければ、どっちが前かお尻かわからない動物だから、前部に尻尾の偽物をつけてしまうと、前と後ろの見分けがつかない

脚^{あし}の向きを見てもわからない。

二人はゲームに参加することにし、ネナが最初に挑戦した。彼女は後ろを向かされ、その間にゲームを進行しているお兄さんがメルを歩かせて回し、左右の向きを入れ替えた。

「さあ、どっちが前だ！」お兄さんが言った。

ネナは振り返り、メルをよく眺め、右を指さして言った。

「たぶん……、こっち」

お兄さんがメルの背中を強く叩くと、パカッとメルが口を開け、左が前だとわかった。

「残念でしたーっ」お兄さんが笑いながら言った。

ミズホと観客たちは大笑いした。

こんどはミズホが挑戦した。彼女は後ろを向いて、お兄さんがメルを歩かせて回し、左右の向きを入れ替えるのを待った。

「さあ、どっちが前だ！」

とお兄さんが言って、ミズホは振り返り、メルをじーっと見つめ、自信たっぷりに左を指さして言った。

「絶対こっち！」

またお兄さんがメルの背中を強く叩くと、メルはパカッと口を開いた。前は右だった。

「残念でしたーっ」

お兄さんが勝ち誇った顔で言うと、ネナと観客たちが大爆笑した。ミズホはちよつと悔しくて、ちよつと不愉快になった。

それから二人は、いろんな屋台の食べ物や飲み物を買って、たくさん食べたり飲んだりして楽しんだ。広場にはいろんな食べ物や飲み物の匂いがまざり合い、お祭り独特のいい匂いがして、楽しい音楽が絶えず流れ、ミズホはずっとウキウキわくわくしていた。

惑星プップでは、一年の木が咲くことによって年齢を決めている。だから、ネナは九歳から十歳になった。

「私、もう十歳になったから、もう少し大人にならないと。そうだ。ねえ、ミズホちゃんは何歳なの？」

「私は十四歳よ。一年の木に花が咲いたけど、まだ十五歳になりたくないわ。来年からでいいでしょ？」そうミズホが言うと、

「別に、いいんじゃない。でも十四歳なんだ。意外にお姉さんなのね。もっと子供かと思ってたわ」とネナが笑って言った。

「私はもう子供じゃないわ」ミズホが言うと、

「そうかな……？」とネナが首をかしげながら言った。

そのとき、大勢の見物人の楽しそうな笑い声が聞こえてきた。

「何かしら？ 楽しそうね！ ネナちゃん、見に行ってみよう！」

ミズホが目を輝かせながら楽しそうに言うと、ネナはつぶやいた。
「やっぱ子供ね」

真夜中になり、二人は広場に隣接した比較的静かな野原へ行つて、星を眺めることにした。そこでは、新年のお祭りで遊び疲れた数組の家族づれや恋人たちが、静かに星を眺めていた。夜空には、二つの三日月がならび、無数の星々が美しく広がり、宇宙の壮大さを教えてくれた。

二人は野原に坐つて、星を眺めながら話をした。

「本当にここも星なの？ 夜空の星と同じように、宇宙に浮かんでいるの？」

ネナが不思議そうに訊くと、ミズホが話した。

「ほんとよ。大きすぎるから、星に住んでる人はわからないけど、この惑星プップも宇宙にあるたくさんの星の一つなのよ」

「『惑星プップ』って星の名前はどうかと思うわ。ミズホちゃん、もつといい名前をつけてよ」

「素敵な星の名前じゃない、惑星プップなんて。私、惑星プップが一番いい名前だと思うわ。ね、いいでしょ？ ネナちゃん」

「しょうがないなあ、もう」とネナがあきらめて言い、つづけて、
「ミズホちゃんの地球って星は、どっちのほうにあるの？」と訊いた。

ミズホは地球がどの方角にあるのかさっぱりわからなかったが、とにかく捜すふりをして夜空の星を見回した。ネナもミズホの目線を追って、首を左右に向けた。

「あっち！」

ミズホが適当な方角を素早く指さしてごまかすと、ネナが言った。
「えっ？ どこ、どこ？ いま早すぎてわかんなかったわ」

「あっちよ！」ミズホは、もう一度、適当な方角を素早く指さした。

「あれ？ さっきとちがうみたい？」ネナが言くと、

「そ、そんなことないわ。でも、地球より惑星プップのほうがいい星よ」とミズホはあわてて言い、話題を変えた。

「ミズホちゃんが地球から来てくれたから、ここもよくなったのよ」
ネナが笑顔で言った。

「私が出来なくても、この星は地球よりずっといいところよ。すごく楽しいもの」ミズホがそう言って深呼吸すると、

「地球は楽しくないの？」とネナが訊いた。

その質問に、ミズホはすぐに答えることができなかった。

ミズホにとって、地球での暮らしは苦痛そのものだった。生きつづける自信さえもなかった。しかし、それは学校という小さな範囲のことだ。時がすぎ、大人になれば、新しい人生がはじまる
いじめから解放される日がくるかもしれないのに、地球での彼女は

それに気づけなかった。自分がいまいる場所が世界のすべてだと思
い込んでしまった。

ミスホが苦痛だと感じたのは、自分の小さな範囲の人生だけだ。
彼女は、地球にも楽しいことがたくさんあるはずと思い、探さな
かったことを反省した。

「ネナちゃん。地球も楽しい星だと思うわ」
沈黙していたミスホが、静かな口調で言って微笑んだ。

新年のお祭りが終わったあと、お菓子屋の屋台は広場の近くに
あるランドの友達の家にあずかってもらうことにした。ネナはもつ
とおいしいお菓子を考えて、来年の新年のお祭りで売るのが、いま
から楽しみになった。

第20章 がんばれバブー！！

川から陸にあがると、脚が出てくる頭でっかちの魚、バブーを捕まえるため、ミズホとネナは木製の蓋つきバケツと捕虫網ほうちゅうあみのようなものを持って、北の川に来ていた。川岸には三十匹前後のバブーがお坐りして休んでいる。

「静かに近づかないと、バブーが逃げちゃうからね」

とバケツを持っているネナが言って、網あみを持っているミズホがうなずいた。

二人は忍び足でバブーに近づいて行っただが、すぐそばまで来たとき、ミズホが転んでしまった。その音に驚いたバブーは、いっせいに走り出し、川の中へ逃げていつてしまった。が、一匹のバブーだけが逃げ遅れていた。ミズホはあわてて立ちあがり、逃げ遅れたバブーに網を振りおろした。

「やったーっ！ バブーを捕まえたわ！」ミズホは大よろこびで言った。

バブーは確かに網の中に捕まっている。

「ネナちゃん。バケツの中に入れて、家に帰ろう」ミズホが言うと、「でも、ミズホちゃん。そのバブーはのろまだから逃げ遅れたんだと思うわ。バブーレースには勝てないかもよ」とネナが言った。

「私、このバブーでいいわ。一生懸命訓練するから、ね、いいですよ？」

そうミズホが言うと、ネナは笑顔で言った。

「ミズホちゃんがいいなら、いいわ」

そして、ネナはバケツに川の水を入れ、その中にミズホがバブーを入れて、二人は家に帰ることにした。

その日から、ミズホはバブーを育てるのに夢中になった。彼女が捕まえたバブーはのろまどころか、訓練なんかする必要がないくらいに足が速くて元気だった。ただ、ときどきお坐りしたまま動かな

くなるので、たぶん捕まえたときが偶然その状態だったのだろう。

バブーはバケツの中に入れて、ミズホの家の居間で飼っていた。バブーという魚は見かけによらず凶暴で、指を噛かまれると大ケガをしてしまう。だから、育てるときは革の手袋をするのだが、もちろんミズホにはその必要はなかった。彼女のバブーも、はじめのうちはよく噛みついてきたが、ミズホが手でエサの米をあげていたら、すぐになつくようになった。

ネナが遊びに来て、ミズホと楽しく話していたら、バブーが勝手にバケツの中から飛び出し、居間を駆けずり回った。

「ミズホちゃん！ 早くバブーを捕まえて、バケツの中に入れて」ネナは逃げ回り、そしてテーブルの上にのぼってしまった。

「大丈夫よ、ネナちゃん。このバブーは、もう噛みつかないわ」ミズホは大笑いし、バブーを捕まえてバケツの中へもどした。

「もしバブーに噛まれたら、大ケガしちゃうじゃない」そう言いながら、ネナはテーブルの上からおりた。

「そろそろバブーレースに出せるかな？」ミズホが言うと、

「そうね、出してみようよ。そのバブーなら一位も夢じゃないわ」とネナが言った。

「一位になると、何がもらえるの？」ミズホが訊くと、

「よくわからないけど、その日によってちがうみたい」とネナが答えた。

次の日、ミズホとネナはミロのメルカに乗って、テッドの港町にあるバブーレース場という倉庫のような建物へやってきた。二人は、ミロも一緒にバブーレースに行こうと誘ったが、彼はメルカの中で待っていると言って、来なかった。

ミズホは自分のバブーが入ったバケツを持って、ネナと話しながらバブーレース場に入っていった。

「ミロさんて、いつもメルカからおりてこないわね」ミズホが言った。

「そうだね。どうしてだろう？」ネナが不思議がると、

「わかった！ きつと、ズボンのお尻がやぶけてるのよ」

とミスホが推理し、二人は大笑いした。

バブーレースは参加費を払って参加し、そのお金が賞品代になる。お金を賭けることはできないのに、サーキット場にはたくさんのお客がバブーレースを見物しに来ていた。

中央に百メートルぐらいの楕円形^{だえんけい}トラックがあり、その周りが観客席になっている。トラックのスタート地点には、一番から八番までの番号がついている八箇所のボックスが横にならび、そこにゼッケンをつけたバブーを入れて、スタートさせるようになっていた。

エントリーをするため、ミスホとネナが受け付けにらんでいると、髪を七三に分け、ちょび髭を生やした、紳士的な初老の男性が話しかけてきた。

「ネナちゃんが、バブーレースに参加しに来るとは驚きですな」

「あ、ソウスケ先生。私じゃなくて、ミスホちゃんがやりたいって言うから来たの」ネナがそう言うのと、

「救世主のミスホさんですか？ 噂は聞いていましたけど、本当にまだ子供ですな」とソウスケ先生は言った。

「ソウスケ先生はね、お医者さんなの。どんな薬でも作っちゃうのよ」とネナが言って、ミスホにソウスケ先生のことを紹介した。

「それは大げさですな、ネナちゃん。私にも作れない薬はありますぞ。何よりも、薬を作る材料が手に入らなければ、どうにもなりませんからな」とソウスケ先生は話した。

「バブーレースが好きなんですか？ ソウスケ先生さん」ミスホが訊くと、

「いや、近くに薬を届けに来たついでに、のぞいてみただけです」とソウスケ先生は答え、つづけて、「ネナちゃん。ママの体調はどうですか？」と思いついたように訊いた。

「ミスホちゃんが来てから、少しよくなったような気もするけど、やっぱりつらいみたい。でも、治る薬がないんだからしょうがない

わ」ネナが話すと、

「ネナちゃんのママと同じ難病で苦しんでいる人がけっこういるんですけど、あの病気だけはどうにもなりませんな。もし、アロマ草が手に入れば、もしかしたら治す薬を作ることができるかもしれないませんかな……」とソウスケ先生はうつむいて話した。

「アロマ草は、なかなか取れないの？」

ネナが悲しそうに訊くと、ソウスケ先生は話した。

「アロマ草は、日陰に生える珍しい草で、花屋のララさんが、山でそれらしい草を見かけたそうですが、いまにも崩れそうな岩場の真下に生えていたそうで、とても取ることができない状態だったそうですぞ」

「それなら、私が取れるかもしれないわ。ネナちゃん、こんどそこへ行ってみよう」ミズホが笑顔で言うのと、

「ありがとう！ ミズホちゃん」とネナはうれしそうに言った。

「しかし、無理はいけませんぞ」ソウスケ先生が心配して言った。受け付けの順番が回ってきて、バブーレースのエントリーを二人はすませた。ミズホのバブーのゼッケンは六番になった。今回のレースの賞品は、一位が神話の復刻本、二位がおしゃれなデザインの豪華な石油ランプ、三位が丈夫な高級フライパンで、特別賞に木彫りの実物大バブー人形がもらえる。

一番から八番までのゼッケンをつけたバブーがスターティングボックスに入れられた。ミズホたちは、参加者専用の席で見守っている。

「ドキドキするね、ミズホちゃん」ネナがハラハラして言うと、「うん。でも、わくわくもするわね」とミズホがウキウキして言った。

そんな二人を横で見ていたソウスケ先生が笑った。

「よいい、ドン！」

とスターターの青年が言って、スターティングボックスの扉が開き、バブーたちが勢いよく走り出した。が、ミズホの六番バブーだ

けが走らない。

「ミズホちゃん、バブーが走らないわ！」ネナがあせって言った。
「走ってよ、バブー!!」

ミズホが大声で叫ぶと、彼女の六番バブーは突然ロケットダッシュし、猛スピードで爆走しはじめた。ほかのバブーの倍のスピードで突進している。場内がわきあがり、観客が総立ちになった。

「おお、速い、速い！」ソウスケ先生が声をあげた。

「いいぞ！バブー、その調子よ！」ネナが夢中になって声援した。
「がんばれバブー!!」ミズホが大はしゃぎで声援した。

ミズホの六番バブーは、あつという間にトップになり、ほかの七匹のバブーをどんどん引き離していった。

「絶対に一着よ！ミズホちゃん！」ネナが声を張りあげて言った。
「そうね！ネナちゃん！」ミズホは大よろこびした。

圧倒的な速さでトップを走って、ミズホの六番バブーはゴールインした。と思つたら、急ストップして、ゴール直前でお座りしてしまった。ミズホとネナは、ショックで目が点になった。

ミズホの六番バブーがのん気にお坐りしている間に、ほかのバブーたちは次々にゴールしていく。一位は三番バブー、二位は五番バブー、三位は八番バブー、四位は二番バブー、五位は七番バブー、六位は四番バブー、七位は一番バブーだった。そして、ミズホの六番バブーがやっと重い腰をあげて八位でゴールインした。

六番バブー奇跡の大敗北に、観客たちが拍手をしながら大爆笑した。ソウスケ先生も大笑いしたが、ミズホとネナに睨まれて即座に笑うのをやめた。

ミズホの六番バブーはレースを盛りあげたので、特別賞の木彫りの実物大バブー人形をもらうことができた。

「これが一番ほしかったの！」ミズホがうれしそうに笑顔で言った。
ネナは、ミズホが負け惜しみ^まを言つてると思つたが、決してそうではなかった。ミズホは本当にバブー人形がほしかったのだ。

家に帰ってから、アキラメナイを挿して棚に飾ってある変な形の花瓶の横に、バブー人形をミズホが飾ると、ネナが大笑いした。

「なんで笑ってるの？」ミズホが不思議に思つて訊くと、

「わ、笑つてないわよ」と言いながら、ネナはさらに笑つた。

変な形の花瓶にバブー人形という変な組み合わせが、ネナはおかしくてしうがなかつた。

その日の夕方、二人は北の川へやってきて、バブーを逃がしてやることにした。

ミズホがバケツからバブーを出して、川岸にそつと置いて言つた。

「じゃあね、元気でね、バイバイ」

ミズホとネナが帰る途中に川岸を振り返ると、バブーは二人のこ
とを見つめていた。

「あれ？ まだいるわ。ミズホちゃんのことか、好きになつちやつ
たんじゃない」

ネナがそう言い、ミズホと顔を見合わせて微笑^{ほほえ}んだ。

第21章 アロマ草を求めて

ララを訪ねて、ハービーにある花屋へミズホとネナは来ていた。ロブが言っていたとおり、彼女は長い黒髪で色白の美人だった。

「お礼を言うのが遅れましたけど、花をありがとうございました」ミズホが言っと、

「いいのよ。こちらこそ、奴隷になった両親を救ってくれてありがとう、ミズホさん」ララは上品な口調で言い、つづけて、「アキラメナイは気に入ってもらえた？」とたずねた。

「はい。素敵な花瓶に挿して、居間の棚に飾ってあります」

そうミズホが言っと、聞いていたネナが笑いそうになった。ミズホは、あの変な形の花瓶を本気で素敵だと思っているらしい。ララがあの花瓶を見たら、きつと驚くだろうとネナは思った。

「あの、ララさんがアロマ草が生えているのを見たって、ソウスケ先生さんから聞いたんですけど」ミズホが話すと、

「たぶんアロマ草だと思うけど、ちがうかもしれないわ」とララが答えた。

「私たち、そのアロマ草を取りに行きたいの。ララさん、生えていた場所を教えてちょうだい」ネナが言った。

「いまにも崩れそうな岩の真下に生えていたの。危ないからやめたほうがいいわ」

ララが忠告すると、ミズホが言った。

「私になんとかしますから、アロマ草の生えている場所を教えてください。もし、取れそうになかったら無理はしません」

ララはしばらく考えてから言った。

「わかったわ。でも、場所を説明してもわからないと思うから、私と一緒に行くわ」

「ありがとう、ララさん」

とネナが言って、ミズホとよろこんだ。

翌日、三人はハービーの町はずれまでミロのメルカに乗ってきて、そこから歩いて山の中へ入っていった。

「ララさん。この辺は怪物が出ないの？」ネナが訊くと、

「そんなに山奥まで行かないから大丈夫よ。それに、落石しそうな岩が多いから、怪物も怖くて近づかないの」とララが話した。

三人がやってきたのは、崖のような場所の下で、上には大きな岩が突き出し、いまにも崩れ落ちそうであった。小さな石は常に上からぽろぽろと落ちている。

「二人とも、岩が突き出している真下には、絶対に行ってはダメよ」ララが注意した。

「アロマ草はどこに生えてるんです？」ミスホが訊くと、
「あそこよ」とララは指をさした。

大きな岩がいくつもかさなつて突き出した場所の真下に、オレンジ色の変つた草が生えていた。そこには、三十センチぐらいの石が、上からときどき落ちてくる。

「やっぱりまちがえないわ。あの草はアロマ草よ。あの草はね、直射日光が苦手なの。だから、日陰になつているあんな場所に生えているの」ララはそう話し、つづけて、「でも、ミスホさん。どうやってあの草を取るつもり？」とたずねた。

「あそこへ行つて、普通に取つてきちゃいます。なんか、大丈夫そうない気がするわ」

ミスホが答えると、ララは落石したと思われる大きな岩を見て話した。

「それはダメよ。ミスホさん、あの岩を見て。私が、あそのそばで花を摘んでいただけで落ちてきたの。ちょっとした震動でも危険なのよ。真下にいたら死んでいたわ」

「二人はここで待つて。すぐに行つて草を取つてきちゃうから」ミスホは、アロマ草が生えている突き出した岩の真下まで行つてしまった。

「ミズホさん！ もどつてきなさい！」 ララが大声で言ったが、
「平気よ！ すぐに取っちゃうから！」 とミズホは言って、アロマ
草を取りはじめた。

その様子を心配そうにララとネナは見守っていたが、大きな岩が
落ちてくる気配は特になかった。

「大丈夫そうだよ、ララさん。私も行ってくる」 そうネナが言うと、
「ネナちゃんは、ここで待ってなさい」とララが言った。

しかし、ネナは言うことを聞かず、アロマ草が生えている場所へ
向かって歩きはじめた。そのとき、突き出した岩が地響きを立て
て崩れ落ち、巨大な岩が草を取っていたミズホを直撃し、下敷きに
してしまった。その震動で、ネナは尻もちをついた。

「たいへんだわ！ ミズホちゃんが……」 ララは両手で顔を覆った。
どうすることもできず、二人はミズホを押しつぶした巨大な岩を
ショック状態で眺めていた。正気にもどったララが、尻もちをつい
たまま動かないネナのところへ行行ってしゃがみ、話しかけた。

「私がいけなかったんだわ。ここに、ミズホちゃんをつれてきたか
ら……」

「ちがうわ！ 私が悪いの！ ママの病気を治したくて……」

そう言ってネナが泣き出すと、ララは彼女を優しく抱きしめた。

そして、ララがネナを支えるように、二人で立ちあがった。すると、
ミズホを下敷きになっている巨大な岩が、突然ぐらぐらと動き出した。
ララとネナは目を丸くして、その光景を見つめた。

「どっこいしょっと」 ミズホが巨大な岩を両手で持ちあげ、その下
から出てきた。

「ミ、ミズホちゃん！」 とネナが言って、泣き顔が笑顔になった。
ララは言葉を失い、驚愕した。

「どっこら、せつと」 ミズホは巨大な岩を横に置いてどかした。
ララとネナは胸を撫でおろし、ミズホのところへ駆け寄っていつ
た。

ミズホは二人のよろこぶ顔を見て、笑顔で言った。

「あーびつくりした！ 死ぬかと思ったわ」
「普通は死んでるけどね」とネナが言った。

優しく穏やかな香りのするアロマ草をたくさん手に入れた三人は、ハービーにあるソウスケ先生の病院へ向かった。病院といっても、ソウスケ先生が一人でやっていて、建物の大きさは普通の民家とさほど変わらない。ほとんどの治療は薬で行っているが、外科手術もできるようだ。

病院内へ三人が入ると、ソウスケ先生が出迎えてくれた。

「ネナちゃんにミズホさん、それにララさんまで。どうしたんです？」とソウスケ先生は言い、ネナの持っていたアロマ草がたくさん入っている籠を見て、「それは、もしかして、アロマ草ですか？」とたずねた。

すると、ララが確信を持って話した。

「そうです、ソウスケ先生。これがアロマ草です。私の祖父が一度だけ取ってきたことがありました。そのとき見たのと、まったく同じものですわ」

「初めて見ました。確かに薬草図鑑に載っていた絵と似てますな」
ソウスケ先生が、アロマ草を眺めながら言った。

「ソウスケ先生、これでママの薬を作って。お金はちゃんと払うわ」
ネナはそう言いながら、アロマ草が入っている籠をソウスケ先生に渡した。

「わかりました。やってみましょう。だけどネナちゃん、今回はお金はいりませんぞ。ただ、薬ができて、ママの病気が必ず治るとはかぎりませんぞ。いいですね」

ソウスケ先生が真剣な表情で言うと、ネナは静かにうなずいた。
「ネナちゃん、よかったね」ミズホが笑顔で言い、つづけて、「でも、ソウスケ先生さん。アロマ草を育てて殖^ふやすことはできないんです？」と訊いた。

すると、ソウスケ先生は話した。

「薬草図鑑によると、このアロマ草で万能薬ができるそうです。しかし、本当かどうかわかりませんな。もし、本当だったら、ミズホさんが言うように、育てて殖やせば、多くの人が難病から救われるでしょうな」

「私、やってみます」ミズホが言うと、

「いえ、私にやらせて、ミズホさん」とララが言った。

「それがいいですな。ララさんは植物に詳しいから、うまくいくかもしれませんぞ」ソウスケ先生が微笑んで言うと、

「それじゃあ、ララさんに任せます」とミズホは言った。

「よろしく願いますぞ」ソウスケ先生は籠からアロマ草を少し取り、ララに渡した。

「ソウスケ先生、薬はいつできるの？」ネナが訊くと、

「明日にはできると思いますぞ。できたら、ネナちゃんちへ行きま
すからな」

ソウスケ先生が言うと、ネナは期待で胸がいっぱいになった。

ソウスケ先生が作った薬を持って、ネナの家にやってきたのは夕方だった。それまでネナは、家の中をうろついたり、通りに出てみたり、病院へ行ってみようと思ったりして、一日を過ごしていた。母のサラは、そんなネナの行動を見て不審に思い、どうしたのかとたずねたが、彼女は理由を話さなかった。ネナは黙っていて、サラを驚かせたかったのだ。

一日に数回おそつてくる身体中の強烈な激痛、ベッドでサラがそれに耐え忍んでいるとき、ネナとミズホがソウスケ先生と一緒に寝室へ入ってきた。

サラが苦しんでいる様子を見て、ソウスケ先生はベッドに駆け寄った。

「サラさん、身体が痛むんですな。今日は薬を持ってきましたぞ。普通の薬ではありませんぞ。ミズホさんが、ネナちゃんと花屋のララさんと一緒に山へ行つて、命懸けで取ってきたアロマ草で作った

万能薬ですぞ」ソウスケ先生はカバンから液状の薬が入った小瓶を取り出し、蓋を開け、「さあ、飲んでください」と言って、サラに万能薬を飲ませた。

その薬は強い睡眠作用があるらしく、サラは何かを話そうとしたが、すぐに眠ってしまった。どれくらいの期間で薬が効くのかかわらないが、万能薬は強い薬のため、一度しか飲まないほうがいいらしい。だけど、一カ月以上しても薬の効果がみられなかったら、もう一度だけサラに飲ませてみよう、ソウスケ先生は話し、ネナの家から帰っていった。

サラが万能薬と呼ばれる薬を飲んでから一週間以上たっても、相変わらず彼女は激痛に苦しんでいるようであった。サラは身体がだいぶよくなったと言ったが、ミズホとネナは、自分たちの行為を無駄にしないため、サラが気を遣^{つか}っているのだと思った。

第22章 海と森で

清々^{すが}しい青空がつづいたある日、ミズホとネナはバンの中型帆船^{ちゅうがたはんせん}に乗せてもらって、海へ出た。帆船の周りには、首が二つあるウミナ^{ほほしう}の群れが飛んでいて、帆柱には鳥のような魚のトッコがたくさんとまっていた。

「とっても気持ちいい！ やっぱ海はいいわね」甲板からコバルト・ブルーの海を眺め、ミズホが深呼吸して言うと、

「ほんと、気持ちいいわ。でもミズホちゃん、バンさんたちのじやましちやダメだよ」とネナが言った。

「うん、じゃましないように仕事を見てるわ。バンさんたち、どんな魚を捕るのかな？」

ミズホが楽しみにして言うと、バンがやってきて言った。

「今日はモビューを捕るんだ。大漁だといいがな」

「バンさん。今日はね、私がお弁当を作ってきたから、みんなで食べてね」そうミズホが言って微笑んだ。

「おお、それは楽しみだ。うんと働いて、腹ぺこになるぞ」バンは笑顔で言った。

モビューは海底付近に生息する底生魚で、底引き網のようなもので漁獲^{ぎよく}する。リドとウッドが帆船の横から網を投げ込み、オスターが舵^{かじ}を取って、しばらく船を進めた。中央の帆柱の見張り台には、いつものようにマックが乗っていて、危険がないか海を見渡している。ミズホとネナはじやまにならない場所で、みんなの仕事を眺めていた。

「網をあげるーっ！」

バンが大声で言って、ケビン、リド、ウッドの三人が、甲板の上に網を引きあげた。

「捕れてる、捕れてる、大漁だわ！」ミズホが楽しそうに言った。

「モビューがあんなに入ってる！」ネナが笑顔で言った。

網の中には大漁のモビューのほかに、キマヌクというフグに似たソフトボールみたいな魚や、クツタというブーメランのような形の魚、それに、ケットンという顔が笑っていると思えないアンコウのような魚などが入っていた。

バンたちが甲板にしゃがみ、魚を種類別に分け、専用の木箱の中に入れる作業をはじめた。ミズホとネナも、それを手伝った。キマヌクを手にとったミズホは、その魚を甲板の上にコロコロと転がしてみた。

「ミズホちゃん。魚で遊ばないでね」

ネナに注意され、ミズホはキマヌクを木箱の中へ入れた。

「ネナちゃん。この魚、笑ってるわよ。何かいいことあったのかな？」

ミズホがケットンを持ってうれしそうに言うと、ネナは少し呆れて言った。

「魚が笑うはずないでしょ。笑ってるように見えるだけよ」

すると、リドが不思議そうに言った。

「でもさ、よく考えてみると、人間以外に笑う生き物っていないよな」

それを聞いて、ウツドが言った。

「リドの言うとおりだ。笑っているように見える生き物はいるけど、人間のように笑わないな」

魚を木箱に投げ込んでいたケビンが、手を休めて言った。

「考えたこともなかったけど、そう言われてみると、そうだな。ほかの生物は、よろこんだり、怒ったり、悲しんだりはするけど、笑うことはない」

すると、バンが言った。

「確かにそうだな。救世主のミズホちゃんなら、どうしても人間だけが笑うのか知ってるんだろ？ 教えてくれないか」

「も、もちろん知ってるわ。そ、それはね、人間は笑わないと危ないの。あんまり笑わない人は、脳みそが腐って、耳から流れ出した

り、口から内臓が飛び出して、どっかに歩いていつちゃうんだって」ミズホはいい加減なことを言った。

「耳から脳みそが流れ出す!？」リドが青ざめて言った。

「口から内臓が飛び出すだって!!」ウッドがおびえて言った。

「な、内臓が歩くのは怖いな……」ケ빈は恐怖で震えた。

「笑わないと危ないぞ!」

バンがそう言って、リド、ウッド、ケ빈たちは、いつせいに無理やり笑い出した。

「みんな楽しそうだね」ミズホが言うと、

「楽しそうには見えないわ」とネナが言った。

無理やり笑っていた四人は、だんだん情けなくなり、やがて泣きはじめた。

「あれ?　なんで泣いちゃったの?」ミズホが訊くと、

「知らない」とネナは、魚を木箱に入れながら答えた。

見張り台で海を眺めていたマツクが、バンたちの泣き声を聞いて、不思議そうに甲板を見おろした。操舵室そつたしつで舵を取っていたオスターは、前方から聞こえてくる謎の泣き声に首をかしげた。

魚を種類ごとに木箱に入れ終わったあと、ミズホはみんなに自分の作った焼きおむすびをくばり、ネナがお茶を入れた。バンたち六人は、魚を入れる木箱をさかさまにして椅子代わりに坐り、甲板で焼きおむすびを食べることにした。

「遠慮しないで食べてね」

ミズホがそう言うと、みんなは焼きおむすびを食べはじめた。けれど、彼女の力で握った焼きおむすびは、かたくて食べることができなかった。

「かたいな!　食えないぞ」マツクが焼きおむすびを何度もかじって言った。

「どうやって食うんだろう?」リドが焼きおむすびを見つめて言った。

「これ、ほんとに食いもんなのか?」オスターがとどめを刺した。

ミズホはすっかり落ち込んでしまった。

「失礼なことを言うな！　これはな、これは……なめるんだよ！」

バンが気を遣って言い、焼きおむすびをぺろぺろなめはじめると、みんなも彼の真似をして、焼きおむすびをなめ出した。

「バンさんたちって、おもしろいわね」ミズホがきょとんとして言った。

「なんか、かわいそうな気もするわ」ネナがつぶやいた。

数日後、ミズホとネナは、ロブに誘われて狩りについて行くことにした。ムタがあやつる二頭のメルが引く四輪の荷車に乗り、南の森へ向かっていった。

荷車に揺られながらミズホがたずねた。

「どんな動物を捕るの？」

「そうだな……、今日は、モリマルとビーリンを狙うとするか」ロブが弓矢を磨きながら答えた。

「それって、動物？　怪物じゃないの？」ミズホが訊くと、

「南の森には怪物は出ない。だから、動物たちがいるんだ」とロブが笑って言った。

「楽しみだね、ネナちゃん」

ミズホが言うと、ネナはうなずいて微笑んだ。

南の森に着いた四人は、獲物を探してゆっくりと歩いていた。

「しーっ！　静かに」ロブがそう言って立ち止まり、弓矢を構えた。ムタも弓矢を構えた。ミズホが周りを見渡すと、尻尾と耳が異常に長いウサギのような動物がいた。

「あれがビーリンよ」ネナが小声で教えた。

ロブが狙いをさだめ、矢を放つと、見事命中した。

「さすがだな、ロブ！」と言って、ムタがビーリンへ駆け寄り、耳を持って捕まえた。

そのあと、ロブとムタは二匹ずつビーリンをしとめ、全部で五匹を捕まえた。

「よし、二人もやってみな」

とロブが言つて、弓矢をミスホに渡した。ムタはネナに自分の弓矢を貸した。

「モリマルだ！」ムタがそう言つて指さした。

ミスホが見ると、カンガルーとシ力を合わせたような動物がうろうろと歩いていた。

「いいか二人とも、モリマルをよく狙つて矢を放つんだ」ロブが指導した。

「ダメだわ。かたくて弓を引けない」ネナが矢を放とうとしたが、うまくできなかった。次に、ミスホがやろうとして弓を軽く引くと、弓矢はぶつ壊れてしまった。

「あつ！ ごめんなさい、ロブさん」

「弓矢を壊すとは……。しかし、本当にすごい力だな、ミスホさん」ロブが言つと、

「人食い怪物のグーボをぶん投げるくらいだから、弓矢なんか簡単に壊せるよな」とムタが言つた。

「弓矢を貸してくれないか」ロブはネナにそう言つて、弓矢を受け取り、モリマルへ狙いをさだめた。

「子供がいるわ！」ネナが指さして言つた。

二匹の小さなモリマルが、ロブが狙いをさだめている親のモリマルのそばへ駆け寄つていく。

「かわいそうだから、やめよう」ロブが弓をおろして言つた。

「ロブさんて、優しいのね」ミスホはロブに見とれてしまった。

「いつもなら、平気で殺してるのにな」

ムタがつぶやいたが、ミスホにはまったく聞こえてなかった。

「おい、ムタ。この弓矢、俺に貸してくれ」ロブが命令するように言つた。

「どうぞ、どうぞ。俺よりロブのほうが腕がいいからな」とムタが言つた。

「あの、ロブさん。弓矢は、きっと弁償しますから」ミスホが言う

と、

「そんなこと、どうでもいいよ」とロブが言って微笑んだ。

ミズホは恥ずかしそうに、ロブへ微笑み返した。ネナはそんなミズホを見て、いつもとちがうような気がした。

四人がほかの場所に移動するため、森の中をゆっくり歩いていると、二本の長い牙が口から出ている三毛猫のような毛色のトラに似た動物と遭遇した。

「まずいな、ムッサーロがいる」ロブが真剣な表情で言った。

ムッサーロは背中を反って、両前足の爪で木を一生懸命に引っ掻いていたが、四人に気づき、唸るような鳴き声を出し、警戒しながら近づいてきた。ムッサーロの好物はビーリンなので、ムタが持っていた五匹のビーリンを狙っているようだ。

ロブが弓矢を構えると、ムッサーロはゆっくりと近づいてきて、突然ダツシュし、四人へ向かってジャンプした！ その瞬間、ロブが矢を放ち、ムッサーロの胸に命中した。地面に転がり、苦しんで暴れ回るムッサーロへ、ロブはつづけて矢を三本放ち、息の根を止めた。ミズホはロブの勇士に、思わずうっとり見とれてしまった。

「すごい収穫だ！ ムッサーロの毛皮は高く売れるぞ」ムタがそう言ってよろこんだ。

「ロブさんは、結婚してないの？」ミズホがロブを見つめてたずねると、

「結婚どころか、彼女もいないな」とロブは答えた。

ミズホはうれしくなって、胸がときめいた。

ロブとムタは、もう少し付近を見回ってくるから、捕った獲物を見張っててくれと言って、どこかへ行ってしまった。ミズホとネナは言われたとおりに、ムッサーロと五匹のビーリンを見張って、二人の帰りを待つことにした。その間、二人は爬虫類や昆虫を見て楽しむことにした。

変な爬虫類がたくさんいて、ミズホは大笑いした。ヘビのようなポケッコは、なぜか両手がついていて、ミズホとネナを見ると、あ

せって逃げていった。トカゲに似たオヨヨンは、ミズホが手でさわっても平然としていた。カメのようなフミフミは、二足歩行で歩き、顔がペンギンに似ていて、意外に足が速かった。

変な昆虫も多くの種類がいた。カブトムシのようなキノキナムシとクワガタのようなチケトケムシは、二足歩行で歩くこともできる。蝶ちょうびのようなヒラフラは、いろんな種類が飛んでいた。サザベムシはバッタとセミの中間のような虫だった。テントウムシに似ているヤラヨレは、背中に渦巻き模様があった。二足歩行で歩くアリのようなマシマシは、きれいにならび、大群で歩いている。カタツムリに似ているヌンヌムシは、手足があつて、両手で器用にエサを食べていた。トンボに似たユラガムシは、羽がヘリコプターのように回っている。そして、クモのようなコセコサは、糸で芸術的な巣を作っていた。

ネナが、木にとまっていたツノが大きいキノキナムシを捕まえて言った。

「ほら、このキノキナムシ、大きいわ。そうだ、ミズホちゃん。虫ゲンカやろう」

「虫ゲンカ？ 何それ？」ミズホが訊くと、

「キノキナムシか、チケトケムシを捕まえて、ケンカさせる遊びよ」とネナが説明した。

「でも、ケンカはよくないわ」ミズホが言うと、

「遊びだつて。終わったら、逃がしてあげるの」とネナが言った。

「わかったわ。私も虫を捕まえてくる」

ミズホは虫を探しに行き、大きなハサミの強そうなチケトケムシを捕まえてきた。

「見て、ネナちゃん。捕まえてきたわ。強そうでしょ、このチケトケムシ」

「ほんとだ。でもミズホちゃん、私のキノキナムシのほうが絶対に強いよ」

「私のチケトケムシだって負けないわ」

虫ゲンカをやるため、ネナが小枝で地面に円を描いた。

「この丸い線から出たら、負けだからね。さあ、ミズホちゃん、この中へ虫を入れて」

二人は円をはさんで向き合ってしゃがみ、虫を円の中に入れた。すると、ネナのキノキナムシとミズホのチケトケムシは、六本ある脚のうち、一番後ろの二本脚で立ちあがって歩き出し、お互いに近寄って闘いはじめた。ミズホは、二匹の虫がツノやハサミで闘うのかと思っていたが、前脚で殴り合ったり、取っ組み合ったりしている。

「なんで、なんで？ どうしてツノやハサミを使って闘わないの？」ミズホが疑問に思っというと、

「たぶん、危ないからじゃない」とネナが答えた。

「あ、そっか。ケガしたら痛いものね」とミズホは納得した。

キノキナムシとチケトケムシが、殴り合ったり、取っ組み合ったりして、円から出そうになるたびに、ミズホとネナは興奮して声援を送った。

しばらく闘っていた二匹の虫は、抱き合うような感じで取っ組み合ったまま、突然飛んでいってしまった。

「あら！ 飛んでいっちゃった！」ネナが言った。

しゃがんでいた二人は立ちあがり、抱き合ったまま飛んでいくキノキナムシとチケトケムシを見あげた。

「きつと、ケンカしているうちに、仲よしになっちゃったのね」

そうミズホが言っで、ネナと二人で楽しく笑った。

「ミズホちゃん、ロブさんのことが好きになっちゃったの？」唐突にネナが訊いてきた。

そのとおりだったから、ミズホはあわてて何も言えなかった。すると、ネナが話した。「あのね、この前、アロマ草の生える場所を教えてくれたお礼に、花屋のララさんのところにお菓子を持って行ったの。そのときね、知らないお姉さんがララさんに相談してたのよ。そのお姉さんはね、ロブさんに捨てられたんだって。ララさ

んが言つてたけどね、ロブさんて、三人も四人も女の人がいるんだつて。みんな騙だまされてるんだつてよ。だからララさんは、そのお姉さんに言つてたの、『ロブと別れてよかった。もっといい人を見つけないさ』つて。ほんとなんだから」

「そんなことないわ。ロブさんはいい人よ。さっきだつて、子供がいるモリマルを助けてあげたじゃない」ミズホが言うと、

「でもね、ララさんが嘘うそを言うはずないわ。知ってるでしょ、ララさんはロブさんと幼なじみだったのよ。だから、ロブさんのことをよくわかつてるんだと思うわ」とネナが話した。

「ララさんの勘ちがいよ。ロブさんは、そんな人じゃないわ」ミズホが言った。

「勘ちがいじゃないわ。だつて　「ネナが言いかけたが、ロブが一匹のモリマルを担いで、ムタと一緒にもどつてきたので、途中で話すのをやめた。」

「モリマルを捕つてきた」ロブが得意な顔で言った。

「今日は、もう充分だ。帰ろう」ムタが言った。

ロブが捕つてきたモリマルは、あの子供がいたモリマルだったが、ミズホとネナは気づかなかった。

第23章 偉大な救世主

ミズホは昨日買った新しい弓矢を持って、穏やかな夕日が照らすハービーの住宅街を一人で歩いてた。壊してしまったロブの弓矢を返すためだが、本当の目的は、ただ彼に逢いたかっただけである。夕食の支度をする匂いが、それぞれの民家から爽やかな風とともに漂ってきて、町の匂いとまざり合い、とても幸せないい匂いがして、ミズホのときめく至福感をさらに倍増させてくれた。

この辺りにロブの家があるとわかっていたが、どこにあるのかミズホは正確な場所を知らなかった。彼女は近所の人になぞねながら、やっとロブの家の前にやってきた。

そして、ミズホが大きく深呼吸してドアをノックすると、家の中からロブと同年代ぐらいで感じの悪い女性が出てきた。

「あの、ここはロブさんの家ですか？」ミズホはかなり驚いて訊くと、

「あんだ、誰よ？ 私の彼に何か用なの？」と彼女は言った。

ミズホはショックで頭が一瞬真っ白になったが、弓矢を彼女に手渡しながら言った。

「こ、これ、ロブさんに渡しておいてください。渡せばわかりますから」

「あんだ、名前ぐらい言ったらどうなの！」

「私は……、ミズホといいます」

「ミズホ？ どこかで……。もしかして、救世主のミズホ様！！」

あ、あの、どうぞ中へ入ってください。ロブはいますから」彼女は急に態度を変えて言った。

「いいえ、私、帰ります。その弓矢をロブさんに渡してください。お願いします」ミズホはそう言って、早足でその場を立ち去った。ネナの話しを信じなかったことを反省し、ミズホは自分が情けなくなり、悲しくなって歩いていると、ロブが走りながらあとを追っ

てきて、息を切らせながら言った。

「ミズホさん、弓矢をありがとう」

「私が壊したから、弁償しただけです。それじゃあ私、帰ります」

ミズホはそう言って、すぐに帰ろうとした。

「待ってくれ！ 怒ってるのか？」 ロブがあわてて言うのと、

「別に、怒ってなんかないわ。ただ、ロブさん、女の人を騙すのはよくないと思うわ」とミズホが言った。

「あ、ああ、そうだな……」

ロブが謝ろうとすると、ミズホは先へ歩いて行ってしまった。ロブはミズホのあとをそれ以上追わず、帰っていく彼女の後ろ姿を茫然と眺めていた。

ルーシーにミズホがもどってきたときは、すでに日は沈み、夜になっていた。ミズホはぼんやり考えながら、月明かりに照らされた町を家に向かって歩いていった。そして、森でロブが『結婚どころか彼女もいないな』と言ったことを思い出し、ミズホは突然腹が立ってきて、地面に転がっていた石ころを蹴飛ばした。すると、その石は民家の壁に直撃し、大きな穴をあけてしまった。

「たいへん！ どうしよう……逃げよつと」ミズホは、走って家に帰ってしまった。

家に着いたミズホが中へ入ろうとすると、ネナが自分の家から出てきて話しかけた。

「ミズホちゃん、遅かったね。ロブさんち、わかった？ 新しい弓矢、よろこんでた？」

ミズホは黙って、とりあえずうなずいた。

「どうしたの？ 何かあったの？」ネナが心配そうに訊くと、

「なんでもないわ。ちよつと疲れちゃった」とミズホは答えた。

「ご飯を食べにすれば。私とママは、もう食べちゃったけどね」

「おなか空いてないから今日はいい。なんか眠いから、お風呂に入って早めに寝たいの。おやすみ、ネナちゃん。また明日ね」

ミズホは寂しそうに家の中へ入っていった。ネナは心配してミズ

ホの家に入ろうとしたが、やっぱり一人にしてやろうと思い、自分の家にもどった。

早く寝たわりには遅く起きてしまったミズホは、顔を洗って居間へ行くと、テーブルの上にネナが用意してくれた朝食のパンが載っていた。ミズホはネナの優しさをありがたく思い、元気を取りもどすことができた。

居間の窓からミズホが外を見ると、ネナが荷車に五個のバケツを積んでどこかへ行こうとしていた。ミズホは窓を開け、ネナに声をかけた。

「ネナちゃん。原油を取りに行くの？」

「あ、ミズホちゃん、おはよう。うん、原油の泉へ行くのよ」とネナは笑顔で言った。

「私も一緒に行くわ。ちょっと待ってて」ミズホが言うと、

「一人で大丈夫よ。バケツは五個しか持って行かないし、怪物のナーナも手伝ってくれるから。たまに一人で行ってたんだ」とネナは言った。

「そうだったの。でも、今日は私も行く。ほんのちょっと待ってて」そして、ミズホはすぐに準備をして、パンを食べながら、急いで家から出てきた。二人はバケツを荷車にもう五個積んで、全部で十個積み、出かけていった。

ミズホが荷車を引きながらネナと一緒にルーシーの町を歩いていると、一件の民家に三十人くらいのひとだかりができていた。そこは、ミズホが昨日の夜、石を蹴って壁に穴をあけてしまった家だった。

「何かあったのかな？」ネナがひとだかりを眺めて言った。

「なんでもないわ。きつと、気のせいよ」昨夜のことを思い出したミズホは、少し早足になって荷車を引いた。

「気のせいじゃないわ。だって、あんなに人が集まってるもん」とネナが言った。

「早く行こうよ、ネナちゃん」ミズホが言つと、

「見に行くの？」とネナが訊いた。

「ちがう、ちがう、原油の泉によ」ミズホはあせつて言った。

すると、ひとだかりから太っちょのおじさんが、二人のところへやつてきて言った。

「ミズホさん、救世主様、不思議なことが起こったんです。ちよつと来てくれますか」

太っちょのおじさんが、ミズホを強引にその民家の前までつれて行ってしまったので、ネナもついて行つた。

「ミズホさん、見てください！ 昨日の夜、うちの壁に突然こんな大きな穴があいてしまったんです」太っちょのおじさんが、鼻息を荒くして言つた。

「こ、これは、ひどいわ。いったいどうしたのかしら？ ちよつと私が見てみます」ミズホはそう言つて、穴のあいた壁を丹念に調べるふりをした。

「ミズホちゃん。見てわかるの？」ネナが訊くと、

「ごめん、ネナちゃん。ちよつと話しかけないでね。いま、集中してるから」とミズホは言つて、どうやってごまかそうか必死に考えていた。

民家に集まっていた人たちは、彼女のデタラメな現場検証を静かに見守っていた。

「わかつたわ！ これは、隕石いんせきの仕業しわざね」ミズホは名案だと思つて言つた。

「隕石ですか！？ なるほど、そういうことですか。こないたずらをする人間なんか、いるわけがないと思つた」太っちょのおじさんは納得して言つた。

「そ、そうでしょ……」

ミズホがちよつと後ろめたく言つと、太っちょのおじさんが話した。

「隕石でよかつた。こないたずらをする奴がいたら、怖いですか

らね。だけど、そんな奴がいたら顔でわかる。きっと、ものすごくヘンな顔をしていますよ」

「そうともかぎらないわ。もしかすると、すごくかわいくて、とっても素敵な女の子かもしれないよ」ミズホが言うと、

「いや、いや、それはないです。こんなことする奴は、笑っちゃうほどヘンな顔で、くそたらしめるような野郎ですよ」と太つちのおじさんが言った。

「く、くそなんてたらさないわ！ 失礼なおじさんね！」ミズホが怒って言うと、

「え？ あの、ミズホさんのことじゃないですけど……」と太つちのおじさんが言った。

「あたりまえです。私のはずないです、そんなの。とにかく、これは隕石なんです。でもおじさん、運がよかったですね。普通だったら家ごとつぶれてますよ」

「そうですか、よかった。それに、原因がわかってすっきりしました。さすが救世主様、ありがとうございます」

太つちのおじさんが感謝すると、ミズホが言った。

「この壁の修理代は、私が払います」

「とんでもない、そんなこと！ 気持ちだけでけっこうですよ、ミズホさん」太つちのおじさんが言うと、

「いいえ、私が修理代を払います。この隕石は、宇宙からやってきました。宇宙を代表して、私が責任を取ります」とミズホが言った。「壁の修理代なんて大したことないですから自分で払います。そこまで救世主のミズホさんに迷惑をかけたくありません」

「いいえ、私が払います」

「気を使わないでください。自分で払いますから、本当にけっこうです」

「ダメです！ 私が修理代を払います！」

「心配しないでください、ミズホさん。修理代は自分で」

「私が弁償します！ でないと、この家を壊します！」

「なんで!？」太つちよのおじさんは驚いて言った。

結局、ミズホが修理代を払う約束をしたが、彼女が壁に穴をあけたのだから当然だ。

ミズホとネナが原油の泉へやってくると、怪物のナーナがうれしそうに近づいてきた。二人はナーナに手伝ってもらい、原油を取りはじめた。

「あのさ、ネナちゃん。私、ロブさんのこと好きじゃないからね。ただ、そんなに悪い人じゃないと思っただけよ」すくい棒でバケツに原油を入れながらミズホが話した。

ネナは何も言わずに、目を合わさないミズホを見つめて優しく微笑んだ。

原油を取り終わると、いつものようにナーナは尻尾で荷車を道端まで運んでくれた。そして、ナーナと別れ、二人はルーシーへもとり、家に帰る前に石油精製所のゴンタのところへ行って原油を売った。

「いや、助かったぞ、ネナちゃんにミズホちゃん。一週間くらい前から、ブルの貨物船がまったく来なくなつて、原油が手に入らなかつたんだ。蓄^{たくわ}えておいた原油も底をつきそうだったから、心配していたところだったんだ」ゴンタはネナにお金を手渡しながら、安心したような表情で話した。

「ゴンタおじさん、それなら自分で原油の泉へ行つて、原油を取ってくればいいのに」ネナが言うつと、

「この前、実は行つたんだ。そしたら、ナーナがすごい勢いで近づいてきたんで、危ないと思って帰ってきたんだ」とゴンタは言つて、頭を掻いて笑つた。

「ナーナは人をおそわないわよ」ネナが言った。

「しかし、ナーナは俺を見つけると、突進してきたんだ。あの走り方は普通じゃなかつたぞ。二人も気をつけろな」とゴンタは話した。「きつとナーナは、ゴンタさんを手伝いたかつたんだわ」

ミズホがそう言うと、ゴンタは大笑いして言った。

「怪物が手伝ってくれるわけないぞ！ ミズホちゃんはおもしろい救世主様だな」

「私たちが原油を取るのを、ナーナは手伝ってくれるんですよ。私たち、ナーナと仲よしなんです。ね、ネナちゃん」

そうミズホが言うと、ネナはうなずいて微笑んだ。するとゴンタは、また大笑いして言った。

「仲よしか、それはよかったな。しかし、ナーナだって怪物だ、二人とも原油の泉に行くときは、充分注意しないとダメだぞ」

ゴンタは、ミズホの話をほとんど信じていなかった。

二人がゴンタの石油精製所を出ると、ネナは荷車を引いて家に帰り、ミズホは原油を売ったお金を半分持つて、修理代を払うため、壁に穴をあけてしまった太っちょのおじさんの家へ向かった。

家に着いたネナが寝室へ入ると、ベッドで寝ているはずのサラの姿がなかった。パジャマが枕元にたたんで置いてある。ネナは、サラがどこかで倒れているのではないかと心配になり、あわてて家の中を搜した。

「ママ！ ママ！ どこにいるの！」

ネナが叫ぶように呼ぶと、サラは普段着で台所のほうから居間にやってきた。

「お昼ご飯の支度をしてたのよ」サラが笑顔で言うと、

「ママ、寝てないとダメじゃない」とネナは言い、元気そうなサラの笑顔を見て、「もしかして、ママ、治ったの！？」と驚いて訊いた。

「そうよ、ネナちゃん！ 信じられないけれど、まったく身体が痛くないのよ！」そう言ってサラは、うれしそうに微笑んだ。

「ママ、よかったね！ ミズホちゃんがアロマ草を取ってくれたおかげだね」

ネナはサラに抱きつき、よろこんだ。

「そうね、ミズホちゃんに感謝しないと。ミズホちゃんはどこへ行

ったのかしら」

サラが言つと、ネナは抱きつくのをやめて言った。

「壁の修理代を払いに行ってるわ」

「ミズホちゃんが壊しちゃったのかしら？」サラが訊くと、

「隕石がぶつかって壊れたんだって。宇宙の責任を取って、ミズホちゃんが修理代を払うんだって」とネナが教えた。

「まあ、そうなの。本当にミズホちゃんは立派な救世主なのね」サラは感心して言った。

アロマ草には人間の免疫力を数十倍も高める効果があり、それによつてサラの病気は完全に治ったのであつた。

翌日、朝食をすませると、サラが外出したいと言つて、ネナとミズホの三人で出かけることにした。

三人は楽しく散歩しながら神殿までやってきて、中に入つていった。サラは祭壇に向かつて祈り、病気が治ったことや救世主のミズホが来たことを神に感謝した。

それから三人は、ハービーまで歩いていき、ミロのあやつるメルカを拾い、それに乗ってソウスケ先生のところへ行つた。病院の前には大勢の人たちが押し寄せて、ソウスケ先生と話をしていた。ミズホたちはメルカからおりて、人々をかき分け、ソウスケ先生のところまで行つた。

「どうしたんですか、ソウスケ先生？」

サラがたずねると、ソウスケ先生は笑顔で話した。

「おお、サラさん！ やっぱり治ったんですな。ここに集まっている方々も、あの薬で病気が治ったそうですぞ。数日前から、この調子で人がやってきて、私に朗報を知らせてくれるんです。病院には入り切れないから、ここで対応しているところなんですぞ」

「こんなにたくさんの方が、私と同じ病気で苦しんでいたんです？」サラが訊くと、

「いえ、あの薬は万能薬ですから、ほとんどの病気に効くみたいで

すな」とソウスケ先生が言った。

「ソウスケ先生さん。花屋のララさんは、アロマ草を育てることができたんですか？」

ミズホが訊くと、ソウスケ先生は話した。

「はい、順調に育っているそうですぞ。もう、危険な場所へ取りに行く必要はないでしょうな。ミズホさん、あなたは私たちをバドルの支配から救ってくれただけでなく、病気で苦しむ人までも救ってくれましたな。ありがとう、救世主様」

「私はアロマ草を取っただけです。薬を作ったのは、ソウスケ先生さんですから、みんなを救ったのはソウスケ先生さんです」ミズホが言うと、

「それはちがいますぞ。アロマ草がなければ薬は作れませんからな。あなたは偉大な救世主ですぞ」とソウスケ先生は断言した。

病院の前に集まっていた人々も、ミズホに感謝し、「救世主様、ありがとうございます」とみんなで声をかけた。

ソウスケ先生と別れたあと、メルカに乗って三人は広場へ行き、遊ぶことにした。

ネナとサラが楽しそうに戯れる光景を眺めて、ミズホは地球のおばあちゃんのことを思い出し、かなり寂しくなった。そこへ、いつの間にかコウサクじいさんが来て、ミズホに話しかけた。

「ミズホさん、万能薬のこと、ソウスケ先生から聞きましたよ。サラさんも病気が治ったようですね」

楽しそうに遊ぶネナとサラを眺めながら、ミズホが微笑んでうなずくと、コウサクじいさんはつつけて話した。

「ミズホさんは、私たちを救ってくれました。それなのに、私たちはミズホさんに何もしてやれません。もし、私たちにできることがありますしたら、なんでも言ってください」

「コウサクおじいさん、ありがとうございます。でも、私は、ネナちゃんやサラさん、それに、たくさんの人たちから親切にしてもらってます。それで充分なんです」

そうミスホが言うと、コウサクじいさんは心を込めて言った。

「ミスホさん、私は長生きをして本当によかったです。救世主がやってきた時代に生きられて、とても幸せです」

ミスホとコウサクじいさんが、ネナとサラの戯れる様子を眺めていると、ランドが深刻な表情で走ってきて、息を切らせながら言った。

「ミ、ミスホちゃん。た、たいへんだ、ゾルデたちがやってきた！」「ゾルデって？」

ミスホが訊くと、ランドが話した。

「バドルの部下で、特使の中で一番偉かった奴だ。ほかの奴らも来てる。奴らは、貨物船の船長のハンスさんをブルからつれてきて、神殿の庭で殴ってるんだ」

「バドルは死んだと聞きましたが？」コウサクじいさんが言った。

「ええ。だが、こんどは本物の神をつれて来たと言ってるんだ」とランドが言った。

遊んでいたネナとサラが、ミスホたちのところに駆け寄ってきた。

「どうなの？ ミズホちゃん」ネナが訊くと、

「なんかね、ブルから本物の神様が来て、貨物船のハンスさんを殴ってるんだって」とミスホが教えた。

「本物の神様なんて嘘よ。救世主はミスホちゃんだもん。それに、神様がどうしてハンスさんを殴るのよ」

ネナが怒ったように言うと、ランドが話した。

「殴ってるのは、特使だった奴らなんだ。本物の神とかいう奴が、命令してやらせてるんだ。奴は、救世主のミスホちゃんをつれてこないと、ハンスさんを殺すと言ってる」

「それはたいへん！ すぐに行きましょう」ミスホが言うと、

「きつと大丈夫、救世主のミスホちゃんが負けるはずないもん」とネナが笑顔で言った。

ミロがメル力を磨いていると、ミスホたち五人があわただしくやってきた。

「おや、もう帰るのか？」

ミロが訊くと、ランドが険しい表情で言った。

「お願いだミロさん！ 大至急、^{だいしきゅう}神殿に行ってくれ！」

五人はメルカに乗り込み、神殿へ向かった。

第24章 それでも、あなたは救世主

ブルから来たのは、ゾルデ、ジゼム、ガル、ベイ、ゲン、レス、そして、神を名乗る男の七人と、彼らにつれてこられたハンスだった。

神殿の庭でハンスは、ジゼム、ガル、ベイ、ゲン、レスの五人に殴られ、ぐったりしていた。神を名乗る男とゾルデが、冷酷にその様子を見ている。神殿の庭には大勢の人々が集まり、不安な表情でブルから来た連中を眺めていた。その中には、バンたち漁師仲間や、ロブとムタなどの姿もあった。

見かねたバンが、勇気を出して彼らの前へ行き、怒鳴った。

「やめるんだ！ こっちには、救世主がいる。お前らなんか、相手にならないぞ。それでもいいのか！」

ジゼムたちがハンスへの暴行をやめ、バンを睨んだ。そして、ゾルデがバンの前にやってきて言った。

「その救世主はどこにいるのだ？ 救世主など怖くない。私たちに、本物の神がついてる。神に勝てる者などいない」

ゾルデはバンの胸ぐらをつかみ、背負っていた鞘から長剣を抜き取った。そのとき、ミスホの声がしてきた。

「やめなさい！」

神殿の庭にいた大勢の人々が、「救世主様が来た」と言って、不安な表情が明るくなった。ミスホがゾルデのところまで行くと、彼はバンの胸ぐらから手を放し、ミスホを睨みつけた。

バンが漁師仲間がいる場所にもどると、ミスホをつれてきたランドや、一緒に来たネナとサラ、そしてコウサクじいさんもそこにやってきた。

「もう、大丈夫よ」ネナが言うと、

「ああ、これで安心だな」とケビンが言って微笑んだ。

「あいつら、いい気になって、後悔するぞ」マックが言った。

「そうだな。懲^こりない奴らだ」

リドがそう言うと、オスター、ウッド、バンが大きくうなずいた。メル力をあやつってミズホたちを乗せてきたミロは、ロブとムタのところに来て話しかけた。

「本物の神様が来たって？」

「あ、ミロさんか。自分のことを神だとか言う奴は、偽者に決まってる」

ロブがそう言って、ムタが鼻で笑った。

ミズホは、ジゼムたちに殴られて傷ついたハンスを見て言った。

「ひどいわ、こんなことして……。やつつけちゃうわよ」

ミズホがゾルデを睨み返すと、神を名乗る男がゾルデをどかし、彼女の目の前に来た。

「あなたが、本物の神様とかいう偽者ね。暴力反対よ、覚悟しなさい！」

そうミズホが言って、神を名乗る男を勢いよく殴った。が、その男はミズホの右ストレートを左手で簡単に受け止めてしまった。ミズホは動揺し、神を名乗る男をよく見てみると、その顔に見おぼえがあった。

「そうか、お前が救世主だったのか。勉強できない、運動もダメ、去年まで鼻水をたらしていたバカ、お前が救世主とはな。笑わせるぜ、ハナミズホ」元海兵隊、対テロ特殊部隊に所属していた武藤ダイキが、ミズホの右腕をつかんだまま話した。

ダイキはスペースシップが爆発する直前にライフポッドへ乗り込むことができ、ミズホと同じようにこの惑星に来ていたのだ。この星に文明があるとは気づかず、彼は最近まで森で生活をしていた。しかし、ダイキはついにプールを発見し、たった一週間で天下を取ってしまったのである。ダイキは頭腦的にも肉体的にも、ミズホとは比べものにならない優秀な地球人だ。それどころか、地球人類の中でもエリートの中のエリートだ。彼がこの惑星を支配すれば、まちがいなくやりたい放題だろう。

ダイキは迷彩服の上から、この文明のコートを着ている。そして、短髪だった髪は長髪になり、もみあげからつながった顎髭あごひげと口髭をのばし、かなり人相が変わっていた。

「この星でお前が救世主になれるなら、俺は神を超越ちようえつできる存在になれる。惑星をまるごと支配するという俺の夢が叶かなうぜ。ハナミズホ、俺と一緒にこの星を支配しようぜ」

ダイキの言葉に、ミズホは黙って首を横に振ると、彼はつづけて言った。

「ハナミズホ、お前は必ず俺と一緒にこの惑星を支配する。それしか、お前が生き残る道はない」

それでもミズホは首を横に振り、ダイキにつかまれている腕を抜き取ろうとしたが、無駄だった。

「やっぱり、お前はバカだぜ」そう言っただけでダイキは、ミズホの頬をめがけて腕を振りおろすようにぶん殴り、彼女を地面に叩たたきつけた。ゾルデたちが勝ち誇ったように笑っている。見守っていた大勢の人々に緊張が走った。ロブとムタは顔を見合わせ、言葉を失った。

コウサクじいさんが眉間みけんに皺しわを寄せた。バンたちが恐怖で硬直した。ネナとサラが口に手をあて、愕然がくぜんとした。みんなが信じた無敵の救世主が、一撃で負けてしまったのだ。

みじめな姿で地面に倒れているミズホは、口と鼻から血をたれ流している。忘れかけていた激痛に遠のく意識の中で、最低の人生がミズホの脳裏のうりにフラッシュバックしてきた。

何をやってもダメなミズホは、殴なぐられたり、蹴けられたり、嫌いやがらせを受けたり、バカにされたり、笑われたりして、いつもいじめられ、いつもケガして、いつも心と身体に傷を負っていた。彼女は幼くして生きること疲れ、生きている意味がないように感じられた。運動会の徒競走とぎょうそうで、いつもびりの六位だったミズホは、小学四年生のとき、運動会を見に来たおじいちゃんとおばあちゃんをよるこばせるため、一度でいいから徒競走で五位になりたいと思った。お

じいちゃんとおばあちゃんよろこぶ笑顔が見たい。それが、幼いミズホの夢だった。

「先生、私、五位になるのが夢なの。どうしたら、足が速くなれるの？」ミズホが先生に相談すると、

「一生懸命努力して、毎日、毎日、走れば、きっと足が速くなつて、五位になれるわ。努力すれば、必ず夢は叶うのよ」と女の先生は教えた。

その日から運動会の日まで、毎日ミズホは自分の家の近所を走つた。近所に住む同級生のおばさんが、彼女の走る姿を見て首をかしげた。勉強も運動もできない子として、ミズホは近所でも有名だったからだ。

運動会当日、ミズホはこの日まで一生懸命に努力した。一位どころか四位だつて夢の夢。でも、たった一度でいいから五位になりたいたと彼女は思った。

そして、運命のスタートが切られ、ミズホは自分の出せる力をすべて出して走つた。しかし、彼女はほかの五人からすぐに引き離され、とても追いつくことができない。ミズホは走り終わる前から涙があふれ出し、泣きながらびりの六位でゴールインして、全校生徒とその親たちの笑いものになった。ミズホの経験は、『努力すれば必ず夢は叶う』という言葉を、信じることを難しくした。

昼休みに、おじいちゃんとおばあちゃんは、ミズホを優しく励ました。しかし、三人でお弁当のおむすびを食べていると、斜め後ろでお弁当を食べていた、近所に住む同級生のおばさんの声が聞こえてきた。

「どんなに努力しても、ダメな子は、やっぱりダメなのね」

その言葉は、ミズホにとって、『努力すれば必ず夢は叶う』なんて言葉より、遥かに説得力があった。

近所に住む同級生のおばさんの名言を、おじいちゃんとおばあちゃんに聞こえないふりをして優しく微笑んでいた。そして、小さな夢を叶えることもできず、体操服を着てちょこんと正座し、おむす

びを食べる幼いミスホは、風が吹いただけでどこかへ飛んで行きそうだった。

どのくらい眠っていたのだろう。知らない部屋のベッドで目覚めたミスホは、寢言のようにつぶやいた。

「ダメな子は、やっぱりダメ……」

コウサクじいさんとネナ、それにソウスケ先生とサラの四人が心配そうに、ベッドに横たわるミスホを見つめていた。彼女の口もとには、ダイキに殴られたときの青痣あおあざがくつきりと残っていた。枕元には、ネナが持ってきてくれた、アキラメナイが挿さしてある変な形の花瓶と、木製のバブー人形が置いてあった。

「気がつきましたか、ミスホさん。よかったです。本当によかったです」コウサクじいさんが静かに言った。

「死んじやったかと思った……」ネナが安心した表情で言った。

「もう大丈夫ですな。しかし、無理はいけませんぞ、ミスホさん」ソウスケ先生が微笑んで言った。

「ここは、どこですか？」ミスホが訊くと、

「コウサクさんの家よ。心配しないで、ゆっくり休むのよ」サラが優しく言った。

ダイキに殴られ、気絶してしまったミスホは、ミロのメル力でコウサクじいさんの家まで運ばれたのであった。

ネナがあわてたように話し出した。

「でも、ミスホちゃん、たいへんなのよ。ミスホちゃんが、あの人たちの仲間にならないと、五人のひとを神殿で殺すんだって。ミスホちゃんが仲間になるまで、毎日五人ずつ殺していくんだって」

「ネナちゃん。いまはやめなさい」サラが言った。

「そうですね、ネナちゃん。まだ時間がありますからな、ミスホさんを休ませてあげましょう」ソウスケ先生が言った。

「ミスホさん、私たちはほかの部屋にいます。用があったら、呼んでください」

コウサクじいさんがそう言つて、四人は寢室を出て行つた。

山にあるコウサクじいさんの家は、二階建ての木造で、けっこう大きかった。一階の広間には、ネナたちのほかに、バン、ケビン、オスター、リド、ウッド、マックの漁師たちや、狩人のロブとムタが集まっていた。ミズホが休んでいた寢室は二階だったので、彼女はそつと一階におりて、みんなに気づかれないうちに家の外へ出た。山からは、ハービーの町を見おろすことができ、せつないほど美しい夕焼けが、すべてを優しい色に染めていた。その景色をしばらくと眺めていたミズホは、自分の無力さにやるせなくなり、自然と涙があふれ出した。

おじいちゃんが臨終^{りんじゅう}に言つた、『どんなにつらいことがあつても最後の最後まで人生をあきらめてはいけない』という言葉が聞こえてきたような気がしたが、絶望に束縛された彼女の心を立ちあがらせることはできなかった。

コウサクじいさんが家から出てきて、ミズホに話しかけた。

「ここにいたんですか。寢室にいなかったので心配しました。もう大丈夫なのですか？」 ミズホは涙をぬぐつてうなずき、頼りなく微笑んだ。

「ミズホさんに見せたいものがあります。家の中へ来てください」

コウサクじいさんが言つと、ミズホは話した。

「私、ダイキさんの仲間になつたほうがいいと思います。でないとみんな殺されちゃいます。みんなを助けるには、それしかないと思います。死んでしまつたら、終わりですから……」

すると、コウサクじいさんが静かに話した。

「ブルでは、ひどいことになっているそうです。殺し合いを競技にして、そのダイキとかいう男は楽しんでいるそうです。彼の支配下では、私たちは幸せに生きることができないでしょう。しかし、ミズホさんのような人には、私は命を懸けてついて行けます。人はいつか死にます。あなたを信じて死ねるなら、私は人生に悔いを残さないでしょう。ダイキのような人間に屈服してしまつたら、必ず

後悔しながら死ぬことになります」

「私、みんなに話したいことがあるんです」ミズホがうつむいて言った。

「その話を聞かせてください。さあ、家の中に行きましょう。みんなも待っています」

コウサクじいさんがそう言っつて、二人は家の中へ入っつていった。

ミズホとコウサクじいさんが一階の広間へ行くと、待つていたネナとサラ、ロブとムタ、バン、ケビン、オスター、リド、ウッド、マツク、そして、ソウスケ先生が、二人の周りに集まつてきた。

「ねえ、ミズホちゃん。服とか全部持つてきてあるからね」ネナが言つと、

「ありがとう、ネナちゃん」とミズホが感謝した。

「ミズホさんが、みんなさんに話したいことがあるそうです」

コウサクじいさんが言つと、ミズホは話し出した。

「ごめんない、私はダイキさんに勝つことはできません。あの人は私と同じ地球人です。神話に出てくるトオルさんも地球人です。その地球では、ダイキさんは優秀な元軍人さんなんです。軍人さんとは、人殺しを仕事にしている人のことです。地球での私は、ほんとにダメな女の子なんです。私は、頭が悪くて運動もできなくて、みんなからいじめられていました。それに私、去年まで鼻水をたらしてたんです」

鼻水の話しに、思わずムタが吹き出したが、みんなに睨まれ、彼はあわてて笑うのをやめた。

「私、バカで、何をやってもダメなの」そう言つて、ミズホが泣き出すと、

「それでも、あなたは救世主です。私たちを救つてくれた救世主です！」とコウサクじいさんが言い切つた。

「私は勝てないの。どんなにがんばつても、ダイキさんに勝てないの。みんなを助けたいけど、勝てないの……」とミズホは言つて、

涙が止まらなくなった。

「ミズホさん、これを見てください」コウサクじいさんが、テーブルの上を指さして言った。

そこには、携帯コンピューター、シェーバーなどの洗面用具、小さな鍵、スケッチブックに描いて切り取った古い地図などがあつた。それらはすべて、およそ千年前の地球のものだった。インフィニティー電池式のシェーバーは髭を剃るだけでなく、髪なども切ることができ、まだ使うことができた。携帯コンピューターもインフィニティー電池式だが、壊れて使うことができなかった。おそらく、このコンピューターが文明の発展に役立ったのだろう。これは使い方さえわかれば、言葉や文字だけではなく、帆船の構造など、知りたいたことはなんでも検索できるのだ。

「ここにあるものは、私の家に先祖代々受け継がれてきた、神がこの世に残していったものです。どれも何に使うのかわかりませんが、この地図と鍵の意味だけは知っています」

そう言つて、コウサクじいさんは地図と鍵をテーブルの上から取り、ミズホに手渡し、つづけて話した。

「その地図に示された場所には、神の武器が眠っているそうです。そして、その鍵が、神の武器が入っている箱を開ける鍵だそうです。語り継がれた話なので、本当かどうかはわかりません」

ミズホが手に持った地図と鍵を見ると、バンが話しはじめた。「その地図に載っている場所は『神の島』と呼ばれてんだ。前からそこには神の宝が隠されているって噂があつてな、多くの船乗りがその島へ行ったんだ。だがな、神の島に上陸した連中は、誰一人として帰ってこない。そこには、恐ろしい怪物がたくさんいるんだ。神が宝を守るために、その島へ怪物を集めたって説もある。実は、俺も一度だけ行ったことがあつてな、船の上からでも怪物がたくさんいるのが見えて、やばいと思い、上陸しないで帰ってきたんだ。でも、島のそばまで行つて、無事に帰つてこられただけいい。運の悪い船は、神の島へ行く途中で海の怪物におそわれて、ボーン！

終わりだ」

「神の宝の噂は、たぶんその地図が原因だったんだな。しかし、宝じゃなくて武器だったとはな」ケビンが言った。

「神の武器って、どんな武器なんだろう」

ロブがつぶやくと、コウサクじいさんが話した。

「まちがった使い方をしないと約束し、先祖たちは地図と鍵を受け継いできたのですが、危険な島へ行って神の武器を取ってくるなどできませんので、誰も見たことがないのです。しかし、取りに行けないような危険な場所に隠さなければならぬほど、恐ろしい武器なのかもしれません。だからこそ、望みがあるのです。ダイキとかいう男を倒すことができる可能性があります」

「だけどさ、その島に行ったら、俺たちも帰ってこれないかもな」マツクが心配そうに言うと、

「あいつらに殺されるよりはましだ」とウッドが言った。

「怪物なんて大丈夫さ。ミズホちゃんがいれば」リドが笑顔で言った。

「ミズホさんが、彼らの仲間にならなければ、最初の処刑がはじまるのは五日後ですな。間に合いますかな？」

ソウスケ先生が言うと、オスターが言った。

「往復は三日くらいだ。二日以内に神の武器を見つけてくれば、なんとかな……」

「船の準備はできてるぞ」バンがはりきって言った。

「ミズホちゃん、待ってるわよ」サラが信頼して言った。

「でも、その武器を手に入れても、勝つことはできないかもしれないわ……」

ミズホが自信なさそうに言うと、コウサクじいさんが話した。

「私たちは、あなただけが頼りなのです。見捨てないでください。

ミズホさんは、私たちの英雄なのです。何もやらないうちから、あきらめないでください」

あきらめる前に、何かをやったほうがいい、たとえ無駄なことでも

も。こんな自分を頼ってくれるなら、私はやるしかない。ミズホ
はそう思い、決意をし、手に持っていた鍵を強く強く握^{にぎ}り締^しめた。

第25章 希望を探す冒険

夜明け前、バンの中型帆船ちゅうがたはんせんは、神の島を目指して出発した。普段より海は荒れ、風も強く、帆船は傾きかげんで疾走し、船首が跳ねあがって、海面へ叩きつけるたびに白いしぶきが舞っている。口もとに青痣が残るミスホは、甲板の手すりにつかまって立ち、フードつきマントをなびかせ、太陽が昇ろうとしている水平線の彼方を見つめていた。

操舵室そうたしつで舵かじを取るオスター、その横にいるウッド、二人の表情は清々しかった。帆柱の見張り台みはでは、マックが潮風を受けながら海を眺めていた。船内の居間では、ロブとムタが落ちつきなく歩き回っている。後部甲板には、バン、ケビン、リドの三人がたたずみ、曙光しきうを浴びる救世主を見守っていた。

九人を乗せた帆船は、大海原をひるむことなく沖へと進んでいた。

昼をすぎて、空がどんよりとしはじめた。操舵室のオスターとウッド、見張り台のマック以外はみんな甲板にいて、曇り出す空を見あげていた。

見張り台で沖を眺めていたマックが、海の異変に気がついた。帆船の周りを飛んでいた二つ首のウミナたちがどこかへ飛んでいき、帆柱ほしじりにとまっていた魚のトッコたちも飛んで海の中へ入っていった。すると、巨大な影が海面を波立たせ、ものすごいスピードで帆船に向かつて近づいてくる。

「なんだあれは？ やばそうだな……」マックはつぶやき、すぐに「バンさん！ 何か巨大な生き物が船に向かってきます！ 注意してください！」と大声で甲板にいたバンに知らせた。

「シランじゃないのか！」バンが見張り台へ向かって大きな声で訊くと、

「ちがいます！ あの速さは絶対にシランじゃない！」とマックは叫ぶように答えた。

みんなは何事かと思って、マックが指で示した方向を見ると、確かに何かが猛スピードで向かってくる。

「まさか……、フィード……」バンがつぶやくように言うと、

「海の怪物、フィードか！？」とケビンが深刻な表情で言った。

バンが操舵室へ向かって叫んだ。

「オスター。逃げろーっ！」

「無理です。間に合わないっ！」オスターが怒鳴って返答した。

海面を波立たせ、すごい速さで向かってきた物体は、帆船のすぐ近くまでやってきて、突如姿を消した。船の上に緊張した沈黙が十秒くらい流れ、いきなり帆船が激しく傾き、甲板にいた全員が倒れて転がった！ マックは見張り台から落ちないように、帆柱を抱えた。帆船はなおも、ぐらぐらと揺れつつけている。みんながなんとか立ちあがったとき、首長竜のプレシオサウルスに似た怪物の長い首が、海面から突き出し、耳をつんざくような鳴き声をあげた！

「なんなんだ！！ あれは！？」ムタがおびえて言うと、

「俺に訊くな！！」とロブが怒鳴った。

帆船を安定させようと、どうにか舵を取っていたオスターが言った。

「まずいぞ、あいつはフィードだ！ 怪物図鑑に載っていた。船を壊されるぞ……」

「島へ着く前に、ここで終わりかよ」ウッドが緊張した面持ちおもてで言った。

背中側が紺色で腹側が白い体長二十メートル前後のフィードは、長い首を曲げて顔を甲板に近づけ、匂いを嗅ぎながら獲物を物色しはじめた。

「とりあえず、船内に避難しろーっ！」バンが叫んで指示を出した。ロブが最初に船内へ駆け込もうとした。そのとき、フィードの大きく開いた口が、彼をめがけて迫ってきた。

「危ないっ！！ ロブ！」ムタが怒鳴った。

ロブが振り向き、怪物のかい口を見て悲鳴をあげた。そこへミズホがやってきて、ロブを船内に押し込み、助けた。が、フィードは、代わりにミズホに食らいついた。彼女の下半身が、怪物の口からはみ出している！

「ミズホちゃんっ！！」バンが声をからして叫んだ。

ミズホの上半身をくわえたフィードは、首をまっすぐにのばし、口を上にあげ、ゴックンと彼女を飲み込んでしまった！ 外から見ても、怪物の長い首を通って、ミズホが飲み込まれていくのがわかった。みんなは愕然と甲板に立ちすくみ、フィードを見あげていた。「俺たちの救世主が……嘘だろ……」リドがつぶやいた。

予想もしなかった事態を悲しむ暇もなく、次に怪物は見張り台のマックに目をつけ、恐ろしい形相で迫ってきた。高い位置にある見張り台からは、逃げようがない。彼は絶好の餌食である！ 恐怖でマックが目を伏せると、突然フィードは長い首を左右に振りまくり、苦しんで暴れ出した。その勢いで、船の揺れは激しさを増した。「い、いまのうちに、逃げよう！」ムタが半泣きで叫んだ。

「いや、その必要はなさそうだ……」ケビンが言った。
苦しむフィードの動きが一瞬止まり、唐突に海へ嘔吐し、ゲロと一緒にミズホも出てきた。見ていたバンたちは、思わず気持ち悪くなった。そして、怪物は呻きながら、あわててどこかへ逃げ去っていった。

マックが見張り台から大声で言った。

「ミズホちゃんだ！！ ミズホちゃんが溺れてるぞーっ！」

まったく泳げないミズホが、もがきながら溺れそうになっている。待ってる、ミズホちゃん。いま行くからなーっ！「バンが叫び、上着を脱ぎ捨て、海へ飛び込もうとした。が、よく見ると、怪物のゲロが浮いていて汚かったので、「よし、誰か行けーっ！」と命令して、ほかの人に行かせようとした。でも、誰も行こうとはしなかった。

リドが機転^{きてん}を利^きかせ、縄がついている木製の浮き輪を素早く海へ投げ込んだ。溺れそうだったミズホは、なんとか浮き輪につかまって助かった。リドが縄を引つ張り、ミズホを船に引き寄せて、操舵室から出てきたウッドが縄梯子^{なわばしこ}をさげると、彼女はそれを使って甲板にあがってきた。

「ミズホちゃん、怪物に何をやっただ？」ケビンがたずねると、
「胃袋を軽くつねったの」とミズホが答えた。

「ミズホさんの味がまずくて、怪物がヘドを吐いたのかと思った」
ムタが余計なことを言つて、みんなのひんしゆくを買った。

「私、お風呂に入つて着替えるわ」ミズホが言つと、

「着替えの服は持ってきた？」とウッドが訊いた。

「いっぱい持ってきたわ」ミズホは笑顔で答えた。

「俺、風呂を沸かしてくる」リドがそう言つて、船内に走つていった。

「でも、どうして私が溺れてるのに、誰も助けってくれなかったの？」
ミズホが訊くと、

「そ、それはな、溺れてる人を助けようとする、自分も溺れてしまつ場合があつて、危険なんだ」とバンが説明してごまかした。

「そうだったの。私、信じるわ。絶対にみんなを信じる。だって、バンさんたちが、私を助けてくれないはずないものね」ミズホは信頼して言つた。

バンは後ろめたくなり、正直に告白することにした。

「実はな……その、なんだ……、ゲロが苦手で……」

一日半かけて、バンの中型帆船は神の島にたどり着いた。その島は、それほど大きくはなく、中ぐらいの山がいくつかあり、高低差の激しい地形になつていようだ。島の周りには、座礁^{ざせう}した帆船や朽^くち果^はてた帆船など、沈みかけた不気味な帆船の残骸が数十隻はあった。神の宝を求めて島に入り、もどつてこなかった人々の船だ。昨日のフイード事件のあとから降り出した雨は、まだ降りつづいて

いて、天候が不気味さをいっそう倍増させていた。

磯^{いそ}に帆船を接岸させ、ミズホ、バン、オスター、リド、ウッド、ロブの六人が、船からおりて島に上陸した。ケビン、マック、ムタの三人は、残って帆船を守ることにした。

「船を頼むぞ！」

バンが甲板で見送る三人へ呼びかけ、六人は地図を頼りに、神の武器が眠っているという場所を目指して歩きはじめた。

ミズホは日比谷中学の学生服を着て、地球の靴下に地球のスニーカーを身につけ、フードつきマントを羽織^{はお}っていた。預かった鍵は、学生服のポケットへ大切にしまった。彼女以外の五人はザックを背負い、食糧や着替えの服、テントなどを手分けして持った。剣や弓矢などの武器は、怪物には通用しないから誰も持って行かなかった。バンが地図と磁石を見ながら先頭を歩き、密林の中を進んでいた。のぼりくだりが多く、しかも雨で足もとがぬかるんでいて、六人は思うように歩けなかったが、地図に示された場所へ行き着くことを信じ、悪路を進んでいった。しばらく歩いていると、雨が激しくなり、やがて雷雨になってしまった。バンたちがコートのフードをかぶったので、ミズホもマントのフードをかぶって歩いた。大粒の雨と雷の音がうるさくて、話すときは声を張りあげないと聞こえなかった。

歩き疲れたロブが訊いた。

「方角は正しいんですか？ バンさん」

「わからないが、いちおう地図どおりに進んでるはずだぞ」とバンは答えた。

こんどはオスターが訊いた。

「バンさん。途中に目印のようなところはないんですか？」

「まちがってなければ、このまま行くと開けた場所に出るはずなんだ」そうバンは答え、立ち止まり、「集まってくれ、説明するから」と言つて、その場へ立て膝をついて坐り、地図を地面に広げた。

みんなはその周りに集まって腰をおろし、ミズホもしゃがんでバ

ンの話を聞いた。スケッチブックに描かれた地図には、どしゃ降りの雨が直接あたっていたが、地球の防水紙に地球の特殊インクのペンで描いてあったから、紙が破れたり、インクが消えたりするとはなかった。

「ここが、その開けた場所だ」バンが地図上を指さし、説明をつづけた。「この開けたところから、この辺りをずつと進むと、原油の泉がある。そこが見つかれば、神の武器が眠っているという場所まではすぐだ。この地図が正しければの話しだがな」

地図を眺めていたオスターが言った。

「だけど、バンさん。その開けた場所は、いまでも同じ状態かな。地図が描かれてから、かなりの時間がたってるんでしょ。もしかすると、いまはもう草や木が生い茂ってるんじゃないかな」

「ああ、そうかもしれん。だがな、行ってみないとわからないだろ。そういうことはな、見つからなかったときに考えればいいんじゃないのか」

そうバンが言うと、リドが訊いた。

「バンさん。いま、どの辺なんです。ずいぶん歩いたような気がするけど」

「いまはこの山 중이다。くだりになれば、少しは楽になるぞ」バンが地図上の山を指さして言った。

雷雨の音でみんなの話しはよく聞こえず、内容も意味もさっぱりわからなかったが、ミズホはとりあえず聞いてるふりをして、ときどきうなずいたりもしていた。

「あまり時間がない。先を急ごう」

オスターがそう言って、六人は立ちあがり、歩きはじめようとした。そのとき、リドが叫んだ。

「やばい！ 囲まれた！！」

雷雨の音で気づかなかったのだ！ 六人は三十匹前後の怪物の群れに、すっかり囲まれていた。それは、反り返った尻尾の先端に大きな一つ目があるギルビーの群れだった。

「みんな、動くな！ 怪物図鑑によると、ギルビーは動くものに反応するらしい」オスターが大声で言った。

「じつとしてれば、どっか行くんですか？」ウッドが訊くと、

「時と場合によるらしい……」とオスターは答えた。

もし、これだけのギルビーが一度におそつてきたら、のろまのミズホには全員を助けることができず、何人かは犠牲を出してしまうだろう。ギルビーの鋭い牙で食いつかれてから助けたのでは遅い。「みんなは動かないでね！」ミズホは叫び、怪物の群れに向かって走り出した。

急に走り出したミズホに反応し、ギルビーの群れもいつせいに彼女へ向かって動き出し、飛びかかるようにおそいかかった。ギルビーの群れは、次から次へとミズホを覆うように折りかさなって、怪物の群れの半数ぐらいがダンゴ状態になり、彼女は完全に見えなくなった。一匹五メートル近くあるギルビーが、十五匹くらいミズホに覆いかぶさり、ダンゴ状態になったとてつもない光景を目撃して、バンたち五人は恐怖で腰を抜かし、倒れるようにその場へ坐り込んだ。

一瞬の間があり、突然、「えーい！！」というミズホのかけ声と同時に、ダンゴ状になったギルビーの群れが空高くぶっ飛んでいき、ミズホがバンザイポーズであらわれた。みんなが空を見あげると、上空へ舞いあがったダンゴ状のギルビーの群れに雷が直撃し、爆音とともに怪物の群れがばらばらになって花火のように空中で飛び散った。それを見て、ミズホにおそいかかろうとしていた残りのギルビーの群れは、一目散に逃げていった。

腰を抜かしたまま坐り込んでいたバンたち五人は、恐ろしい怪物の群れよりも、ミズホのほうがもっと恐ろしいと思った。

夕方には完全に雷雨はやみ、夕焼けが見るものすべてを真っ赤に染めた。夜になって、休むことにし、二つの月明かりの下、六人は協力して一つのテントを張った。それをやるとき、じまな雑草は

手でむしったが、花に目と口があつて『ラン、ラン、ラン……』と合唱するウタランという花がいっぱい咲いていて、ミズホがかわいそうだと言ひ、その場所はさけて草をむしり、テントを張った。ウタランは夜になると静かに歌い出す不思議な花で、まるで子守歌のように眠気を誘う。

ミズホたち六人は、テントの前で焚き火を囲んで坐り、メルの干し肉と乾パンかんのようなパンで食事をした。ミズホはパンを持ってウタランの咲いている場所へ行き、それをちぎって与えると、花は歌うのをやめ、おいしそうにムシャムシャとパンを食べて、すぐにまた歌い出した。

ミズホは焚き火のところへもどり、坐つて言った。

「ウタランて、おもしろい花ね」
すると、オスターが話した。

「ウタランは、植物図鑑によると、雑食植物で、なんでも食べるそうだ。歌うのは夜だけだが、たまに昼間歌っているヘンな奴もいるそうだな。それにしても、歌って食べる愉快な花、ウタラン。俺も初めて見た」

「オスターは、相変わらず図鑑が好きだな」

バンが笑いながら言つと、オスターが力説した。

「しかし、バンさん、図鑑は楽しいですよ。誰も見たことがない怪物とか載ってるんですよ。それって不思議だと思いませんか？ あそこに見えるウタランだってそうだ。本当にいて、図鑑の説明に書いてあつたとおりに歌ってる」

「つまり、図鑑の原型を創った昔の人が見たつてことじゃないかな」
ロブが言つと、

「動物や植物はともかく、危険な怪物までも細かく描写されてるんだぞ」

オスターがそう言つと、ウッドが話した。

「もしかして、神話に出てくるトオル様が図鑑の原型を創つたのかも。ミズホちゃんと同じ地球人なら、楽勝でしょう」

すると、バンが言った。

「地球人が……、そのほうが不思議だな。ミズホちゃん、俺たちがいるここも、本当に宇宙の星の一つなのか？」

「ネナちゃんも同じようなこと訊いたわ。でも、ほんとなの。この惑星プップも、たくさん星の一つなのよ。私は地球という名前の星から来た人間だから地球人。みんなは惑星プップの人間だから……プップ星人ね」

ミズホがそう話すと、バンが言った。

「プップ星人！？　そうか、俺たちはプップ星人か……。それは……ちよつとやだぞ」

「どうして？　素敵じゃない、プップ星人なんて。それに、おもしろい」

ミズホが笑って言うと、リドが言った。

「おもしろくなくていいから、地球人みたいな、かつこいいのがないな」

「じゃあ……、バブー星人がいい？」ミズホが案を出すと、
「もつとやだ！　プップ星人でいいや」とリドは妥協^{たきよう}して言った。

六人は食事をすませたあと、交替で寝ることにした。最初は、ミズホとバンとリドの三人がテントに入って眠り、オスターとウッドとロブの三人が見張り番をした。火をつけてから三時間くらいでなくなるロウソクが燃え尽きたら、見張り番を交替することにした。先に寝た三人は、服を着替えないで横になると、ウタランの歌が心地よく、すぐに眠ってしまった。

見張りの三人は、焚き火の周りに坐って話した。

「昼間のギルビーの群れ、すごかったですね。あれじゃあ、この島に入ったら生きて帰れるはずないですよ」ウッドが話すと、

「ああ、そうだな。ミズホちゃんがいなかったら、俺たちもいまごろは怪物のエサになってたな」とオスターが言った。

ウタランの『ラン、ラン、ラン……』という穏やかな合唱で、ロブが眠くなってつぶやいた。

「あのウタランとかいう花の歌、本当に眠くなるな。歌うのをやめてくれないかな」

すると、ウタランは不意に歌うのをやめてしまった。

「お、言葉が通じた！」ロブが言うと、

「いや、ちがう！ 植物図鑑によると、ウタランは危険を察知すると歌うのをやめるんだ。あそこだ！ あれを見ろ！」とオスターが言って、暗闇を指さした。

そこには、何かがギラギラとたくさん光っていて、だんだんこっちに向かってくる。

「あの光、どこかで……？ そうだ！ あれは、広場で見たグーボの目だ。人食い怪物のグーボが来たぞ」ロブが緊張して言った。

ウッドがテントに急いでいって、中へ顔を突っ込み、寝ていた三人を叩き起こした。

「みんな、起きろ！ 怪物が来るぞ！」

バンとリドはあわててテントから出てきたが、ミスホは眠そうに枕を持って出てきた。

「ミスホさん、グーボだ！ あのグーボがやってきたぞ。どうにかしてくれ！」

ロブが叫んだので、ミスホが寝ぼけまなこを手でこすって見ると、体長七メートルぐらいの二足歩行で歩く全身にたくさんの目玉がある夜行性のグーボが三匹、長い舌を振り回しながら徐々に近づいてきた。

「あれやだなあ、ねばねばが嫌なの。あと、臭いし……」ミスホがそう言うと、

「そんな好き嫌い言っていないで、早くやつつけてくれ。そうだ、尻尾をつかめばいいんじゃないか」とロブが言った。

「そうね。じゃあ、行ってくる」ミスホはそう言って、グーボに向かっていった。が、すぐにもどってきて、「これ、持ってて」と言っ
て、枕をバンに渡し、それから三匹の怪物に立ち向かっていった。
三匹のグーボは同時にミスホにおそいかかるうとして、自分たち

でぶつかり合い、地面に倒れた。その隙に、ミスホは一匹のグーボの尻尾を両手でつかんだ、はずなのに、別のグーボの舌がのびてきて、まちがえてそれをつかんでしまった。

「げっ！ べろつかんじやったわ」

ミスホは叫び、やけくそになって、舌をつかんでしまったグーボを振りあげたり、振りおろしたりして、立ちあがろうとした別のグーボを、ドッシン、ドッシン、と何度もぶっ叩いた。その間に、三匹目のグーボが逃げ出した。ミスホは舌をつかんでいるグーボを頭上で一回転させ、手を放し、逃げていくグーボめがけて投げつけた。二匹は激突し、暗闇の森へぶっ飛んでいった。最後にミスホは、さんざん叩かれ、気絶しているグーボを蹴って、遠くへ飛ばしてしまった。

「お、恐ろしい……」オスターがつぶやくと、

「怪物？ ミズホちゃん？ どっち？」とウッドが訊いた。

「それは……言えない」とオスターは答えた。

もどってきたミスホが、ちょっと楽しそうに言った。

「見て、見て、手がねばねばよ！」

「フィードのゲロよりましだと思っぞ」バンが言った。

「ほら、手を洗えば」リドが水筒すいとうを持ってきた。

「ありがとっ、リドさん」ミスホはお礼を言って、念入りに水筒の水で手を洗った。

第26章 神の武器

オスター、ウッド、ロブの三人が休み終わったあと、六人はテントを撤収して、夜中のうちにキャンプ地を出発した。そして、山をおりてからしばらく歩き、太陽が昇りはじめたところ、湖が干あがったような広々としたところにやってきた。湖の底のようにになっている下までは、五百メートルぐらいの急な坂になっていて、大きな岩がゴロゴロしていた。

「やっぱり方角はまちがってなかった。ここが、地図に載っていた開けた場所だ」

バンがよろこんで言うと、ウッドが下のほうをのぞき込んで訊いた。

「岩が多いな。下までおりて、あそこを横断して、向こう側に渡るんですか？」

「いや、ここをおりて、もう一度あがってたら遠回りになる。まっすぐ行くわけじゃないからな。この周りを歩いていって、途中であるの辺の森へ入って行くんだ」バンが方向を指で示しながら説明した。「やっぱりバンさんが言ったとおり、探す前から見つからないかもしれないと思うのは、よくないってことだな」

オスターがそう言うと、バンは彼の肩を軽く叩き、笑顔で言った。「さあ、行こうか」

そして、六人は歩き出そうとした。が、そのとき、真後ろにムカデと毛虫の中間のような怪物、ジュームが突然あらわれ、身体半分を反らせて起き上がり、口を横に開き、襲撃してきた！ ミズホはとつさにジュームのたくさんある脚の一本を片手でつかみ、投げ飛ばした。怪物は、開けた場所の底のほうに落下していき、ドッスンと砂埃をあげて落っこち、気を失ってしまった。みんなはほっとして、ジュームが落ちたところを見おろすと、その付近の地面がボコボコと音を立て、動き出して広がっていく。そして、いきなり地底

からジュームの大群が百匹近く飛び出してきた。怪物の群れは、六人のほうへ向かって急な坂を轟音^{ごうおん}とともに駆けあがってくる。一匹十メートル前後のジュームの大群が、急な坂をすごい勢いで駆けあがってくる光景は、この世のものとは思えない。

「な、仲間が復讐^{ふしゅう}しにきた！」ウッドが叫んだ。

「も、もうダメだ！」ロブが悲鳴のように叫んだ。

頼りのミスホをみんなで見ると、彼女は急な坂を少しおりて、大きな岩を持ちあげ、ジュームの大群へ向かって投げつけた。岩は砲弾のように飛んでいき、駆けあがってくる怪物の大群の中に着弾^{ちやくたん}し、爆発するように砕け散った。ミスホは大きな岩を二発目、三発目と、何発もジュームの群れに投げつけ、岩は、ドッカン、ドッカン、と怪物の大群の中に着弾していった。ジュームの大群は、あわてて急な坂を駆けおりていき、地底へ逃げ込んでいった。

ミスホが、みんなのところにもどってきて言った。

「ちよつと疲れたけど、早く行かないとね」

彼女は楽しそうに笑ったが、誰も笑い返すことはできなかった。

六人が森に入ってからずっと歩くと、地図に載っている原油の泉が見つかった。そこは、ミスホとネナが原油を取りに行っている場所より少し大きくて、全体の形がいびつだった。

「ここまですぐれば、もうすぐだぞ」バンが言った。

「よかった。さっさと行こう」リドがうれしそうに言った。

すると、原油の泉を見つめてウッドが言った。

「ここにも何かいる？」

みなでそこをよく見てみると、潜水艦の潜望鏡^{せんぼうきょう}のような目が原油の泉から一本出て、六人のほうを眺めている。

「あれ、ナーナだと思うわ」

ミスホが言うと、オスターが話した。

「ナーナじゃないな、あの目は。それに、ナーナは原油の中には入らない」

潜望鏡のような目は、ひょこんと原油の泉に引っ込んだと思ったら、その右横にまたひょこんと目が出てきて、すぐに引っ込み、さっきの場所からまた目が出てきて、すぐに引っ込んで、こんどは左横に目があがってきて、引っ込み、次はそのすぐ後ろに二本の目によきつと出てきて、また引っ込んだ。

「なんでもいいから、早く行こう」ロブが言うと、

「思い出した。怪物図鑑によると、原油の中で生きる怪物は一種類だけ。それは、たぶんパラパロだ」とオスターが険しい顔で言った。突如、原油の泉から体長八メートルぐらいの黒っぽい怪物が、ブアオーンツと鳴きながら出現した。パラパロは巨大なエビのような感じで、両腕が大きなハサミになっていて、二本の脚で歩き、顔には潜望鏡のような目が、前列に三本、後列に二本ならび、その五本の目がランダムにのびたり縮んだりしている。

「走って逃げたほうがいい」オスターが大声で言うと、

「怪物は一匹だ。ミスホちゃんなら、どうってことない」とバンが言った。

「走って逃げるんだ！」

オスターがもう一度言ったそのとき、原油の泉から上陸してきたパラパロが、空へ向かって、口からものすごい炎を噴きあげた！

「怪物図鑑によると、奴は火を噴くんだ」オスターが叫ぶと、

「それを早く言え！」

とバンが言つて、六人はいっせいに走って逃げた。が、ミスホだけは転んでしまった。

「ミスホちゃん！！」リドが気づいて叫んだ。

五人は立ち止まって振り返ると、パラパロがミスホのすぐそばまで迫っていた。

「早く助けないとやばいぞ！」ウッドが怒鳴った。

「どうやって！？ 無理だ！」ロブが叫んだ。

パラパロが大きな鳴き声をあげ、倒れているミスホに向かって口を開き、強烈な火炎放射をあびせた！バンたちはどうすることも

できず、愕然として見ているほかなかった。ミズホは怪物の嘖きつづける炎に包まれ、燃えて灰になっていく　のが普通だが、怪物が炎を嘖き終わると、彼女は元気に立ちあがった。ただ、羽織っていたフードつきマントだけは燃えてなくなった。

パラパロは驚き、いつきに五本の目を全部出し、ミズホを眺め、再び彼女に火炎放射攻撃をあげた。しかし、何度やっても結果は同じで、ミズホは炎の中に平然と立っている。そのうちパラパロは疲れ果て、炎は出なくなり、五本の目を回し、酸欠でぶっ倒れた。パラパロが炎を出すには大量の酸素が必要で、出しすぎると酸欠になってしまう。

バンたち五人がミズホのところに駆け寄ってきて、しげしげと彼女を見つめた。

「……大丈夫……みたいだな」バンがつぶやくように言った。

「熱かったけど、なんとか……平気みたい」ミズホは自分の身体を調べて、突然、「たいへんだわ!」と叫んだ。

「どうした!? ミズホちゃん」リドが心配して訊くと、

「上着が燃えちゃった」とミズホが答えた。

「着替えを持ってるからいいじゃん」リドは少し呆れて言った。

そして、ミズホはバンのザックから、予備で持ってきたフードつきマントを出して、学生服の上に羽織った。

「やっぱり、これがないとね」そう言って、ミズホは微笑んだ。

フードつきマントは、彼女のお気に入りになっていた。

原油の泉から森を少し歩いていくと、昼になる前に、六人は庭のようになっている場所に出た。周りには一年の木があり、その中央には得^{えたい}体の知れない物体がある。そう、ここが目指してきた目的地だった。

「ついに……やってきた。ここが地図に記された、神の武器が眠る場所だ」バンが意外と冷静に言った。

「あれが、神の武器……なのか?」ロブが、中央にある謎の物体を

眺めてつぶやいた。

「あれは、たぶん……昔のライフポッドよ」ミズホが言うと、
「ライフ、なんだって？」とリドが訊いた。

「そうだね。地球のトオルさんが乗ってきたライフポッドよ。あの中に、きつと何かがあるのね」ミズホはそう言っ、希望が湧いてきた。

かなり汚れているが、まちがえなくそこにあったのは、およそ千年前に地球の日本人、安堂トオルが乗ってきたライフポッドだった。
「よし、近くまで行ってみよう」バンが言っ、

「待った！ ニヨンニヨンが来た！！」とオスターが叫んだ。

みんなが見ると、向こう側の森から庭のようになっている場所へ、でっかい頭の上に大きな目玉が縦に三つならび、二足歩行で歩く体長四メートルぐらいのオオサンショウウオのような茶色い怪物がやってきて、ライフポッドの周りをうろろしはじめた。その怪物は、ミズホたちにまったく気づいてないようだ。

「またかよ……」バンがぼやいた。

「私が投げ飛ばしてくるわ」ミズホが行こうとしたら、

「ダメだ！ ミズホちゃん」と言っ、オスターが止めた。

「ニヨンニヨン、そんなに危ないの？」ミズホが訊くと、

「その反対なんだ。怪物図鑑によると、ニヨンニヨンは人間をおそわないはずだ」とオスターが説明した。

「図鑑がまちがってるかもしれないぞ」バンがそう言っ、

「そうね。だったら、私が一人で行ってくるわ。もし、ニヨンニヨンがおそってきたら、投げちゃう」とミズホが言っ、

すると、オスターが話した。

「怪物図鑑によると、ニヨンニヨンは、たまに人間をぶつことがあるらしい。だけど、ぶたれてもニヨンニヨンの手の平はやわらかいから、ケガをすることはないそうだ。だから、もしぶたれても投げないでくれ」

「オスター。お前、何を言ってるんだ？ 怪物なんか投げたってい

「いだろ」バンが言った。

「ニヨンニヨンは、俺の一番好きな怪物なんです。図鑑で見たときから、一度でいいから実物を見たいと思ってたんです。船に残らないで、わざわざケビンさんに代わってもらってここまで来たのは、あのニヨンニヨンを見ることができるとも思ったからなんです……」オスターが子供のようなことを言った。

「わかったわ、オスターさん。でも、ニヨンニヨンがたまにぶつこがあるって、どんなときなの？」ミズホが訊いた。

「怪物図鑑によると、心が悪い人間をぶつそうだ」

オスターが答えると、ウッドが驚いたようにたずねた。

「心が悪い人間？ オスターさん、どうして怪物が、心の悪い人間を見分けることができるんですか？」

「それはわからないが、そう図鑑に書いてあったんだ」

そうオスターが話すと、リドが言った。

「きつと、図鑑を創った奴が、たまたま自分だけニヨンニヨンにぶたれなかったから、そんなこと書いたんじゃないです」

すると、ミズホが心配して言った。

「ニヨンニヨンが心の悪い人間をぶつなら、私はぶたれちゃうわ。だって、怪物にとつては、私は悪者だし……」

ロブが思いつめた表情で話しはじめた。

「そうだな。あんな暴力をふるわれたら、怪物たちには、ミズホさんは悪人だろうな。つまり、この世に完全な善悪はないってことだ。自分が生き残るための行動、それが善になったり、悪になったりするだけなんだ。生き残るため、それが大切なんだ……」

「ニヨンニヨンが悪い人間をぶつなんて、デタラメか偶然だって」リドが言った。

「きつと、そうね。私、行ってくるわ」ミズホが行こうとすると、

「よし、俺も一緒に行く」とオスターが言って微笑んだ。

「みんなで行くか」

そうバンが言って、六人はうなずき、庭のようになっている場所

に入り、ライフポッドのところまで歩き出した。すると、うろつろしていたニヨンニヨンが六人に気づき、立ち止まり、身体をよじってミズホたちを眺めた。

「見てる見てる」ミズホが小声で言った。

「大丈夫、俺は図鑑を信じる」オスターがつぶやいた。

突然ニヨンニヨンが走り出し、六人のところに駆け寄ってきた。そして怪物は、でかい頭をさげて、縦にならんだ大きな三つの目を一人ひとりに近づけ、ムニヤムニヤと変わった鳴き声を発し、盛んに六人を観察しはじめた。みんなが黙ってライフポッドに向かって歩きつづけると、ニヨンニヨンはじろじろ見ながらついてきた。ちよつとじゃまだった。

沈黙を破り、ミズホがニヨンニヨンに話しかけた。

「こんにちは、いい天気だね」

特にニヨンニヨンの反応はなかった。

「逢えてうれしいぞ」オスターも憧れの怪物に声をかけたが、ニヨンニヨンは無反応だったので、彼はしょんぼりした。

「一匹で寂しくないか？」ウッドが怪物にたずねたが、ニヨンニヨンは無反応。

「飯を食ったか？」バンはニヨンニヨンに訊いてみたが、やはり怪物に言葉は通じない。

「愛してるよ」

とロブがニヨンニヨンに言った。そのとき、いきなりニヨンニヨンはロブの頭をバシバシ叩きはじめた。しかし、オスターが言ったとおり、怪物の手の平はやわらかく、まったく痛くはなかった。

「おい、おい、やめてくれ！」

ロブが怒鳴ると、ニヨンニヨンは走って森へ行ってしまった。

「これでわかった。ロブは悪い奴だ」

バンが冗談を言って、みんなが笑うと、ロブは少し悲しそうな顔をした。

そして、ついに六人はライフポッドのところまでやってきた。

「これに乗って、神話の本に出ている神様が宇宙から来たのよ」ミズホが話すと、

「しかし、これで宇宙へ飛べるなんて、信じられないぞ」とバンが言った。

「この鉄のかたまりみたいなものが、空を飛ぶことが不思議だ」オスターが言った。

「空を飛ぶ乗り物を造るなんて、本当に可能なのかな……」ウッドがつぶやくと、

「常識では考えられないな……」とロブが言った。

「中へ入ってみましょう」ミズホが出入り口を見つけ、ドアを開いた。

「いや、俺はここで待ってるから、早く神の武器を探して、持ってきてくれ」バンがそう言うのと、

「そうだな。中は狭^{せま}そうだし、頼むよ」とリドが言った。

確かに一人乗り用のライフポッドの中は狭いが、入ろうと思えば三人は中に入ることができる。しかし、ミズホ以外の五人は、得体の知れないものに入るのを嫌がり、ミズホだけがライフポッドの中へ入った。

その中は、ミズホが乗ってきた五人乗り用のライフポッドとはまったくちがった構造だった。五人乗り用のライフポッドは、居住空間になるくらいの広さは充分にあったが、このライフポッドを住みかとして生活するには、かなり厳しいだろう。トオルがこの星に来たときは、言葉も通じず、文明らしい文明はなかった。それなのに、こんなライフポッドでしばらく生活したのかと思うと、ミズホはせつなくなった。

船内をミズホが見回すと、一つしかないシートの上に、特殊合金製の小型ケースが置いてあった。その中に神の武器があるのだと、彼女はすぐに判断できた。この特殊ケースの中に収納されていたものなら、千年以上たってしまいたいまでも、必ず使うことができるだろう。ただし、使い方がわかればの話しだが。

シートの上のケースを手にとって、ミズホが持ちあげてみると、小型のわりには少し重かった。ミズホは、学生服のポケットからコウサクじいさんから預かった鍵を出し、ケースを開けてみた。そこには、見たことのあるものと、小さなメモ用紙が一枚入っていた。メモ用紙には、『この星で、生きて行こうと決めた』と書かれていた。

ミズホがケースを持ってライフポッドから出てくると、みんなは彼女の周りに集まってきた。

「あつたんだな……」

バンがケースを見て言うと、ミズホは静かにうなずいた。

「その武器で、あいつに勝てるのか？」オスターが訊いた。

「わからないわ。でもやってみる」とミズホは答えた。

「ミズホさん。それ、俺が持つて行つてやる。俺、役に立ちたいんだ。悪い人間だと思われたくないしな」ロブが思いつめたような顔で言った。

「ありがとう、ロブさん。お願いします」ミズホはケースをロブに預けた。

すると、オスターが話した。

「ロブ。ニヨンニヨンにぶたれたからつて気にするな。俺は凶鑑を信じたいが、やっぱり怪物が人間の心の善悪を判断できるとは思えないしな。だから、もう気にするな」

「ああ、オスターさん。ありがとう」とロブは言つて微笑んだ。

「向こうにも道がある。何かありそうだな」リドがそう言つて、自分たちがやってきた方角とは逆を指さした。

「調べている時間はない。船にもどるぞ」

バンがそう言つて、六人は歩き出した。すると、またニヨンニヨンがあらわれ、六人へ駆け寄つてきて、熱心にみんなを観察し出した。

「さて、こんどは、誰がぶたれるのかな？」

ロブが楽しそうに言つと、ニヨンニヨンは、やはりロブをバシバ

シぶって、どこかへ走り去った。みんなはロブがかわいそうだと思い、一生懸命に笑いをこらえた。けれど、小刻みに震える肩の動きで、笑っているのがわかってしまった。

帰路では、一匹も怪物はおそってこなかった。それどころか、六人を見ると怪物たちは急いで逃げていってしまった。怪物たちには、きっとミズホのほうに怪物だったのだろう。

二度もニヨンニヨンにぶたれたロブは、何かを考え込んでいる様子だったので、みんなで励ましながら歩いた。しかしロブは、あまり元氣にならなかった。もしかしたら、みんなの励ましは逆効果だったのかもしれない。

ミズホはかなり疲れて、みんなの足を引っ張ったが、帰りは天候もよく、ウッドが休憩のときに怪物のうんちに坐ってしまったこと以外のハプニングもなく、道もわかっていたので、六人は予定よりも早く帆船が待っている磯にもどってきた。テッドの港を出発してから、四日目の朝だった。

残りの時間は、今日を含めて二日ある。順調に行けば、この島からテッドの港までは一日半で帰れる。明日の昼ごろまでに向こうに着ければ、ダイキが予告した最初の五人の処刑を防げる可能性がある。

疲れ果てていたミズホは、磯に來ると元氣を出し、うれしそうに言った。

「やつともどつてきたわ。早く船に乗って休みたいわね」

しかし、バンが深刻な表情で言った。

「船がないぞ……」

六人は絶望した。待っているはずの帆船が、どこにも見あたらないのだ。

第27章 もう、間に合わない

バンの中型帆船がなければ、どうにもならない。ダイキを倒すどころか、帰ることすらできない。帆船に残ったケビン、マック、ムタの三人はどうしたのだろうか？ 何かの理由で、三人だけで帰ったのだろうか？ それとも、海の怪物フィードにおそわれて、沈没でもしたのだろうか？ 雷雨がひどかった日に、事故でもあったのか？ いずれにしても、このままでは帰ることはできない。別な帆船が迎えにでも来なければ、六人はこの島に取り残される。

「どうする？ バンさん……」オスターが不安な面持ちで訊くと、
「考えよう。時間は充分にあるぞ……」とバンが答えた。

「バンさん、どうして？ 時間はないんですよ。明日中に帰らないと、処刑がはじまってしまふ……」

ウッドが嘆くように言うと、バンが落ち着いて話した。

「ああ、そうだ。しかしな、船がなければ帰れないだろ。最初の処刑に間に合わなくても、どうにかミズホちゃんをつれて帰らなければ、毎日五人ずつ殺される。明日までには間に合わないが、時間は充分にあると思って、帰る手段を見つけるんだ」

「まさか奴ら、裏切ったのか……？」ロブがつぶやいた。

「ロブさん、みんなを信じよう。ケビンさんたちが裏切るはずないわ」

ミズホが言うと、バンが力強い口調で言った。

「そのとおりだ！ あいつらは、絶対に俺たちを裏切るような奴じゃないぞ。何か問題が起きたんだ」

突然、リドが思いついたように話した。

「ねえ、バンさん。座礁してる船とかに、使える救命ボートは残ってないかな。もし残ってたら、時間はかかるけど、帰ることはできる。バンさんが磁石を持ってるし」

「危険だが、それに懸けるしかないな」

バンが言うと、ウッドが暗い表情で言った。

「だけど、使える救命ボートがあるとは思えないな。ほとんどの船は腐ってる……」

すると、オスターが言った。

「探す前から見つからないと思うな。わかったかウッド」

バンはオスターを見て微笑み、磯に打ちあがっている朽ち果てた帆船を指さして言った。

「よし、あの船を調べてみるか」

そして、六人がその帆船に向かって歩きはじめたときだった。

「船がもどってきたわ！」ミズホが大よろこびで叫んだ。

みんなが海に視線を移すと、ケビンが操舵する中型帆船が磯へ向かってやってきた。六人は歓声をあげ、みんなで抱き合ってよろこんだ。

磯に帆船が接岸すると、六人はすぐに船へ乗り込んだ。

「ごめん、みんな。ギルビーの群れが磯に来たから、船を出して島を一周してたんだ」マックが謝って説明した。

「もどってくれば、それでいい」バンが言った。

「予定より早かったな。神の武器は見つかったのか？」ケビンが自分の頭をさすりながら訊くと、

「これがそうなの」とミズホはケースをにかけて言った。

「あとは、救世主に任せるだけだ」バンがミズホを見つめて言った。

帆船に乗ってから、六人は順番にお風呂へ入った。海の上での水は貴重だが、雷雨の日にケビンたちが大量に水を確保してくれたおかげで、かなり贅沢に使うことができた。ミズホは最初にお風呂を使わせてもらったあと、いつもの茶色のワンピースに着替え、靴下や靴もこの文明のものを身につけた。

神の武器を探し出してから、あまり休まず磯までもどってきたので、みんなは疲れているはずなのに、目的を達成したうれしさで興奮し、ロブ以外は誰も寝なかった。

帆柱の見張り台にはマックがいて、帆船はケビンが操舵手そつだしゅを務めた。ミズホとバンたちは、操舵室で自分たちの冒険談をケビンに話して聞かせたり、神の武器を見たりしていた。

ミズホが操舵室で小型ケースを開けると、バン、オスター、リド、ウッドが、その中をのぞき込んだ。

「これは、なんだ……見たこともない……」

ウッドがそう言つて、中の武器を持つとすると、ミズホは素早くケースの蓋ふたを閉め、鍵をかけてしまった。ウッドは危うくケースに手を挟みそうになった。

「ところで、ロブはどうした？」オスターが訊いた。

「船内の部屋で、寝てるみたいですよ」

リドがそう教えると、オスターが心配そうに言つた。

「あいつ、ニヨンニヨンにぶたれてから、ずいぶん落ち込んでるみたいだな。俺が余計なことを話したせいだな」

すると、バンが話した。

「ロブは傷つきやすい性格なのかもな。しかし、大丈夫だろう。相棒のムタがついてるからな」

「ムタさんは、ずっとロブさんと同じ部屋にいるの？」ミズホが訊くと、

「ああ、そうだ。ロブが風呂から出たあと、あいつら二人は部屋にこもりつきりだ」とバンが言つた。

「友達つて、いいわね」とミズホは笑顔で言つた。

夜中になつても、船内の個室でミズホはワンピースのままベッドに腰かけ、ランプも消さずに起きていた。脚あしの筋肉痛と、迫りくる対決への不安で、彼女はどうしても眠ることができなかったのだ。ミズホは口もとに手をやり、ダイキに殴られたときの青痣をさすると、まだ少し痛かった。

ドアをノックして、ロブが部屋の中に入ってきた。

「ロブさん、なんか用？」ミズホが訊くと、

「明かりがついてたから、眠れないのかと思つてな」とロブが言っ

た。

「なんかね……、でも大丈夫。ロブさん、心配してくれてありがとう」ミズホはそう言って感謝した。

「ほかの連中はぐっすり寝てるぞ。もし不安で眠れないなら、もう一回ゆっくりお風呂に入るといいかもな」とロブが優しく言った。

「うん、そうだね。ロブさんは寝ないの？」ミズホが言くと、

「俺とムタは、昼間ずっと休んでたから、マックと見張りを交替するんだ。船の操縦をしてるケビンさんとも代わってやりたいが、俺とムタは狩人だから船を操縦できない。ケビンさんには、オスターさんが起きるまで我慢してもらうしかないな」とロブは話し、つづけて、「眠れないのはわかるが、少しでも寝ないとダメだぞ、ミズホさん」と言って、部屋を出て行こうとした。

「あ、ロブさん、待って」ミズホはロブを引き止め、「ロブさんていい人ね。ニヨンニヨンは、きつといい人をぶつのよ。凶鑑を読んだオスターさんが、まちがえておぼえたんだと思うわ」と微笑んで言った。

「さあ、どうかな」ロブはそう言って、部屋を出て行った。

そのあと、寝つけなかったミズホは、ロブが言ったようにお風呂へ入ることにした。これで三回目のお風呂である。島からもどってきた朝に入って、夕食のあとに入って、そして夜中のいま、お風呂に入ったのだ。三回目のお風呂で、ミズホはやっと疲れが取れ、脚の筋肉痛も楽になったような気がした。

お風呂からあがり、ミズホはいつものワンピースを着て、そのままベッドへ横になると、いつの間にか眠ってしまった。とても深い眠りだったような気がするが、すぐにミズホは叩き起こされてしまった。

「ミズホちゃん！ たいへんだ、起きろ！！」マックが怒鳴って部屋に入ってきた。

「何？ 何？ そんなにあわてて！？」ミズホが訊くと、

「ふ、船が、船が燃えてるんだ！！」とマックは顔面蒼白で言った。
がんめんそうはく

ミスホはマツクと一緒に甲板へあがっていくと、全部の帆に火がつき、ものすごい勢いで燃え広がって、暗闇の海を明るくしていた。寝ていたみんなも甲板に来ていて、大騒ぎをしている。

「このままだと、船体が燃えるぞ！」バンが叫んだ。

「これじゃあ、消すことできない！ 救命ボートで逃げよう」リドが大声で言った。

「救命ボートがなくなってるぞ！」ウツドが叫んだ。

「なんだって！？ どうにかするんだ！」オスターが怒鳴った。

「焼け死ぬ前に、海へ飛び込もう！」リドが夜中の海を指さして叫んだ。

ミスホは、船首に近い帆柱から順番に根本からもぎ取り、海へ投げ込んでいった。まるで巨大なうちわを燃やし、海へぶん投げているようなすさまじい光景だ。海に浮かんた全部で三本の帆柱は、しばらく燃えつづけ、やがて火は消えていった。その様子を甲板の上から、みんなで茫然と眺めていた。

「これじゃあ、船が動かない……」マツクがつぶやいた。

「ケビン、ケビンはどこだ！」

バンが大声で呼ぶと、操舵室のほうからケビンがふらふらしてやってきた。彼の頭から、痛々しく血が流れている。そんなケビンを見て、みんなは愕然とした。

「大丈夫、ケビンさん……」ミスホは心配し、自分のハンカチをケビンに渡した。

「あ、ああ、なんとか。ありがとう、ミスホちゃん」ケビンは、そのハンカチでケガをした頭を押さえた。

「どうしたんだ……何があつたんだ？」バンがたずねると、

「ロブとムタにやられた……。あとは……わからない……」とケビンは苦しそうに答えた。

「どういうことなんだ……？ あいつらは、どこに行ったんだ？」

バンが顔をしかめて言うのと、ウツドが叫ぶように言った。

「救命ボートで逃げたんだ！」

すると、リドがあわてて操舵室をのぞきに行って、怒鳴った。

「やられた！ 神の武器がない！！」

「ミスホちゃん、鍵は？」バンが訊いた。

「鍵はちゃんと船室にあるわ」とミスホは答えた。

操舵室からもどってきたリドが言った。

「鍵があっても、神の武器がなければ意味がない。ロブたちが、奴らに渡したら……」

「……あの二人、いつから計画してたんだ……」

バンが悔しそうに言うと、オスターが話した。

「きつと、神の武器を見つけ出したころじゃないのか。ロブは落ち込んでたんじゃなく、計画を練ってたんだ」

「くそっ！ 昼間、ロブとムタが船室にこもっていたのは、神の武器を盗む計画をしてたんだ」リドが激怒して言った。

「マツク！ お前は何してたんだ？」

バンが怒鳴るように訊くと、マツクは話した。

「あの二人が、見張りを代わるから、休んでくれって。それに甘えて、船内で休んでいたら、甲板ですごい音がして、あがってみると帆柱が燃えあがってたんで、急いでみんなを起こしに行ったんです……。みんな、本当にごめん。俺の責任だ」

「マツクさんは、悪くないわ。誰だって、ロブさんたちが、こんなことするとは思わないわよ」ミスホがそう言って慰めた。

オスターがうつむいて、つぶやくように言った。

「信じられないが、ニヨンニヨンはまちがってなかったんだ。ニヨンニヨンはロブの本性を見抜いていた。ニヨンニヨンは俺たちに知らせてくれていたんだ。ニヨンニヨンを信じていれば……ニヨンニヨン……」

「オスター。ニヨンニヨン、ニヨンニヨン言ってる場合じゃないぞ」バンが少し怒って言った。

みんなが途方に暮れていると、だんだん空が明るくなってきて、太陽がいつもより速いスピードで昇ってくるように感じられた。

「もう、間に合わない……」マックが肩を落としてつぶやいた。

「間に合っても、神の武器がない……」リドがつぶやいた。

ケビンが、自分の血がついたハンカチを眺めながら言った。

「……しかし、これからどうするんだ？ このままじゃ、みんなを助けるどころか、俺たちがのたれ死にだ」

「考えるんだ、と言いたいところだが、どうやら運命は、考える余地すら与えてくれないようだな……」バンが弱気になって言った。

「俺たちは、できるだけのこととはやった。決して、手を抜いたわけじゃない。胸を張って死のうじゃないか」ケビンが微笑んで言った。
「やっぱりダメだ。俺はあきらめない。そう、はったりだよ。だが、何回でも言ってやるぞ。俺はあきらめない！」

バンが大声で叫んだ。そのとき、帆柱をなくした帆船に突然激しい衝撃があり、全員がよろけ、ミスホだけが倒れてしまった。

「なんだ、いまのは！？」ケビンが驚いて言った。

ミスホが手すりにつかまって立ちあがると、海面から怪物の長い首が目の前にあがってきた！

「フイードだ……」オスターがつぶやいた。

「なんで、こんなときに……」リドがぼやいた。

「やつぱ、あきらめるか……」バンは結局、弱音を吐いた。

ミスホの目の前に長い首を出したフイードは、彼女を見て顔をゆがめた。胃袋に激痛が走ったらしい。

第28章 救世主は来ない

あれからネナとサラは、山にあるコウサクじいさんの家で、英雄の帰還きかんと救いを信じて過ごしてきたが、ついに最終期限の五日目の朝を迎えてしまった。

ネナとサラとコウサクじいさんは、早朝から起きて、一階の広間にあるソファ―に坐っていたが、話す言葉も見つからず、ただ茫然としていた。サラは朝食を用意したが、誰も手をつけなかった。

ネナが窓の外を眺めていると、ミロのメルカがやってくるのが見えた。

「帰ってきたんじゃない」ネナはそう言って、広間を飛び出し、おもてへ出て行った。

サラとコウサクじいさんもネナのあとを追って、家の外へ行き、ミロのメルカのところに駆け寄った。しかし、メルカからおりてきたのはソウスケ先生だった。ネナの期待は一瞬で終わったが、サラとコウサクじいさんは、メルカに乗ってきたのがミズホたちではないとわかっていた。なぜなら、港からこの家がある山に来る途中に神殿はある。時間がないのに、わざわざ一度ここまで帰ってくるはずはない。

ソウスケ先生が暗い表情で話した。

「神殿で処刑の準備をしますぞ。最初に処刑される五人も決まったそうですぞ。コウサクじいさん、ミズホさんたちは帰ってこないんですな？」

コウサクじいさんはうなずき、ゆっくりと話しはじめた。

「私はこの年になるまで、ずっと神に頼って生きてきました。神を信じ、救世主がやってくるのを待っていました。そして、自分では何もしようとはしませんでした。若い人より長く生きていながら、頼ってばかりで、本当に恥ずかしいことです。きっと、神様も呆れているでしょう。遅すぎたかもしれませんが、私にできることをや

つてみたいのです。私は非力ですが、神殿に行つて五人を助けられるかやってみましょう」

「私も一緒に行くわ」ネナが笑顔で言った。

コウサクじいさんは、ネナを見て優しく微笑み、そして、サラへ向かつて頼んだ。

「サラさんは、留守番をお願いします」

サラはうなずいたが、コウサクじいさんのことが心配だった。

晴天の海で、十人乗りの救命ボートに二人だけだと、意外と快適に過ごすことができた。救命ボートの中央にはムタが船首に背を向けて坐り、左右についた長いオールを漕いでいた。ロブはムタと向き合つて船尾のほうに坐り、のびのびと寛いでいる。

救命ボートには、バンの帆船から持ってきた食糧や水筒の水が充^{すいとう}分に積まれていて、その中に、あの小型ケースもしつかりと積まれている。そして、ロブとムタはテッドの港を目指して着実に進んでいた。

「やっぱりロブは、頭がいいよな」ムタがオールを漕ぎながら言った。

「だろ！ この世に善悪はない。生き残ることが大切なんだ。この神の武器をダイキに渡せば、まちがえなくよろこんで、俺たちの待遇もよくなる」ロブが話すと、

「そうだな。バドルのときと同じようにな」ムタが言った。

バドルの時代、ロブとムタは、バドルに反抗する連中を特使たちに密告したり、特使たちをおだてたり、狩った獲物の毛皮などを特使たちにあげたりして、奴隷になるのを完全に防ぎ、いい待遇を受けていたのだ。

ロブが小型ケースを見つめて言った。

「鍵はないが、ダイキなら開けられるだろう。ミスホには悪いが、俺は強い奴の味方につく。それが、人生を賢く生きる方法なんだ。俺は、生き残るぞ……」

「あの連中、もう死んだかな？」ムタが言うと、

「ああ、船が焼けたんだ、助かるはずはないな。海に飛び込んでもいずれ死ぬだろうし、特にミズホは泳げないしな」とロブが話した。「まったく、バカな連中だよな」ムタはそう言ってあざ笑った。

「俺たち、利口に生まれてよかったな。世の中、利口な人間が勝利するんだ」

ロブがにやりと笑って言った　そのとき、不意にムタはオールを漕ぐのをやめ、笑っていた顔がこわばり、ロブの後ろ、つまり進行方向とは逆の海を見て叫んだ。

「か、怪物だ！　海の怪物だ！」

「怪物？　フイードか！　フイードの海域かいいきはとつくにすぎてるぞ」そう言ってロブが後ろを振り返ると、確かに海面から長い首を出したフイードが救命ボートへ向かって急接近してくる。

「あれは、本当か！！　フイードが……」ロブはそれ以上の言葉を失った。

接近するフイードは、首に網漁具用の縄あみぎよくようなわを巻きつけ、帆柱のない帆船を引っ張ってくる　もちろんそれは、バンの中型帆船だ。甲板には七人が全員そろっている。

海の怪物フイードは、痛い目に遭わされた相手に服従ふくじゆつする性質を持っていたのだ。縄をつけてあやつる方法は、オスターの怪物図鑑の知識が役立った。

「いたぞーっ！　あそこだーっ！」バンが叫んだ。

「行けーっ！　フイード！！」オスターが救命ボートを指さし、怪物に命令した。

猛スピードで救命ボートまでやってきたフイードは、ショック状態のロブとムタをパクパクとテンポよく食べてしまった。

「あっ！　食べちゃった！」ミズホがあわてて言った。

「見なかったことにしよう……」バンが言った。

リドが海へ飛び込んで、救命ボートに乗り、甲板からウッドが投げた縄を小型ケースへ頑丈に巻きつけた。そして、ウッドがそれを

甲板の上に引きあげ、縄を解き、ミズホにケースを渡した。フィードは、それらの作業を長い首を動かしながら不思議そうに見ていた。なわばし縄梯子を使つて、海から甲板にあがつてきたリドが笑顔で言った。「これで、神の武器は取りもどしたな」
「急ごう、みんなが待つてるぞ」
バンがそう言うのと、ミズホはケースを抱きしめたまま、真剣なまなざしでうなずいた。甲板の七人に顔を寄せていたフィードも、なぜかうなずいた。

最初の処刑に選ばれたのは、貨物船の船長のハンス、リドの兄のランド、石油精製所のゴンタ、花屋のララ、理髪店のヘレナおぼさんの五人であつた。ダイキに囚われていたハンス以外の四人は、適当に選ばれた。では、今日から毎日行われる予定の処刑は、何に対する刑なのか？ それは、ミズホを苦しませるための刑にほかならない。

神殿の祭壇さいだんは処刑台かいぞうに改造され、向かつて左から、ハンス、ランド、ゴンタ、ララ、ヘレナおぼさんの順で椅子いすに縛られ、横一列にならんで坐らされている。五人の後ろには、向かつて左から、ジゼム、ガル、ベイ、ゲン、レスの処刑執行人たちが、長剣を持つて立っていた。そして、処刑台の正面には、ダイキとゾルデがならんで偉そうに立ち、ハンスたち五人の顔を眺めている。

神殿内には、ミズホの顔見知りなどたくさんの人々が集まつて、処刑台を心配そうに眺めているが、決して処刑を見に来たのではなく、救世主が助けにやってくるのを信じてここに集まつてきていた。

コウサクじいさんとソウスケ先生とネナは、神殿内にいる人々をかき分け、一番前に出て、ダイキとゾルデの真後ろにやってきた。

コウサクじいさんが、ダイキの背中に向かつて話しかけた。

「ダイキさん、こんなことはやめてください。あなたも、ミズホさんと同じ地球人ではないですか。ここには、三人の地球人がやってきました。一人目は、トオル様に来て、私たちに文明を築いてくれ

ました。二人目は、ミズホさんが来て、大勢の人々を苦しみから救ってくれました。そして三人目が、あなたです。宇宙の彼方から、ここへ来る事ができるほど高度な文明を持った人間が、どうしてこんなことをするのです」

コウサクじいさんの話を聞いても、ダイキは処刑台のほうを向いたまま、後ろを振り返りもしなかった。ならんで立っているゾルデはダイキの横顔を見たが、まったく表情を変えていない。

コウサクじいさんはつづけて話した。

「一つだけ、年寄りの願いを聞いてください。どうか、その五人の代わりに、私を殺してくれませんか？」

ネナとソウスケ先生が、驚いてコウサクじいさんの顔を見た。

「それで、今日のところは許してください。お願いします。ダイキさん……」コウサクじいさんは、ダイキの背中を見つめて頼み込んだ。

処刑台の上で、ヘレナおばさんが泣き叫んだ。

「助けて！ お願い、助けてください！」

「レス！ その女を黙らせろ！」

ハンスの後ろに立っていたジゼムが命令し、ヘレナおばさんの後ろに立っているレスが怒鳴った。

「もう一度声を出したら、最初に殺すぞ！」

そしてレスは、椅子に縛られているヘレナおばさんの背中を蹴った。

「最初に私を殺しなさい！」コウサクじいさんが怒鳴った。

その迫力にネナとソウスケ先生は顔を見合わせた。ダイキとならんで立っていたゾルデが振り返り、コウサクじいさんの目の前にやってきて言った。

「おい、くそじい、よく聞け。あのバカ娘が来て、ダイキ様の言うことを聞けば、全員許してやるんだよ」

すると、コウサクじいさんは叫ぶように言った。

「救世主は来ない！ 私たちの救世主は、どんなことがあっても、

こんなことをする連中の仲間にはなりません！」

それまで黙っていたダイキが、処刑台を眺めたまま重い口を開いた。

「もう、ハナミズホなんか来なくていいぜ。どうせ遊びだ。五人を殺せ！」

処刑執行人たちが長剣を振りあげた。処刑される五人は恐怖で目をつぶった。そのとき、集まっていた人々が突然左右に分かれていき、両開きの正面玄関から処刑台までの間に一直線の道をあけた。ソウスケ先生が、コウサクじいさんとネナをつれて、処刑台に向かって左側へ分かれた人々のところまで行った。

処刑執行人のジゼムたちは、思わず処刑を中断し、処刑されようとしていた五人は、明らかに変わった神殿内の雰囲気気づき、つぶっていた目を開いた。すると、両開きの正面玄関から、マントのフードを深々とかぶった口もとに青痣のある少女が神殿内に入ってきて、左右に分かれた人々の間を歩いてくる。

つづいて、バン、ケビン、オスター、リド、ウッド、マックが神殿内に入ってきて、六人は正面玄関のところで横一列にならび、ダイキの後ろ姿へ向かって歩いていく少女の背中を見つめた。

マントのフードを深くかぶっているため、少女の顔は見えない。しかし、ほとんどの人々は、彼女がミズホだとすぐにわかった。

処刑台のランドがつぶやいた。

「救世主が来てくれた……」

コウサクじいさん、ネナ、ソウスケ先生や心配して神殿に集まっていた人々の表情が、希望で明るくなった。

ゾルデがミズホに駆け寄って言った。

「来たな、バカ娘！」

次の瞬間、ゾルデは、ミズホに突き飛ばされてぶっ飛び、天窓を突き破っておもてに飛んでいき、庭へ落ちて失神した。ダイキがゆっくり後ろを振り返ると、ミズホは神殿の中央ぐらいで立ち止まった。

ダイキがミズホを睨みつけた。彼女は立ち止まったまま無言で動かず、深くかぶったマントのフードから、青痣の残った口もとだけをのぞかせていた。

「決めたぜ。お前たちの信じている救世主が、死ぬところを見せてやる」ダイキはそう言つて、ミズホの前まで歩いていき、「よく見てろ！」と怒鳴つた。

そして彼は、ミズホの首を右手で絞め、左手で彼女のフードを脱がせた。ミズホの無垢な視線とダイキの鋭い視線が激突し、神殿内に緊迫した静けさが流れた。

自分を見あげるミズホの無垢なまなざしに、ダイキは一瞬ためらつたが、思いなおして言つた。

「バカは、英雄にはなれないぜ」

ダイキはミズホの首を力強く絞めつけ、殺してしまふ 予定だつたが、なぜか彼女の首から手を放し、あとずさりをして三步さがつた。

「357マグナム……トラディショナル・リボルバーか……」ダイキは、ミズホがマントから手を出して握っているものを眺めてつぶやき、つぶけて、「そんなもの、あるはずがないぜ……」と動揺して言つた。

「でも、あつたの」ミズホはダイキにハンドガンに向けたまま言つた。

常識で考えたら、確かにそのハンドガンは、この星どころか現在の地球にもあるはずがなかった。いまから千年くらい前、殺傷能力の高いマグナム弾は核兵器と同じ扱いになり、マグナム弾を使用するハンドガンとともに、地球から完全に姿を消した。

357マグナム・トラディショナル・リボルバーは、およそ千年前、すべてのハンドガンがオートマチック式になった時代に、米国の銃器メーカーが、一度だけ復活させた回転式六発弾倉のハンドガンであった。最後のマグナムでもあり、最後のリボルバーでもあつたそのハンドガンは、現在の地球では、伝説のリボルバーとしてあ

まりにも有名だった。

357マグナムは、トオルが乗ってきたライフポッドに自殺用として装備されていた。つまり、地球に帰ることができなくなったとき、苦しまずに自ら命を絶つための道具だった。ハンドガンのケースの中に入っていた、『この星で、生きて行こうと決めた』というメモは、トオルが自殺をやめて、この星で生きようと決断し、書いたものだった。

もし、オートマチック式のハンドガンだったら、ミズホには安全装置を解除することができなかっただろう。しかし、ミズホが握っているハンドガンは、ダブルアクションのリボルバーだ。弾丸も最初から装填そうてんされていた。あとは、引き金をひくだけでマグナム弾は発射される。

頭の回転が速いダイキは、すぐに理解した。

「そうか……。千年前、オリオン大星雲で起きた事故で、この星にやってきた、安堂トオルが残っていたのか。……しかし、お前に俺が殺せるのか？」

ダイキの言葉のとおり、ミズホはハンドガンの引き金をひくことができない。悪人だからといって、彼女は人を簡単に殺せるような性格ではない。しかし、ダイキを倒さなければ、たくさんの人たちが殺されるだろう。

緊張した沈黙が、しばらくつづいた。

「ミズホ。俺に銃を渡して、一緒にこの星を支配しようぜ」

ダイキがそう言った直後、ミズホがハンドガンの引き金をひき、神殿内に銃声じゆうせいが轟いた。その音に驚き、集まっていた人々が耳をふさぎ、いっせいにしゃがみ込んだ。銃弾はダイキの腹部に命中しているが、彼は倒れず自分の撃たれた場所を眺め、青ざめている。

ミズホはつづけてハンドガンを撃ち、すべての銃弾をダイキの腹に撃ち込んだ。彼女がハンドガンを撃つたびに、神殿内の人々が、びくつ、びくつ、と身体を動かせた。

六発の銃弾を腹部に受けたダイキは、それでもミズホを睨みつけ、

唸りながら立っていた。が、限界がきて、うつぶせに倒れ込み、そして息絶えた。

処刑執行人のジゼムたち五人が、持っていた長剣を処刑台の上に捨てた。銃声に驚いてしゃがんでいた、コウサクじいさんやネナたちをはじめ、神殿内に集まっていた人々は、ゆっくりと立ち立ちあがり、ミズホを尊敬のまなざしで見つめた。これでこの惑星に地球人はミズホしかいない。楽しくて平和な日々がつづくだろう　と、思うのはまだ早かった。

死んだはずのダイキが不意に立ちあがって、高笑いしたのだ！

ミズホにかつてない恐怖が走った。神殿内にいた人々は、一気に絶望のどん底へ叩き落とされた。処刑執行人のジゼムたち五人には希望がもどった。

「すっかり忘れてたぜ」ダイキはこの文明のコートを脱ぎ捨て、さらに迷彩服の上着を脱ぎ、Ｔシャツ姿になり、「この迷彩服、防弾なんだよ」と言って、その上着を投げ捨てた。

その迷彩服は、デニムぐらいの生地の厚さであったが、弾丸が直撃した瞬間に硬化する特殊な素材の防弾着だった。

ミズホはダイキに向かって、もう一度ハンドガンを構えた。

「ハナミズホ。そのトラディショナル・リボルバーは、六発しか弾丸を装填できないんだ。残念だが、弾切れだ。マグナム弾の予備があるとは思えないぜ。たとえ弾丸の予備があつたとしても、お前にはリロードできないだろう」

ダイキはそう言って、勝利の笑いを一瞬浮かべ、すぐに真剣な表情になり、つづけて言った。

「お前の負けだ。覚悟しろ！」

ミズホは神の武器を探す旅で、もうダメだと思ったことが何度かあつたが、どうにか危機を乗り越えてきた。そんな経験が、彼女を簡単にはあきらめさせなかった。

たった一発でも弾丸が残っていれば、ダイキを倒すことができる。奇跡を信じて、ミズホはハンドガンの引き金をひいた　何度も何

度も引き金をひいたが、ただ虚^{むな}しい金属音が神殿内に鳴り響くだけだった。

奇跡は起こらない。あとは、ミズホが自分で考えるしかない。しかし、相手はエリート^{エリート}の元軍人で、ミズホは勉強も運動もできない小柄できゃしゃな女の子、勝てる見込みはゼロに等しい。

ダイキがミズホに向かつて一歩踏み出した瞬間だった。ミズホは自分で考え出した最後の手段を実行した。彼女は握っていたハンドガン^{ハンドガン}を、ダイキの頭部へ投げつけた！

突然の攻撃を予測できず、ダイキが顔を背けると、ハンドガンは彼のこめかみに直撃し、恐ろしい打撲音がした。ダイキは一瞬動かなくなり、膝^{ひざ}から崩れるように倒れた。

完全に気絶したダイキを確認し、ミズホはつぶやくように言った。
「最後の最後まで、あきらめないわ……」

その言葉を聞いて、コウサクじいさんとネナが顔を見合わせて微笑み、ミズホのところへ駆け寄った。バンたち六人もミズホに駆け寄り、笑顔で勝利をよるこんだ。処刑台にいたジゼムたち五人は敗北を認め、椅子に縛られていたハンスたち五人を解放した。神殿内に集まっていた人々は、ミズホの勇氣に感動し、心から感謝した。

ソウスケ先生が、倒れているダイキを調べて言った。

「気を失ってますな。これなら、意識を取りもどすことは当分ないでしょうな」

「それじゃあ、いまのうちに、こいつを海へ捨てに行こう」バンが言うと、

「ああ、それがいい」

とケビンが同意し、みんなでうなずいた。

突然、コウサクじいさんの家で留守番をしているはずのサラが、神殿内へ駆け込むようにやってきた。

みんなは驚いて彼女を眺めると、サラはミズホを見つめ、大声で言った。

「ミズホちゃん！ ミズホちゃん、地球の人たちが迎えに来たわ！」

頭の中が真っ白になったミズホが、正面玄関を見ると、そこから、JSTの制服を着た三十代の男性三人と、スーツの上着を脱ぎ、シヤツの袖をまくった二十代の青年が入ってきた。そして、最後にスーツ姿の高瀬宇宙科学庁長官が神殿内に入ってきた。

信じられなかった　ミズホはもう地球へは帰れないと思っていたのに、迎えがやってきた。

先に入ってきた四人は、気絶しているスペースジャック犯のダイキを捕まえた。高瀬長官たちは、サラから詳しい話を聞き、だいたいのことを把握はあくしていた。

高瀬長官はミズホのところに来て、優しく微笑み、話しかけた。

「やはり、君だったんだね、ミズホさん。生きていてよかった。サラさんから名前を聞いたとき、君しかいないと思った」

うつすらと涙を浮かべるミズホの顔を高瀬長官はしばらく見つめ、彼は感激してつぶやいた。

「君が、この星を救った救世主……」

第29章 決断するとき

オリオン大星雲でのスペースジャック事件のとき、高瀬長官は大型宇宙客船の河田船長によってナビゲーション・ブリッジのライフポッドに無理やり乗せられ、無事に地球へ帰ってくることができた。

地球にもどった高瀬長官は、事故の詳細を報告して、緊急対策本部を宇宙科学庁に設置し、すぐに生存者の救助活動を開始したのであった。全部で百機のライフポッドの回収作業は順調に進み、半年以上かけて九十七機を回収した。一機は高瀬長官が乗って帰ってきたので、残り二機のライフポッドを回収すれば終わりであった。しかし、回収した九十七機のライフポッドには、誰一人乗っていないかったので、あとの二機を回収しても無駄だと判断され、大規模な救助活動は打ち切られた。それでも高瀬長官はあきらめ切れず、小規模な救助活動をつづけ、残りのライフポッドの微弱な救難信号をキヤッチし、この惑星を発見したのであった。

ダイキは自分が捕まるのを恐れ、ライフポッドの救難信号を壊したが、ミズボが乗ってきたライフポッドが、ずっと救難信号を出しつづけていたのであった。

高瀬長官が救助活動をやめなかった理由の一つは、ミズボの義母であるおばあちゃんが、何度も宇宙科学庁にやってきて、ミズボの安否を確認しに來たからであった。ほかの乗員乗客の家族は、ライフポッドがほとんど回収されても生存者がいないとわかると、多額の賠償金たばいぎんを受け取り、あきらめたが、ミズボのおばあちゃんだけが、いまだに賠償金を受け取らず、宇宙科学庁にやってきて、ライフポッドを全機回収してほしいと懇願こんがんしていた。

回収されたナビゲート・レコーダーと、ダイキたちの武器を宇宙客船に積み込んだスペースポートの職員の逮捕により、高瀬長官の報告に嘘はないと明らかになったが、高瀬長官は、自分だけが生き残った恥ずかしさと、ミズボのおばあちゃんのことであって、最後

の二機を一年近く捜しつづけたのであった。

惑星プップに高瀬長官たち五人が乗ってきたスペースシップは、乗員三十名が乗れる中型の宇宙探査船であった。たった五人のクルーなのに、小型ではなく中型のスペースシップに乗ってきた理由は、オリオン大星雲でライフポッドを捜す活動をするためには、その規模の宇宙探査船が必要だった。

ミズホたちが神の島で夜を迎えたとき、雷雨はやんでいたが、その雷雨は島から大陸へ移動していた。その雷雨の夜に高瀬長官たちはやってきたので、スペースシップのジェット音に誰も気づかなかった。

高瀬長官たちは、スペースシップを着陸させる前に上空から町などを確認し、地球よりもかなり後れた文明があることを知った。宇宙条約で、地球文明よりも劣る地球外文明の関与は許されていないから、宇宙探査船をミズホが乗ってきたライフポッド付近に着陸させ、この惑星の文明と接触しないように、高瀬長官たちは調査をしていたのであった。

ライフポッドは発見したが、機内には生存者を確認できず、高瀬長官たちはがっかりしたが、非常食やザックなど、いくつかなくなっていることに気づき、もしかしたら誰かが乗っていたかもしれないと希望が湧いた。しかし、この惑星の知的生命体があさった可能性も否定できなかった。

生存者が乗っていた可能性を最初に気づいたのは、一緒に来た宇宙科学庁の青年、伏見^{ふしみ}であった。五席あるシートのうち、一箇所のシートベルトがはずれていることに気づいたのだ。したがって、高瀬長官たちは、この惑星の不思議な鉱物や動植物を調べながら、生存者がもどってくる可能性を信じて、そこで待っていたのであった。

しかし、生存者がライフポッドにもどってくる様子はなかった。高瀬長官は、望みを懸けて地球外文明との接触を決心した。町へ行くとパニックになる恐れがあったから、山にぼつんとあったコウサ

クジいさんの家に高瀬長官たちはやってきた。そこでサラと出逢い、彼女の話聞いて、瀬長官たちは、なぜこの文明は日本語を話すのかを理解し、ミズホとダイキがこの惑星にいることを確信したのであった。

そして、サラに案内してもらい、高瀬長官たちは、コウサクじいさんの家からハービーまで歩いていき、そこからメル力を拾って神殿まで来て、ミズホを見つけることができたのであった。

ミズホがダイキと対決した日の夜、高瀬長官たちは、森に着陸させていたスペースシップを移動し、テッドの海へ着水させ、タラップを浜辺におろし、そこから乗降できるようにした。

ダイキはスペースシップの一室に鍵をかけて閉じこめ、逃げられないように監視された。

ミズホは高瀬長官から呼ばれ、スペースシップ内の部屋で話を聞いていた。

「今日は立派でしたね、ミズホさん。いや、今日だけじゃないようだ。この星で大活躍をしたそうだね。この星の人たちは、ミズホさんが地球へ帰ってしまうと言って、寂しがっていたよ」

高瀬長官がそう話すと、ミズホは照れ笑いをして言った。

「でも、高瀬長官。この星の場所がわかったんだから、また遊びにつれてきてくれますよね？」

「それができなんだ、ミズホさん。ここへは誰も地球人が来ることができないように、この星のデータは一切残さない。だから、二度とこの星に来ることはできなくなる」

「どうして！？　たくさん友達ができたのに！　それは困るわ。みんなと二度と逢えないなんて、絶対に嫌です」

ミズホがあわてたように言うと、高瀬長官は優しく話した。

「よく考えて、ミズホさん。もし、地球にこの星のデータを持って帰って、ダイキのような人間が知ったら、わかるね。たった一人の地球人でも、この星を支配できる。だから、この星の人たちのため

に、絶対に地球人へこの場所を教えるわけにはいかないんだ」

「でも、高瀬長官と一緒に来た人たちが、この星の場所を教えちゃったら？」

「大丈夫、私がこの星のデータを管理している。ここを出発したらすぐにデータを消去してしまうよ。そうすれば、この星に地球人は誰も来られないんだ。もちろん、私も来ることはできない」

たとえこの星の話を地球人にしても、データがなければ探し出すことは不可能だ。一度訪れた地球人でも、データがなければ来ることは不可能に近い。『オリオン大星雲のどこかにある』では、とても探し出すことはできないだろう。

考え込んでいたミズホが言った。

「……私、ここに残ります」

「本当に残るのかな？」

高瀬長官が少し驚いて訊くと、ミズホは笑顔で話した。

「はい。この星のほうが、地球よりずっと楽しいんです。毎日がほんとに楽しくて。地球に帰っても、きつとつらいし……。ここなら幸せに暮らせます」

「ミズホさんがそうしたいなら、私は止めないが、おばあちゃんのことを忘れてはダメだよ。ずっと、ミズホさんが帰ってくるのを待っているんだ。それでも、ほんとにこの星に残るのかな？」

高瀬長官の話しに、ミズホの気持ちは揺れた。地球へ帰るべきか？ この星に残るべきか？ ミズホが答えを出せないでいると、高

瀬長官は微笑んで言った。

「ミズホさん。明日から十日後までに決めればいい。私たちも、もう少しこの星を調べてみたいんだ。変わった生物がいるみたいだし、せっかく地球外文明を発見したんだ、少しはここで遊んでいきたいからね」

スペースシップに泊まらないかと、高瀬長官は言ったが、ミズホは自分の家に帰った。

久しぶりに自分の家のベッドに入ったミズホは、とてもわくわくし、この星で暮らしていきたいという思いが強くなった。地球へ帰るかどうかを決めるのにはまだ十日あるが、ミズホの心はすでに決まっていた。

次の日、ミズホとネナは、ミロのメルカに乗って、コウサクじいさんの家に置きっぱなしの荷物を取りに行った。ネナはミズホに、この星に残ってもらいたいと話したかったが、ミズホの気持ちを考えると、彼女は話すことができなかった。

しかし、コウサクじいさんが話してくれた。
「ミズホさんがここに残ってくれると、ありがたいのですが、どうでしょう？ ミズホさんの話を聞いて思ったのですが、地球へ帰るよりも、ここに残ったほうが、ミズホさんは幸せに暮らせるのでは？」

「そうなんです。コウサクおじいさんの言うとおり、私、地球よりこの星で暮らしたほうが楽しく生きられるんです」

ミズホが笑顔でそう言ったので、コウサクじいさんとネナはうれしくなった。そして、ミズホがつづけて話した。

「地球に帰ってしまったら、もう二度とこの星に来ることはできないそうです。でも、地球へ帰ります。どんなに辛いことがあっても、乗り越えていけそうな気がするんです。それも、この星の人たちのおかげです。ありがとうございました。それに、おばあちゃんも待ってるしね」

コウサクじいさんとネナは、しばらく黙ってしまった。

「ミズホさんは、本当に勇気がある人です」コウサクじいさんが微笑んで言った。

「だって、英雄だもんね」ネナが明るく笑って言った。

コウサクじいさんの家を出たあと、二人は帆柱を修理中のバンの中型帆船にミズホの荷物を取りに行った。そこで、ミズホが地球に帰ることを話すと、バンたちは寂しがり、お別れ会をやるうと言ってくれた。

海の怪物フイードは、バンたちが逃がしてやると、自分の海域へうれしそうに帰っていったそうだ。

それからの数日間、高瀬長官たちは、この星をいろいろ調べていた。ほかの大陸には怪物が多く生息していて、人間はいなかった。神の島にあったライフポッドから少し離れた場所に、トオルが住んでいたと思われる石造りの家が一軒見つかった。

地球の科学では説明が困難なことも多くあった。たとえば、この星のものは、地球人にとってすごく軽い、ということは、地球のものはこの惑星の人間には重いはずなのだが、地球人と同じ感覚で普通に持つことができるのだ。そのほかにも、興味深いことが多くあった。

オスターはスペースシップに乗せてもらい、高瀬長官たちと行動をともし、一緒に怪物などを見に行った。宇宙科学庁の伏見が、写真と映像が撮れるカメラで、いろんな生物を撮影して、写真はプリントし、図鑑の好きなオスターにあげていた。デジタル画像を写真にプリントする機材は、スペースシップに装備されている。

高瀬長官たちが乗ってきた宇宙探査船は、ライフポッドを回収できるようになっていたが、トオル、ミズホ、ダイキが乗ってきた三機のライフポッドは回収しないことにした。ミズホが乗ってきたライフポッドから発信されていた救難信号は、この星の場所がわからないように、高瀬長官が壊^{こわ}して止めた。

ミズホは、いつものようにネナと楽しく過ごしたり、帆柱がなおったバンの中型帆船でプールへつれて行ってもらったりして、みんな楽しく遊んだ。

ミズホは高瀬長官から借りたカメラで、お世話になった惑星プツプの人たちの写真と映像を撮った。写真はプリントしてみんなにあげた。ネナたちは、自分の写真を見て驚き、カメラの画像ディスプレイで自分たちの動く映像を観て、もっと驚き、言葉を失っていた。

カメラの操作は簡単で、惑星プップの人たちにも使うことができたから、ミスホはみんなと一緒に写っている写真や映像をたくさん撮ってもらうことができた。

第30章 胸がいつぱい

お別れ会は、地球へ帰る二日前の夜に神殿の庭で行われた。少人数でやりたいというミスホの希望もあって、参加したのは、ネナとサラ、コウサクじいさん、ソウスケ先生、バン、ケビン、オスター、リド、ウッド、マック、それと、スペースシップで来た、宇宙科学庁の高瀬長官と伏見、航空会社JSTの三人であった。

神殿の庭に椅子やテーブルを置き、ネナとサラが作ってくれたおいしい料理やデザートを囲み、夜空の下、みんなでおしゃべりしながら楽しく過ごした。

ミスホはみんなを紹介するとき、地球人とプップ星人と言って紹介したから、ネナたちはすごく恥ずかしくなった。高瀬長官たちは『惑星プップのプップ星人』と聞いて、笑いをこらえるのがたいへんだった。

オスターは、怪物の写真コレクションをみんなに見せびらかし、特に枚数が多かったニヨンニヨンの写真を見せ、どの写真のニヨンニヨンが一番好きかをしつこく訊いてきたので、みんなは適当に答えていた。さらにオスターは、動く怪物の映像を五分に一回くらいの間隔で観たがったから、伏見は泣く泣くカメラと録画チップのコピーをオスターにあげてしまった。伏見のあげたカメラは、水中撮影もでき、永久に壊れず、電池も切れないという、一千万円近くするものだった。

ミスホは、自分やみんなが写っている録画チップのコピーをオスターに渡し、みんなで仲よく観るように言った。高瀬長官は、コウサクじいさんに最新型の携帯コンピューターをあげ、使い方を見せていた。

リドが、みんなの写っている写真を眺めて言った。

「写真で、おもしろいな……。それにしても、地球はすごい文明だよな。惑星プップも、いつか地球みたいになるのかな？」

すると、高瀬長官が話した。

「地球では『不可能』と言われていたことが、次々と実現していき
ました。きつと、この惑星も地球みたくなる日がきますよ」

二人の会話を聞いて、考え込んでいたウッドが話しはじめた。

「俺、できるような気がする。ミズボちゃんとの冒険でわかったんだ。最後まで望みは捨てちゃいけないって。目標を持つことが大切なんだ。たとえ不可能と思えることでも、挑戦したほうが人生は豊かになる。カメラとかいう道具だって、いつか作れるし、空を飛ぶこともできると思うな」

「ウッドの言うとおりだ」頭に傷痕が残るケビンが、明るい表情で言った。

ミズボの口もとの青痣あおめざは完全に消えていたが、ロブたちにやられたケビンの頭の傷は、まだ治っていなかった。

「あの冒険は、すごい経験だったな」

マックがつぶやくと、サラは悲しそうに言った。

「ロブさんとムタさんは残念だったわね。命を落とすなんて……。怪物におそわれてしまったそうね……」

実は、ロブとムタが裏切ったことは、誰もみんなに話していなかったのだ。

「ロブさんとムタさんは、私を助けるために、怪物と勇敢に闘っておいしく食べられちゃったの。かわいそうに……」

ミズボがそう話すと、ケビンは笑いそうになった。

「ねえ、ミズボちゃんの家はどうするの？」ネナが思い出したように訊いた。

「ネナちゃんにあげるわ」ミズボが言うと、

「私は必要ないわ……。コウサクじいさんが使えば。山の生活はたいへんでしょ？」とネナが言った。

「そうだね。使わせてもらいます」コウサクじいさんが微笑んで言った。

バンはみんなの話をろくに聞かず、写真に写っている自分をずっ

と眺めていて、唐突に言った。

「俺って、かつこいいよな」

みんなから、大ブーイングを受けた。バンの顔の話題で大笑いしたあと、ソウスケ先生が言った。

「だけど、ミズホさんがこの星に来てくれてよかったですな。本当に助かりましたぞ。ありがとうございます、ミズホさん」

「私じゃなくても、地球人なら誰でも私と同じことができます。きっと、私以上のことができると思うわ」

ミズホがそう言うのと、コウサクじいさんが話した。

「そうではないでしょう、ミズホさん。ダイキも地球人でしたが、私たちを苦しめようと思いました。普通の人間は、力と権力を持つと、欲望に負けてしまい、すべてを支配したくなるものです。ですから、ミズホさんでないと私たちを救うことはできなかったのです。ミズホさんだから、できたのです」

ミズホは恥ずかしそうに微笑んでいたが、高瀬長官と伏見、それにJSTの三人は、同じ地球人として、ミズホのことを誇らしく思った。

お別れ会の最後は、神殿の前でカメラを自動撮影にし、記念写真をみんなで撮った。プップ星人バージョン、地球人バージョン、ミズホとプップ星人バージョン、地球人とプップ星人の全員バージョンなどを撮った。

ミズホが家に帰ったあと、ネナがお土産にと言って、自分の作ったお菓子と、ミズホの大好きだった果物のプップをたくさん持ってきてくれた。ミズホは、お礼にアキラメナイが挿してある変な形の花瓶をネナにあげた。ネナは変な形の花瓶をもらって複雑な気持ちになったが、ありがたくもらうことにした。バブー人形は地球へ持って帰って、おばあちゃんに見せたいとミズホは思っていた。

地球へ帰る前の日、ミズホはネナと一緒に原油の泉へ行つて、ナナとお別れをしに行った。荷車とバケツを持ってこなかった二人

に、ナーナは不思議がっていたが、怪物の直感で、ミズホがお別れを言いに来たのだとわかったようだ。ミズホは高瀬長官のカメラで、ナーナとネナと自分が一緒に写っている写真や映像を自動撮影で撮った。

「原油を取るのを手伝ってくれて、ありがとう、ナーナ。バイバイね」

ミズホがそう言つて、二人が原油の泉から帰ると、ナーナは道端まで出てきて、歩いていく二人の後ろ姿を寂しそうに眺めていた。

そのあと、ミズホとネナは、二人が初めて出逢った場所へ行ったり、川辺に行つてバブーを見たり、ハービーやテッドへ行ったりして、歩きながら楽しい思い出話をたくさんし、二人は何度も『ありがとう』を連発し合っていた。お世話になったネナと、のんびり楽しい一日を過ごすことができて、ミズホはとても幸せだった。

惑星プップでの最後の夜、ミズホは荷物をまとめ、ネナの家に泊まった。ミズホが自分の家を買うまでに使っていた空き部屋は、すごく懐かしなつく感じた。

ミズホとネナとサラは、真夜中まで三人でいろんな話をして楽しく過ごした。ミズホは、ネナとサラと別れるのがつらくなり、何度も泣きそうになったが、そのたびに我慢をして、彼女は笑顔で振舞った。

ベッドに入つたミズホは、この惑星が地球ではないとわかったときの不安や、この部屋に初めて泊まった夜のうれしさなどを思い出して、胸がいっぱいになり、涙があふれ出した。

ついに地球へ帰る日が来た。よく晴れた爽さわやかな日の午前中だった。スペースシップは海へ着水し、テッドの浜辺にタラップをおろしている。そして、浜辺から栈橋、市場や町のほうまで、見渡すかぎりの人々がミズホを見送りに来ていた。プールからもハンスの貨物船をはじめ、大型から小型までの帆船がたくさんやってきて、甲板には多くの人々が乗り、海の上から救世主を見送ろうとしている。

タラップの下には、お別れ会をやってくれたメンバーやミズホの顔見知りがたくさん集まって、ミズホと最後のお別れをしていた。高瀬長官はタラップの一番上にいて、ミズホがあがってくるのを待っている。オスターが最後の別れを、伏見からもらったカメラで撮影していた。

日比谷中学の学生服を着たミズホが、みんなへ向かって話した。
「みなさん、たいへんお世話になりました。楽しい素敵な日々をありがとうございました。」

コウサクじいさんやバンたちは、目に涙を浮かべ、ありがとうとミズホに言っていた。ネナが涙ぐんで言った。

「私もミズホちゃんが来てくれて、ほんとに楽しかったわ。いろいろありがとう。元気でね。地球に帰っても、私のことを忘れないでね。」

「忘れないわ、ネナちゃん。絶対に忘れないわ。ネナちゃんは、宇宙一の友達よ」ミズホはそう言い、ネナに優しく抱きつき、「元気でね。さようなら、ネナちゃん」と言って泣いてしまった。

「ミズホちゃん、さようなら……」

そう言ってネナも泣き、周りにいたみんなも泣いてしまった。バンの泣き方は、ちょっと大げさで恥ずかしかった。

そして、ミズホはタラップをあがっていき、途中で振り返り、ネナと小さく手を振り合ったあと、大勢の人々へ向かって大きく手を振った。すると、見送りに来てくれた数え切れないほどの人々が大歓声をあげ、ミズホに手を振った。

高瀬長官はタラップの一番上から、大勢の人々に手を振るミズホの後ろ姿を見つめ、いじめられ、自分に自信をなくしていた少女がこんなに立派になったと思い、人間のもつ可能性の素晴らしさを肌で実感し、感無量になり、目に熱いものが込みあげてきた。

大歓声を聞いて、船内から高瀬長官のところに伏見が出てきた。
「すごいですね……」伏見が感激して言うと、

「ああ、本物の英雄だな」高瀬長官は、ミズホの後ろ姿を見つめた

まま答えた。

スペースシップは、安全に発進できる場所まで海上を移動した。ミズホが坐っているセーフティー・シートの横に、ならんで腰かけている高瀬長官が言った。

「さあ、家に帰ろう」

ミズホは笑顔で力強くうなずいた。

爆音とともにしぶきを舞いあがらせ、風を巻き起こし、スペースシップはゆっくりと発進した。その風は、見送りに来ていた人々の髪や服を激しくなびかせ、プールから来た海上に停泊しているたくさんさんの帆船も大きく揺らした。

大空へ、そして宇宙へ飛び去っていくミズホの乗ったスペースシップを、ネナとサラ、コウサクじいさん、ソウスケ先生、バンたち、帆船の甲板で見あげるハンスやプールの人たち、大勢の人々が清々しい笑顔で、いつまでも、いつまでも、スペースシップが見えなくなっても見送っていた。特に、大空を見あげるネナの笑顔は素敵だった。

惑星プップの大気圏を出たスペースシップは、オリオン大星雲のコズミックトンネルへ突入し、やがて冥王星付近に通り抜け、そして太陽系に入り、地球へ向かって航行していた。

あの事故で助かったのは、たった三人だとミズホは高瀬長官から聞いて、彼女は亡くなったクラスメートのことを船内で考えた。

中心となつてミズホをいじめていたアイナとは、一度だけ一緒に帰ったことがある。そのときアイナは、自分の親に悩んでいることをミズホに打ち明け、別れぎわに『いじめてごめんね』と謝ったことがあった。もしかしたら、あの日のアイナが本当のアイナだったのかもしれないとミズホは思った。仲よしだったレミカは、突然裏切つてミズホをいじめたが、いじめを楽しんでいるときのレミカより、一緒に遊んでいたころのレミカのほうが、ずっと輝いていたとミズホは思った。彼女は、誰も恨むことなく許し、同級生たちが生

きていたら、友達になる努力をしたのにと思っ
て悲しくなつた。

帰路のスペースシップ内では、高瀬長官の宇宙の話を聞いたり、ネナたちの写真や映像を見て、楽しかった日々を思い出し、泣いたり笑ったりして、ミズホは過ごした。もう二度と惑星プップへ行くことはできない、ネナたちと逢うことができない、そう思うと、ミズホの心はせつなくなつた。

スペースシップの窓からミズホが宇宙を眺めると、地球が見えた。地球では、惑星プップにいたときのような活躍はできない。つらい人生が待っているかもしれない。それでも彼女は帰ってきた。ミズホが宇宙から地球を眺めていると、未来の不安は消え去り、至福感しふくかんがおなかの底から噴ふきあげてきて、気持ちよく胸をときめかせた。惑星プップで過ごした日々よりも、もっと楽しい日々を地球で送ろうと、ミズホは心に決めた。

そして、ミズホを乗せたスペースシップは、美しい光のラインを描きながら、地球の大気圏へ突入していった。

ちょうど日の出ぐらいの時間になり、ミズホの養母である三城メグミ、つまり、おばあちゃんが、ジーンズとトレーナーを着て、その上にエプロンをかけたいつもの姿で、玄関先の小さな花壇へ水を与えに出てきた。

おばあちゃんは小さな花壇かだんに水を与え終わり、楽しい形のじょうろを地面に置いて、草や花の状態を観察していた。すると、車がやってきて止まり、ドアが開く音がした。おばあちゃんが後ろを振り向くと、車の運転席にはグリーンのスーツを着た伏見が乗っていて車の左わきには、グレーのスーツ姿の高瀬長官と、バッグを持って日比谷中学校の学生服を着たミズホが、笑顔で立っていた。

奇跡のような光景を見て、おばあちゃんはすぐに信じることできず、その場に立ちすくんでしまった。高瀬長官は、ミズホが持っていたJSTのバッグを自分が持ち、彼女の背中を押した。ミズホがおばあちゃんに走り寄っていくと、おばあちゃんもなんとか歩み

寄り、二人は強く抱き合った。

ミズホとおばあちゃんは、しばらく言葉を交わすことができず、抱き合っていた。そんな二人を、高瀬長官は優しい笑顔で見守った。

「ミズホちゃん。お帰り……」おばあちゃんがうれし涙を浮かべ、懐かしい声で言った。

「おばあちゃん。ただいま……」ミズホは胸がいっぱいになった。

およそ一年が経ち、ミズホは地球に帰ってきた。朝の太陽は希望に満ちあふれ、秋の気持ちいい風が、キンモクセイの幸せな匂いとともに吹いていた。ミズホは、おばあちゃんに話したいことがたくさんあった。ネナたちの写真や映像も見せたかった。お土産のプツプツや、ネナのお菓子も食べてもらいたかった。それと、バブー人形を早く見せたかった。

第31章 英雄神話

時は流れ、およそ五十億年の歳月がすぎ、地球の恒星である太陽は、赤色巨星に進化する兆候を見せはじめた。凍てつく地球では、核融合システムによりわずかに生き残っている人類が、新天地を求めて宇宙への脱出を試みようとしていた。しかし、五十億年間で地球人類の科学的進歩は右肩あがりで成長したわけではない。小惑星の地球衝突などの大規模な災害で、人類は何度も絶滅の危機にさらされ、そのたびに地球文明は振り出しにもどされた。現在の地球は、ミズボが生きた時代より科学は後れていて、光速に近いスピードで飛行することが可能な、反物質エンジンの長距離型宇宙船の試作機が、やっと完成した程度だった。

ミズボの生きていた時代は、大規模な災害もなく、ダイキの起こしたスペースジャック以上の大事件もなく、比較的平和な時代だった。地球に帰ったあとのミズボは、いろんなことに挑戦して、貴重な体験をたくさんした。彼女は勉強や運動も大好きになった。もちろん、人よりできるようになったわけではない。しかし、知らなかったことを知るよろこび、できなかったことができるようになる楽しさがわかり、誰のためでもない、何かのためでもない、自分のペースでやる、楽しいからやる勉強や運動が、彼女は大好きになった。そして、とても充実した幸せな素晴らしい一生を、ミズボは送ることができた。

惑星プップの太陽は、若い恒星だったので、五十億年経ったいまでも健在だ。高瀬長官が、惑星プップのデータを消去したため、ミズボたち以来五十億年間、地球人は誰もこの星には来なかった。

現在の惑星プップは、およそ三十億年前に起こった陸地と海底の逆転現象で、地形はまったく変わり、人間以外の生態系も大きく変わった。五十億年前にいた怪物類は、いまの惑星プップでは確認さ

れていない。

五十億年間で起こった自然災害により、惑星プップも地球と同じように、人類絶滅の危機を何度も経験した。現在の惑星プップの文明は、ジャンボジェット機が空を飛び、世界旅行ができるまでになっている。

惑星プップの現代文明の自然人類学によると、人類の誕生はいまから六百万年前で、ポクルスという哺乳類から進化したと考えられている。つまり、五十億年前に文明を持った人類が存在していたとは思われていないし、まして、宇宙から知的生命体が惑星プップにやってきたなど考える学者は少ない。超古代文明があったのでは？ と主張する学者もいるのだが、誰にも相手にされず、物笑いになっている。

しかし、ミズホの英雄伝説は五十億年経つたいまでも、惑星プップに語り継がれ、有名な本になっている。それは五十億年前の話だとは思われてなく、数千年前の人間が考えた、作り話だと思われる。その本の題名は『英雄神話 救世主ミズホ様』であった。

予言された救世主は、地球という星からやってきた。
その救世主は、十四歳の少女で、名前はミズホである。
ネナという幼い少女が、ミズホ様と最初に出逢い、
そして、町につれてきた。

ミズホ様は、神の鎧よろいを身につけ、
人々を苦しめた悪の集団を、たった一人で倒し、
大勢の人々を苦しみから救った。

ミズホ様は、神の力で、巨大な怪物を投げ飛ばし、
簡単に退治して、人々を怪物の恐怖から救った。

ミズホ様は、神の力で、薬草を手に入れ、
その薬で、大勢の人々を病から救った。

ミズホ様は、決して削ることができない剛岩しつがんせき石を、
神の道具で簡単に削ってしまい、

我々に素晴らしい石像を作ってくれた。

ミズホ様は、隕石の直撃により、破損した民家を、

宇宙の責任は、私の責任と言って、

修理代を弁償してくれるほど、寛大な心の持ち主でもあった。

ミズホ様は、この星を『惑星プップ』と名づけた。

この『惑星プップ』という素敵な星の名前に、

我々は感動して、感謝し、たいへんよろこんだ。

救世主ミズホ様のおかげで、幸福な日々がつづいていたが、

地球から救世主以上の力を持つ恐ろしき支配者、

ダイキという男がやってきた。

ミズホ様は、ダイキによって倒され、人々は希望をなくした。

しかし、ミズホ様は、人々のために復活し、八人の弟子をつれ、

試練の冒険へ旅立ち、神の武器を手に入れてきた。

その旅で、ミズホ様は二人の弟子を失った。

ミズホ様は、激しい爆発音がする神の武器を手を持ち、

最後の対決に臨み、ダイキを倒し、勝利した。

ミズホ様は、恐ろしき支配者から人々を救い、

完全な幸福を惑星プップにもたらした。

そして、ミズホ様を、地球の神々が迎えにやってきた。

大勢の人々が寂しかったが、笑顔で見送ることにした。

ミズホ様は、火を噴く巨大な神の船に乗って、

轟音とともに宇宙へ飛び去り、地球に帰っていった。

偉大な力を持ち、この星を救ったミズホ様は、

楽しく生きること教え、決して威張ることはなく、

星を支配することもなく、すべての人々から愛され、尊敬された。

我々プップ星人は、何があっても、

我々の英雄、救世主ミズホ様を忘れてはならない。

この英雄神話を、後世に語り伝えよう。

およそ五十億年経った現代でも、この星の名前は惑星プップと呼

ばれている。それは、この有名な英雄神話に書かれているから、現代文明の人もそう呼んでいるのであった。

しかし、ミズホの英雄伝説を実話だと信じている人はほとんどいない。もし、本気で信じていたら、きっとバカにされ、笑われてしまっだろう。

バカにされ、笑われても信じつつける、それは難しい　　たとえば
真実でも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2829b/>

地球の乙女

2010年10月8日12時56分発行